
けいおん！ + 俺

おお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！+俺

【Nコード】

N12170

【作者名】

おお

【あらすじ】

けいおん！の二次創作です。オリ主は梓と同学年という設定です。基本オリ主視点で話は進みますが、たまに三人称になったりします。あと、話はアニメ基準です。小説を投稿するのは初めてなので、見苦しい所もあると思いますが、よろしく願います。

主人公紹介（前書き）

今更って感じですが……。
ふと思いついて作ってみました。

主人公紹介

> i29405 — 2057 <

三浦仁^{みつじひと}

身長171cm

体重58?

A型

本作の主人公。

使用するギターは、ツヤツツヤの黒いギター。

(種類に関しては、作者の音楽的知識が皆無な為、設定はありません。でも、結構いいギターです)

【容姿】

所々に赤毛が混じった黒髪。まあ遠くから見ればただの茶髪に見える。長さは普通。

癖毛ではないが、常時寝癖がついているらしい。

本人の意思とは無関係に、常になんだか眠そうな顔。と評される。

まあ、なんだか気の抜けたような顔ということ。

しかし、見開くとツリ目気味。ちょっと怖い。

顔のレベルは、まあまあ。ホントにまあまあ。

顔面偏差値52くらい。

どっちかと言うと小さい方で、体の線も細め。

もつと体重を増やして、ガツシリした体になりたいと思っている。

【性格】

どちらかと言うと、落ち着いた性格。

でも、クールという訳じゃない。ちゃんと騒いだりもする。

異性に関しては、かなりヘタレになる。

何かキツカケが無ければ、声もかけられない。

だけど、慣れれば気楽に話せるようになる。要はきっかけ。

ちなみに、男とは基本すぐに仲良くなれる。

普段は何事も「そこそこ」「ほどほど」で済ませるが、やる時にはやる男……だと思う。

一度決めたら、最後までやり通せる意思の強い一面もある。

最初は嫌がっていても、やっているとなつてくる性格。

諦めが早いのが長所であり、短所の一つ。

でも、失敗は引きずり易い。

その他、若干心配性な一面もある。

ちなみに、かなりセコい。

焦ると口を滑らせる傾向がある。

【能力・趣向】

ギターの腕前は中々。演奏の特徴は、「荒っぽいけど、力強い」
ちなみにギターを始めたのは中三の夏から。

学業は中々優秀。上の下といった所。
どうでもいいけど、文系で、得意教科は現国。

運動能力はいたって平均的だが、走るのはいそこそ早い。
五十メートル走の記録は六秒台の後半といった所。
しかし、本人は運動嫌い。
ちなみに、まったく泳ぐ事が出来ない。

一人暮らしをしている為、家事全般はこなせる。
家庭料理の腕前は高く、皆からの評判も良い。また、本人も料理好き。

お化けの類が大の苦手。

ホラー映画なんでもっての他。
しかし、漣とは違い、苦手なのはあくまでもホラー系のみ。

ファッションに対する興味はゼロ。
ファッションセンスはゼロ以下。

趣味は読書、映画鑑賞、ゲームと、完璧なインドア派。

特技は料理と太鼓の 人

部活中は基本的に本を読みながら、紅茶とお菓子とをじっくり味わっている。

イメージＣＶ 入野自由さん

千と千尋の神隠し (ハク)

キングダムハーツシリーズ (ソラ、ヴァニタス)

あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。(宿海仁太)

主人公紹介（後書き）

おお「オマエ特徴無くて描きやすいな」

仁「オマエが特徴つけてくれなかったんじゃないか」

始まり。

春。

まだ少し寒さの残る道を、俺は歩いていた。

本日よりワタクシ、三浦仁みつうじんは！晴れて高校生となりましたっ！！

……なんて、心の中で言ってみる。うん。心の中で。

こんな事を口に出して言ったら、俺はただの危ない人だ。

今日から俺は、ピッカピッカの 高校一年生。

向かう先は私立桜ヶ丘高等学校。旧名、私立桜ヶ丘女子高等学校。

つまり、元女子高。

それも、今年から共学。当然、生徒の大半が女子。

俺の学校からこの高校に進学した男子は俺一人。

俺の名誉のために言わせてもらうけど、

別にハーレムな生活を狙ってきたわけじゃないんだぜ？イヤ、マジで。

……なんだその目！！ホントだって、信じてくれよ。

ちゃんとこれには聞くも涙、語るも涙の深いワケが……

え？んじゃそれを説明しろって？

それはまた別の機会に。

そろそろ学校が見えてきたからさ。

よく見ると、周りはこの桜高の制服をきた人が沢山いた。
無論、視界に入るほとんどが女子の皆さん。

……イヤ一人だけ、男子を発見。あ。目が合った。

これも何かの縁。十人弱しかいない俺ら男子。これから仲良くしようぜ。

向こうが手を挙げて、俺に近づいてきた。

俺も少し笑みを浮かべ、手を挙げて合図を返した。

第一話 物事を決めるのに時間がかかるヤツは、決めてからが早いんだ。多分。

原作キャラはまだあんまし出てません。

第一話 物事を決めるのに時間がかかるヤツは、決めてからが早いんだ。多分。

無駄に長い校長の話がようやく終わる。強力な催眠効果を含んだその言葉達は、

僅か数分で、俺の意識を半分吹っ飛ばしていた。

……眠い。眠いよパトラッシュ。

有名なアニメの、これまた有名なセリフをもじり、心の中で呟く。

「続いて、生徒会長の挨拶」

機械を通し、講堂中に声が響き渡る。

もう駄目だ。俺のことはもういい。放っておいてくれ……。

視界が段々暗くなっていく。

「おい、仁!!!起ーきーろっ!!!」

この言葉で、俺の意識は覚醒。
寝ぼけ眼で、声の出所を探す。

「おい仁!!!そろそろ終わるぞ!!!」

だんだんと目の焦点が合ってきた。

「おー。サンキュ、大」

「ほれ、教室行くぞ」

奴の名は、瀬川大^{せがわだい}。登校してくる時に出会ったヤツ。
薄い茶髪。ひよろつとした長身。髪の毛は短い。丸刈り一歩手前と
いった所。

まだ少し話したただけだが、気が合いそうだ。
多分、いいヤツだと思う。

ラッキーな事に、俺は大と同じクラスだった。

一年二組、出席番号三十七番、三浦仁。三十六番、瀬川大。

男子は無条件で後ろの方らしい。

まあ、人数も少ないしな。

今年度入学者数男子。十一名。

一組に三人、後の組に二人づつ配属されている。

……ん。少し尿意が。

「ワリー。ちょっと便所寄っていくわ」

「おー」

大と一言話し、俺はトイレへと向かう。

男子トイレは、学校に二つしかない。

その上、一つは職員用である。

まあ、男子の人数が少ないから、こんなもんだらう。

小綺麗なトイレ。用を済ませた俺は、手を洗いつつ、鏡を見る。

赤毛交じりの黒髪。……染めてはいないぜ？

半開きの目。……眠いからじゃない。いつも通りだ。

俺としては普通にしているつもりなんだけどな。

だけど俺の瞼は人よりも重いのかしらんが、常に半開きだ。目をカッと見開いてみる。

そうすると、俺の人相がグツと悪くなる。きつとこの顔で町を歩けば、

俺のために人々が道を空けてくれることだらう。

俺は手に付着する水滴を飛ばしつつ、教室へと戻った。

休み時間、俺は大と校内をブラブラを歩いていた。

廊下には、部活動誘いのため、大勢の先輩方が。

男子はお断りかと思っていたが、俺と大にも沢山のチラシが渡された所を見ると、

俺の考えは外れたらしい。

「仁」。仁は部活動どうする？」

外へと歩き出しながら、大が聞いてきた。

実はというと、俺は部活に入りたい。

しかし、この学校に入学した時点でそれは半分諦めていたんだけど……。

先ほどの様子を思い出すと、希望も捨ててはならないと思い直す。

「オマエは？」

大の質問には答えず、逆に聞き返した。

「囲碁部に入る」

「は？」

……意外だ。

てつきり大はスポーツマンで、バスケットをやってそんな雰囲気かブンしてたから。

俺がその思いを伝えると、大はからりと笑う。

「俺、天性の運動オンチだぜ」

「嘘だろ？」

「俺、後転も出来ないぜ。五十メートル走は、八秒台だし」

……い、意外だ。

人は見かけによらないとは、なるほどこういう事か。

「囲碁は強いのか？」

「七十三戦負けなし、だ」

「オーマイガ……」

開いた口が塞がらない。
うん。これほどピツタリな表現は無い。

「で、仁は？」

「俺は……。どっかに入ろうと思ってるんだけど」

「運動部？」

「イヤ、俺筋金入りの運動嫌いだから」

「へーっ。意外だわ」

どうやら大にも俺と同じ感情を抱かせたみたいだ。

「へーっ」の声が裏返ってた。

「んじゃ、文化部に入る……」

大の言葉は途中で途切れる。
原因はすぐに分かった。

な、何だアレ……。

少し前に佇む、怪しげな着ぐるみ集団。

犬、猫、鳥、馬……。

近寄りたくない。絶対に。

話しかけられたくない。何としても。

「な、何部なんだ？アレ……」

「つーか、アレは部活なのか？」

「演劇部とか？」

「何の劇だよ……。それに、演劇部ならさつき廊下に居ただろ」

大と俺がと話していると、茶髪のポニーテールの生徒と、その友人が鳥の

着ぐるみに襲われ、物凄い速さで校内へと逃げていった。

時は経つ。

もう五月が見えてきた頃のこと。

「ん……」

休み時間。俺は入部届けを前に、唸る。
俺はまだ入る部活を決めていなかった。

「仁ー。いーかげんに決断しなさい」

大が言う。

「俺の決断力の無さは天下一品なんだよ」

「開き直るな！！」

ここで大はため息一つ。

「しゃーない。こうなりやしらみ潰しに一つつつ考えよう」

そう言っただけの中から一枚の紙を出して言った。

呆れた素振りを見せつつも、こういう時に一緒になって考えてくれる大は、

やはりいい奴なのだとは再確認をする。

「んじゃーまず、茶道部」

「俺、正座は二分でギブ」

「じゃ、演劇部は？」

「……恥ずいな」

「オカルト研究部」

「そっち系はお断りだ」

「……チキン」

「うるせえ。お前はどーなんだ」

「小学生の頃、ホラー映画見て、吐きそうになるまで泣いた事がある」

「俺、吐くまで泣いた事ある」

ここで大は無言で俺の肩を二回軽く叩いた。

なんだ。その目は。

俺を見る大の目は、優しさと哀れみが入り混じって溢れていた。

「んじゃー、囲碁部」

「んー。ルールは一応解るし、保留で」

「文芸部は？」

「文芸部って何する所？」

「……分かん」

「だよねー」

「吹奏楽部とかは？」

「俺、そういう系の楽器は弾けない」

ここで大は紙から目を離し、視線を俺に向ける。

「『そういう系の楽器は』って事は、他に何か楽器弾けんの？」

「太鼓の人、難易度鬼オールフルコンボ！！」

「……………」

大の目が白い。

「じよ、冗談だって！！！！ちゃんと弾けるよー！他の楽器」

「早よ言えや」

「えーと……。ギター……。一応弾けるかな」

俺は頬を掻きながら言った。

中野梓は、今自分の耳に入ってきた言葉を、頭の中で何度も繰り返していた。

聞き間違いじゃないよね？多分。

ギター弾けるって言ったよね？きっと。

梓は、自分に問いかける。

梓は軽音部に入っていた。

今年度の入部者数は、今の所、梓一人。

何としても、後一人くらいは確保しておきたかった。

それと、一昨日の軽音部での会話。

「折角わが校も共学になったんだ！ここはぜひとも男子部員が欲しい！！」

軽音部部长はそう言っていた。

男子に拘らず、部員がもう少し欲しいというのは、梓も一緒だった。

……まさか、こんなあっさりと願いが叶うなんて。

「梓ちゃん。今三浦君が言った事……」

友人の平沢憂が梓に話しかけてきた。
憂も今の言葉を耳に入れたらしい。

「うん。ギター弾けるって言ったよね」

よかった。私の聞き間違いじゃなかったワケだ。
梓は心の中で胸を撫で下ろす。

「さっさと勧誘しちやいなよ。早くしないと、ウチが取っちゃうよ」

こう言っつて梓をからかうのは、もう一人の友人、鈴木純だ。

「絶対ダメ!! 軽音部に入ってもらおう!!」

「なら、早く行こーよ」

純が梓の背中をグイグイと押し始める。

三浦仁の席は窓際の一番後ろにあった。誰もが羨む特等席だと思つ。仁は席に座り、前の席の瀬川大と話していた。
席に近づくにつれ、二人の会話が耳に入ってくる。

「へーっ。意外だわーっ。お前ギター弾けるなんてな! 知らなかった」

「そりゃそーだ。言っつてないんだから」

「教えてくれればよかったのに。俺とお前の仲だろお？」

「ちょっと恥ずかしいじゃん？それに、あんまし自信はないし」

「え？まさか音が出せますってレベル？」

「いや、ちゃんと曲は弾ける……！……と思う、恐らく」

「もっと自分に自信をもてよ」

「あんがと。でも、そのセリフはちょっと……古いぞ」

「一度言ってみたかった！そこにツツコミは無しだ」

ここで二人の会話が止まる。その理由は……。

「……………」

彼らの席の周りを囲むようにして、梓と憂と純が立っていたからだ。

「え、えーっと……。何か用？」

仁が言った。

純が後から梓の背中を小突く。

梓は昔からクラスの男子などと話すのは、少し苦手だった。

向こうから話しかけてくれるとラクだったが、自分から話したことはあまり無い。

気楽に男子と話せる純などを見ると、内心羨ましさを感じていた。

しかし、今日はコチラから話し出す必要がある。というか、

このまま帰ったら、梓はただの拳動不審な人である。

梓は深く息を吸って、言う。

「三浦君？」

「はあ」

「ギター弾けるんだよね？」

「き、聞こえてたの？」

「うん」

「い、一応……」

さあ。

後一言。

再び息を吐いて、吸って、梓は言った。

「三浦君」

「はい？」

「軽音部に入らない？」

第一話 物事を決めるのに時間がかかるヤツは、決めてからが早いんだ。多分。

仁「というワケで、初めまして!!!この小説を開いて下さって、
ありがとうございます!!!」

作者「一話目から長々とスンマセン」

仁「この話を気に入ってくれたなら、これからも宜しく頼みます」

作者「そんな人いるのかな……。怖くなってきた」

仁「少しは自信持て。コツチまで心配になってくる」

というワケで、宜しくお願いします。

第二話 人との出会いは何かのキツカケだと俺は思っただよな。

え、何？俺が何かした？

俺は固まっていた。

大と話していたら、急に三人の女子に囲まれたんだ。

フツーは固まる。フツーは焦る。

……よな？

三人の女子の内、左にいるのは確か……。鈴木さんだっけ。
焦茶色の髪。頭の上で二つ結んでる。パツと見て判るクセ毛。
人の良さそうな顔。元気娘ってカンジ。

そこで、右の方にいるのは、平沢さん。席がわりと近い。
茶色の髪を後でくくってポニーテールにしてる。
真面目な優等生ってカンジ。出来た人。

そこで真ん中に立ってるのは……。中野さん……。だよな？
うっへ、なんて真剣な顔……。ホントに、俺が何かした？
艶やかな長い黒髪。頭の横で縛ってロングツインテールに。
若干のツリ目。いや、ネコ目？
なににせよ、どことなくネコを彷彿とさせる。

この三名に、現在進行形で俺と大は囲まれている。
何これ。私たちの誰と付き合うのよ！！ハッキリしなさい！！的
な展開？

イヤイヤイヤ、ないないない。

俺は必死に記憶をまさぐるが……。
何も心当たりは無い。断じて無い。

第一俺は、この三人とは一度も話したことは無い。
あ、平沢さんとは一度会話をしてるわ。

「スミマセン。消しゴム取ってくれませんか？」

ビビリな俺。なぜか敬語。

イマイチ女子と話すのは苦手なんだよな。何を話したらいいか判
んないし。

まあ、とりあえずこの三人とは口くな会話を交わしてはいない。

俺が黙々と考えていると、中野さんは俺に「ギター弾けるんだよね
？」と聞いてきた。

オーマイガ、ガツデム、なんてこった。

三種類の言葉で、俺はシヨックを表現する。

なるべく人には知られなくなかった。恥ずかしいし、中学時代に自
慢げに

「俺、ギター弾けるんだぜ！！」などと高らかに自慢するチャラ男
を見たからだ。

本人はなんら気にしていなかったが、俺から見れば只の痛いヤツだ
った。

まあでも、今思えばソイツの言い方に問題があったんだと思う。

とりあえず俺はイエスという意味の返答をした。

すると中野さんは言った。

「軽音部に入らない？」

は？けいおんぶ？

何ソレ？

俺が困り果てた表情を一瞬作ると、大が俺に言ってきた。

「あー。書いてある。ホラ、ここに」

……ホントだ。軽い音楽の部活、軽音部。

「軽い音楽って……何？口笛とか？」

何とも間抜けな発言をしてしまった。

少し考えりゃ口笛が部活になるなんてありえないことくらい、すぐに判るだろが。俺のバカ。

俺の発言を気にせず、中野さんは説明してくれる。

「軽音部は、簡単にいうとバンド。ギターとか、ドラムとか」

へー。バンドなんだ。

それならどっちかつーと重音ってカンジがするけど。

「……で、俺にその軽音部に入ってくれと？」

中野さんは頷く。

「バンドのメンバーになれと？」

中野さんは頷く。

……ムリだ。出来っこない。ムリムリ。

それにバンドやってる人ってなんか……。怖そうだ。

クラ ザー三世みたいなのが何人か集まってギターを弾いたり、キーボードを弾いたり、ドラムを叩いたり……。

おぞましい映像が頭の中に流れ込んでくる。

「今時そんな人なんかいないって、安心しな」

コラ！大！

勝手に人の頭の中を覗くな！！

「今年はまだ私一人しか入部者がいなくて！で、誰か他の人にも入って欲しいな」

なんて思ってたんだけど……」

中野さんが身振り手振りを加えながら早口で言う。

アレ？若干涙目になってない？ウソ！？待って！！やめて！！

「入ってあげなよ三浦君」

「そーだぞ、仁。女子を泣かせるなんてサイテーだぞ、それに丁度いいじゃん、

部活やりたいって言ってただろ？」

「先輩の人たちも、みんないい人達だから、大丈夫だよ」

鈴木さん、大、平沢さんが次々に俺に言うてくる。そして、

「お願いします！！」

頭を下げる中野さん。

なんだコレ。選択肢一つしかねーじゃん！！

でも確かに、俺がやれる部活って言ったなら、ココぐらいだよな……。

「中野さん」

「はい？」

中野さんは顔を上げた。

「男子が入っても……OKなのかな？ホラ、先輩方とかが……」

「あ！それは大丈夫！！男子の部員が欲しいって言ったの、律先輩だもん！！」

よ……良かった。最大の心配事が消えた。

まだ見ぬ律先輩に感謝感激！！

「じゃあ、とりあえず今日は見学に行くよ」

「見学？男はズバツと決めちまえよ！入っちゃえい！仁！！」

「うるせえ」

俺が大を軽く小突くと、中野さんは

「ありがとう！絶対に入部させて見せるから！！」

と、とびきりの笑顔で言ってくれた。

それを見て俺は思う。

女の笑顔は強力な武器だと。

「じゃ、軽音部の部室は、音楽室だから！放課後、絶対来てね！！」

「ありがと、三浦君。瀬川君も」

「俺なんもしてないよ」

「一緒に説得してくれたし」

「はあ、どーも」

一言二言、大と鈴木さんとで会話を交わし、三名の女子は戻っていった。

ツイテンポくらい置いて、大が言う。

「よかったな」

「何が」

「入る部活決まって」

「まだ決まったワケじゃ無いよ」

「あそこまでいったら、もう確定したようなもんだろ？」

「まあ……。ね」

「とにかく良かったじゃねえか!!」

大は俺の肩を二回バシバシと叩いた。

「いってえ!!」

「何言つてんだ！嬉しいくせに仏頂面しやがって！！ホラ笑え！！」

……うん。ちょっと嬉しかった。

放課後。

囲碁部に向かう大と別れ、俺は音楽室の前に立っていた。

「ココ……。だったハズ」

上を見る。うん。確かに音楽室だ。

大きく深呼吸二回。よし。

俺は扉のノブに手をかけ、ゆっくりと捻った。
瞬間。

乾いた破裂音が数回。同時に俺の視界をたくさん細長い何かが覆う。

そして聞こえる数人の声。

「軽音部へようこそ」

……。何コレ。

俺は目の前を覆う何かをどける。何だコレ、紙テープか。
前を見るとソコには……。

「あれっつ、なんか反応薄いな」

「うーん、もうちょっとインパクトが強い方が良かったかな」

メイド服に身を包んだ……え？メイド服！？

ここには数名の女性がいた。全員、揃いも揃ってメイド服。中野さんも着ていた。隅っこで。

アンタら、世の中の男全てがこういう趣味を持つてると思うなよ？心の中で叫びつつ、俺は彼女らを凝視。やっぱりダメだ。俺は男だった。

とりあえず、聞いてみる。

「あゝ。ココ、何部ですか？」

「軽音部です……！」

目の前の茶髪のショートカットの人が俺に言ってくる。

……アレ？どっかで見たよーな顔だな。

「三浦君だよな？梓が言ってた」

梓？ああ、中野さんのことか。

まだ俺はクラスの子の名前をほとんど覚えていなかった。

「ホラ。こっちきて座って？」

「おいしいケーキはいかが？」

え？ケーキ？何故？

案内されるがままに座ると、長いクリーム色の髪をした先輩が俺の前にティーカップを置いた。

「お茶どうぞ〜」

「え？ああ、どうも……………」

おっ、お茶？何故？

ここに来てからハテナマークの使用頻度がハンパ無い。
わからん事だらけだ。

「来てくれてありがとう」

中野さんが俺の横に来て言う。

「あー、えーと……………。何？」「」

俺は何から聞いたらよいか判らず、またも間抜けな発言をする。

「軽音部の部室……………。あまり細かい事は追求しないで……………」

苦笑いの中野さん。

「いつもこんなカンジなの？」

「うん……………。まあ……………。あっ！！ね、練習もちゃんとしてるよ！！」

……………。なんか怪しい反応だ。

まあ、今はとりあえず、

「ケーキ、頂きます」

俺は手を合わせた。

第二話 人との出会いは何かのキツカケだと俺は思っただよな。(後書き)

仁「展開遅くね？マダ入部しないんかい」

作者「ワリ、書きたい事がたくさんあるんだよ」

仁「無駄な所が多い気もするが」

作者「ソコに気づくとは、目の付け所が違っねえ」

仁「なんのこっちゃ」

作者「つーかもう、どこをどう削ればよいのか、チンプンカンプンで」

仁「大丈夫かお前、続けられんのかコレ……」

作者「七割くらいの確立で……」

仁「高いけど低い！！ちゃんと続けるよ!?!?」

作者「わかってるって、冗談だ」

仁「マジか……。イマイチ信用ならん」

作者「まあ、気にすんなって、次で入部させるから」

仁、作者「というワケで、二話目を読んで下さってありがとうございます」
います」

第三話 よく判らないけど、これ好きだなあ。っていつのがあるだろうっそれだよ

なんだ、この状況。

って、前の話もこんなカンジから始まった気がする。

軽音部部室。俺の前にはケーキとお茶。

お、美味しそうっすね……かなり。

とりあえず、口に入れる。

「……美味っ」

思わず言葉が漏れた。

本当に上手い。頬つぺたが光の速さで落ちてしまった。

やべえ、手が止まらない。

気がつくくと、先輩方はみなさん俺の座っているテーブルを囲んで、俺を凝視している。

……スンマセン。食べづらいのですが、でも、手は止まらない。

俺がケーキを食べ終わると、クリーム色の髪先輩が聞いてきた。

「お味はいかが？」

「あっ、凄い美味しかったです。ホントに」

「そう？よかったです」

ぽわーっとした笑顔を見せる先輩。

すると、カチューシャをつけた別の先輩が自己紹介を始める。

「というわけで、軽音部へようこそ！私が部長の田井中律です！」

田井中先輩。

茶髪のショートカット。カチューシャで前髪を挙げ、額を出している。

小柄。喋り方等から快活な正確だと推測。

「んで、コッチは、ギターの唯」

「平沢唯です！」

平沢先輩。

コチラも茶髪のショートカット。ややクセ毛。前髪の右をピンで留めている。

のんびりしたカンジ。今時流行りの癒し系かも。

……あれ？

「平沢？」

「あ、唯先輩は、憂のお姉さんなんだよ」

中野さんが説明してくれる。

なるほど、道理で顔に見覚えがあったワケだ。

「妹共々、よろしくね」

笑顔で手を振る平沢先輩。

「コチラはキーボードの、ムギ」

「琴吹紬です。よろしくね、三浦君」

琴吹先輩。

先ほどケーキとお茶を出してくれた人。

クリーム色のロングヘア。若干パーマかかっているのかな？

太い眉毛が特徴的。ほんわかした感じのお嬢様ってカンジ。

なんとなく気品がある。気がする。

「そんで、こっちがベースの……アレ？溲は？」

「あそこに居るよ」

平沢先輩が指差す先に……。居た。長いすの影から俺を見ている。

俺を怖がってるの？そんな俺怖いかな……。

俺が一人でショックを受けてると、田井中先輩がその人を連れてきた。

「ほーらっ。みーおー。恥ずかしがなくなって」

「ちょっと待って！律！！」

んで、俺の前に突き出される。

「うわっ」

うわって……。

それは後から押されたことによる悲鳴？それとも俺の目の前に突き出されたから？

後者だったら、泣くよ。俺。意外とナイーブだからね。

「べ、ベースの秋山漣……。です。よ、よろしくね？」

うわあ、すっげえオドオドしてる。

目え合わせてくんねえもん。

耐え切れず、田井中先輩に聞いてみた。

「……俺、そんなに怖いですかね？」

「大丈夫。漣は人一倍恥ずかしがりやなだけだから。すぐに慣れるよ」

「そーっすか……」

良かった……。けど、

この怖がり方はなく。ちよっとキツイっすよ。

秋山先輩。

長い黒髪。前髪は俗に言う、姫カットってやつ。

若干のツリ目。でも、綺麗な人だと思う。

背が高く、大人なカンジだ。

「そんでこっちが、もう一人のギターの梓」

「よろしくね、三浦君」

さて、五人全員の紹介をもらったんだ。俺も自己紹介を……。

「え……と、一年二組、三浦仁です。今日は」

「仁君仁君！新歓ライブの私達の演奏、どうだった？」

話の腰を折られる。

イヤ、それより平沢先輩……仁君？

「仁君の感想、聞きたいわ」

イヤ、だから琴吹先輩、仁君？

「そーだな！どうだった？仁」

え？田井中先輩……。

仁？

知り合つて数分の人を、名前呼び？

しかも異性。

俺が変なの？アレが普通なの？

イヤ、今までの人生でこんな事は一度も無かつた。今がおかしいんだ。そうに違いない。

だつて、中野さんも俺のことは「三浦君」だろ？

あまりに普通に名前と呼ぶので、惑わされてしまった。

普通、異性同士で呼ぶ時は、苗字だと思っただけど……。

「正直に言つてくれて構わないよ。三浦君」

若干震える声で秋山先輩は言う。

良かつた。秋山先輩は苗字で呼んでくれた。

……良かつた……のか？

俺の心に安堵と失望が入り混じった複雑な気持ちが溢れる。

それと、新歓ライブか……。うーん……。謝ったほうがいいな。

「すみません！！見てません！！」

頭を下げて俺は言い放つ。

なるべくスッキリと言ったつもりだったんだけど、俺の放った言葉の威力は予想以上に凄まじいようだった。

ま……。真っ白になってる……。

効果音で表すなら、「ガーン」

正に「ガーン」凄いな。一体誰が最初にこの表現を考えたのか。

俺はその人に厚い敬意を払おう。

「見てないの？」

「すみません」

「何してたの？」

「えーと……」

新入生歓迎会が行われている頃、俺達男子は空き教室で

「男子熱血友情連合」結成会を開いていた。

……。まあ判りやすく言うと、少ない男子、仲良く過ごしましょうって会。

みんなイイ奴そうで、非常に安心した記憶がある。

俺はその事を伝える。

「あー。道理で男子の姿を一人も見ないと思った」

中野さんが言う。

「なんか、いいな。男子っぽくてさ」

「楽しそうよね、男の子達って」

「私も……」

……なんか会話が変な方向に飛んでしまった。

そんなに男子って羨ましいかな？まあ、確実に話の内容はくだらないだろうな。

……でもまあ、それが……楽しいんだよな。すっげーバカだと思うけどさ。

俺が悶々とそんな事を考えている内に、女性陣の男性談義は終わってらしい。

田井中先輩が俺に言う。

「んじゃーさ、仁は私達の演奏を聞いてないワケね？」

もう呼び名にはつつこま無いぞ。言っただけとは思えないし。

でも慣れない！恥ずかしい！何とかして下さい！！

とは言わない。言えない。出会ってまだ数十分だし。俺にはそんな社交性は無い。

……なんかココに来てから、俺の弱さばかりをさらけ出している気がしてならないんだけど。

「はい。そういう事になります」

「んじゃーさ、今から仁に私達の演奏、聴いてもらおうぜー」

「え？」

いいのかい。そんな事。

「うん。良いかもな」

「そうと決まれば、早速準備だ！」

「おーっ！！！」

手を宙に突き出す軽音部の皆さん。

「さ、ここに座って」

先輩方が演奏の準備をする中、俺は中野さんに案内され、長椅子に腰をかける。

中野さんも隣に腰を下ろした。拳四つ分の隙間が何だか物悲しい。

……アレ？

「中野さんは弾かないの？」

「私のパートはまだ出来てないから……」

中野さんは少し悲しそうな笑みを浮かべて言った。

「ごめんね、梓ちゃん。もう少しなんだけど……」

「いいんですよ！曲を作るのは大変だし、第一、練習する暇がありませんでしたし！」

「よし、準備完了！」

「いけるよ！りっちゃん！」

お、始まるみたいだ。

「いち、に、さん、し！」

田井中先輩がスティックを四回叩く。
前奏が始まった。

……あれ？これ、ホントにあの人達？
凄く上手いとは言えない。けど……。

なんか……いいなあ！！

よく判らないけど、いい。とにかくいい。
上手く言えないけど、一体感っつーの？

田井中先輩のドラム。 琴吹先輩のキーボード。 秋山先輩のベース。
平沢先輩のギター。

この四つが合わさり、見事に共鳴している。

何よりも……楽しそうだった。

演奏の合間に、アイコンタクトをしている。その度に、笑顔を見せる。

この人達と演奏できるのが、たまらなく嬉しい、楽しい!!
そう言っているようだった。

俺もこの人たちと演奏してみたい。そう思った。
すっげえ楽しそうじゃん。

中野さんの視線を感じて俺は振り向く。

何だか心配そうな顔をしていたが、俺の顔を見たたん、嬉しそうに笑った。

俺の反応を見たんだろうな。一目で分かったハズ。
自分の顔が高潮しているのを感じた。

演奏が終わる。

室内にギターの余韻が響いた。

「どーだった……かな？」

スティックを置いた田井中先輩が俺に聞いてくる。
感想は一言しか思いつかなかった。

「凄く良かったです!!」

ありきたりな言葉。

でも大丈夫。めっちゃ感情込めて言ったから。きっと伝わってる……
ハズ。

最後に自信を失うのが、俺の悪い癖だと思う。
そんな俺の心配は一瞬で吹き消される。

「ホントに！良かったあー！」

「じゃあさ、じゃあさ……」

俺は田井中先輩の言葉を引き継ぐ。

「俺、この部に入部します！」

一瞬の沈黙。ちよつと俺は焦る。

あれ？俺、何か変な事言ったかな？ズレてたか？

「……や」

何だ？嫌ですってか？俺泣いちゃうよ？

「いやったあー！！！！！！！！！！」

俺以外の全員が叫ぶ。

うおつとビビる俺。

急に両手を取られる。目の前には中野さんが。

「ありがとう、三浦君！ホントにありがとうー！！」

溢れんばかりの笑顔。

ち……近いつす、恥ずいつす……。

中野さんの手の中で、俺の両手はしっとりと汗ばんでいった。

第三話 よく判ないけど、これ好きだなあ。っていつのがあるだろうっそれだよ

おお「やっと入部けてー」

仁「わー。パチパチパチ」

おお「微塵も感情の籠ってない拍手、ありがとう」

仁「次の話でやっとこさ俺のギターの前腕を披露する時が来たな…

…」

おお「イヤでもお前……」

仁「何？」

おお「やっぱりいいや」

仁「気になる。言え」

おお「イヤ、次の話を見てくれたら判るから。ヨロシク!!」

仁「宣伝しやがった!!」

第四話 自分は出来てるつもりでも、周りから見たら全然出来てない。そうい

軽音部部室。俺はこの部活に入部を決めた。

その宣言をしてから、何故か俺の歓迎会が始まってしまった。

……アナタ達。練習しないの？んじゃ、さっきの演奏は？

俺の疑問など知る由も無く、先輩方は俺に質問をぶつけまくってくる。

「仁君、やっぱり背高いね！何センチ？」

「え？イヤ、百七十一センチしかないんで、どっちかっつーと小さい方なんですけど……」

「いいんだよそんなの！アタシ達から見たら十分おっきいし。で、体重は？」

体重？そんなの聞いてなんの意味が？

一応答える俺。

「五十八キロしかないです。ホントは、もっと増やしたいんですけどね」

「ええ〜！なんで？」

琴吹先輩と秋山先輩が見事にハモツた。

……何故そんなに過剰な反応を？

「血液型は？」

「A型です」

「えーっ」

「それは洒落ですよね……?」

「うん、安心しな」

「はい。安心します」

よかった。ちよつと焦っちゃったよ。

ここで一旦、会話がストップ。

……む。この一瞬のスキを突いて、俺もいくつか質問を……。

「あの。俺からも聞いていいですか?」

「どんどこいだ!」

「何でそんな格好してるんですか?」

「え?」

この状況では、そんな格好はメイド服を指す。

何故か軽音部の皆さんはメイド服を着ていた。
ふう。最大の疑問がようやく聞けたよ。

先輩方の返事は単純明解だった。

「えー。だって可愛いし、男の子が喜ぶと思って……」

「男をどついつ目で見てるんですか？」

「こつこつ目」

田井中先輩は、ジトーツとした目を作る。
何それ？全然信用されてねえ！

「とりあえず、なんか落ち着かないので、着替えてもらえますか？」

うん。コレは言えた。つーか、言わないとな。

だって実際落ちつかねえんだもん。このままずっと居たら俺、おかしくなっちゃいそう。

流石にこの年で前科一犯は嫌だわ。

「ちえー。わーったよ」

「仁君のイケず……」

平沢先輩。日常会話でそんな表現使った人、僕初めて見たっす。

……あれ？

気づいたら皆さん俺の事を見ている。顔に何か付いてる？

「何ですか？」

「何ですかって……。着替えるって言ったのは三浦君でしょ……」

「え？」

「だ、か、ら、着替えるんだって！今から……」

え？

……。

「ああ！！！！そーいう事かあ！！！」

ようやく分かったよ。着替えるんだから出て行って事ね！
あーハイハイ。実に簡単な事だし……。

「早よ出てけええー！！！！！」

「すいまつせーん！！！」

音楽室を追い出される俺。

でもまあ、仕方ない。俺が悪い。うん。

……なんでこんな簡単な事に気づけなかったんだろうか。なんてデ
リカシーが無いんだ。俺。
軽い自己嫌悪に陥る。

「入っていいよー」

しばらくすると、音楽室の中から平沢先輩の声がした。

うーん。追い出された身としては入りづらいな……。

俺は扉の前で立ち止まった。すると、

「なーにやってんだよ。さっさと入れ」

田井中先輩が扉を開けてくれた。

あ、有難い！ホントに。

中に入る。よかった。皆さん制服だ。

「そういえば、仁君はギターなんだよね？」

俺が椅子に座ると、平沢先輩が聞いてくる。

「はい。……だったよね？」

中野さんが俺に確認を求めた。

「はい。一応」

「ギターが三人か！演奏の幅が広がるな！！」

「ちょっと弾いてみてよ！！」

え？イヤ、ムリムリ。そんないきなり。

俺はとりあえず逃避を図る。

「え？でも、俺ギター無いし……」

「大丈夫！貸してあげるから」

中野さんの言葉で、俺の計画は一瞬で粉碎される。

……中野お……。

でも、こんな穴だらけの計画、失敗しないほうがおかしい。

「はい。私のギター使って」

中野さんが俺にギターを貸し出してくれた。

えーっと、なんてギターだっけ？これ。

俺はギターに詳しくは無いんだよね。全然。

「んじゃ、有難く使わせて頂きます」

「いいよ。どござ」

何故か中野さんは少し笑いながら言った。

……何故？まあいいや。

えっと……。

ギターを首から下げて、アンプに繋ぐ。軽く弾いてみて準備完了。

……なんの曲にしようか？頭の中に楽譜を思い浮かべる。

でも、俺のレパートリーは考えるほど多くないんだよね。

五秒悩んで、一番得意……だと自分で思っている曲に決定。

「じゃ、いきますね」

軽く深呼吸。

うっ、緊張する。

もっと精神的に強くならんきゃな。

そんな事を考えつつ、俺はギターを弾き始める。

弾いている最中は、絶対に五人の方は見ない。

だって、反応とか気になって気になって……。あ、ヤベ、ミスりそう。

俺はなるべく演奏に集中することにした。

演奏終了。

……ふう。なんとかなったと思う。きつと。多分。恐らく。

俺は五人の方を向き直る。

「ど、どうでした……?」

「凄くカッコよかった!」

「私、仁君の演奏好きだなあ!」

「中々の腕前だなあ」

「少し荒っぱいけど、力強くていいと思うよ」

上から順に琴吹先輩、平沢先輩、田井中先輩、中野さんの感想。

合格点はもらえた……よな?よかったよかった。

俺は安堵のため息をついた。

……あれ?

秋山先輩の顔が若干硬直している。

やべ、下手だった?やっぱり。イヤ、秋山先輩に合わなかったかな……?

かなり焦る俺。たまらず聞いてみた。

「俺の演奏駄目でしたか……?秋山先輩」

「いや、演奏はよかったけど……演奏中の顔がちょっと怖くて……」

う、それ俺のコンプレックスですよ……。

集中している時の俺の顔は、泣く子も黙る、というか、泣く子は吐くまで泣き喚くほど、

なんというか……怖い……らしい。

普段のしまりの無い顔とのギャップが激しいんだそうだ。

「漣」。それはちょっと、仕方ないだろ？」

仕方ない!？

仕方ないっつーのも、中々心に刺さるといつか……。なんというか。

「いや、集中してるのは分かったんだけど……。気を悪くしたらゴメン!！」

秋山先輩が頭を下げる。

あ、そういうのはやめて下さい。焦りますから。

「いや、よく言われますから、気にしない下さい!！」

「でも演奏中はもっと楽しそうにしないと、見てる人が怖がるぞ」

「笑ってみてよ、仁君!ここに來てから、苦笑いしかしてないよ!」

笑えつつたつて……。そんな、いきなし。

俺はあまり笑わない方だ。というか、喜怒哀樂の全てが顔に出にくいと言われる。よく。

俺としては、そんなつもりは無いんだけどな!。

自分では笑ってるつもりだよ?俺、お笑いとか好きだし。

俺の顔の筋肉はあまり優秀ではないんだな。

「ほら」。仁君笑つてっつ

「すまいるだよ!仁君!！」

「うん。三浦君はもっと笑ったほうがいいと思う」

ちよ、待って、ホントに。ムリだから。

「いや、ちょっとカンベンしてもらえますか？」

「なにおーっ。先輩の言うことが聞けないのか！！」

そう言われても……。

「よし、分かった。ジャンケンだよ！私達全員が仁君に勝ったら、仁君は笑顔をプリーズね！！」

なるほど。なら俺は五回中一回でも勝てばいいのか。

それなら滅多な事では俺の敗北は無いハズ。よし。

「分かりました。受けて立ちましょう！」

「よしきたあ！まずはこの私が相手だぜ！」

田井中先輩が一人目の相手か。

「最初はグー！ジャンケン……」

……負けた……五連敗だよ。見事に。俺ってジャンケンこんなに弱かったんだな。

俺は自分の運の無さに絶望する。

チクショー！ありえねえぜホントに！！
何かに当たりたい衝動をグツと堪える。
目の前では五人が歓喜の声を上げていた。やめろ、心に響く。

「んじゃ、お約束の商品！プリーズ！」

商品！？平沢先輩、人の顔を商品呼ばわりとは……。
心の中でブツクサ文句を言う。
当然、表には出さないけどさ。

「……………んじゃ、やりますよ……………」

軽く深呼吸。……………よし。
行ける！笑え！俺の顔！！

……………皆さんの反応は冷めていた。

「それ、笑ってるの？」

……………頑張ったんだよ。俺。

人間、どうしても苦手な事ってあるじゃん。仕方ないさ。うん。

「スンマセン。ベストは尽くしましたが……………」

「アレがベスト！？さっきの苦笑いの方がまだマシだよ！？」

う。心に刺さる……………。

そんなこんなで、時間は経っていった。

「お。もうこんな時間か。よし。帰るぞー」

「結局全然練習しなかったじゃないですか！」

「しょうがないだろ？仁が来たんだし」

「え？なんか……すみません」

「いって事よ！仁君！」

「明日はしっかり練習するからな！」

明日は練習か。

……ホントに練習するのか？この人達。

でもまあ、お茶会も楽しかったし。よしとしよう。お菓子も美味かったし。

俺の長所の一つは、諦めの早さだと思っ。

「そんなワケだから、明日から三浦君も自分のギター、持って来てね」

中野さんが言う。……けど。

「えっ？自分のギター？」

「ん？何？」

……えーつとねえ……。

「俺、ギター持ってない」

一瞬の沈黙。

……で。

「えええええええー！！！！！！」

俺を除く五名の声が、音楽室に響いた。

第四話 自分は出来てるつもりでも、周りから見たら全然出来てない。そうい

仁「え？どーゆー事？これ」

おお「どーゆー事って……こーゆー事だよ」

仁「ウツソン！俺、ギター持ってなかったのぉ！ギター弾けるのに……」

おお「まあ、そういう事になりまんがな」

仁「何故関西弁！？しかもカタコト」

おお「ショックが和らぐと思わない？」

仁「思いません」

第五話 第一印象だけで人を見定めてはいけない。イメージと違うことがあるか

今回ちょっと長くなっちゃいました。

ダラダラとすみません。

第五話 第一印象だけで人を見定めてはいけない。イメージと違うことがあるか

みんなは叫び声を上げた後、俺に次々と質問を浴びせてきた。

「持っていないってどういう事？」

「だからさっき言ったじゃないですか、『俺、ギター持っていないし』って」

「いや、それは、『家にギターはあるけど、今現在ギターを持っておりません』って意味

だと思っていたのだが……」

……個人個人の捕らえ方ですね。田井中先輩。

「部で貸し出してくれたりはしないんですか？」

「しません」

ゲーツ。俺は完全にそういうのをアテにしたのに。

……まっずいなあ。

「でも、何でギター持っていないのに弾けるの？」

うん。素朴な疑問ですよ。平沢先輩。これには深い事情があるんですよ。

中学生の頃、俺は一応部活動に入っていたんだ。しかも、運動部。昔は今程運動嫌いじゃなかったからさ。

あ、ついでに言っておくと、俺の運動能力はいたって平均的だ。いや、平均より、ちよっぴし上かな？まあいいや。基本、普通ってこと。

三年生になると、当然引退するじゃん？二年半の活動を終えた俺は、何かやる事が欲しかったんだよね。

……なるべく疲れずにさ。

そこで出てきたのが、友達の家で見つけたギター。俺は早速練習した。……友達の家で。

その事を、皆さんに伝えると、

「セコッ！」

と、帰ってきた。まあ、妥当な反応だろうね。

でも、もうちよっとソフトに言っただけで欲しかったっす。

俺のハートはガラス細工ですからね。

二カ月半程通ったら、ある程度弾けるようになった。

そこで俺は、そろそろ自分のギターを買おうと思って、楽器店へ走ったんだけど……。

おっどろいたね。ギターの試し弾きが出来るなんてさ。

「おいおい、まさか……」

「はい。残りの約八ヶ月、楽器店の試し弾きで練習してました」

……やべえ、言わなきゃ良かったかも。皆さんの目が白い。でもま

あ、当然っちゃあ当然か。

俺は必死にリカバリーを試みた。

「いや、でも苦勞もしたんですよ？三回連続で行くと、店員さんに

顔を覚えられちゃうから、
ちよくちよく店を変えたり……」

「仁、ちよつといいか……?」

俺の言葉の終わりを待たず、田井中先輩が言う。

「なんですか?」

「とつっ!」

「つてえ!!」

な、なんだ? 頭の天辺に衝撃が。

その原因はすぐに分かった。田井中先輩の手刀だ。

ま、殴られて当然だと自分でも思っているので、何も言えない。

中野さんが呆れ顔で言った。ヤメテ。そんな顔しないで。

「やれやれ、今度、ギター買いに行きましょうか?」

「そうだな……。ギターがないと練習にならないしな」

「ギターっていくらするんですか?」

田井中先輩にやられた所をさすりつつ、俺は聞いた。

あんまし高すぎると困るんだよな……。

そんな俺の切実な願いも空しく、中野さんは言い放つ。

「あんまり安すぎてもよくないし、四、五万つてとこだと思つよ」

……厳しいな。かなり。
仕方ない。

「リサイクルショップで買うかな……」

俺がそう言つと、またも田井中先輩の手刀が飛んできた。

結局土曜日である明日、俺のギターを買いに行く事になった。

俺一人じゃ信用出来ないという事で、皆さんも一緒に来るらしい。

入部一日目で俺は自分の信用を地に落としてしまったみたいだ。やつちまったな。俺。

……おつとやべえ、焦げる焦げる。

三浦仁。現在晩飯の調理中。

俺は実質的に一人暮らしだ。

両親は、どちらも仕事で海外を飛び回っている。年に数回しか帰つてこない。

ちなみに、俺の両親は見ているほうが吐き気を催す程のラブラブだ。ホントにやめて欲しい。

そんな二人は、実は常に同じ国にいて、共に仕事をしている。

というわけで、俺はこの中々広めの家に一人で過ごしているというワケ。

だから俺は男子にしては珍しく、家事全般は完璧にこなせるんだぜいや、完璧は言い過ぎたか。それなりに……おつと。また弱気になつてる。もう癖だな、これは。

ん。そろそろいいかな。……よし、完成ーっ。

気づいたら鼻歌を歌ってた。俺は一人で照れる。料理は、俺の趣味の一つだった。

作った飯を口に運びながら、俺は考える。

にしても、ギターって思ったよか高いなあ……。それも、中野さんが言ってたのは恐らく最低でも

これ位は欲しい。って事だから、もっと多めに持ってた方がいいよな……。

よし。決めた。男は度胸だ。来月は節約生活だな。

俺は決意をガツチリと固めた。

そこで、次の日。

待ち合わせ場所に、俺は全力で走っていた。

ヤバイ。タイムリミットは、あと二分。間に合うか。

母親以外の異性と休日に出かけるのは……。その……。初めてなんで、緊張で寝れなかったんだよ。

バカにしてるな？仕方ねえだろ！俺はまだ汚れを知らぬ、ピュアボーイなのさ。

そんな事を考えながら走ると、軽音部の皆が集まっているのが見えた。

「おっそいぞー仁ー！」

「後二十七秒だよ！」

と、俺に声をかけてくるのは田井中先輩と平沢先輩。よかった。どうやらギリ間に合ったっぽい。

「すみません！寝坊してしまつて」

俺は息を切らして謝る。そんな俺にかけられた言葉は……。

「それ、私服？」

「……ヒドくないですか？」

現在の俺の格好。紺のジャージの中に白い半袖Tシャツ。

「トレーニングしに来たんじゃないんだぜ？目一杯めかしこんで来いとは言わないけど、」

それはちよつと……どうよ？」

「服でしょう。立派な」

「他に何か持ってないの？」

「えーつと、寝る時様のスウェットと、後もう一着、黒のジャージがあります」

「え？それだけ？」

「はい」

……え？何でそんなに驚いた顔を？

何か、別の生物を見るような目で見てない？

「服……買わないの？」

「そんなのに金使ったつたら、本とかゲーム買いますよ」

当たり前だろ？……少なくとも、俺の中では。

毎月のように新しいゲームや本が出るのに、服なんか買ってもらえっか！！

あ、この後何かDVDレンタルして行こう。今日は映画って気分だ。

「ぶっ！」

中野さんが笑った。

何？俺の顔か？俺の顔がおかしいのか？それとも俺の言ったことがおかしかったのか？

事の真相を確かめるべく、とりあえず聞いてみる。

「何故笑う？」

「ゴメン。大真面目な顔で言うから、可笑しくて……」

ここでまたクスクス笑い。といつても、嫌味な笑いじゃない。

「私、三浦君って、もっとちゃんとしてると思ってた」

え？俺、ちゃんとしてないの……？

自分では、日々真面目に生きてたつもりだったのに……。
琴吹先輩と、秋山先輩も言う。

「あ、私も。なんというか……イメージとちょっと違つかないって」

「うん。もっとクールなイメージもあったのに」

ここで五人は俺の格好を見る。

「この格好じゃねえ……」

「そんなにおかしいですか!？」

「だって高校生にもなれば、普通は男子も少しはオシャレに気を使うのにさ」

「それに、ギターの実習は楽器店巡りをしての試し弾き……」

中野さんの呟きで、俺を除く五人が大笑い始める。その渦に取り残される俺。

何これ。すつげえ苛められっ子の気分。こんなカンジだったんだな。ゴメン。小学校の頃
逆上がりが出来ないのを皆で笑っちゃまった山本君。俺が悪かった。

「ふー。仁、今日はいくら持ってきた？」

ひとしきり笑った後、田井中先輩が聞いてきた。

「え？ちよつと多めに、十一万円ですけど」

「おお。十分だ。よし。んじゃまず仁の服を買いに行くか!」

「それいいね!私達を選んであげるよ!」

「え?でもギターも買わなきゃいけないし」

「そんな格好じゃ、一緒に歩いてて恥ずかしいよ」

「う。ちよつと傷つきますよ、中野さん」

「いや。梓の言う通りだ。そんな格好じゃ、一緒にいる私達が恥ずかしい！ほれ、行くぞ」

な、なんだ？女性にとっては、活動の必需品よりも、まず服装なのか！？

うーむ。女は分からん。

そんなこんなで、女性達に服屋に連行される俺。すっげー弱い。男尊女卑なんて言葉、俺の中の辞書には無いみたいだ。

「よし。到着ー」

俺はオシャレな店の前に立っていた。ショーウィンドウの中に、これまたオシャレな服を着たマネキンが数体、イカシたポーズを決めて立っている。

まあ、オシャレな服つつつても、俺には何一つ分からない。

最近流行った……アレだ。レギンス？も、俺には股引きにしか見えなかったし。

そろそろ店内へ入ってゆく五名。

ちよ、ちよつと待って。俺、こういうところ来た事ないから、入り辛いんだよ。

「んじゃ、仁。自分がいいなって思う服、ちよつと選んでみて」

「皆さんが選んでくれるんじゃないかなかったですか？」

「仁君の好みも反映させたいから」

……なるほど。お優しいっすね。

俺は目の前の服達を一つ一つ見ていく。

お。これなんかいいんじゃない？紫と黄色の、一見合わなさそうな色をあしらった……。

所々にプリントされたチューリップがまたいい味出してるぜ。

俺がその服を見せると、五人は全員失望の表情を浮かべた。

「まさかここまでとは……」

「想像以上ですね」

「本当にそれを着るつもりなのか……？」

「独創的なデザインね……」

「むう、中々手ごわい相手だね！」

上から田井中先輩、中野さん、秋山先輩、琴吹先輩、平沢先輩の感想。

そ、そんなにヒドいか？この服。作った人泣いてるぞ。あと、俺も。

「よーっし。仁の実力は十分に分かった！私達に任せてくれ！」

その言葉をキツカケに、五人は俺に服を持ってきては試着させまく

った。
着せ替え人形？俺。
五人は、俺の格好を見て話し合いをしている。

「むう。溇の選んだのはちょっと明るすぎるな……」

「え！？でも、いいと思わないか？」

「仁が着るんだぞー。それ」

「うう。そうか……」

「こんなのだろうかしら？」

「おお！ムギちゃんそれいいよ！」

「私、こういうのもいいと思います」

「あ！あずにゃんのもいい〜！」

あ、あずにゃん？だれソレ。ひよっとして……中野さん？
俺の視線に気づいたのか、中野さんは慌てて手を振る。

「ち、違うからね！唯先輩が勝手に呼んでるだけだから！」

「ああ〜ん。あずにゃんのいけず〜」

……あずにゃん……ねえ。

結局服を二着、ズボンを一着買うことになる。

三着合計八千七百円ナリ。
……じゃあな。福沢諭吉。

服屋を出て、楽器店に向かう途中。田井中先輩が言う。

「せっかく買ったんだから、ちゃんと着ろよ」

「当たり前ですよ」

絶対にこのちゃんと服は着なければ。でなければ、死んだフックーが浮かばれない。

そんな話をしながら歩くと、数分で目的の店に着いた。

お。この楽器店は、一番初めに来たトコじゃん。懐かしい。たしか、三回お世話になってるはず。

「ここ、ムギちゃんの家系列のお店なんだよ！凄いよね！」

「え？」

平沢先輩の言葉に、俺と中野さんは同時に声を上げ、顔を見合わせる。

……系列？ひよっとして琴吹先輩って、お金持ち？

うん。やっぱりそうだ。あの高そうなお菓子達も全部琴吹先輩が持ってきたって言ってたし。

やべえ、お嬢様じゃん。なんか、凄え輝いて見えてきた。全く別の世界の人……。

「仁？なにボケーンとしてんだよ。ホラ、行くぞ」

「え？ああ、はい」

田井中先輩の言葉で、現実世界に引き戻される。皆さん既に店の中へと入っていた。

また置いてけぼりか……。

中に入って、ギターを見る。こうやって沢山のギターが並んでるのを見ると、なんか楽しくなる。

俺は全ての段に本がキツチリ並んでる本棚を見るのが好きなんだよね。同じ感覚だろうか？

「ギターくらいは自分で選んでよ」

中野さん。俺、すっかり頼りない男？その言い方だと。

人には向き不向きがあるって事を、分かってくれよ。

ずらりと並ぶギターを一つ一つ眺めていく。手に持ってみる。

……駄目だ。なんか俺に馴染まない。……気がする。

いくつかそつやって行く内に、一つのギターに辿り着く。

おお。これ……いいんじゃない？ツヤツツヤの黒。

持ってみた。……いい。これはいいよ。やべえ。運命の出会いだわこれ。

俺の頭の中に、ファンファーレが鳴り響く。

「それにするのか？」

秋山先輩の言葉に、俺は頷いた。

「うん。似合ってるよ」

「かつこいいよ！仁君！」

「ところで、値段はおいくらかしらん？」

そうだったよ。値段がある意味一番重要だ。
心臓をバクつかせながら、俺は値札を見る。

……よおおおおおっしやああああ！！！！完璧！！九万八千円なり
いい！！！！

俺の喜びようを見て、女性陣は結果が分かったようで、胸をホッと
撫で下ろしていた。

俺、ギターゲッツ！

……古い？

第五話 第一印象だけで人を見定めてはいけない。イメージと違うことがあるか

仁「なんだ！今回の俺！ダッセエ格好したセコい野郎じゃん！」

おお「認める！それがお前だ！」

仁「もうちょいマシな設定をつけてくれても良かったんじゃない？
運動神経も普通とか……」

おお「もともとお前はそういう設定だったから。諦めな」

仁「なんか長所は無いのかい？家事以外に」

おお「大丈夫。次の話で、お前のもう一つの特技を出すから」

仁「マジ！？あざーっす！」

おお「でも、それは……。ちょっとお前ウザくなるな。うん」

仁「え？ウソ」

第六話 入ってのは、いかなる事にでもだんだん慣れていくもんだ。

(前書き)

おお「前回の後書きで言ったコイツの特技ですが……」

仁「なんだい？」

おお「事情がありまして、バツサリとカットさせてもらいましたあ
！！」

仁「な、何いい！！」

おお「そんじゃ、本編どうぞ」

仁「おい、待って！ちょっと！！」

第六話 人ってのは、いかなる事にもだんだん慣れていくもんだ。

「考えてみるとさあ、この小説って、一話の終わりから五話の途中まで、

全部一日での出来事なんだよな？話引き伸ばしすぎじゃね？」

「初っ端からそれはないんじゃないか？」

話の始めっからこの小説の多々ある駄目な所をガッツリ否定してくれたのは大君。

この作者の文才の無さは、もう君も分かっているだろう？

まあ、確かに話は進まない。けど大丈夫！進める所は一気に進めるって言うてたから。

現在、週明け月曜日の昼飯中。

「しかし。お前ギター持ってなかったなんてな。ビックリ仰天だよ、ホント」

「そんな驚く事か？」

「だって、中々上手かったんだろ？中野さんが言ってた」

え？そーなの。やだなあ。照れちゃうよ。僕。

それで放課後。中野さんが俺の所にやってきた。

「一緒に部活行こっ」

だつてさ。

それに対する俺の返事は、

「えっ？」

……失礼過ぎない？俺。

でもさ。いきなし女子に「一緒に行こっ」って言われっとなさ。ちょっとビクツとするよね？

何？もしかして俺だけ？俺だけなのか！？

「ゴメン。ちょっといきなりだったからビククリして」

「あゝ。良かったあ。嫌がられてるのかと思っちゃった」

ほらあ！

なんか不安がらせちゃってたし！！

だからいつまで経ってもモテないんだよ。俺。

そんなこんなで中野さんと部室へ。

道中、中野さんの方から二言三言、話しかけては来たものの、俺から話しかける事は出来なかった。

だつて、だつて……。恥ずかしいんだもん！！二人つきりだとなあ……。

でも、早く慣れないといけないよな。いつまで経ってもこんなんじや、中野さんに悪いし……。

やれやれ、情けないわ。俺。自分で自分が嫌になるよ。

部室の扉を開けると、先輩方は全員揃っていた。

「おーす！仁、梓」

「こんにちは」

「どうも」

田井中先輩に挨拶を返し、鞆を長いすに置き、テーブルに向かおうとした時だった。

……あの人、誰だ？

知らない女性が椅子に座り、ケーキとお茶を優雅に味わっていた。

中々綺麗な人。長い茶髪。楕円型の眼鏡。

先生……だよな？あんな先生居たっけ？

俺の視線に気づいたその人は、俺の方を向いた。

やばい。めっちゃ綺麗じゃん。思ったより。

「アナタが新入部員の三浦君？」

「は、はいっ」

声が上がった。

……恥ずかしい。

「そっかー。仁君はまださわちゃんと合ってなかったんだね」

「そついえば、私達の音楽の担当は山中先生じゃありませんからね」

平沢先輩と中野さんが言う。……え？
平沢先輩。さわちゃんって、まさか……。

「軽音部の顧問をさせてもらってます、山中さわ子です。よろしく
ね」

……この人だった。

先生に対しても変わらぬその姿勢。俺、尊敬するっす。
とりあえず、挨拶を返さなければ。

「三浦仁です。よろしくお願いします」

俺は頭を軽く下げる。

山中先生は、何やら品定めをするような目で、俺を見ていた。

「あー。仁。気をつけたほうがいいぞ」

田井中先輩がニヤツと笑って俺に言ってきた。
気をつける？気をつけるって、何が？

「さわちゃんを普通の先生だと思ったら、大間違いだからね！」

「どづいつ意味よー!!」

……まったくだ。こんな綺麗で優しい先生に対して、どこを気をつ
けると？

「ところで、仁君」

「なんですか？」

山中先生は俺を見て言う。

……なんだか真剣な眼差しだ。ちょっと怖いです。

俺、少し後ずさり。

すると、山中先生は立ち上がって、俺の方に近づいてきた。

……なんか目が変な光を放っているような気がする。かなり怖いです。

俺、かなり後ずさり。……が、

……か、壁！？もうだめだ。山中先生の手が伸びてくる。俺は観念して目を瞑った。

……頭に何かを装着される感触。

何だ？何が起こった？

目を開けてみた。

「あーら。中々似合うじゃない！」

「うん。カワイイよ！仁君」

か、かわいい？俺が？何故？

困惑する俺。頭の上に手をやってみる。

……何かがあるな。なんだコレ？

琴吹先輩が手鏡を見せてくれる。そこに居たのは……。

誰も見たくない、つか、誰にも見せたくない猫耳を付けた俺。

すぐさま頭の上の異物を取り外す。この間、約0.4秒。

こんなに素早く動いたのは、生まれて初めてかもしれない。スッゲー早かったよ俺。

俺が初めて本気で体を動かしたのは、頭の上の猫耳を取る為。

……なんなんだ、俺の人生は。

「あーん。結構似合ってたのにー」

「恥ずかしがりやさんねえ」

恥ずかしがりや？今のでまったく拒否反応を起こさなかったら、別のあらぬ疑いをかけられちまう。

うん。絶対にそうだ。自分を信じる。俺が正しい。

……俺は約一分前に思った事を、早くも修正した。

スイマセン。平沢先輩。アナタの言う通りでした。この人は普通の教師じゃない。

「仁君の為に、今度男の子用の衣装も作ってあげるわね」

え？は？衣装？何？

「私達が着てたメイド服も、さわちゃんが作ったんだよ」

俺は初めてこの部室に来た時の事を思い出す。

……嫌ああああ！！！！！！

俺はこれからの自分を想像して、真っ青になる。

しかし、あの衣装を五人分自作した山中先生の衣装作りの腕に、内心関心してしまった。……不覚！

「律、そろそろ練習しないか？三浦君もギターを買った事だし」

「そーだな。んじゃ、練習するかあ！」

そんな俺を見かねてか、ようやく練習開始の合図がかかった。

た、助かった。ありがとうございます。

それに、丁度いいし。新しいギターで、早く演奏がしたかった。
……いや、勿論家でも練習してきたよ？俺、意外とマメだからね。
ホントに。

俺が言ったのは、早くアンプに繋いで音を出したいって事。お分かり？よし。

「そうだ。忘れてたわ」

琴吹先輩が両手をパン、と鳴らして、自分の鞆をあさる。
顔を上げた琴吹先輩の手に握られていたのは、二枚の紙。

「梓ちゃんと、仁君用の楽譜。昨日、ようやく完成したの！」

おお。ようやく俺の元にも楽譜が。

「ありがとうございます！」

俺と中野さんは琴吹先輩から楽譜をもらった。
中野さんは嬉しそうに顔をほころばせる。

お、俺用の楽譜か……。なんか、本格的にこの部に入ったって感じがしてきた。感無量！！

「おお。仁、やっと笑ったな！」

え？笑ってました？俺。なんと、気付かぬ内に。
でもまあ、嬉しいからな！

「嬉しいわ。私の作った楽譜で」

「いい笑顔だよ仁君！その意気だよ！」

笑顔一つでこんなにも喜ばれる俺。

嬉しいやら、情けないやら、何やら複雑な気分だなあ。

「演奏中も、その顔で頼むな……」

言った時の顔を見るに、切実な願いなんでしょう。秋山先輩。でもすいません。その願い叶えられそうにありません……。

実際、俺がギターを弾いてる時は、絶対に秋山先輩は俺の事を見てくれなかった。

残念！！

そんなこんなで、気付けば軽音部に入ってから、一ヶ月が経とうと
していた。

俺は渡された楽譜の曲を、まあ大体覚え、弾けるようになり、二曲
目、三曲目の練習に入っていた。
それにしても……この曲達……。

「ふわふわ時間」

「私の恋はホッチキス」

「ふでペン〜ボールペン〜」

なんじゃこの曲達!?

……などと言ったら、製作者の秋山先輩に悪いか。でもさあ……。

軽音部では、全てオリジナルの曲でやるらしく、当然その曲も、軽音部内で作られていた。

曲を担当するのは、琴吹先輩。そこで、歌詞を担当するのが、秋山先輩だ。

そして、その歌詞の内容は……。

ひじょーにメルヘンチックな内容。そして、独創的なセンス。

聞いている時にはあまり気付かなかったけど、正直、俺にはとてもじゃないが、歌えない。

おそらく、内容的に製作者は平沢先輩あたりだと思っていたんだけど……。

見事にハズレ。正解は大穴、秋山先輩。イメージと全然違って、心底驚いた。

……まあ、ここまでだと俺が秋山先輩の歌詞をボロクソ言っている様にも聞こえなくも無いけど。

いやいやいや。違うぜ?別に、批判的な感情は無いんだぜ?信じてくれよ。

確かに、初めて見た時は驚いた。けどさ……。

何回も見てるうちに、慣れちゃったというか、むしろ、ハマっちゃったんだよね。

噛めば噛むほど美味くなるみたいなの?スルメみたいな。

いや、スルメは例えとして悪かったかな。まあ、何回も聞くとこの曲が好きになってくる。不思議。

だから、俺は別にこの曲が嫌いじゃないのよ。むしろ、好きだ。〇

K?

よーし。分かってくれたか。長々と喋った甲斐があったよ。

それより、現在。俺は何してると思う?

正解は……。

「後五分です。見直し等、しっかりして下さいね」

テスト中なのでした。

まあ、俺のテストはもう十分前にはもう終わってるんだよね。

学生の試験。中間テスト。避けては通れない壁、テスト。

この悪しき習慣に、何人もの学生が涙を飲んでいったことだろうか。

俺の成績?……聞かんといてーや。ご想像にお任せします。

後日。そのテストは返された。

人によつて、リアクションが大きく異なるのが、見ていてなんとなく楽しい。

一目で点数が悪かったんだと思えるくらい落ち込んでいる者。

それとは逆に、テスト用紙を見た瞬間、顔中に笑顔をぶちまける者。特に何も行動は起こさないが、目元がニヤけている者。

待っている者の中にも、
余裕の表情で待っている者や、またはガクガク震えながら待っている者。

悟りを開いたかのような表情で、どんな点でも受け入れようとする者。

または、今更やっても何の意味もないまじないをかける者。などなど。

皆さんは、どんな感じですか？

……え？俺？

残念だったな。生憎俺は、今回のテストに自信があるのさ。

でも、勘違いするなよ？自信があるとは言ったが、それはあくまでも俺の中だからね。

まあ、世間一般では「なかなか」と言われる点数。真ん中よりは上。上の下の下。そんな感じ。

大が呼ばれる。次に俺の名前が出る事は分かっているので俺も一緒に立ち上がった。

テストを受け取って点数を見る。……やはりな。予想点数との誤差は二。

正確な点数は、プライバシーという物があるので、カンベンしてちょよ。

「仁」。どーだった？」

「まあまあ」

俺はそう言っつてテスト用紙を見せる。

「大は？」

大は俺に自分のテストを渡してくれた。

どれどれ……。自分の顔が引きつったのが分かった。

え？ちよっ、まっ、何が起こった？シンジラレナリー。

大のテストの点数の欄には、赤い数字が三つ並んでいた。

第六話 人つてのは、いかなる事にもだんだん慣れていくもんだ。

(後書き)

仁「はあ……俺の特技……」

おお「オイオイ。落ち込むなって、人間、とりえは一つじゃないぜ？」

仁「ホントは、何を書く予定だったの？」

おお「いつや」。今回の話を見ても分かる通り、勉強が出来る設定にしようとしたけど……」

仁「いいじゃんそれで！」

おお「いや、よくよく考えてみたら、イメージと違うかなって」

仁「ええやん。家事をこなせて成績も優秀、オマケに容姿端麗で」

おお「容姿端麗はどこにも書いてない。……まあ、俺も悪いと思っだから、お前の

成績は「なかなか」にしてあげたんじゃない」

仁「……だよな！まあ、いいや」

おお「それでこそお前だ！！」

第七話 最初の一步が踏み出せば、後は意外とラクなんだぜ。

今日はヒマだなあ。話す人が居ないや。

……イヤイヤイヤ、違う、違うよ？ 苛めなんか受けてないからね。安心して下さい。

現在三時間目。俺は視線を窓の外から目の前の席に移す。

瀬川大の席には、誰も座っていないかった。

今日は大が休んだんだよ。風邪で。

我がクラスに男子は俺と大しかない。当然、どちらか一方が休めば……。

もう一方は一日、中々寂しい思いをする事になる。この俺のように。

何故だ。何故今日はこんなにも時の流れが遅い。……寂しいなあ。

小動物は寂しすぎると死んでしまうと聞いたとき、「ありえね〜」なんて言ってたけど……。

今ならその気持ち分かるよ。バカにしてゴメン。俺も死んじゃいそうだ。

昼休みは他のクラスに遊びに行こうと思っているけど、授業の合間はそのうはいかない。

時間が短いから。既に経験した二回の休み時間は、信じらんないくらい長く感じた。

俺は本を読むのも好きなので、その二回はどちらも読書で時間を潰したが……。

やはり……寂しい。ええい。家ではいつも一人だろうが。俺。シャキツとしろ。かつこ悪い。

三時間目の終わりを告げる鐘が鳴る。

俺は机から本を取り出した。

……いいもん。読書の方が、楽しいもん！
俺は自分に暗示をかけ、本を読み進める。

二ページ程読むと、視界が少し暗くなった。……なんだ？
そう思った瞬間、上から声がした。

「なんの本読んでるの？」

顔を上げる。

中野さんと平沢さんと鈴木さんの顔が俺の視界に飛び込んできた。

「え？ああ……」

俺は答えずに表紙を見せた。

「つか、いきなりの事で答えられなかったんだよね。」

「うっわ……難しい本読んでんねえ……」

「本読むの、好きなの？」

「ああ、うん」

ここでしばしの静寂。

ん？中野さん達は何しに来たんだ？

「えっと、それより何か用？」

ここで中野さん達は顔を見合わせる。

なんだ？なんかおかしい事でも言ったかい？

中野さんは言った。

「用が無くっちゃ、話しかけちゃいけないの？」

え？この返答はちよつと予想外。

今まで平沢さん、鈴木さんはもちろん、中野さんだって、部活関係の時にしか喋った事無かったし。

「いや、そういう訳じゃないんだけど」

「じゃあいいじゃん！三浦君、瀬川君が休みで寂しいんですよ。私達が話し相手になってあげるよ！」

鈴木さんはそう言つてニカツと笑つた。

平沢さんと中野さんも、俺に向けて笑顔を見せてくれる。

……なんか照れる。恥ずかしい。やべ、目え合わせらんねえ。

俺は咄嗟に目を逸らしてしまった。

そんな俺を見て、鈴木さんは笑いの種類を「ニカツ」から「ニヤツ」に変えて言つ。

「あゝ。三浦君、赤くなつてる。かわいいねえ」

う、うるせえ！仕方が無いだろ！

くっそ、すっげえ小バカにされてるよな。俺。

ほぼ女の園に潜入して早二ヶ月半。

俺には未だに女子に対する耐性が殆ど備わっていないらしい。

四時間目の終了を告げる鐘が鳴る。

俺は鞆から財布を取り出し、購買へ向かった。

さっさと買って、さっさと食って、遊びに行こう。

今の俺が最も優先する事は、空腹を満たす事よりもこの寂しさを解消することだ。

いつもは必ず三種類買っていくパンだが、今日はカレーパン一つにしておこう。

カレーパンの代金を払い、購買を後にしようと振り向き、少し歩いた時。

「あれ？三浦君もここで？」

中野さん達が居た。

「ああ。うん」

「そーなんだー。私もだよ！」

鈴木さんが笑顔でVサイン。

しかし、俺の持っているパンを見て、その笑顔を消す。

「あれ？それだけしか食べないの？少食だね」

「いや、そうじゃなくて、今日はなんとなく……ね」

「ふーん。んじゃ、何で今日は……」

「純ー。早くしないと、売り切れちゃうよーっ」

鈴木さんが言い終える前に、中野さんの言葉が届いた。どうやら、残りのパンの個数が少なくなっているようだ。

「ああ！今行くーっ！すぐ買ってくるから、待ってて！」

「え？あつ、ちょっと……」

俺に言う暇を与えず、鈴木さんはすぐに走って行ってしまった。わーお。強引！

あれ？俺の予定が、だんだん狂っていく……？

当初の俺の予定では、今頃にはもう昼食を済ませ、他のクラスに遊びに行っているハズだった。そのハズだったんだけど……。

「やっぱり、憂のお弁当、凄いやねえ」

「え？そんな事ないよ……」

「毎日自分で作ってるんでしょ？唯先輩の分まで」

目の前には俺の席を囲むような形で、仲良く昼食を取る中野さん、平沢さん、鈴木さんが。

何故？

教室に戻ってきた俺は、カレーパンを四口で食べ終え、さあ、出かけるかと準備をしてただけど……。なんか気付いたら、三人とも俺の所に集まって来て……。そんで、

弁当を広げ始めて。

俺は流されるように、なんの躊躇いも無く、その輪に入ってしまった。……どういう流れ？つーか自然に入っていいワケ？俺。

いや、いつもこうやってネガティブに事を考えるからいけないんだ、俺！

いける！だって向こうの方から俺の所に来てくれたんだ！大丈夫だよ！

一歩踏み出すんだっ！俺！！
震える心を押さえつけ、口を開いてみた。

「でもホントに凄いなと思うよ。スッゲー美味そうだもん」

「ほんとに？ありがとう」

うおお！！会話に入れた！感動！感激！感無量！！
暫し喜びに浸る俺。すると、

「どっしたの？三浦君？」

「無言でガッツポーズ決めてたけど……」

うっは、行動に出ていた！？

……ん？

鈴木さんからの視線を感じる……。

「何？」

「いや、三浦君って、何かイメージと違うなーって。ちょっとただけど、喋ってて思った」

「それ、中野さん達にも言われたことあるんだけど」

「え？やっぱり？梓も？」

「うん。だつておかしいんだもん！こないだ、軽音部で三浦君のギターを買いに行った時なんか……」

うん。そうだよ。あの時に言われたんだよ。「イメージと違つ」つて。

俺のイメージって一体……。何？

「あはは！何それおっかしい！！」

「うーん。そんなに笑わなくても……」

「ゴメンゴメン。でも、身だしなみには気を使いなよ。結構いい顔してるんだから」

笑顔で言う鈴木さん。

俺、その言葉を聞いて、思わず目を逸らす。……いきなりそれは反則だよ。

気付けば、中野さんも平沢さんも俺を凝視。ちよつやメテ！そんなに見ないで！

「うん。確かに、よく見れば中々だよ」

「え？イヤ。そんな事無いです」

「なんかいつも眠そうな顔してるから、よく分からないんだと思う」

よ?」

「着てる服とかでも、だいぶ印象は違うし……」

「うん。だから、やっぱりジャージはやめた方が良いよ。絶対」

「でも、ジャージの方がラクなんだよね。なんと言うか……。寝っころがり心地がいいんだよ」

「何それ」

「いやだから、寝っころがった時の心地よさが、ジャージがダントツで良いんだよ!」

俺は人差し指を立てて言い放つ。

一瞬の沈黙。そんで巻き起こる笑いの渦。

ええ!? これ俺かなり真面目に言ったんだけど! 俺なりの研究成果なんだけど!!

「それに、髪の毛は気にしないの? いつつも寝癖とかあるけど」

「いちいち直すのもめんどくさいし、三十分もすれば直るし」

「うお。ここまでオシャレに興味がない人、初めて見た」

「でも、飾り気がなくて、良いと思うけどな」

いやあ。あはは。

面と向かって褒められると弱いんだよね。恥ずかしいけど、嬉しい。悪い気はしないさ。そうだろう?

「お母さんとかに、何か言われなかったの？」

「ああ。ウチ、親いないから」

三人の顔がサーッと青ざめる。

「マズイ。言い方をミスった。俺が親に捨てられたと思ってるよ。これ。」

「まずい事聞いたなあっ」って顔してるもん。

「ゴメン。言い方が悪かった。両親は仕事で海外に居ます」

ほーっと安堵の表情を見せる三人。

やはり、勘違いをしてたみたい。いや、俺が悪いんだけども。

「ふーっ。なんだびっくりしたよーっ」

「もっとマシな言い方してよ！本当に」

すぐさま中野さんと鈴木さんから抗議の声が上がる。申し訳ありません。

平沢さんが俺に聞いてくる。

「って事は、三浦君一人で暮らしてるの？」

「ん？ああ。兄弟もいないしね」

「家事とかは……自分でやってるの？」

俺は頷いた。

すると、中野さんと鈴木さんからへーっと言つ声。

「意外だなあ……………」

「三浦君、料理も作れるんだ？」

「うん。簡単な物なら……………」

「へええ。凄いねえ」

「いや、平沢さんに言われても……………ねえ」

「男の子が料理できるのって、珍しいから」

「ああ。うん、まあ……………ね」

「照れてるねえ。赤くなってるよ？」

鈴木さんに言われるが……………。言い返せない。

つーか、今日このやり取り何回目？俺何回照れてんだ？

昼休み終了を告げる鐘が鳴る。

あれ？もう終わり？ウソ、早くない？

楽しい時には、時間が経つのが早く感じるよな。

今の時間は……………俺にとって……………楽しかった。らしい。うん。

放課後。

「三浦君、部活行こ」

「おー。今行くー」

中野さんと廊下を歩く。

ん？なんか、今までとは違う感じがする。なんだろ。

「そつえば、中野さんっていつからギター始めたの？」

「小四の時から。親がジャズバンドやってて、その影響で」

へえー。小四から！どーりでギターが上手なワケだ！

やっぱり、何か凄い人ってのは、その事を小さい頃からやってるもんだよなあ。

……つてアレ？なんか……自然に……話せてね？俺。全然緊張とかしてないもん。今。

今日一日だけで、随分と進歩したなあ。俺。

っーか、仲良くなった気がする。勘違いかもしれないけど。

でも、中野さんも、なんか自然な感じがする。今までは、ちよつと固かった気がするんだよな。

物事っつーのは、どういうキツカケでどう転ぶか分からないけど、今日の事は当然良い方向に転んだと考えるもいいよな？うん。そう思っところ。

翌日。

「いんやー。まいっっちゃったよ。朝起きたら目の前がグラングラン揺れてるんだもん」

瀬川大君、復活。良かった良かった。

「まあ、一日で治って良かったな」

「ん？その仁らしからぬセリフ、さては、俺が居なくて寂しかったんだろ？」

「いや、そんな事は……ない」

ホントは、ちょっとあるんだけどさ。

ちよつとの間話していると、中野さん達がやってきた。

「おはよー。三浦君、瀬川君」

「瀬川君、風邪大丈夫？」

「いやー。瀬川君が復活して良かったよ！ねえ、三浦君」

なっ！？鈴木さん……。

「やっぱり俺が居なくて寂しかったんだなあ！嬉しいぜ！」

「鈴木さん、余計な事言わんとして」

「え？だって、ホントの事だし」

「うん。三浦君、とっても寂しそうだったよ」

な、なんと……平沢さんまで……。
周りは敵ばかりだな。正に四面楚歌。この言葉を日常で使えるとは思わなんだ。

「あ、そうだ。今日は用があつて来たんだつた」

「ん？何？」

中野さん達は携帯を取り出した。

「メルアド。まだ交換してなかったでしょ」

ああ。そういえば……。

俺は鞆から携帯を取り出した。

「ほら、瀬川君も」

「お、俺も？」

赤外線で互いの携帯情報を飛ばしながら、中野さんは言う。

「三浦君、先輩達のアドレスもまだ登録してないんじゃない？」

「え？ああ、田井中先輩にこの前催促されたけど、忘れてたな」

「もう。今日ちゃんと登録するんだよ。軽音部の仲間なんだから」

「あ……うん」

この日、俺の携帯のメモリーに、新たに七人の名前が追加された。

第七話 最初の一步が踏み出せば、後は意外とラクなんだぜ。(後書き)

仁「あのさ、この小説、開始からずっとオリジナルの話だけだよ、ちゃんとアニメの方の話と繋げるきはあるのかい？」

おお「つたりめえよお！」

仁「何故に江戸っ子口調!？」

おお「つか、アニメ通りにやってたら、お前六、七話もすればもう二年生だぜ？」

そんなハイスピード小説、ありえないだろ？」

仁「おお……確かにそうだな」

おお「あと一話くらい挟んだら、合宿に行かせてやつから」

仁「ホントだな？」

おお「信用ねえなあ、俺」

第八話 何かが出来るようになりたいて時は、やっぱり地道な努力が一番だよ

七月に入り、少し気温が高くなってきた。

汗っかきな奴は、もう既に額に汗を浮かべて日々を過ごしてる。色々々と大変そうだなあ。

ちなみに俺は、そういう気温の変化にはめっぽう強くて、一年中同じ格好をしていられるのだ。

中々得な体質だと思うね。自分でも。

そんな時期のある日の部活中、田井中先輩は言った。

「なあ仁」

「なんですか？」

「いい加減、アタシ達の事、名前で呼んでくれないか？」

「ムリです」

「すっげー即答！」

いや、無理っしょ。名前で呼ばれるのもなんだか落ち着かないのに、自分から名前で呼ぶなんて……。

流石に無理だ。ハードルが高すぎる。僕には出来ませえん！

「そっだよ仁君！私達、悲しいよ！」

「もうここに来て二ヶ月になるんだからさー。いい加減慣れてくれ
よ」

いや、平沢先輩、田井中先輩、僕これでも随分慣れた方なんですけどね。

ん？……よしつ。良い反論材料を見つけたぞ！

「秋山先輩も中野さんも、俺の事は苗字で呼んでますよ！」

俺はそう言い放つ。完璧だ……完璧な反論。

しかし、平沢先輩と琴吹先輩は笑いながら俺に言ってきた。

「ふふふ。甘いよ、仁君！」

「そう来ると思ったわ！」

え？何が？

「さあ、特訓の成果を見せてやれ！漣！梓！」

田井中先輩の言葉で、秋山先輩と中野さんが俺の目の前に立つ。なんだ？何が始まる？

二人とも、顔が若干赤い。

それで、二人は足元を見つめて揃ってこう言った。

「「じ……仁……君」」

雷に打たれたかのような衝撃が全身を貫いた。なんか、鳥肌が立ってるし。

……なんつー破壊力。き……気絶するかと思ったわ！！

田井中先輩達に呼ばれても、ここまではならないのに……。

いままで苗字で呼んでくれてた人がいきなし名前になったのと、

そのちよつと赤らめた顔の抜群のコンビネーション。……やられたぜ。

「つか、いつの間に……。なんて無駄な特訓をしていたんだこの二人は！」

「い……いつから？」

「二週間前から……」

なんと言う壮大なプロジェクト！

田井中先輩達は勝ち誇った表情で、俺に言う。

「この通り、漣と梓はもう既に弱点を克服していたのだよ」

「後は仁君だけよ！」

「さあ、言うてごらん！私の名前を！」

「いや………すいません。こればかりはカンベンして下さいませんか？」

「ならん！」

「つか、男に名前を呼ばれるのって、抵抗ありません？」

「全然無いけど？」

「うん。そっちの方が仲良くなった気がするよ」

「苗字だと、なんか他人行儀な気がするわ」

と、田井中先輩、平沢先輩、琴吹先輩。
むう。この三人は駄目か。

中野さん達は!?

俺は残る二人の方をバツと向いた。

「確かに恥ずかしいけど、名前で呼んでくれた方が、仲良く慣れそうな気がするし……」

「それに、私達はもう名前で呼んでるし……だったら私達の事も、名前で呼んでくれたほうが……さ」

ウツソン!この二人だったら、絶対に抵抗があると思ったのに!もの凄くうるたえる俺。詰め寄る五人。逃げ場は……無い。
平沢先輩と、中野さんが固まった俺に言った。

「さあ!仁君!」

「遠慮はしなくていいよ」

ぬう……。こうなったら……。

「分かりました。そんじゃ、あっち向いてホイで、俺が五連勝したら、カンベンして下さい!」

「何故にあっち向いてホイ!??」

「細かい事は気にしなさんな」

よし。これならジャンケンが弱い俺でも、何とかなる。

要は相手の指をよーく見てればいい訳だ。集中すれば……勝てる！
そんじゃあ行くぜえ！俺！出陣！！

俺はガツクリと頂垂れていた。

シヨックだ……。まさか初戦の一回目で負けるなんて……。

一人目の相手、琴吹先輩は指を上に向けた。俺は……気付いたら上を見上げてた。

俺は自分のバカさ加減に絶望する。

田井中先輩が俺に向かって言い放った。

「そんじゃ、言ってみようか！」

俺の前に横一列となって並ぶ五人。

順番に言えってか？よーし。ここまで来たら腹括って……。
えーと……アレ？

「皆さんの名前……なんていいましたっけ？」

「そっからか！！」

だつてえ……。今まで苗字でしか呼んでなかったしい……。

俺、人の名前とか覚えるの苦手だし……。

その後、二時間くらい頑張ったが、俺はどうしても名前で呼ぶ事が出来なかった。

……まあ、仕方ないよな。

家に帰ると、俺は自分の部屋へ直行。
制服のまま、ベッドに倒れこんだ。

はあ……。

溜息をつく。

やれやれ。大変な事になったな。

帰り道で、俺は新たに条件を付けられた。その内容は……。

一週間以内に呼べるようになれ。だとさ。ハッキリ言って、かなり
厳しいと言わせてもらおうか。

それから、中野さんと呼ぶ時には、さん付けはやめてくれ。との事。
しかも、これは中野さんたつての希望。

中野さん曰く、「ある程度は仲良くなっただけど、やっぱりさん付け
じゃ、ちよつと遠い感じがする」

らしい。まあ、確かにそうなのかも知れないけどさ。

この半月くらいで、中野さんとは随分仲良くなれたと思う。もち、
軽音部の皆さんとも。

それでも、皆が名前で呼び合ってるのに、俺だけ苗字は確かに変だ。
うん。それは分かる。

けどさ……いや、やるしかないか。うん、やろう！これは俺に与え
られた試験だ！

このままじゃいつまで経っても変わらない！もう一步踏み出す時だ！

俺は少し考えて、携帯を取り出して、メールを作成し始める。

送り手は軽音部の五人。内容は……。

「顔写真、下さい」

もうお分かり？

送られてきた写メを見て、練習しようというワケだよ！
シンプルかつ、効果的な練習方法だと思わないかい？

二、三分待つと、全員から目的の写メールが届く。
よし。いよいよだな……。

……出来なかった……。写真相手でも駄目なのか……。
俺は新たな方法を考える。

女性に簡単に声をかけられる人って、大体アレだよな。なんつーか
……イケてるよな。

服とか、髪型とかさ。バッチリ決まってるってカンジ。

……そーだよ！俺もイケイケな格好すりゃ良いんじゃない？自信も付
くんじゃね？

よし。そうと決まったら……。

俺は洋服棚を開く。……といっても、実際に服が入っているのは、
一段だけだ。

後は本棚代わりにさせてもらってます。余ったスペースは、有効活
用しなくちゃね。

棚の中から、軽音部の皆に選んでもらった服を適当に引っ張り出す。
一ヶ月に六着。かつてないペースで増えてゆく俺の衣服達。そろそ
ろサイフの中身がヤバイ。助けて。

つーか、去年一年間、服は一着も買わなかったよな。買ったといっ
たら……パンツくらいか。
随分長い事履いてたから、穴開いちゃったんだよね。

……って、何言ってるんだ俺！？恥ずかしい。こんなカミングアウト
は今まったく必要ないぞ。

白いTシャツを着て、その上にフード付きの服……パーカーっつー
んだっけ？まあいいや。

下はゆったりしたズボン。全体的に、サイズがデカイ。

このゆったり感が良いんだとさ。俺に合っているんだと。

と、皆は言ってたけど、俺には何一つ分からない。この服が自分に
似合っているのかも分からない。

けど、皆が選んでくれたんだし、きっとカッコイイんだろう。

うん。俺、カッコイイ。自惚れる、俺。自信をつける、俺！

携帯を開いて再チャレンジ。

……駄目だ。まだ恥ずかしい。

俺は更に自己暗示をかける。

仁。お前はカッコイイぞ。道を歩けば、十人が十人振り向くさ。

お前に話しかけられたら、どんな女性でもイチコロさ。絶対にいけ
る！

いよっ！ニクイね色男っ！！まさに容姿端麗とは、君のためにある
言葉だ！！

そうだ。俺はイケてる！

ははは！今ならどんな女でも落とせるさ！

さあ行くか！夜の街へっつ！！！！

……おっと。当初の目的を忘れるトコだったぜ。

俺は携帯を開き、顔写真を眺める。

……今夜のターゲットは、この子猫ちゃん達か。

フツ。悪くねえ。

俺の携帯の画面に映し出されていたのは、黒髪ツインテールの女の子。

よし。

……何をうつたえてるんだ？俺。画面越しに目が合ったくらいでくっ。落ち着け、俺。お前の百戦錬磨の鍛え抜かれたハートが、これしきの事で揺らぐハズが……。

俺は一旦、画面から目を逸らす。

何をやっているんだ俺。まったく、俺ともあろうものが情けないぜ。大丈夫さ。俺に見つめられたら、緊張するのは向こうの方さ。よし。いくぜえ！

再び俺は、画面を凝視。

……中野さんって、結構可愛いよな。つーか、この軽音部のレベルが高いよな。

全員平均以上だもん。そんな中にこの……この俺が……。あああああ！やっぱし駄目だあ！ずっと見てらんねえ！

自己暗示はあっさりと解け、いつものヘタレな俺、カムバック。

やっぱり、自分を偽って特訓をしても、自分の為にならないよな。

……つーか、偽った状態でも出来なかったし。地道な練習が一番だよな。うん。身に染みたわ。

それからというものの、俺は名前呼びの特訓を必死に行った。

まずはこの緊張を無くす事が第一と考えた俺。
そこで考え出したのが、毎日軽音部の全員と真顔にらめっこをする事。

軽音部の皆さんは、俺のこの特訓に、快く付き合ってくれた。……
良い人達だ。

最初は三秒も持たなかったけど、やっぱり、人ってのは成長するもんだね。

だんだん目が合うのにも慣れてきて、秋山先輩、中野さんになら……
おっと。

み……湊先輩、あー……梓になら、三回に一回は勝てるようになってた。
た。

……やっぱり、まだ恥ずかしい。

そんで、家で写真を見つめながらの練習。

傍から見たら、俺はただのストーリーカー。誰にも見られたくはないな。
うん。絶対に。

一人暮らしで良かったと、心底思ったよ。

なんで母親ってのは、今は誰も入って欲しくないな。って時に部屋
に入ってくるんだろっね。

中学生の時、学校の創作ダンスをノリノリで踊っていたら、その時
丁度帰国していた母親が……。

母さん。ノックくらいはしてくれよな。頼むから。

こうして、血の滲むような特訓一週間以上も重ねた結果……俺は……

……俺は……。

「唯先輩」

「律先輩」

「澁先輩」

「紬先輩」

「梓」

俺は左から順に、名前を呼んでいく。

……か、完璧だあ！俺、やったよ！

「どうですか？皆さん！」

「あはは……やっぱりちょっと恥ずかしいな……」

ちよ、律先輩。今更それはないっしょ。

俺、頑張ったんだから。

「私は嬉しいよ！仁君！」

「私もよ！」

「あ、アタシだってなー。嬉しくないワケじゃないぞ！」

そう言っただけだと、何よりです。

ああ、そうだった。梓に確認したい事が。

「梓ー。ホントに呼び捨てでいいのかい？」

「うん。まだちょっと恥ずかしいけど……。その内慣れるだろうし」

「俺もまだ完全に慣れたワケじゃないよ」

「ホントだー。仁の奴、赤くなってるぜ！」

「ほんとだー」

なっ！律先輩……。

俺の周りには、必ずこういう人が一人は居るのかな？

……それは、中々困るぞ。

「あれ？澪ちゃん、どうしたの？」

唯先輩が澪先輩に言う。

そつえば、さっきから一言も発していない。……どうしたんだ？
耳を澄ますと、澪先輩が何かをブツブツ呟いてるのが聞こえた。

「男の子に名前と呼ばれた……。男の子に……」

律先輩が、俺に向かって言う。

「今度は、澪が仁に名前と呼ばれる特訓が必要だな……」

なんてこったい！

次の日、学校に着いて自分の席に腰を下ろすと、大と会話をする前

に、梓達がやってきた。

「な……………何？」

戸惑う俺。

鈴木さんと平沢さんは俺に向かって言った。

「私達の事も、名前で呼んでよ!!」

「えーと……………何故？」

「だって、梓ばかりズルいじゃん！」

「え？ズルいつて……………何がさ？」

「私達も、仁君と仲良くなりたいたいから」

なんと。平沢さんまで。

「嫌……………かな？」

平沢さんは、悲しそうな顔を俺に向けてくる。

ちよつ。それ反則……………断れないじゃん！この状況で、誰がノーと言えるのさ！

「女の子泣かせる男は、最低だよ」

追い撃ちをかける鈴木さん。

うつ……………やられたぜ。

俺は無言で首を縦に振った。

やったあと歓声を上げる二人。

そんな二人を見て、梓はホッと一息ついて、大に向かって言った。

「大君もだからね」

大は物凄くビックリしたようだ。

「ええ！？予想外！なんで俺も！？」

「男だったら、細かい事は言いなさんな！」

「よろしくね」

こう告げて、三人は去って行く。

放心状態の大。まるで、この前の俺を見ているかのよう。

俺は、大に向かって言った。

「一緒に特訓するか？」

大は無言で俺に向かって頷いた。

第八話 何かが出来るようになりたいって時は、やっぱり地道な努力が一番だよ

仁「つ、疲れたよ……今回」

おお「お疲れさん」

仁「ああ。どーも」

おお「ホントはこのまま苗字呼びのままで行こうかとも考えたけど、
やっぱりそれだと一体感が出ないじゃん？」

仁「まあ、そりゃそーなんだけど」

おお「やっぱりしき、けいおん！っつーのは、皆仲が良くなってくっちゃ
いけないと

思うんだよな」

仁「へえ、結構よく考えてるんだな」

おお「見直したかい!？」

仁「ああ。たった今、ゼロになっただぞ、喜べ」

おお「つまり、今まではマイナス!？」

第九話 何かを言う時には、その言葉を今使つと、どついつ意味になるのか、
ようやく合宿編に入りました！
でも、まだ出発すらしてないという……。
今回、ちよつと短めです。
話のキリがいいんで……。スンマセン。

第九話 何かを言う時には、その言葉を今使つと、どついつ意味になるのか、

俺は今、サイコーに気分がいい。
何故かつて？ふふふ、教えて欲しいかい？

明後日つから、夏休みなのさあ！

日々の勉強で疲れた体を癒す為の約一ヶ月……。
ひゅーっ！楽しみーっ！何しようか。

まずは録画してある映画を見なくては。

それから、読みたかった本も全部読もう。

あ、もうすぐあのシリーズの新刊が出るな……。ようし、全巻読み返すか。

そんで十日後には、新しいゲームが……。ふふふ。既に予約済みさ。
それからそれから……。え？宿題？何それ？美味しいの？

そんなワケで、現在俺の気分は最高潮になっている。

机に座りながら、自然とほころぶ俺の顔。こついつ時には、俺はよく笑う。

柄にも無く鼻歌を歌い始める俺。曲名はふわふわ時間。

普段なら周りの目が気になる所だけど……。今日は特別さ。

後は今日のホームルームを終え、明日の終業式をちゃっちゃと済ませて終わり。

そこからは俺の、俺による、俺のための時間が待っている。

まあ、部活があるんだけど。ウチの部活の活動はは半分以上がテ
ィータイムで構成されてるから、

まったく問題ナシ。のーぷろぶれむだよ！

「随分とご機嫌だな……仁」

大が俺に言ってきた。

おいおい。二日後には夏休みというこの状況。有頂天にならない方がおかしいぜ？

「あたぼーよお！もうすぐ夏休みだぜ？開いてる日、どっか行こーな」

「おお。いつに無く積極的だな」

「まあな。俺だって、テンションが高い時だってあんのよ？」

「それは知らなかった。良いトリビアだな」

「無駄知識扱い！？」

そんなこんなで、今日一日の学級活動を全て終え、夏休み前最後の部活に、俺は向かっていた。

「いつになくご機嫌だね」

梓が俺に言う。

うん。だいぶ名前呼びにも慣れてきた。自分の成長が嬉しいね。

「まーな」

ニカツと笑って俺は答える。
本当に最近はよく笑えるな。いつつこんなカンジだと良いんだろ
う。

「なんか……気持ち悪い！」

「うっわ。それ傷つくよ」

「ゴメンゴメン。見慣れないテンションだったから」

「梓は、気分が高揚してこないのかい？」

「うん。別にこれといった用事は無いし……。学校に行く時間
が減る分、暇になっちゃいそう」

「日々の生活の中に幸せを見つける事が、人生を楽しく生きるコツ
だぜ？」

「何それ？格言？」

あははと楽しそうに笑う梓。

人の笑顔ってのは、見てると気持ちが良いよね。自然とコツチも笑
顔になるよ。

音楽室への階段が見えてきた。

階段を登り、左手に見える音楽室の扉を開ける。

「こんにちはーっ」

「どーもー」

「おーす！梓！仁！丁度良かった！！」

部室に入った瞬間に律先輩が声をかけて来る。これも毎度毎度の事。でも今日は少し違うトコロがあったよな。

「丁度良かった」？何が？

そんな俺の疑問を解消する言葉が、唯先輩の口から出た。

「海と山、行くならどつちがいい？」

「…………えーっと、何の意図があつて、その質問をしているのでしょ
うか？」

俺は心に浮かんだ新たな疑問点をすぐさま口に出す。

紬先輩が、答えを言ってくれた。

「合宿先。夏休み、軽音部で合宿に行く事になったの！」

嬉しそうに言う紬先輩。そして…………。

え？合宿？固まる俺。

梓が律先輩に向かって言った。

「合宿！？聞いてませんよ？そんなの！」

「当たり前だ！たった今、決まった事だからな！」

…………な、なんとという急展開！

こんなんで良いのか？軽音部！

梓が俺の気持ちを代弁してくれる。

「いや、そんな急に決めて……ちゃんと下調べとかしないと……」

「その点はだいじょーぶだよー!」

唯先輩が、紬先輩を指差す。

「ムギちゃんちの別荘、貸してくれるんだって!」

「山でも、海でも、どっちでもオーケーよ」

笑顔で答える紬先輩。

……本物だ……やはりこの人は本物のお金持ちだった……。この人に粗相は働かないように、細心の注意を払う事にしよう。うん。

「で、どっちがいい?」

律先輩がずいっと顔を突き出すようにして俺達に聞いてくる。梓は言う。

「どっちかといったら……海……かな?」

「了解。唯!海に一票!」

「あいあいさーっ!」

「一票って……今何票ずつ入ってるんですか?」

俺は聞いた。

「え？海に五票だけど」

……つまり、全員海が良いって事ね。

つか、それなら最早アンケート形式で聞く事も無いでしょう。たとえ俺と梓が山に入れたとしても、四対二。海の勝ち！

俺は今思った事をそのまま伝えた。

すると、漣先輩が答えてくれる。

「全員の意見も聞いとくべきだと思って」

「なるほど」

「で？仁はどっちに行きたいんだ？

ん？律先輩？今の質問に一箇所違和感を感じました。説明してもらいましょう。

俺は言っ。

「どっちかっついたら海ですけど、行きたいかって？どゆことですか？」

「何言ってるんだ？仁」

「仁君、行かないの!？」

は？

行かないの？って……行かないよ!？
色々と問題があるでしょうが。

「行きませんよ。当然」

俺がそういうと、律先輩、唯先輩、紬先輩が俺に詰め寄ってきた。え？何々？俺なんか変な事言ったか？言っていないよな？

「行かないって、どーゆー事だよ！？」

「何か予定があるなら、大丈夫よ。日にちをずらせばいいだけだから」

「そうだよ！仁君！」

え、え？

おかしくない？何故こんなに責められる？

俺は軽く咳払いをして、言う。

「えー。皆さん五人は、れっきとした女性です」

「そーだが。それがどうした？」

「そして、俺は男。合宿するのは、何日か外泊するワケですよね？」

「当たり前だ！」

「抵抗とか……無いんすか？」

「何が？」

……何故だ……何故ここまで言っているのに分かってもらえない……。

画面の前の皆には、分かってくれてると思う。いや、分かっているよ
ね？俺の言いたい事。

「いや、色々と問題があるでしょうが……。仮に顧問を同伴させた
所で、山中先生も女性だし

その。ホラ。気になんないんですか？寝るときとか、同じ屋根
の下に男が居る事がさ」

「大丈夫だよ！私達、仁君の事、信じてるから！」

いや、唯先輩、信じてるからって……。

何か、いかにも俺がやらかしそうな言い方ですよね？

「もし何かあったとしても、仁一人なら全然心配ないさ！」

う、律先輩……。

俺の事、完全に舐めきってますね。

ちよっとムツときた俺。ボソツと言って見る。

「男つてのは、いつ何時、どうゆう状況で豹変するか分かりません
よ……？」

「ヒッ！？」

マジイ！おチャラけたカンジで言うんだっ！完全に漣先輩がビビ
ッてしまった！

……まあ、無理は無いと言わせてもらっ。かなり真顔で言ったから
さ。

漣先輩は、俺の真顔を苦手としている。今でも、演奏中は俺の顔を
見してくれない。

頑張つて表情を和らげてるつもりなのに……。

俺はその度に少しシヨックを受ける。

おっと。こんな事言ってる場合じゃない。今すぐ、リカバリーに入らねば。

漣先輩を男性不信に追い込む訳にはいかない俺。すぐに口を開いた。

「いや、でも大抵の人はちゃんとそこんトコの感情のコントロールはできますから、大丈夫ですよ」

「そ、そーか！そーだよな！安心したよ！」

少し硬いが、漣先輩は笑ってくれた。

ふう。良かった良かった。

しかし、俺の発言を逆手に取り、すぐに律先輩は言う。

「ってコトは、アタシ達と居ても、なんら問題は無いワケだ」

「え？イヤ、でも……」

何か反論の糸口を探す俺。

……マズイ。なんも無い。

固まった俺に、梓は優しく言った。

「大丈夫だよ、仁君」

「え？」

「私達、全然仁君の事、そういう風に意識してないから！」

天使のような笑顔で言う梓。

あつはつはつは！！梓！！

……泣いても良いですか……？

梓には悪気は無いんだろう。イヤ、無いハズ。イヤ、無しであって欲しい。

律先輩が、俺の肩を優しく叩いた。

「とゆうワケで、今年の合宿先も海に決定しましたあ！」

「わーい！」

律先輩が言う。その後が続いて拍手をする唯先輩と紬先輩。
漣先輩が言う。

「で？日にちはどうするんだ？」

「そーだなー。誰か用事とかある人居る？」

誰も何も言わない。

つまり、全員フリーって事か。

律先輩が言う。

「んじゃ、来週にでも行く事にするか！早い方がいいしな！」

「さわ子先生にも、一言言ったほうがいいんじゃない？」

「そーだなー。置いてくとブツブツうるさいかもしれないからな！」

「……酷い言い草ですね……」

律先輩の言葉に対し、梓がボソツと呟いた。
うん。俺もそう思うぞ。

唯先輩は、幸せそうな顔を浮かべて独り言。

「あゝ。海かあゝ。楽しみだなゝ。新しい水着、買わなくっちゃ！」

……合宿ですよ？練習しに行くんですよ？

俺の視線をよそに、唯先輩は紬先輩と楽しそうに話しはじめる。

聞こえてくる言葉は、「バーベキュー」やら、「花火」やら。

まるっきりバカンス気分だなオイ。

本当に練習になるのだろうか？どうも合宿と旅行を取り違えてるよ
うな気がするんだよな。

イヤ、でもこの人達はいざ演奏となると、めっちゃ素晴らしい物を
聞かせてくれるんだし……。

合宿くらいは……大丈夫だろうか？

第九話 何かを言う時には、その言葉を今使つと、どついつ意味になるのか、

仁「無駄な話多すぎない？」

おお「ワリ。俺もまさかこんな事になるなんて……。いくら合宿編
その一

だからって、出発もせずに終わるなんて……」

仁「もっとよく計画を立ててから書き出して頂きたい！」

おお「許してちょ」

仁「なんつー誠意のこもってない謝罪……。逆に尊敬するわ」

第十話 見栄を張りたくなるのが人間なんだよ。仕方が無い。(前書き)

合宿その2です。

第十話 見栄を張りたくなるのが人間なんだよ。仕方が無い。

で、でっけえええ……。なんだコレ？

まさに別荘ってカンジだ。ようし。俺も将来はこれくらい買える位になつてやる。

おっと。初っ端から悪い。

でも、仕方が無いさ。紬先輩んちの別荘、予想よか遙かにデカイんだもん。

三浦仁。現在絶賛驚愕中。

横を見ると、他の四人も、俺と同じような表情をしていた。

うん。やっぱりホントに驚くと口が開いてしまうもんなんだな。人間の習性だ。

ただ一人、涼しい顔の紬先輩。

唯先輩が紬先輩に聞く。

「これが、去年言つてた借りれなかつた別荘だね！」

「ごめんなさい。その別荘は、今年も駄目だったの……。多少狭いと思うけど、我慢してね？」

……ウッソーン！

この大きさに狭いとか……。何？僕んち犬小屋レベル？

はっはっは！何だろう。このなんとも言えない虚しさは。

そうこうしている内に、唯先輩と律先輩は水着に着替え、さっそく海へと繰り出していった。

小言を言いつつも、水着姿となつて海に向かう漣先輩と梓。楽しそ

うな紬先輩。

…… 澪先輩。プロポーションいいな……。
つか、皆さん水着かよ……。直視できねえじゃん。ま、俺は行かないからいいか。
練習はいつになるんだろう？

俺が鞆から本を数冊持ってくるよ、梓が言ってきた。

「仁君、行かないの？」

「おー」

「どうかしたのか？」

「イヤ。ちょっと皆さんと居るのは気まずいというか………なんと
うか………」

言葉を濁しつつ、俺は言う。

梓は少し驚いた様に言った。

「もう慣れたんじゃないの？ 軽音部」

梓さん、違うんすよ。

今回は内面的な問題じゃないんです。外見的問題なんです。

「せつかく海に来たんだから、仁君も行きましょ」

紬先輩が俺に言う。

……ここで時間を取らせるのはなんだか申し訳ないな。

ま、本を読むなら中でも外でも変わんないかな。……いや、結構変わるか。

でも、本に集中してりゃ、皆さんの格好にも目が行かないだろうし、ここはよしとしようか。

「分かった。俺も行きます」

俺はそう言っただけでスッと立ちあがって、歩き出す。

すると、澁先輩が俺に言ってきた。

「あれ？仁、泳がないの？」

「水着忘れたなら、ここに何着か予備の水着があるわよ？」

うーん。

拙先輩。水着うんぬんの問題じゃないんですよね……。

どうするか、言うか？

一瞬躊躇。それで、決心。

俺は口を開く。

「泳げないんすよ。俺」

え？と意外そうな表情の三人。

「泳げないって……どの程度？」

「いや、まったく」

「まったくって、どのくらい？」

「浮いてる事すらまなりません」

へえーっ、っと言ったような表情を見せる三人。

今時まったく泳げないって、確かに珍しいよな……でもさ。

泳ぐって事はさ、水に浮くって事なんだよ？浮く訳無いじゃん水なんかにさ。

だって、風呂場では体浮かないし、第一、水って液体だし。人が入ったら、沈むに決まってる！

認めねえ。俺は断じて認めねえ。

浮力？知った事が。皆騙されてんだよ。

と言う訳で、俺は青空の下、砂浜で心地よい海風と潮の香りを感じつつ、日陰で読書。

傍から見れば、俺の行動を理解出来る人は少ないに違いないだろう。いやはや、それにしても、海で本を読むのも中々新鮮だなあ。いい気分だ。

俺の少し前の方では、ビーチパラソルの下に紬先輩、漣先輩、梓が座っている。

流石にあの中に入って平常心で居られるほど、俺の精神は強くない。唯先輩と律先輩は海の中。楽しそうだなあ。泳げない俺にはまったく理解出来ないけど。

少し眺めていると、律先輩と唯先輩がやって来て、梓に何か話しかけたようだ。

梓は立ち上がって少しムキになったように叫んだ。

「やってやるです!!」

挑戦的な言い切りで敬語を合わせるなんとも特殊な表現を使う梓。そう言つて梓は、唯先輩達の所へと走つていく。なんとなく、その行動は子供っぽい。

さて、読み進めようか。俺は手元の本に視線を戻した。今更思つた事だけど、持つてくる本の選択を間違えた気がする。大津波に飲み込まれ、無人島に漂着した六人の男女の話……。冒頭の部分が、なんとなく今の状況と似てるんだよな。怖い怖い。心の中の恐怖を押さえ付け、俺は本を読み進める。

しばらく読んでいると、俺は急に睡魔に襲われた。

……眠いな。昨日夜更かししすぎたか……。

俺は目を閉じてしまった。その途端い、意識が飛ぶ。

目に当たった光で、俺の意識は覚醒する。

目を開けたその前には、携帯のカメラレンズが。

なんだ、写真のフラッシュだったのか……。っーか、

「何撮つてるんですか!」

俺が言うと、律先輩は笑いながら答えた。

「いや〜。あんまし気持ち良さそうな顔だったからさ〜。思わずっ。」

なんすか、それ……。

律先輩は俺にその写真を見せてくれた。

……なんともしまりの無い顔。俺ってこんな顔して寝てんだな。少しシヨック。

「りっちゃん、後でその写真、私にもちよーだいつ」

俺の顔写真がどんどんばら撒かれてゆく……。ハッキリ言って、あんまり良い気分はしない。俺は言う。

「で？なんの用ですか？」

「これから練習しようと思って」

漣先輩が答える。

俺の心の中に少し意地悪い気持ちが浮かんだ。

「ほう。ちゃんと練習もするんですね」

俺の言葉に、少したじろいで、律先輩と唯先輩は言う。

「くう〜。痛い所を突きおるわ……」

「仁君！私達だって、ちゃんと練習もするんだよ？」

「あはは！すいません。つい」

それよりも、ようやく練習か……。ん？

俺は目の前に並ぶ五人の内、一人を指差して言う。

「誰？」

「中野梓ですっ!!」

「あ、梓!？」

ぜ、全然分からなかった!

目の前に立っている梓は、上から下までこんがり日焼けしていた。俺は頭の中で、あの有名なハンター生活体験ゲームの肉焼きミニユージックを再生させる。

「上手に焼けました」

うん。ピッタリ。

その後、別荘内のスタジオで練習。

別荘の見かけに負けず、このスタジオもまた綺麗なもんで、めっちゃ高そうな機材が置いてある。

良い機材が揃っていると、なんか練習に熱が入る様な気がする。

準備中に、唯先輩が梓に聞いた。

「あずにゃん、それ何？」

ここでいう「それ」とは、梓のギターの先っぽに引っ付いてる物体の事を指す。

そういえば、俺も知らないな……。何それ？

「これですか？ただのチューナーですけど」

……ちゅーなー？

……なんだそりゃ。聞いたことがあるような無いような……。唯先輩は言う。

「へーっ。ちゅーなーって言うんだ」

「これでちゅーニングするんですけど……唯先輩、ちゅーなー知らないんですか？」

「うん。初めて見た」

首を縦に振る唯先輩。

唯先輩は、俺に振ってきた。

「仁君は、知ってた？」

……正直に言おう。

「知らなかった……」

「ええっ!？」

随分と驚いた表情をなされますね、梓さん。

でも、仕方無いじゃないですか。俺、今までちゅーニングなんかする必要なかったんだもん。

梓は言う。

「じゃあ二人とも、どうやってちゅーニングを？」

唯先輩は、ごく当たり前の様に言った。

「え？適当に……」

ジャランと音を鳴らす唯先輩。驚く梓。理解不能な俺。

「ぜ、絶対音感！？」

ああ！それは知ってる！

なんか、音を聞けば、それがどんな音か、すぐ分かっちゃう的な能力でしょ？

梓が言うには、唯先輩にはその能力が備わっていると……。凄いのか凄くないのか、分からない人だ……。梓は俺の方に向き直る。

「仁君は？どうやってたの？」

……どーしよう。

俺、チューニングなんてマトモにやった事ないよ……。

そっぴや、梓や遷先輩は、いつも練習前にジャラジャラ音を出してたな……。

あれってチューニングだったのか。練習前のアップ的なもんだと思ってた。

「まさか……チューニングの仕方、知らないの？」

うっ。鋭いな、梓。

内心たじろぎながらも、俺はなるべくカッコイイ声で言う。

「え？そんなの適当に……」

俺は唯先輩と同じように、ギターを少し鳴らす。
梓は苦笑いしながら言った。

「全然出来てないよ……」

ゴメンナサイ……。

その後、梓の持ってたチューナーを借りて、人生初のチューニングに挑戦。

俺の準備が整う頃には、皆の準備も完了していた。

「そいじゃー、いくぞ」

合図する律先輩。頷く残り五人。

スティック同士を叩く音が四回響いて、演奏スタート。

合わせてみると、今までで一番の出来と言ってもいいくらいの演奏。やはり、環境が良いと、気分良く弾けるんだよな。

この後、律先輩の腹の虫が鳴り出し、俺達は晩メシをとる事になった。

「ぬぶつううう……」

「じおおおお……」

「……………」

俺の横で、律先輩と唯先輩が大粒の涙を流している。

……違う！違うよ！？俺が泣かせたんじゃないから！話を聞いて下さい。

晩メシはバーベキュー。

俺と律先輩、唯先輩は、その具材を切る係となっていた。

現在俺達が切っているのは、タマネギ。切ると目が痛くなってくるんだよね。

この感覚には、慣れが必要なんだ。

二人は泣きながら抱き合った。

「死ぬ時は、一緒だよ」

……なんすか、そのセリフ。

一向に二人の作業が進まないの、俺は二人の切るタマネギを全て俺の前に持ってくる。

よし、と一呼吸。

リズムカルに包丁を入れる。包丁がまな板を叩く音が、なんとも気持ちが良い。

ノツてきた。俺の魂のリズムを刻むぜ！！

とんととんとん、とんとん！

……完璧だ！

唯先輩と律先輩は歓声を上げる。ふっ。悪い気はしねえぜ。

俺だって、やる時にはやんのさ。

そんなこんなでテキパキと作業は進行。

気付けば、網の上で良い音を立てる肉に野菜達。
美味そう。うじゆる。涎が止まらんなあ。

「よし、んじゃ、皆用意はいいかー？」

律先輩が音頭を取る。

「せーのっ」

『いただきますー!!』

あっはー！美味しい！

やっぱり肉は美味しいよね。いや、野菜も美味しいんだけども。

たらふく肉と野菜を喰う。

大勢で食べる飯っつーのは、いつもよか美味しく感じるよなあ。
家じゃいっつも一人だから、尚更だわ。

あっ！？律先輩、それは俺が育ててきた肉のみの串……。
くっそ〜。やられたぜ。

第十話 見栄を張りたくなるのが人間なんだよ。仕方が無い。(後書き)

おお「まさかお前泳げないなんてな……ププッ！」

仁「るっさい！！仕方がねーだろ！」

おお「少しは努力したのかい？」

仁「努力？そんなものは遠い昔に置いてきた」

おお「何カッコ付けてんだ！」

第十一話 勘違いを解くのは、中々難しい。(前書き)

合宿その3です。

第十一話 勘違いを解くのは、中々難しい。

ふっつ。食った食ったあ！
もう入らないな。

食後の一段落。紬先輩はいったん別荘に戻る。
そこで、戻って来て言った。

「花火やる！」

お、いーねえ。

夏の風物詩の一つだよな。花火。
打ち上げ花火も迫力があっていいけど、手持ち花火もまた風情がある。

……と思う。いや、あるだろ。うん。綺麗だし。
律先輩は言う。

「ようし、そうと決まったら後片付け、全力で行くぜ！」

おーっ！と唯先輩、紬先輩。

宣言通り、片付けはかなりの速さで行われ、俺達は早速花火を開始する。

「あーっ。りっちゃん、二本一気にやってるー！ズルイよ」

「何を言うっ唯！本数が多いほうが、迫力が出るんだよ！」

「ムギ先輩、三本もですか!？」

「うん！やってみる！」

「火傷には気をつけるよー」

なんとも微笑ましい光景だなあ。

……はっ！今の俺、かなりオッサン臭かった！歳は取るもんだなあ……。

俺はそんな事を考えつつ、五本の指の間に花火を挟んで、四本一気に点火する。

ここまで本数が多い場合、全部一緒に持つと炎が上がっちゃうんだよね。軽いトラウマだよ。

だから、一本一本の隙間は空けておかないとな。

四本全てが、鮮やかな色の付いた火花を吐き出し始める。

うん。やっぱり綺麗だ。

「おおっ！仁君凄いなー！」

「やるなー！仁！！」

「うん。ホントに綺麗ですね」

「私も負けていられないわ！」

「ムギ……無理するなよ？」

こんなカンジで、三丁五本ずつ一気に花火を消費していった結果、当然の如く、あっという間に残りの花火の残数が減っていく。

むう……。そろそろいいかな。
俺は皆に聞く。

「線香花火、あけてもいいーですかー？」

「おー。いいよー」

律先輩から許可をもらい、俺は線香花火を取り出す。
やっぱり、花火の締めはコレっしょ！

なんともいえない儂さというか、なんとというか……。ま、一言で言
やあ、綺麗っつー事だよな。

「仁君。私にも一本ちょうだい」

「お、私もー」

こんなカンジで、六人全員に線香花火が行き渡った。
ようし、点火！

……。あー。そろそろヤバイか……。イヤ、お前なら出来る！頑張れ
え！

俺は持っている線香花火に向かい、全力で念を送る。

よし、いーぞ！持ちこたえた！ああ！！無常にも風が！マズイ！！
あー、あーあ……。終わっちまった。残念。

さてもう一本行こうと思ったが、残りは丁度一本。
どうしようかな……。少し悩む俺の耳に、紬先輩の声が届く。

「あつ。また落ちちゃった……」

「ムギー。こういうのは、思いつきし応援しないと、駄目なんだぞー」

「うん、わかった。私、やってみる！」

……ここは引いておこう。

紬先輩、めっちゃ楽しそうだったし。悲しませるワケにはいかん。

皆が見守る中、紬先輩の持つ線香花火は、俺が今までに見た事が無い位大きく、長く続いた。

花火も終わり、さあ別荘に戻るかと思っていたら、律先輩が宣言。

「肝試しをやるうー！」

お断りしまあす!!!

駄目よー。悪戯に死者を愚弄するような真似しちゃ。絶対駄目！

イヤ、ホントに無理だって！ねえ！やめよーよお!!!

澪先輩が呆れた様に言う。

「次から次へと……」

「いーじゃん！やっぱり夏で合宿といえば、肝試しだよね！」

左手をグッと握って言う律先輩。

嫌だああ……。誰だ！夏の定番は肝試しだなんて、最初に言い出した奴は!!!

「私はやらないぞ」

おお！味方があー！！

ガンバレ！澁先輩！！

……………。

律先輩の挑発に、澁先輩はあっさり陥落。……………なんてこった。

そんなこんなで、俺の切実な願いは全く通じず、結局肝試しは開催される事に。

律先輩は仕掛けをするとかなんとか言つて、一足先に林の中へ。

こんな暗い中で林にずんずん入っていけるその度胸。見習いたいっす。ホント。

俺達五人は、二つに分かれて入る事になった。

俺は澁先輩と梓と共に、先に入る事に。

……………いやだああ。まだ死にたくない。

心の中で叫びながら、俺達は林の中へ。

澁先輩と梓は、手を繋いで歩いている。

イヤ、澁先輩が全力で梓の手を握っていると言った方が正しいかな。ホントは俺も全力でどちらかの手を握って居たいトコなんだけどなあ。流石にそれは無理だよな。

そんなワケで、俺はビクビク怯えながら、二人の後ろを歩いているんだよね。

「こ、高校生にもなって、肝試しも無いよな」

笑顔で言う澪先輩。

しかし、その笑顔と言葉は引きつっている。
ふむふむ。どーやら澪先輩も中々の怖がりを見た。
澪先輩に対して、どっと親近感が沸き起こる。

その時、後ろの草むらから、ガサツと音がした。

「ひっ!」

「うおっ!」

軽い悲鳴を上げる澪先輩と俺。

……何かが居る……な。

ははは、どーしよー。逃げ出したい。チビリそうだ。
もしホントにチビッたら、俺は社会的に死んでしまう。

俺は膀胱に神経を集中させる。

真っ青な俺の顔を見て、梓は聞いてきた。

「仁君……怖いのか?」

ここで嘘をついても、何も良い事は無い。

俺は全力で首を縦に振る。苦笑いの梓。

梓、逆に聞く。何故怖がらない?

もう一度草むらが鳴る。

ち、近づいてきてる!?!イヤだ!ゴメンなさい!?!良い子になるか
らあ!?!

「な、なんでしょか」

流石に少し怯えた様子の子。

「きつと、り、律の仕業だよ……」

漣先輩はガタガタ震える声を発し、ガクガク震える手で懐中電灯を物音の方向へと当てる。
そこには……。

……！！！！

マズい！言葉が出てこない！

髪の毛の長い女の人の様なシルエットがそこにあつた。
呻き声を上げながら、フラフラとした足取りでコチラに近づいてくる。

俺の体中から、変な汗がどつと湧いてきた。

恥も外聞もかなくなり捨て、俺はその場からダッシュで逃げ出そうとしたが……。

あ、足が動かねえ……。

ははははは……終わった……俺の人生。短かったなあ……。
ホントにヤバい時つて、何故か笑いが顔中に広がる。何故だろう？

その者は、どんどん接近。

手をコチラの方に突き出して、地の底から出る様な声で、言った。

「漣ぢやあああん……」

「うあああああああああああ……！！！！！！」

そういえば、着ている服もヨレヨレで薄汚れていて、顔は疲れきっているみたい。
梓は言う。

「驚かせようっていう目標は達成できたみたいですけど……」

澁先輩を見ると、上から下まで真っ白になっていた。

紬先輩が声をかけながら澁先輩の体を揺るすも、まったく反応ナシ。
……俺よりも怖がりな人、初めて見たかも。

俺は意識は辛うじて残ってるし、全身は真っ白になってはいない。
せいぜい、灰色ってとこだな。

その後、入浴を済ませ、一同、就寝。

俺には専用の部屋が一つ与えられたが、コレがまた広い広い。
ベッドふつかふか。枕もつふもふ。逆に寝れねーよ。

昼寝したのもマズかったかな。

やっべ、催してきた。

……どしよ。さっきの肝試しのせいで、俺はいつもより三割り増し
で臆病に。

しかし、我慢も出来ない。……しょうがないな。

命がけでトイレへと辿り着き、用を済ませてトイレを出る。

……ん？

来た方とは別の廊下に、明かりが見えた。

あそこは……確か、スタジオだったっけか？電気を消し忘れたのかな……
…。

まさか！お化k……いやいやいや、ないないない。あるわけない。そんな事。

今時そんな事信じてる奴なんかいないよね。うんうん。

俺は扉の前に立ち、丸く開けられたガラスの部分から中を除く。

咄嗟に俺は目を逸らす。

……何やってんだ？あの二人。

スタジオの中では、梓と唯先輩が居た。

二人は床に寝そべり、抱き合っている様に見えた気がする。

俺はもう一度中を除く。

……間違い無いな。

……まあ、世の中にはそういう世界もある事だし！

本人達が良いと思うんなら、部外者には何も言う権利は無いし、恋愛に年齢も国籍も性別も関係は無いっちゃ無いし、

いざとなったら、そういう事を認めてる国もある訳だし……。

何も問題は無い。うん。見なかった事にしよう。

無粋な真似はしちゃいけない。事はデリケートな問題だ。俺にはどうも出来ん。

明日からも、二人にはいつも通りに接するよう、頑張ろう。

俺はそう心に誓ってそこを後にしようとする。が、

「あー仁君！」

やっほー、とコチラに手を振る唯先輩。

マズイ。見つかった。どうするか……。ぐう、仕方ない。謝ろう。

俺は扉をガツと開くと、中に滑り込みつつ、土下座の格好に入る。

いや、そりゃもー美しい土下座であったと自負させて頂く。間違い

ないね。うん。

俺は土下座の体勢のまま、高らかに言う。

「すいませえん！この事は、誰にも言いませんから！！俺もすぐに忘れますからあ！！」

へ？といった様な顔の二人。

上手く伝わらなかつたか、ようし、ちよつと踏み込んで言うてみるか。

「いや、明かりが付いてたんで、何してるのかな？なんて思つて……。でも、まさか……」

ああ！違います！二人は悪くないです！俺が悪いんです！邪魔してすみません！」

この言葉を聞いた二人の反応は対極だった。
唯先輩はポケットとした顔で、

「へ？なんの事？」

梓は顔を真っ赤にして焦つた様子で、

「ち、違う！ギターの練習してただけだから！！」

「え？でも、床に転がって二人で引つ付いてイチヤイチャして……」

「ああ。暖かかつたよ。あずにゃん」

「唯先輩も、誤解を招くような事は言わないで下さい！！」

「へ？何が？」

「いや、大丈夫だって梓。俺、口はかなり固い方だから」

「もおおー！だから違うつてええええ！！」

それから三十分。梓の必死の説明を受けて、俺は事の全容をようやく理解した。

……ふう。なんだ、そっち系じゃなかったのか。いや。ビツクリしたよお！もう！

俺はほっと一息。

そんな俺を見て、梓もほっと一息付いた。

第十一話 勘違いを解くのは、中々難しい。(後書き)

仁「なんか……疲れたよ。今回。色々」

おお「お前に怖がりという設定をつけた時から、肝試しをやるのが
待ち遠しかったよ」

仁「くっそ、楽しみやがって……」

おお「ちなみに、夏合宿の話は、もう一話だけ続くよ」

仁「へー」

おお「興味ゼロか……」

第十二話 よくよく考えっと、俺って幸せ者だったんだな。(前書き)

合宿編終了です。

第十二話 よくよく考えつと、俺って幸せ者だったんだな。

別荘の部屋の窓から差し込んだ朝の日差しが、俺の瞼に当たり、網膜を刺激する。

あゝ？もー朝か……。

明日は帰る事になつから、実質的に遊べんのは、今日が最後だな。

……最早来た目的が変わつちまつてるな。

一人で苦笑いしながら、俺は寝ていた上半身を起こした。

……アレ？つかしいなあ。

目の前がぼやけてる。俺、目は悪くないのになあ。

……そういや、頭もボーツとする。

とりあえずベッドから降りようかと、俺は体を持ち上げる。

その時、視界がぐにやりと歪んだ。

うっ……。軽い吐き気。

たまらずベッドに倒れこむ俺。

……やっべ、風邪ひーたみたいだ。しかも……けっこー重症かも。

時計を見る。午前五時五十分。

まだ皆寝てるよな……。

……どしよ。

そうしている間にも、再びあの喉の奥に何かが入り込む嫌な感覚が俺を襲う。

俺は仰向けになると、ゆっくりと深呼吸を数回。

吐き気よ……収まれ……収まってくれ……頼む！

……ッ！

駄目だ！やっべえ！

俺は体に鞭を打って、部屋を出て、ダッシュでトイレに向かう。吐き気と頭痛と眩暈がヤバイけど、んな事いつてらんね。

俺はトイレの扉を乱暴に開け、そして同じように閉めた。

とりあえず、出す物は出してトイレから出ると、梓と鉢合わせしてしまった。

まっずい。ドタバタしすぎたか。起こしちまったみたい。

「なんか凄い大きな音がしたけど、何かあった……仁君、どうしたの!？」

梓は俺の青い顔を見て、途中で質問内容を変えた。

余計な心配はかけらんない。……頑張れっ！俺っ!!

俺は顔の筋肉に全神経を集中させ、笑い顔を作る。

もちろん、ガツチガチの笑顔であろう事は理解してる。けど、笑ってりゃなんとかなるっしょ。

「別に。ちょっと調子が悪くてさ。もうちょい寝てりゃ良くなると思うよ」

「でも、顔色すつごく悪いよ?」

俺は更に神経を集中。ニカッとした笑い顔を見せる。

もちろん、そんな爽やかな物になってはいない事は、重々承知の上

だ。

「そうか？じゃ、俺はよく分かんないけど、結構ヤバイのかな」

そう言った瞬間、目の前が再び歪んだ。

う……。やべえ。今度は眩暈かよ。忙しいねえ。

このままだと梓に気付かれちまうか。早いトコ、部屋戻る。

「そいじゃ、さっさと部屋戻って寝る事にするよ。梓、起こして」
「メンな」

そう言っつて、俺は梓に背を向けて歩き出した。

……なるべく平常に……平常に……。

だけど、梓は俺の歩き出した時のフラつきを見逃してはくれなかった。

俺の肩を掴んで引き止める梓。

「フラフラしてるよ？仁君ホントに大丈夫！？」

「大丈夫だから……梓も帰って寝たら？」

俺はそういったけど、梓はボンヤリしている俺を見て、状態を理解してみた。

ハッキリした声で言った。

「仁君。今皆呼んでくるから、ここでちょっと待ってて」

……それだけは、やめてくれ。

迷惑はかけたくないんだよ。

少しココで休んだら、自分で部屋戻っから……。

梓は行っちゃった。

「げっ。九度四分もあるぞ」

律先輩が、体温計を見て言う。

……九度四分か、今までの最高は八度九分だから、記録更新だな。ついに俺も九度の壁を突破か……。

現在時刻は六時十分少し前。

梓の呼び掛けに皆は答え、俺の部屋へと出勤してきた。

……申し訳ないツス……ホントに。

俺はベッドの中。山中先生を含む六人がそこを囲むようにして立っている。

六つの視線の集中砲火。ははは。中々キツイ。

横になると、結構体はラクになるもんだ。不思議。

でも、やっぱり体のダルさ、火照り、若干の頭痛が残る。

紬先輩が、俺の額に熱冷ましシートを貼ってくれる。

うっひゃ。冷て〜。

透先輩が、腰に手をやって言った。

「それじゃ、少し早いけど朝ご飯にするか」

「私が仁君のお粥を作ってあげるよ!」

唯先輩の手料理……。うん。
大丈夫かな？いや、大丈夫だろ。うん。あまり疑うのは、唯先輩に悪い。

「うーか、この時点でかなり失礼だよな。好意で言ってくれてるのに。」

「そんじゃ、お言葉に甘えて。お願いします」

「まかせて！仁君！」

唯先輩は両拳を握って、鼻息を荒げながら言った。

「朝ご飯作ってる間、誰か仁君に付き添った方が良くないですか？」

「いや、梓。それはいいよ。風邪をうつしちまったら悪いし」

逆に心配で、寝れねーかな。

「んじゃ、仁君は今日一日しっかり寝て、風邪治しなさいよ？」

山中先生が言う。

望むところです。明日も皆にメーワクかけるなんて……。耐えらんない。

お大事に……。との言葉を残して、皆は部屋から出て行った。

俺は心の中で固く、固く誓う。

ぜってー今日中に治すー！！

俺は目を閉じて、眠りにつく。

……なんか、ガチャツって音がしたな。
俺は目を開いた。

唯先輩と梓がお粥の乗ったお盆を持って入ってくる所だった。
梓が俺に言う。

「あ、ゴメン。うるさかった？」

「いや、まだそんなに深い眠りじゃなかったから」

二人は、俺のベッド元まで歩いてくる。

「どーぞ！私の自信作だよ！」

唯先輩が俺にお粥を見せながら言った。

見た目は普通のお粥。ご飯の中にウインナーやらコーンやら。
あっはー。いい匂い。

「そいじゃ、頂きます」

俺はお盆を受け取るうと両手を出したが……。

唯先輩はそんな俺の行動を無視。いや、見てないな。
スプーンでお粥をすくって、息を吹きかけて冷まし、俺の口元へ差し出してくる。

「あの〜」

「はい、あ〜ん」

……………。
何コレ。ウレシイ。でもハズカシイ。

梓を見る。横を向いて、口元を押さえて笑いを堪えてる。

……………。

唯先輩を見る。めっちゃキラキラした目。

俺は観念して口を開く。スプーンと共に、お粥が口の中へ。

……………美味え。

「これ、ホントに唯先輩が作ったの？」

頷く梓。

「凄く美味しいですよ。唯先輩」

俺の言葉に、鼻から勢いよく息を噴出して、どや顔を作る唯先輩。スンマセン。さっきちょっと疑ったりして。めっちゃ美味いっす。

唯先輩は続いて二杯目をすくおうとする。慌てて俺はそれを制した。

「いや、それだと時間掛かるじゃないすか。俺がテキトーに食ってるんで、二人は戻って下さい」

「えー。でも……………」

「何ですか？」

唯先輩は少しの恥じらいを込めて言う。

「仁君に食べさせるの、なんか楽しくって……ずっとやってたいなあって……」

俺の顔が真っ赤になる。体温は三度ばかり上昇。

え？まさか……これって……。

告白！？「お前の作る味噌汁を毎日飲みたいな」的な！？

しかし、唯先輩は俺のそんな淡い気持ちをすぐさまぶち破る。

「なんか、赤ちゃんにご飯あげてるみたいで！」

……はっはっはあ！勘違いだったぜ！

赤ちゃん扱いかよ。しかも……。

所詮人生なんてこんなもんさ。どーぞ。笑ってくれ。こんな俺を。

唯先輩と梓は、俺の心に少しばかり傷を付けて退室。

俺はお粥を食べ終えると、再び夢の中へ。

それから、入れ替わり立ち替わり皆さんが様子を見に来てくれた。

嬉しかったけど、恥ずかしいっつか、申し訳ないっつか。

こんなカンジで、俺は丸一日、ベッドの上で寝て過ごした。

翌日、目を覚まして体を起こすと、昨日が嘘のようにラクになった。

横に置いてあった体温計で熱を測る。

……三十六度八分。
はっはぁ！三浦仁！完全復活う！！

今は……ゲーツ。まだ五時かぁ。昨日寝まくったからなぁ。
計算してみたら、一日の四分の三寝て過ごしてたんだな。俺。

俺は体を起こして、一日ぶりの健康な体を堪能すると、再びベッドに体を倒した。

しかし、俺もツイてないっちゃツイてないよな。

折角こんな綺麗なトコまで来て、熱出すなんてな……。

そういえば、小学校の時も、遠足の日に熱を出したことがあったっけ。あんどきや悲しかった。

修学旅行の時も、実は少し体調悪かったんだよね。新幹線の中とか、死にそうだったよ。

……俺って、行事運無いなあ。いや、全体的に運が悪いのか。ジャンケンも弱いし。

ふう。

……いや、俺がここにこれたという時点で、中々ミラクルか。

フツーだったら、絶対に俺は参加出来ないよな。あれだよ。常識的に……さ。

うーん。ここの人達は……少し……変わってる？のかな。

いや、良い人達なんだろう。入部するときも、なんの躊躇いも無く俺を迎え入れてくれたし。

昨日も、自分達の遊びも程々に、俺の看病してくれたし。

うん。良い人達なんだ。お陰で、助かったよ。

唯先輩は、やれば出来る子ってカンジだよな。

一つの事に集中すりゃ、恐らくビククリするような結果を出してく

れるハズだよ。

性格的には、なんかドジっ子というか、天然と言つか、見てると和むんだよな。

練習嫌いに見えるけど、昨日の事を考えると、その考えは放り捨てた方が良さそう。

それに、絶対音感も持ってるし。意外と凄い人なんじゃないか？

人に接する時には、ランク付けとかはせず、誰に対してもあの態度で接してそうだ。

うん。良い人だな。

律先輩は、適当そうに見えっけど、かなりしっかりしてるよな。

駄目なトコもたくさん目に付くけど、周りの空気を読むのが上手い気がするんだよ。

気配り上手。といったところだな。

ホントに人を傷つけるような事は絶対に言わないだろう。あの人は明るい性格だし、友達も多いに違いない。

誰からも親しまれる人ってカンジ。きっと律先輩の事を嫌ってる人なんて、探しても見つからんだろう。

うん。良い人だよ。

漣先輩は、一言で言うと、見た目と中身のギャップが激しい。

落ち着いてクールなカンジは見たため通りだけど、あの可愛らしい歌詞のセンス。

実は凄く恥ずかしがり屋で、怖がりな人だった。……なんとなく、共鳴する部分がある。

凄く真面目で優しい性格だし、人当たりも柔らかい。

……まあ、律先輩とは、どつき漫才みたいな事をやってるけれども、あれは、二人の仲の良さから来るものだろうな。律先輩だからこそだ。

うん。良い人だわ。

紬先輩は、とにかく優しい。雰囲気も暖かい。モノスゲお嬢様なのに、全然鼻にかけたりしないし、すっげ周りの事を思いやっているとと思う。

物腰も柔らかくて、なんかほわんほわんしてる。落ち着く。和む。唯先輩と律先輩とたまにふざけてるけど、そーいう時の紬先輩は、心の底から楽しんでるってカンジ。

やっぱりお金持ちっつー事もあって、少し周りと感覚がズレてるトコもあっけど、本人は「普通」

に憧れてるんだよな。金持ち故のってやつか。

うん。良い人。

梓は、うん。しっかりしてるよな。

ギターの練習は……毎日やってるんだろうな。梓の性格から考えつと。

あのギターの実力は、やっぱり日々の練習の賜物か。ちつくしよ。

俺も頑張んど。

教えんのも上手いし……俺も何回も救われた。面倒見が良いんだろ
うな。

それに、責任感も強そうだ。

唯先輩の頼みには小言を言いつつも、結局はちゃんと依頼は遂行するし。

うん。良い人だ。

こうしてジツクリ考えてみると、俺の周りには良い人だらけだな。なんて幸せな境遇なんだろう。俺。

この人達と一緒に音楽をやれて、俺は幸せなんだ。

皆の為に、俺ももつと頑張ろつと。

とりあえず、今日の朝飯は俺が作るかな。

時間もあるし、昨日のお礼も兼ねて、気合入れて作るかあ！

俺はベッドを抜け出し、部屋を出た。

第十二話 よくよく考えつと、俺って幸せ者だったんだな。(後書き)

おお「今回の話、実は書くの苦労したんだぜ」

仁「そーなん?……コレが?」

おお「苦労した割には低クオリティだな。的な目で見ないで下さい」

仁「いや、別にそんな事思っただけ。と言ったら嘘になるけど」

おお「回りくどい!」

仁「まあいいや。で、どこで苦労したん?」

おお「今回は、お前が軽音部に対してどういった印象を抱いてるかを書きた」

かつたんだよね。でも、それが難しくてさ」

仁「で、俺に高熱を出させたと?」

おお「そのとーり!」

仁「もーちよいマシな方法は無かったのかい?」

おお「思いつかんかった」

仁「頑張れ!」

第十三話 人の評価は気になるよね。

夏休みも残り少なくなってきた。

そろそろ鞆の封印を解かないとな。マジヤバくなってきた。

……いいさ。夏はまだ長い。なんとかなる！そう思っとこう！

とりあえず、今はこの休日を満喫する事が第一だ。うん。そうに違いない。

おっと。時間が無い。急ごう。

俺は大との待ち合わせ場所へと向かっていた。

昨日、メールで約束を取り付けたんだよね。

今日は俺も予定無かつたし、丁度良かつたんだ。グッドタイミング。

おっ。まだ大は来てないな……よし！勝った！

俺は待ち合わせ場所に相手より先に居ると、なんか優越感に浸れるんだよね。

「オマエの事、待っててやったんだぜ？」みたいな。

口に出しては言わないよ？勿論。友達無くしちまうよ。

大と落ち合い、街にくりだす。

何するかは全く決めていない。あっちをブラブラ。こっちをブラブラ。

気になる店に入っては商品を眺める。

結構楽しいよね。こーゆーの。金もかかんないし。

今は大の希望で、服屋の中にいる。

大はファッションに対して、俺の百倍くらい興味と関心を持っていた。

……いや、違うな。0に何をかけても0か。失言でした。

「だーいー。俺もー飽きた〜」

「やれやれ。お前も少しは自分の格好を見直してみろよ」

え？今日の格好も、軽音部の皆に選んでもらった服だぜ？オシャレな筈だ。カツコイイ筈だ。

俺がその事を大に伝えると、大は首を振って言った。

「違えよ。服じゃねえよ。靴だよ！靴！」

……俺は下を見る。

俺が今履いているのは黒いサンダル。底がゴツゴツしていて、歩く度に痛気持ちいいんだよね。

俗に言う、健康サンダルっつーヤツ？

「なんでその服を着て、そのサンダル!？」

「いや〜。気持ちいいし。夏だし。涼しいし」

「お前、他に靴持ってなかったっけ？」

「ああ。長い事履いてたんだけど、穴が広がって親指と人差し指が外に出るようになったから、捨てた」

「そこまで履いてもらったら、靴も本望だろーな！きつと！」

言葉では褒めてるようにも聞こえない。けど……。大の目は、精神異常者を見るような目。何コレ？みたいな。いいじゃない！人間、外見じゃない、内面だよ！

「よーっし。分かった。靴買いに行こう」

「ええ？別にいいよ。まだ夏だし、雨もそんなに降らないし」

金も無いし。

心の中でそつと呟いた。

「いや。そんなカッコした人間と一緒に歩きたくない」

ええっ！？そんなに酷い！？少なくとも、足元より上はマシだろお？
うーん……ふあっしょんの世界は奥が深いな……。

つか、こんなカンジのやり取り、前にもした気がする。

そんなこんなで俺は大によって靴屋へと連行される羽目に。
店内に入って、すぐに目に飛び込んだのは……。

「梓ー。これどう？」

「うーん。もうちょっと明るい方がいいかも……」

「あーじゃあ、これはどう？」

梓達だった。

憂が俺達の方を向く。ガッチリ目が合った。

「あ！仁君！大君！」

憂が手を振りながら言った。
同時に、梓と純も俺達の方を見る。

「よー」

俺は片手を上げて挨拶を返す。
隣で大も同じ行動を取る。

「何ー？二人で、デート？」

なっ！純！俺は健全なる男子学生だぞ！？
男とデートなんてしないやい！
大は言う。

「まあ、そんなトコ」

否定しないんかい！！
……ええ。どーしよ。コイツと係わんの、もうやめとこっか。
自分の体は大切にしないと。

四人の視線の集中砲火を浴びて、大はボソツと付け足した。

「冗談だ」

ふう〜と息を吐き出す俺達。
まったく……驚かせやがって。
っーか冗談言うんだったら、もちっと軽い感じで言ってくんない！？
俺の気持ちを代弁するように、梓は言う。

「あまりに真顔で言うもんだから……一瞬ホンキにしちゃったよ」

「わりーわりー」

ヘラツと笑って大は言った。

さっきの表情とはエライ違いだな。オイ。

純は聞いてきた。

「ねえ二人とも。この後ヒマ？」

俺と大は顔を見合わせる。

これからの予定は全くの無計画だったから、考えようによっちゃヒマかなあ。

大は言った。

「ヒマっちゃ、ヒマだけど」

「なら、これから一緒に遊ぼうよー！」

純はニカツと笑って言った。

その後、靴は今度買うからと大を説得。
ゲーセンへ出向く事に。

中に入ってすぐ、あるゲームが俺の目の中に。

……おおっ！アレは太鼓の 人！

最近やってなかったなあ。よーっし。いっちょやってみつかあ！

俺がバチを持って画面を前に立つと、大が言ってきた。

「そーいやお前、前にこのゲーム得意だっけ言ってたよな」

「おー。まあ見てな」

四人は俺の後ろに横に並ぶ。

ふっふっふ。俺の特技、見せてやる！

百円投入。

難易度は、鬼。一番難しい奴。

何か新曲が沢山出てるな。

おーし。コレにしよう。

画面で、太鼓のキャラクターが言った。

「さあ、始まるドン！」

……あっはー！

気っ持ちはいいー！！

画面を流れる音符に合わせて、リズムカルに太鼓を叩く。

俺は順調にスコアを伸ばしていく。

周りに人だかりが出来てるのが、なんとなく雰囲気分かった。

ふっ。悪くねえ。あああっ！あつぶんええ。ミスるかと思った！今のは偶然だな。

曲が終わる。

画面に太鼓のキャラクターが現れ、スコアが表示されていく。太鼓のキャラクターは言った。

「フルコンボだドン！」

フルコンボ……そう。俺は一度もミスらなかった。久々にしちゃ、上出来だ。周囲のどよめきが心地いいぜ。

俺は四人を振り返る。

なんだか、笑顔が若干固い。

その理由を、近くに居た子供が親切に教えてくれた。

「お兄ちゃん、凄いな！でも、なんか気持ち悪かったよ！！」

……子供は残酷だなあ。

たった今、俺はバチを置いてこの世界から引退する事に決めた。

その後、俺以外の四人はUFOキャッチャーに挑戦。俺は見てるだけ。

だってさ。一発でとれりゃいいけどさ。無理じゃんそんなの。お金をドブに捨てるようなもんだよ。

次に、プリクラとやらを撮りに行く。狭い空間に五人。中々キツイ。

撮り終わって出てきた写真を見て、俺は愕然とした。

「こんな小さい写真に……五百円……」

俺は堪らず言った。

「コンビニで使い捨てカメラでも買ってきた方がお得だったんじゃない？」

純は言う。

「プリクラはシールになってるから、手帳とかに貼っておけるし……」

「写真の裏に糊でも塗れば、好きな所に貼れるよ」

梓は言う。

「撮った写真に、ラクガキ出来るし」

「俺、今黒のマジック持ってるよ？使う？」

俺の正論に、皆は反論出来なかったみたい。
ふふふ。いつだって正しい方が勝つのさ。

梓と純は「コイツには何を言ってもムダ」といった表情をしていた。
やれやれ。負けを認められないと、人間は大きくなれないぜ。

「あゝっ！遊んだなあゝっ！」

歩きながら純は伸びをする。

俺だってそうだ。元々俺はインドア派だぞ。半日外に居ると、もうげっそり。

足が疲れたよ。ずっと立ちっぱなしだったからさ。

店を巡るにしても、程々にしとかないとな。

既に日は傾いている。

オレンジと紺色が混ざって空は今、紫色となっていた。

メツチャ綺麗。心に染みるような色だ。あの空を題材に、詩が書けそう。

現在時刻は七時前くらいかな。でも、俺の腹時計は既に八時を回ってるみたい。

ぎゆるぎゆるさっきから音が鳴ってるから。うう。腹減った。

俺は思った事をもう一度言った。

「腹減ったなあゝっ！」

「そういえば、もう七時だね」

梓が携帯を見ながら言った。

よかった。俺の体内時計、中々正確だ。

大は俺に言った。

「なあ仁。今日この後お前んちに行ってもいい？」

「え？いいけど、なんで？」

「いや、今日親が居なくてさ。家に居てもつままないし」

「ああ。まあ良いけど」

「あ！そーだ！お前、メシ作ってくんね？」

「ハア！？何で？」

大の提案に俺が驚いていると、純が手を挙げて言ってきた。

「え？仁君の手料理？アタシも食べたい！」

「あつ！私も！憂は？」

「うん。仁君の料理、一回食べてみたかったんだあ。それに、お家も気になるし」

え？何この食い付きの良さ。

そんなに期待してる？やめて。俺プレッシャーにめっさ弱いから。

「分ーったよ。別に良いけど……」

俺は梓、憂、純の三人を指差して言った。

「お前らは大丈夫なの？そんな急に決めてさ」

「大丈夫！今家に連絡するから！」

純の言葉を合図に、憂と梓も同時に携帯を取り出した。

どうやら本日俺の家で夕食を取る事は決定事項らしい。

……ま、別にいつか。

いつつも一人でメシ食うのも侘しいし。

大勢で食う飯は美味しい！うん！コレ重要だ。

そんじゃ、何作るかな……。

電話をかける三人の横で、俺は冷蔵庫の中身を必死に思い出し、献立を考えていた。

「おお〜」

「ここが仁君の家か……」

「何か……普通」

「純。一体どんな家を想像してたんだい？」

「もっと和風で……なんていうかお屋敷みたいなカンジで……」

たどたどしく説明を始める純の言葉を、大が途中で引き取る。

「縁側に座って茶あ飲んで……ってカンジだな」

「ああ〜！分かる〜！」

俺のイメージって……一体。
ハッキリ言わせてもらおう。

ウチは普通（より少し大きいかもしれない。自信は無い）の一軒家だ。
まあ、カツコ内の事を考慮したとしても、普通の家だという事には
変わらないぜ？

俺は家の鍵を開ける。

俺の後について、四人はゾロゾロと家の中に入っていく。

「……お邪魔します」「……」

「どーぞどーぞっくり〜」

とりあえずの挨拶を交わしつつ、俺はリビングの方へ向かった。
俺は言う。

「荷物はテキトーに置いていて」

純は部屋を見渡して言った。

「思ったより片付いてるね。家の中」

そりゃもう。

俺、結構綺麗好きなんだぜ？

キッチンの方に移動。

冷蔵庫の脇に割り付けられた物を見て、梓が言う。

「ポイントカード……」

「あとーポイントで全部溜まるんだあ！」

大が言う。

「おおっ。ちゃんとエコバック持ってるんだな」

「とーぜん。環境にも優しいし。ビニール袋はお金取られるし」

純が言う。

「大量の輪ゴムが吊るしてあるね」

「何かに使えるかもしれないからね。捨てるのは勿体無いよ」

憂が言った。

「なんて言うか……すっごく家庭的だね」

「お褒めに預かりまして」

俺は恭しく一礼。

純と梓は言った。

「主婦みたいだね」

「なるほど……こんな生活してるから、セコ……節約上手になっ
たんだね」

「梓？今一瞬本音が聞こえたよ？」

大は言う。

「まったく、お前はホントにセコ……ドケチだな」

「オイ今言い直す必要あったか!?!どつちにしろ罵倒の言葉なんだけども!」

「いや、梓とコメントが被るのはどーかと思って」

「そんなお笑い芸人みたいな事気にしなくていいんじゃないのかな!?!」

「まあ、そー言いなさんなって」

まったく。

「そんじゃ、早速準備に取り掛かりますか」

俺は冷蔵庫の方に歩きながら言つと、憂が言った。

「あつ。私、手伝おうか?」

「いいよ。憂。俺の料理食いたいって言ってたじゃん」

「でも……」

少し申し訳なさそうな顔をする憂。

別にそんな気遣いは必要ないのに。

さては……。俺の腕前が信用出来ないのかな?よし。見てろよつ。そんな憂の肩に手を置いて、純が言った。

「気にしなくていいってさ、憂。俺に任せろって。期待して待つてろって。舌がとろけんぞぉ！って仁君も言ってるよ？」

「純」。包丁取ってくんない？」

「なんでアタシには手伝わせる気なの！？」

無駄にハードルを上げやがるから。
俺は四人を追い立てる。

「おら。用が無いんだったらさっさと退場する。その入んでテキト
ーにくつろいでてくれや」

歩きながら大は俺に聞いてきた。

「仁」。お前の部屋どこ？」

「二階上がって廊下の一番奥の部屋」

「あつ。アタシもっ」

「行こ？憂」

「……うん。分かった。じゃあ仁君、頑張つて！」

「期待してるからねっ」

梓と憂が扉の向こうに消え、ココには俺一人に。

よーっし。気合入れて……。

開幕だあっ！

目の前で、四人が俺の作ったロールキャベツを口に運ぶ。

「どーかな……?」

モゴモゴと租借する四人に、おずおずと俺は聞いた。
考えてみれば、父さんと母さん意外に飯を作ったのは初めてだった
んだよね。

だから、反応はかなり気になる所だ。

さあ！ジャッジを！星いくつ？

「美味しいよ！ホントに！」

まず口を開いたのは梓。

良かった。結構な好評価ととっていいんだよね？

「ああ。美味いわ。マジで」

「凄いね！仁君」

続いて大と憂。

あれ？純は……。

そう思った瞬間。

俺の目の前に突き出される皿。

「おかわりっ！！」

純が満面の笑みで皿を俺に差し出していた。

っーか……。

「純、食うの早くね？」

「しょうがないじゃん！美味しかったんだから。で？おかわりは？」

「鍋にあと二つ残ってるけど……」

「ラッキーッ！」

純はそう言っただけで席を立った。

とりあえず、四人から良い評価を頂けましたあ！よかったよかった。

俺が喜びに浸っていると、憂が言ってきた。

「今度は、私ご飯作ってあげるね！」

「憂の料理も美味しいんだよ」

へえ〜！

そりゃー楽しみだなあ。

是非、ゴチになります！

俺はまだ見ぬ憂の料理に思いをさせた。

第十三話 人の評価は気になるよね。(後書き)

おお「お久しぶりです」

仁「やっと再開できたよ……」

おお「スンマセン。テスト勉強で。俺普段は勉強全然してないんで」

仁「お前中三だろ？受験生だろ？そんなんで大丈夫なん？」

おお「受験生が勉強をしなければならいなんて、誰が決めた！」

仁「流石に勉強しろよお！高校落ちんぞ！」

おお「もしそうになったら、田舎に帰る」

仁「帰るって……。お前田舎出身じゃないじゃん」

第十四話 災難はまとめてやって来やがる。(前書き)

今回の話は体育祭です。

アニメでは体育祭の描写は無かったのですが、俺がやってみたかったので。

一話にまとめるつもりが、まさかの二話編成に……。自分の計画性の無さを実感しました。

第十四話 災難はまとめてやって来やがる。

「では、百メートル走に参加したい人……」

我がクラスの学級委員が黒板の前に立って言った。

夏休みも明け、学校生活も再開。

休む間も無く、ある行事がやってくるんだよな。

俺は黒板の一番右に書かれた議題を見る。

『体育祭出場種目』

学級委員は俺に言う。

「三浦君は、瀬川君が来たら二人で相談して決めてね」

「あーい」

運動嫌いの俺としては、体育祭なんて行事はなんとしてもサボりたいトコだけど……。

学年に男子は十一人しか居ないクセに、ちゃんと生徒会は男子用の行事も用意しやがるんだもん。

ウチのクラスの二人の男で、半分ずつ出るしか無いじゃん。

一人がサボったら、もう一人の負担はものっそい大きくなる。一日中出っぱなしだ。

俺は気が小さいので、そんな極悪非道な事は出来ない。

ひよっとして、大のヤツも……いやいやいや。大はそんなコトしないよ。きつと。

……一応釘を刺しておくか。

本日、大は事情があつて、少し遅れてくるらしい。大が来たら、出る種目を話し合わないとな。

個人的には、大玉転がしとか、借り物競争とか、そういうちょっと楽そうな競技に参加したいところだ。

逆に、この『軍団対抗代表リレー』は絶対にお断りだね。各軍団から一学年三人ずつ。合計九人で走るこの競技。考えただけでもプレッシャーが……ぶるっ。

それから、『学年クラス対抗リレー』も。

全員参加だから、出場する事には変わりないけど、走る順番が大事。俺達男子用に空けられた枠は、一走と二十走とアンカー。

一組に男子が三人居る関係で、他のクラスは男子が一人二回走る羽目になる。

絶対それは嫌だ。アンカーも嫌だ。

そこんトコは大も一緒だろうから、そこは男同士。命がけのジャンケン大会を開く事にしようか。

その会議のすぐ後。

トイレに行こうかと立ち上がった俺は、教室の外に大の姿を見つけた。

今まさに教室に入って来るところみたい。

大は俺の姿を認識したみたいで、右手を上げて挨拶。

俺は言葉で挨拶を返す。

「よー大。何で今日遅れたん……」

俺の言葉は途中で止まる。

「何かあったの？」

今度は紬先輩だな。

俺はその質問には答えず、横に居る梓に話を振る。

「梓。説明してやって」

「何で私!？」

文句を言いつつも一連の事件を説明する梓。

それが終わった後に律先輩が一言。

「なんだ。そんなコトか」

「そんなコトとは無いでしょう!！」

堪らず俺は跳ね起きた。

そんなコト?何を言う!!!国家レベルの大事件だ!!!

俺にとっては。

律先輩は笑って弁明する。

「悪い悪い。でも、ずっと競技に参加してられるんだぜ?確かに疲れるけど、アタシは羨ましいぞ」

「俺は運動すんのが嫌いなんですよお……」

「でも、仁君別に運動出来ないワケじゃないじゃん。足も速いと思っけど」

梓が慰めてくれるが、俺の心は休まらない。

「男子の中では、たいして速くないんだよ」

俺の運動能力は水泳を除いて全てが極々一般的。

だけど、梓が言ったように俺は足はだけはそこそこ速い。

でも勘違いすんなよ？「そこそこ」だからな？「そこそこ」

十人居たら四番目。百人居たら三十七番目。そんなトコロだと思う。その上、学年には陸上部の男子が二人居る。どちらも、ものっそい足速い。

「まあいいじゃん！楽しもうぜ、年に一度の行事じゃん！」

明るく言ってくる律先輩。

気持ちにはホントに有難いけど、やっぱり俺の心は晴れない。唯先輩が聞いてくる。

「どれくらいの競技に出るの？」

えーっと……。百、千五百メートル走に、大玉転がし、綱取り合戦、大縄（回す役）。

それと、綱引きに、二人組み障害物競走、二人三脚、クラス対抗リレー（三人分計三百メートル）

うっわ。自分で数えて泣けてきた。多いよお……。

ちなみに、軍団対抗リレーは出なくてもいい事になった。

流石にこれ以上は大変だろうと学級委員の配慮からだ。

非常にありがたいんだけど、出来ればあと二つくらい減らして欲しいかったよ。

「確かに多いな……」

溥先輩が本日初の同情の言葉を投げかけてくれる。
うう。分かってくれるのはアナタだけだ。
律先輩も、頭を掻きながら言った。

「仁……悪かった。想像以上にハードだわ」

「頑張つて！仁君！」

「応援してるからね！」

「クラスの皆で協力するから」

軽音部五名の励ましを受けて、少し元気が出てきた。

うーん……いつまでもウジウジしてんのも、なんかカッコ悪いよな。
しゃーないっ。もう決まった事だしな。腹括って、頑張っか！
でも、体育祭当日はアンメルツヨコヨコを持って行こう。

201

体育祭当日。

晴天。これでもかっつーくらいの晴天。

暑い、暑いよお……九月に入っても、気温は下がらないんだね。
流石の俺も、少しテンションダウン。といっても、これ以上は下がらない。

つか、皆やる気満々だなあ……。

その情熱が、少し羨ましかったり。

白い鉢巻を巻いたウチの軍の団長が号令を掛ける。

「白軍第一応援歌、行くぞおおお！ー！」

周りから沸き起こる甲高い『オー!』
そして何週間も練習してきた応援歌を合唱。ものっそい熱気だ。
見ると、他の四軍団も同じ事をしていた。
ちなみに今は競技開始前の声出し。
それが終わると、一番最初に『一学年百メートル走』あるため、俺
は召集場所へ行かなくてはならない。

団長が笛を吹く。

やれやれ、いよいよか。俺は今日一日持つんだろうか……。
ケガ人の為、一番後ろの席に座っていた大に挨拶してから俺は純、
梓と召集所へ向かう。

憂は千五百メートルに参加する為、百には出ない。

純が梓に言う。

「緊張するねー」

「ねー」

「仁君は大丈夫?」

梓の問いに答える俺。

「大丈夫なワケないだろ……今後の為に、体力も温存しとかんとい
けないし」

「むっ。手を抜くなんて許さんぞ!」

「純」。俺が一体いくつの競技に出るか、知ってて言っているのか
い?」

「うん」

「俺を干物にする気ですか……」

溜息をつく俺を見て、純は梓に言った。

「男の子が走ってる姿って、なんかカッコイイよね」

「うん。爽やかかって言うか、額に少し光る汗が何とも言えないよね」

「それと、風になびく髪の毛と鉢巻も。もう堪んない」

「青春って感じがするよね」

前もって打ち合わせてたかのような会話だな。

ふん。まったく甘いぜ。そんな言葉で俺がやる気を出すと思ったら大間違いだ。

必ず。必ずブッチギリでゴールしてやる。

最後に用意されていた男子のレースで、俺は陸上部の直樹と大接戦の末、惜しくも二位に終わった。

応援席を通過する時の歓声がちょっと気持ちよかったというのはナイショだぞ。

少し間をおいて、次の競技は綱取り合戦。

この競技は、二つの軍の対戦形式で行われる。

グラウンドの真ん中に配置された五メートルくらいの綱を、両サイ

ドにある自軍の陣地まで引きずる。
んで、最終的に陣地内にある綱が多い軍の勝利だ。
ハッキリ言って、中々ハードだよ。
ホラ。見ると、赤軍の誰かが青軍のヤツらに綱ごと引きずられてる
もん。

その勝負は青軍の勝利に終わり、次は我が白軍と黄軍の戦いだ。
両軍、陣地の前に一列に並ぶ。
俺は端っこの方に立って、狙う綱を見定める。

……ようし。あの一番組っこの奴を狙おう。
俺から一番近いし、合図と同時にダッシュで言って帰ってくれば、
余裕のハズ。

開戦を知らせる空砲が鳴り響き、どちらの軍もダッシュで綱へと向
かう。
ものっそい地響きと土煙。結構な迫力だわ。
俺は思惑通り、全力ダッシュで目標の綱をゲット。そのままUター
ンして自軍へと戻る。
しかし、あと陣地まで数メートルというところで、突然綱に抵抗が。
……まさか……。
俺は後ろを振り返る。チツ、やはりか！

「雄平！智治！見逃せ！！」

「そいつあ無理な相談だな仁！おい雄平、行くぞ！」

「おう！！」

二人は俺持っている綱をガッチリ握って、俺の進行方向とは逆に進

み始める。

ここまで来たら一ポイントくらい自分で入れたいので、俺は力を振り絞る。

「そ・う・は・い・く・かあああ！！」

頑張れ！俺！踏ん張れ！俺！ファイトだ！俺！！

全身に神経をを集中させ、なんとかその場で持ちこたえようとするが、徐々に陣地から遠ざかっていく。

まずい！このままじゃ！！

俺は体を後ろに倒して、これ以上引きずられない様にする。

「くっそ！あきらめる仁！往生際が悪いぞ！！」

雄平と智治が全力で綱を引いた。

……瞬間。

俺の両足は急激に地面を滑り、体は無様に土の上に仰向けに転がった。

……え？アレ？嘘おお！！

焦って俺は言う。

「ちょ、ちよっタンマ！ホント！」

「智治！行くぞ！」

「まっかせろ！」

「いやっ、ホント無理だつて！危ないつて！ああ、あああああああ
あ……………」

俺は綱をしつかり握っていたため、二人にズルズル引きずられていく。

よりによって、応援席のまん前を。

いつ、痛いっ！恥ずかしいっ！もうヤダあ！！

応援席から沸き起こる笑い声が、俺の心に深く突き刺さった。

その後、俺は千五百メートル走、大玉転がしに出場、気付けば午前中最後の競技となっていた。

その競技は、「二人組障害物走」うん。これは説明いらないよな。競技の名前のまんま。二人で力をあわせてがんばんぞお！って競技。ちなみに俺のペアは……。

「頑張ろうね、仁君！」

憂だ。

大がいないから、男は俺一人。当然、ペアは女性の方となる。ちよっとやり辛いけど、問題は無いだろう。

一番目は俺たちの番だ。

スタート係の放つ空砲で、皆一気に走り出す。

俺は憂に合わせてランニングペース。

まずはこういう障害物競走でよくあるネットをくぐって、その先のハードルを三つ越える。

順調なペースだ。まだどの組とも差があんまし付いてない。

目の前に並んだ十個の平均台が見える。

なるほど。お次はコレを渡りきれれば良いわけね。楽勝。

……ん？

先生が何か紙を抱えてるな。なんだろう。

『ペアで手を繋いで渡りましょう』

……。

笑顔で手を差し出してくる憂。

ガチガチの笑顔で振り返る俺。

これは……どうするべきか……。

他の組の人達は既に渡り始めている。ええい。迷ってるヒマは無い！！

「失礼します！！」

俺は憂の手をガツと掴んで、平均台に足を掛ける。

冷やかしの声がその辺から聞こえてきた。

クソッ！今笑った奴顔覚えたからなあ！！帰り道に気をつけな！！！！

なんとか二人で渡りきった。

はあはあ……疲れたぜ、精神的に。

次は……？

輪っか状の縄が置いてある。

そして隣にはまたもや先生が指令の書いた紙を持って立っていた。えーっと……。

『電車ごっこの要領で走りましょう』

なんだこの競技！？俺の精神をぶっ壊す為に作られたのか！？
だったらもう十分だ！もうズタボロだ！
縄を持って天使のような笑顔で聞いてくる憂。

「前と後ろ、どっちがいい？」

憂さん……。

今話すべきに内容はソコではないと思うのですが……。
しっかり者でも、やっぱり唯先輩の妹だ。
俺は密かに再認識する。

「仁君、急がないと！」

「え？」

前を見ると、確かに結構他の組との差が開いてしまっている。
確かにマズイ。恥ずかしがってる場合じゃないな。

「んじゃ、前で」

「了解」

またもクスクス笑いの渦が巻き起こる。

うるせえやめろお！俺だって恥ずかしいんだよお！

高一にもなって女子と電車ごっこ……。

真後ろで走る憂は、何故か終始楽しそうなオーラがある。背中で感じる。

走りながら俺は聞く。

「なんか楽しそうだな」

「え？ああ。昔お姉ちゃんと、よくこうして遊んだなあって」

「昔の思い出に浸るのはいいけど、割と離されてるからペース上げるよ？」

「了解っ！」

そこからはピッチを上げて走り、最後の障害に到達。

俺の人生最後の電車ごっこは大勢のクスクス笑いと共に幕を閉じた。先生の指令を見る。

『地面に落ちている紙の指令に従ってね』

なるほど……っか、あと一枚しかないな……。ま、ビリだし、仕方が無い。さて、どんな指令だろうか……。

『一人がもう一人をおぶって走れ』

もうヤダ俺！もう帰る！！

駄目だよこれは！コレばかりは駄目！！

考えてみれば、コレが一番マトモな指令なんだけど……。

俺らの組の特殊な状況下では、一番危険な指令だ。

「どっちがおんぶする？」

ええっ！？やる気だよこの人！？

っか、どっちがっ……。。

「いや、俺がおぶるに決まってるじゃん。でも……うーん……」

俺が考えてる内に、見る見る差は広がってゆく。
憂が話しかけてくる。

「大変！もうこんなに差が開いてるよ！」

尚も俺は考える。

そんな俺の態度を見て、憂が一言。

「やっぱり私をおんぶするなんて……嫌かな？」

……。

ちつくしよおおおおお！！！！！！！！！！

俺は全てをかなぐり捨てて走った。恥も。プライドも。世間体も。

結果、奇跡の大逆転勝利で、俺達ペアはそのレースの一位となった。

……っ、疲れた……！！

心が。

第十四話 災難はまとめてやって来やがる。(後書き)

仁「おい」

おお「何？」

仁「たかがお前のオリジナルストーリーに二話も使ってるじゃねえよ！一話にまとめろ！」

おお「しょーがないだろっ！書きたいことが沢山あったんだよ！」

仁「あげくの果てに、俺をこんな目に合わせやがって……クソッ」

おお「俺からしたら羨ましいけどな」

仁「周りの視線が痛いの!!」

第十五話 たとえ駄目だったとしても、ホンキでやったんなら大丈夫。

（前書き

今回の話……ありきたりっつーか、クサイ話っつーかで……。

なんか書いてて恥ずかしかったです。

もっと爽やかに、オリジナリテイのある話を書きたい。

第十五話 たとえ駄目だったとしても、ホンキでやったんなら大丈夫。

昼食の時間になると、生徒達は一旦校舎内に引っ込む。
飯を食ったり、体を休めたり……。
束の間の休息つてヤツだな。カツコよく言つと。
ちなみに今現在、俺は……。

「少し染みるけど、我慢してね」

「い、痛いっ！染みるっうっう……」

保健室で手当てを受けていた。

俺は綱取り合戦で、背中一面に傷を負っていた。仰向けで引きずられたからなあ……。
ケガつてさ、気付かない内はホント何も感じないけど、気付いた途端に痛み出すよね。
大に背中をポソツて叩かれて、ようやく気が付いたんだ。
純が言つ。

「あらら。お風呂大変そうだねえ……」

付き添いにいつもの四人が来てくれてたんだよね。
別にいいって言ったのに。
大が言つた。

「傷の事忘れて、タオルでゴシツてやつたりすんなよ？」

「ああ、痛いよね、それ！仁君気をつけなよ？」

「大丈夫だよ梓。そんなへマは……って痛いっ！」

「これで大丈夫よ」

保険の先生が消毒を終えた事を伝える。

後ろ向きのままで俺はお礼を言う。

「ありがとうございました」

「ふふっ。午後も、頑張つてね！」

保険の先生が背中をポンツと叩いたので、俺はまた悲鳴を上げた。

保健室を後にし、教室へと戻る途中で……。

「あっ！あずにゃん！仁君！」

先輩達を発見。

大を覗く四人が挨拶。

「……こんにちは」「……」

「じーんー。見てたぞー。さっきの」

「うっ。是非忘れてください……」

早速律先輩がからかってきた。

「いんや〜。面白かったなあ〜」

「写真に取っておいたよ!」

「いつの間につ!」

濤先輩のツツコミを受けつつ、唯先輩が携帯を取り出して、その写真を見せる。

俺と憂が電車ごっこをしてる写真だ。

「やめてええ!削除してええ!」

「えー、いいじゃん。可愛いよー憂も仁君も」

「可愛い?俺が!??どこをどう見たらそのような感想が出てくるんですか!」

「この引き攣った顔が!」

唯先輩は携帯の画面を俺の目の前まで近づける。
うっ。すっげえ顔。

入試の面接の時だって、こんな顔はしてなかったろうな。
梓が言う。

「唯先輩。後でその写真、私に送ってください」

「梓アア!?何言ってるのさ!」

「あ!私も!」

そんなこんなで、いつぞやの様に俺の写真が皆にばら撒かれてゆく……。
ん？イヤ、今回ばら撒かれてるのは俺だけじゃない。きっと憂だつて……。

「お姉ちゃん。私にも送ってね」

「オイ当事者！！！！」

「おかしい……」。

「最近たまに思うけど、皆おかしいよ……」。

「ここで唯先輩は、視線を俺の後方にやる。」

「わ！おつきいねえ！」

「そっか！大の事忘れてた！スマン！」

「俺は慌てて大の紹介を始める。」

「えっと、同じクラスで、友達の……」

「瀬川です。瀬川大」

「大がペコツと頭を下げる。」

「律先輩が言う。」

「うっは、瀬川君でかいなあ……何センチあんの？」

「えっと、百八十六センチ……です」

「えっ！？そんな身長あつたん？」

「おお」

少し考えて、俺は一言。

「六センチくらい分けてくんない？」

「お前にそれが出来るんなら、ご自由にどうぞ」

とびっきりの笑顔で大は言った。

なんて優しい奴なんだ。ようし。今すぐ緊急手術を開こう。

「オペ室へGO！」

「なんか話を色々すつとばして考えてない!？」

唯先輩は言う。

「そつだ!じゃあ私も仁君達に、友達を紹介してあげよう!」

ちよつと待っててね〜と行って、廊下を駆けていく唯先輩。

待つ事二分弱。

「おつまたせ〜」

「ちよ、ちよつと唯!？」

手を振りながらコチラへ向かってくる唯先輩の後ろに、誰かがついてる。

イヤ、唯先輩に引つ張られてるんだな。あれは。

「皆紹介するね。私の幼馴染で、真鍋和ちゃん」

真鍋さんと呼ばれた人は、突然の紹介に驚きつつも、俺達にペコッと頭を下げて、挨拶。

「真鍋和です。唯とは、幼稚園からの付き合いです」

真鍋和さん。

短めの茶髪で、太枠の赤い眼鏡。フチは下にしかついていない。喋り方から察するに、落ち着いた性格と見た。

真面目な人ってカンジ。大人。

俺達五人も、それぞれ自己紹介をする。

俺が最後に紹介した後に、真鍋さんは言った。

「あなたが梓ちゃんと仁君ね。唯から話は聞いてるわ」

梓は聞いた。

「へえ。唯先輩は、なんて言っていました？」

「軽音部に、とっても可愛い後輩が二人も入ってきてくれたって」

「ちよっ！今の言葉に疑問点が一つ！！」

さつきからだけど、可愛いってなんだ！？

せめてカッコイイって言ってくれ！

……イヤ！それも困るな！カッコイイと心の中で思っていてくれ！

俺の知り合いメモリーにまた一名、人が追加され、昼休みは終わった。

運動会は再開。プログラムは午後の部に入る。

まず、全軍がエール交換を行う。

その後、全員参加の軍団対抗綱引きだ。

我が白軍は、三勝一敗で二位に終わる。

続いて、二人三脚。

先ほどの障害物走もそうだったけど、二人三脚でも当然、俺のパートナーは女性である。

二人三脚つっののは、二人の体格差があるとそれだけ不利になる。俺が身長そこまで高くなって、よかったよ。

俺のパートナーは、クラスで最も背の高い山本佳代子さん。

ハッキリ言って、俺より断然高い。野球ボール一つ半くらいの差がある。

その上、彼女は柔道部に所属するバリツバリのスポーツマンで、運動神経は学年トップだ。

ま、とは言っても所詮は女性。

いくら俺が運動神経普通だからとは言っても、やっぱり少しはスピードを緩めてあげないとな。

こういうのは、出来る人間が合わせてやるべきなんだよ。

「山本さん、頑張ろうね」

「三浦！よろしくっ！」

俺と山本さんはガツチリ握手を交わす。

予想以上に力が強くて、握られた手が痛くて、内心めっちゃ焦った
というのはいここだけの秘密。

俺は心に若干の不安を抱えながらも、山本さんと片足ずつ紐で結ん
で、準備を整える。

山本さんは聞いてくる。

「最初は、どっちの足から？」

「んじゃ、結んでる足から行きましようか。掛け声とかはいる？」

「んー。んじゃ一応やろうか。普通に一、二でいいんじゃない？」

「おっけ。了解」

作戦会議が終了。俺達は他の組と共にスタートの位置へ。

「位置について……ようい……ドン！」

スタートの空砲と共に、一斉に飛び出す皆。

とはいうものの、やはり上手く走れないところもあるみたいで、既
に転んだ組もあるみたいだ。

……つーか山本さん速っ！？

ちよっ。待つて！マジで！足が追いつかない！

走りながら俺は山本さんに呼びかける。

「ちよ、ちよっと、ペース速すぎない？もちっと緩めようよ」

「一、二！一、二！」

き、聞いてねえ……。

尚もスピードを上げ続ける山本さん。

既に俺は、山本さんに引つ張られるような形になっていた。
すんげー力！俺の脚、最早俺の意思では動いてねえ！

「三浦！遅い！」

「はいっ！すいませえん！！」

レース前の余裕を若干後悔しながら、俺達はブッチギリでゴールテープを切った。

応援席に戻ると、残っていた団員が俺達を迎えてくれた。

「凄いねッ！山本さん！」

「すごく速かったね！」

「カヨ！さっすがあ〜！」

何故だろう。俺に対する賞賛の言葉が一つも見当たらないのだが。

俺が自分の席へと戻ると、そこには必死に笑いを堪えている梓、憂、純、の姿が。

クソッ。どいつもこいつも。

今のレースでの、俺の役割の重要性を理解してないな。

大が俺の肩を、ポンッと優しく叩いた。

……ようやく……全てが終わる。

残りの競技は二学年クラス対抗リレーと、軍団対抗リレー。
つまり、これから行われるクラスリレーを終えれば、本日の俺の仕事は終わりってワケ。

しかし、これから合計三百メートルを全力疾走するんだよね。
そろそろ俺の体力的に限界がきそつだ。出来れば手を抜きたいんだけども……。

「三浦君！頑張って！」

「気合入れる三浦ー！」

「お前なら出来るぞ！」

……そういうワケにはいかないよな。

こんなに期待かけられてんもん。負けらんねえ。やってやる。

体育座りで順番を待つ梓が声をかけてくる。

「仁君がんばっ！」

俺はニツと笑って頷いた。

第一走者がスタートラインに立つ。

俺の他の男子は……博也だけか。よし。

しゃがんで靴の紐を確認。もう一度、強く結び直す。ついでに、ハチマキも結び直した。

先生から白いバトンを渡される。

そこで、ラインの上にしゃがみ込み、クラウチングスタートの姿勢をとる。

「位置について……よい……」

空砲の音と共に五人が飛び出す。

同時に沸き起こる大声援。すっげ緊張する。足がもつれない様にないと。

スタートダッシュには中々成功。コースの内側をキープだ！
すぐ後ろに博也の足音が迫ってるけど……抜かせるワケにやいかな。

俺はそのままトップで第二走者にバトンを渡す。
走り終わって歩きながら、博也が話しかけてきた。

「仁、お前あんなに足速かったっけ？」

「いや、ちょっと今日は色々懸かってるからね」

「何？大と賭けでもしたん？」

「違うよ……。うん、もつと別のもんだよ」

中盤にやってきた俺の二回目の百メートルでは、二名の女子を抜き去ってバトンパス。

中々順調だ。現在我が二組はトップを走っている。
既に走り終えた純と梓が話しかけてくる。

「おつかれっ仁君」

純が言った。

「お疲れって……まだ一回走るんだぜ、気は抜けない」

「まあ、少し体を休めてさ、あつ！次、憂の番じゃない？」

コースの向こう側を見ると、確かに今憂がバトンを受け取ったところだった。

そこらじゅうから聞こえる声援。

「加奈ーっ！ガンバーッ！！」

「いいぞ！抜けえっ！」

「フアイトっ裕子っ！！」

「陽介頼んだぞおお！！」

負けじと叫ぶ梓と純。

「憂ーっ！！」

憂はしっかりと順位をキープして走り終えた。

その後は、抜きつ抜かれつ。

ウチのクラスの順位もよく変動し、ビリになったり再び一位に躍り出たり。

現在はウチが二位。一位は四組。

このニクラスと残りの三クラスとの間には、結構な差が出来ていた。つまり、ほとんど二組対四組という事になってしまったワケ。

俺はアンカーでもある。

出来るなら、なるべく競争はしたくない。ラク〜に走り切りたいと思ってたのに……。

神様って残酷。俺のここの一番での弱さを知ってるのかな？

俺の二人前のランナーである小野田さんがバトンをもらって駆け出す。

少し待って、俺は各クラスのアンカー達と共に、コースへと出る。

見ると、小野田さんが四組のランナーを抜き去り、一位でバトンをパスしていた。

うっげ。ものっそいプレッシャーなんだけども。

四組のアンカー、直樹は言った。

「仁。悪いけど、手加減はしないぜ」

俺は黙って俯く。

「仁、直樹、ガンバレ」

「俺達は無理っばいな」

「転ぶなよお？」

残る三人がそれぞれ激励の言葉をかけてくれる。

俺がコースの一番内側、直樹がその隣に立ち、来たるべき時を待つ。

ヤバイ。緊張なんてもんじゃない。

こんなに暑いのに、歯がガチガチいつてやがる。

クッソ！落ち着け！！

前のランナーがやってくる。俺はそれを見つめながら、軽く走り出す。

周囲の大歓声の中、自分の鼓動が聞こえる。スツゲ早い。

そろそろ。

俺は前を向いた。後ろから声がする。

「はいっ！」

後ろに伸ばした左手に、しっかりとバトンが渡された。

よしっ！行くぜええ！！

俺は両足に力を込め、一気に加速。

殆ど同時に、隣で直樹がバトンを受け取っているのが見えた。俺達の差は……無い。

俺はガチガチにならないくらいに、だけど全力で両手足に力を込める。

肘をしっかりと後ろまで引く。足をもっと遠くまで伸ばす。腿を上げる。

リズムよく。呼吸に合わせて。あんまし飛び跳ねないように若干の前傾姿勢を保ちながら。

しかし、やっぱり直樹は早い。

俺を抜かす為外側を走ってるくせに、徐々に距離を詰めてきやがる。流石だわ。

でも、今日ばかりは俺だって負けらんねえ。ゴールまで、あとちよつとなんだ！！

腕振れ！足上げる！歯あ食いしばれ！

もっ！もっ！と速く！！

横目に見えた直樹の姿は、俺の横に並び、そして……。

俺はゴールラインを踏んだ。

直樹の背中を見つめながら。

「みんな、今日は一日よく頑張ってくれました！ホントにありがとうございます！」

団長が涙で顔をクシャクシャにしながらも、明るい笑顔で言い切った。

周りから沸き起こる拍手と歓声。

「皆の頑張りのお陰で……優勝する事が出来ました！」

ここでまた拍手と歓声。

そう。我が白軍は、今年度の体育祭において、競技の部、応援の部において、見事一位を獲得。

そして、総合優勝した際に送られる優勝旗も、ウチの軍へと授与された。

皆のテンションはマックス。只一人、俺を除いて。

原因は分かりきってる。

さっきのクラスリレーだ。

俺のせいで負けた。俺のせいで。俺が、もっと真面目に練習すれば、もしかしたら……。

後悔ばかりが、俺の心を埋め尽くす。

皆の顔を見れない。目を合わせられない。今すぐ逃げ帰りたい。

その後、生徒は再び教室へ戻る。

担任からの話を一つ二つ聞いて、体育祭の後片付けに入る。

「皆、素晴らしかったぞ。チームの為に頑張ると言う事は……」

先生が何か話をしてるけど、俺の耳には入ってこない。

俺はポーツと外を眺めている。

口には出さないけど、内心俺への不満が溜まってるんだろうな……。今まで頑張ってきて、後ちよつとで勝てたのに……。ってさ。

俺がそんな事を考えてると、大が振り向いて、俺の肩をトントンと叩いた。

大の方を向く。すると大は、俺の机によく授業中に回されるような小さいサイズの手紙を置いた。

一気に五通も。

なんでこんなに多いんだ？

俺が戸惑っていると、隣の席からも手紙が……。十通。

その後も俺の元には手紙が届けられる。

その枚数、実に三十九枚。

恐る恐る中を開く俺。中身は……。

『三浦君、ドンマイ！』

『気にしないでよ。謝るべきはこっちの方だから』

『元気出せ？なっ』

『カツコよかったよ！三浦君！』

『今日は楽しかった！！』

な……。んだ……。コレ。

そこに書かれてたのは、クラスの皆からのあつたかい言葉。決して口先だけじゃない、心からの言葉。

それがこの手紙達にこめられていた。

俺はハッと前を向く。

視界に飛び込んで来たのは……。

自分の席から俺を見つめる、三十九人の顔。

皆は一斉にニカッって笑った。

……皆……いー奴等だな……。

俺は、先ほど心に浮かんだ事を恥じる。

滲む視界を押さえ付けながら、俺もニカッと笑った。

第十五話 たとえ駄目だったとしても、ホンキでやったんなら大丈夫。

（後書き

おお「こんなカンジになっちゃいました」

仁「なんか読んでつと、鳥肌が立つんだけど」

おお「感動して!?!」

仁「いんや、背筋がゾワワツてる方の」

おお「俺だってな!もつと爽やかに書きたかったさ!でも……」

仁「お前の小さい脳みそじゃ、いくら絞っても出てこないよ」

おお「む……自分で言おうとしたセリフでも、人に言われっとムカ
ツク」

第十六話 物を大切にする。その心掛けが大事なんだ。(前書き)

アニメ一期十一話、「ピンチ！」に入りました。

第十六話 物を大切にする。その心掛けが大事なんだ。

時間が流れるのは早いモンで、季節は既に春夏秋冬の三番目。気温も、半袖で過ごしていると、若干肌寒さを感じる程度のレベルまで下がった。

制服も夏使用から冬使用になり、俺は再びブレザーと対面する事となった。

そんなある日の放課後。

俺は昨日買ったばかりの小説読みながら、まったりと紬先輩の紅茶とクッキーを味わっていた。

いつも通りの時間。

だけど今日は……。

「なんかゴキゲンだな。梓」

「えっ？」

律先輩に言われて声を漏らす梓。

律先輩の言うとおり、今日の梓はどことなく気分が良さそうだ。今の今まで、鼻歌でふわふわ時間を歌ってたし。

梓は少し笑って答えた。

「もうすぐ学祭でライブが出来ると思うと、嬉しくて」

あー。そーかあ……。もうそんな時期になるんだな。

梓と俺にとって、初めてのライブ。

うっ。考えただけなのに、心拍数が上がってきた。

学園祭までに、もちっとメンタルを強くしないと。

俺が考えてると、斜め前に座る漣先輩が、凄い勢いで紅茶を噴出した。

何？何があったの？

漣先輩が言う。

「ああ。漣は去年、大活躍だったもんさ」

なんだ？去年の学祭の事か？

大活躍って、なんか凄い事でもやったのかな？

でも、あの恥ずかしがり屋の漣先輩が……。

すると、山中先生が言った。

「去年の学園祭のライブなら、ちゃんと撮ってあるわよ」

へえ。

去年の学祭かあーっ。

「わあ、見たいです見たいです！」

梓が言ったので、俺も、

「あつ。俺も見たいです」

と言った。

すると、漣先輩が俺の肩をガツと掴んだ。

ものっそい力だ。

漣先輩は言った。

「やめとけ、仁。呪われるぞ……」

「やめときます」

キツパリと言い放つ俺。

違うよ？別に怖くなんかないからね？

俺、過去は振り返らない主義だからさ。

その後、録画してあった去年のライブを見た梓は、顔を真っ赤にしていた。

……何故？

その後も、去年のライブの鑑賞会が続く。

俺は椅子に座ってっから、よく見えないけど。

……つか、呪われるんじゃないの？

漣先輩、騙したな。

テーブルの向こうで、律先輩が梓の肩に手を回しながら言った。

「梓と仁にとっちゃ、軽音部として初ライブだな」

「はい！」

梓が俺の方を見て言った。

「頑張ろうね！仁君！」

「ん？おう！」

俺が言った瞬間に、音楽室の扉が開く。

「盛り上がってるそこ、悪いんだけど」

真鍋さんだ。

手には何か用紙を持っている。

澪先輩が言った。

「おお。和。どうしたの？」

「どうしたのじゃないのよ」

真鍋さんは律先輩に、持っていた紙を渡しながら言う。

……何の紙だろう？

梓が読み上げてくれる。

「講堂使用届……」

「そ。学祭の分。出してないでしょ」

ええっ！マズインじゃないっすかソレ！！

律先輩の隣で、梓も俺と同様の反応をとる。

「ああ。忘れてた」

「「そんな呑気な！」」

「おおっ。綺麗にそろったね〜！」

俺と梓が放った律先輩へのツッコミは、タイミング、言語選択共に完全に同じだった。

難しく言ってみたけど、簡単に言うと、ハモりました。それに対して感嘆の声を上げる唯先輩。

「いつやあ。忙しくってねえ」

悪びれる様子もなく、言い訳をし始めた律先輩に対し……。

「去年もこんな事あったな」

俺の後ろから阿修羅の如き禍々しいオーラと共に、地の底から湧き出てきたような言葉が……。

それは、俺の横を通って、ゆっくりと律先輩の下へ向かう……。そのことには気付かない様子で言う律先輩。

「ああ〜あれは、部活申請……」

部室内に、漣先輩の鉄拳が律先輩の頭にめり込む音が響いた。

「あ〜じゃあ梓、書記な」

「えっ？私？まあ、良いですけど……」

そう言って、使用届に記入を開始する梓。

「えっと……使用者は軽音部……」

ここでいきなり梓の手が止まる。

「あの、名称って……」

「バンド名でいいんじゃない？」

梓の問いに律先輩が答える。

頷いて、再びペンを握りなおす梓。

しかし、梓は再び顔を上げて言った。

「そういえば、バンド名ってなんでしたっけ？」

梓の問いに、一斉に答える唯先輩と律先輩と透先輩。

「「「*? & # @ 「「「

ゴメン、全然聞き取れんかった。

つか、今の聞き取るなんて、聖徳太子でもなきや無理なんじゃないか？

紬先輩が言う。

「決めてなかったね」

「いい機会だから、決めるか！」

律先輩の言葉を皮切りに、皆が思い思いのバンド名を上げていく。

「平沢唯と、ずっこけシスターズってどう？」

「それだと、俺入ってませんよね」

「大丈夫よお。アタシに任せれば！」

「俺に何をさせる気ですか！」

山中先生に任せてたら、俺はそのうち社会的に死んでしまう気がする。

漣先輩が言う。

「ぴゅあぴゅあとかどうかな？」

「もうネタはいいから、真面目に考えようぜ」

「ううっ。割とホンキなのに……」

「ホンキだったんかい！」

「ホラ。人のセンスは色々ですから」

律先輩の言葉に、分かりやすく落ち込む漣先輩。それに対して、すかさず律先輩と梓が言った。

ここで会話の流れが一旦止まる。

会話の狭間の沈黙……。若干居心地が悪い。

……！そーだ！

今俺、物凄いバンド名思いついってしまった！コレは……ヤバイぞ。マジヤバイ。

自信満々。俺は言った。

「音で地球を救い隊……なんてどうですか？」

再び一瞬の沈黙……そして……。

「いや、中々決まらないもんだな。」

「え？スルー？スルーですか律先輩！？」

俺は他の五人の目を見つめるけど、誰一人俺と目を合わせてくれない。

おかしいな。良い名前だと思ったのに。

世間はまだ俺に追いついていないらしいな。

「ようし！分かった！」

突然山中先生が言った。

……何だ？

「私が決める！」

「……もう少し皆で考えよう」「……」

団結した……。

見かねた真鍋さんは言った。

「じゃあ書類。後で生徒会室に持ってきてね」

「あ！和！悪いな。待たせちゃって」

「……」

澁先輩の言葉に、笑顔で返す真鍋さん。
うっん。大人な人だなあ……。
立場的には、コッチが悪いはずなんだけどな。

その後、唯先輩と真鍋さんは帰りにお茶の約束を取り付けてた。
そーいや、この二人って幼馴染なんだよな。
よくぞまあこの二人が仲良くなったなあ。全然タイプが違うと思っ
ただけど。

あ！でも、人つてのは、自分に無い物を求める習性があるから、そ
ういう意味じゃ、二人はピッタリなのかも。

結局バンド名は各自それぞれ考えてくる事になり、練習する事に。
学園祭も近いし、気合入れないと！
皆が立ち上がろうとしたその時、唯先輩が言った。

「あ！そだ。なんか最近、音の調子悪くて……」

ん？唯先輩、ギターが不調なのかしら。
それは困ったな。学祭も近いのに。

「え？ちよつと見せてもらえますか？」

梓が言うと、唯先輩は自分のギターケースを長椅子のトコロに持っ
てきた。

そこを皆で囲むようにして覗き見る。

ケースを開け、唯先輩のギターを取り出して梓は言った。

「うわっ。弦錆びてるじゃないですか」

俺もその問題のギターを見る。

うん。一目でかなり汚れていると見えた。

駄目だな。唯先輩。手入れはきちんと交換しないと。

俺だって、毎日綺麗に磨いてるんだぜ。お陰で表面はピツカピツカさ。しかし、次に梓の放った一言が、余裕だった俺を動揺させる。

「これ、いつ弦を交換したんですか？」

「え？弦って交換するものなの？」

……まずった。心の虚を突かれたせいで、口から勝手に言葉が飛び出す。

驚いたような目で俺と唯先輩を見る四人の視線が痛い。

梓は振り返って、俺の方を向く。

「仁君……？ギター持ってきて」

「え？ああ～いやあ～その」

梓は俺の肩に手を置く。

おかしいなあ。梓ってこんなに力が強かったんだっけ？

今肩から「ミシッ」っていう不吉な音が聞こえた気がしたんだけど。透先輩といい梓といい、近頃の女性は握力が強くていらっしやる。

もう一度、強い口調で梓は言う。

「持ってきて」

「はい………すみません………」

俺は命令に従順に従い、俺のギターをここに持ってくる。

梓は俺のギターを見て、さっきと同じ事を言った。

「弦、錆びてるね……」

「ごめんなさい……」

俺は床に正座をして言う。

だって、なんか怖いんだもん。

梓の背中から沸き起こるオーラが。

「てゆうーか二人とも……」

なんだ？また何か始まるのか？もうカンベンしてえ！俺が悪かったあ！

「ネックも反ってるし、これじゃオクターブチューニングもめっちゃくちやですよ！」

……梓……ごめん。ホントゴメン。

怒ってるのは分かったから、せめて日本語で話してくれ。さっぱり理解できん。

見上げると、唯先輩もまったく今の説明を理解できていないようだった。親近感。

澁先輩が言う。

「落ち着け梓！今の二人には到底理解出来ない！」

仰る通りです。澁先輩。

梓は少し悩んで言う。

「つまり……大事にしないと駄目じゃないですか。いいギターなの

に」

「はっ！大事にしてるもん！」

唯先輩は、今の梓の一言で言いたいこと全てを理解したみたい。そうだよな。唯先輩、なんだかんだでギター大切にしてるもんな。

「一緒に寝たりとか、服着せたりとか……」

うん。大切にする方向性を、思っくそ間違えてるね。

やっぱり唯先輩は唯先輩だった。

唯先輩が、俺に言う。

「仁もだぞ」

「大事にはしてるつもりなんですけど……」

「まあ、確かにギター本体は綺麗でしたから。少し専門的な知識が足りなかったただけだと思います」

ありがとう梓。そう言ってもらえると、心が落ち着くよ。

唯先輩が言う。

「さわちゃん先生。なんとかしてよ」

「やっぱり、お店に頼んだほうがいいんじゃない？」

……めんどくさいだけだろうな。この人の場合。

笑って誤魔化す山中先生。

梓は言う。

「じゃあ、楽器店に行きましょうか」

「え？そこまでしなくても」

「いいんじゃないかな……？」

「いや、学園祭も近いのに、これじゃ練習になりませんよ」

うーん。仕方ない……か。

唯先輩は少し悩んで言った。

「りっちゃんもお手入れなんかしてないよね？」

「しとるわ」

「ええっ!？」

俺は手でパツと口を押さえるけど……時既に遅し。

俺の口から出た言葉はしつかりと空気を揺らし、律先輩の鼓膜まで届いてるだろう。

なんだか俺、今日は口が軽いなあ……。

すかさず俺にヘッドロックをかける律先輩。

ちよっ！痛い痛い！手加減ブリーズ！！

俺の頭を締め上げながら律先輩は言う。

「私はしてなくても当たり前。みたいな言い方するな」

唯先輩は口を尖らせて言った。

「りっちゃんのクセに……」

俺の頭蓋骨を圧迫していた力がフツと消える。

ほっ。よかった、標的が移った。

ありがとうございます唯先輩。先輩の犠牲、僕は一生忘れません。

第十六話 物を大切にする。その心掛けが大事なんだ。(後書き)

おお「活動報告にも書きましたが、これから更新のペースは遅くなると思います」

仁「コイツが頭悪いからです。すいません」

おお「くっそ……見てろよ。絶対せーせき上げてやる！」

仁「でもお前、長続きしないからな」

おお「……………」

第十七話 事件は小さなキツカケから。

結局山中先生の言ったとおり、俺と唯先輩のギター達は楽器店で修理してもらうことに。

お馴染みの店。紬先輩んちの系列。

早速店内へ入ろうとした所、漣先輩が言った。

「じゃあ、私ここで待ってるから……」

「え？なんでですか？」

梓が聞く。

漣先輩は遠い目をして言った。

「私左利きだから……右利き用の楽器見ても悲しくなるだけだし……」

ああ。なるほど。

確かにこういうのって殆ど右利き用しかないよな。

野球のグローブも然り、だ。

律先輩が言う。

「でもホラ、なんかレフティフェアやってるよ？」

「えっ？」

その言葉を言うと同時に、ものっそいスピードで漣先輩は店内へ。なんて切り替えの早さ。脱帽です！

中に入ると、律先輩の言った通り、レフティモデルのギターがズラ

ツと並んでいた。

漣先輩は顔中に喜びと恍惚の表情を浮かべて言った。

「店員さん！ここにあって、全部下さい！！」

おおっ。テンションMAXですねえ。

あんな漣先輩、中々見られんぞ。写真を……あーっ！そーだった！今日携帯家に忘れてきたんだった！！
軽い失望感に襲われる俺の隣に立っていた唯先輩は言う。

「漣ちゃん、楽しそう」

「左利き用は少ないですからね」

「二人とも、先行ってましようか？」

梓の言葉に、俺と唯先輩は頷く。

律先輩と紬先輩にその事を伝えて、俺達三人はレジカウンターの方へ。

梓が店員さんと呼ぶと、眼鏡をかけた男性店員さんがやってきた。

「ギターの調整をしてもらいたいですけど」

「はい。どちらのですか？」

俺と唯先輩は、ギターケースを店員さんに差し出した。

「では、ちょっと見せてもらいますね」

そういって店員さんはギターケースを開いた。

中にあるギターを見た瞬間、店員さんの顔が強張る。

「あの……これ、ヴィンテージギターですか？」

いやあ……。お恥ずかしいばかりで……。
梓も恥ずかしそうに言った。

「スイマセン……ただ汚いだけです」

ゴメン梓。

こんな思いをさせちゃって。

梓に対する申し訳なさが募る中、唯先輩は元気よく言った。

「まだ買って一年です！」

くらくら。

そんなこんなで、二つのギターはカウンターの奥へと運ばれ、店員さんによる修理が施される。

その様子をジッと見つめる唯先輩。

おっ。たった今唯先輩のギターの弦が……。

パン、という軽い音を響かせ、ギターの弦が途中でぶち切られる。

唯先輩は言う。

「あああ。私のギターが裸にされてゆく……」

「何言ってるんですか……」

「上手い例えですね」

「何言ってるの仁君」

あれ？何故か矛先が俺の方に。
梓は唯先輩に言った。

「そつだ。前から聞いたかつたんですけど、なんで唯先輩はそのギター買ったんですか？」

「え？」

「ホラ、重いし、ネックは太いし、癖があるじゃないですか」

うん。確かにそう思うな。

ネックがどーたらつてのはよく分からんけど、唯先輩のギターが重いつつーのはなんとなく分かる。

梓のギターと比べると、その差は歴然だ。女性には少し厳しいんじゃないかと思う。

そんな疑問を一気に吹き飛ばす答えを、唯先輩は持っていた。

「え？だって、可愛いから」

「……可愛い？」

流石に戸惑ったような顔の梓。

うーん……可愛い……のか？

まあ見ようによっちゃそうも見えなくは無いですけども……。

あーでも確かに。じつと見てたらだんだん……あの色合いが……
ほんわかしてて……。

……可愛いな。

「分かるような気がします」

「でしょ〜」

「二人の感覚が分からない……」

梓はそう呟くと、俺に聞いてきた。

「じゃあ仁君は？なんであのギター選んだの？」

え？俺か？俺はな……。

俺は五月にこのギターと出会った時の事を思い出す。
なんでこのギターにしたんだっけ……確か一目見て……。あ、分か
った。

「かつこいい……から……」

「分かるよ仁君！あのギターは、なんか大人のかっこよさがあるよ
ね！」

同調してくれる唯先輩。

ですよね！かつこいいですよね！渋いっすよね！！

梓はあははと苦笑いをした。

修理には時間がかかりそうなので、俺たちは一旦カウンターから離
れて律先輩達の元へ。

「お待たせしましたー」

梓が律先輩と紬先輩に声を掛ける。

「メンテナンス頼んで来ました」

「おつかれっ」

……あれ？

ここで俺の中に一つの疑問が浮かぶ。
俺はそれを口に出した。

「あれ？ 澁先輩は？」

「ああ、澁ちゃんならまだ……」 紬お嬢様！

紬先輩の言葉は、どこかから飛んできた言葉で遮られる。
言葉を発した正体は、この店の店員さん。

「いらっしやいませ、お嬢様！」

「あ、どうも……」

「これは紬お嬢様！」

次々と店員さん達がやってきて、紬先輩に挨拶。

おおっ。店員総出のご挨拶か。

唯先輩が言う。

「びっくりするんだよね。あの呼び方」

「なんだか変な感じするよな」

「俺も絢お嬢様って呼んだほうがいいんでしょうか……」

「その必要は無いと思うけど……」

「でも、絢先輩って凄いいお嬢様じゃないですか。もしなんか変な事でも言ったら……」

俺の頭の中を恐ろしい妄想が支配する。

ヤバイ。マジヤバイ。

今度から絢先輩の前に立つ時は、きちんとした正装しないと。ああっ！礼儀作法も勉強しないと！

「お辞儀の角度って九十五度でいいんですってっけ？」

「仁。何考えてるか知らんが、絶対に大丈夫だぞ。あと、九十五度は曲げすぎだ」

律先輩が言う。

何を言ってるんですか！体格の良い黒スーツサンガラス軍団に囲まれてから後悔しても遅いですよ！？

俺が心の底から律先輩の身を心配していたその時。

「お待たせしました」

呼ばれて振り返ると、さっきの店員さんが俺と唯先輩のギターを持って立っていた。

二つのギターは完璧に修復され、新品同様の輝きを放っていた。

「わあ〜っ!」

「綺麗になったな!」

「これからはこまめにメンテナンスをして……」

「ギー太っ!!」

梓が言い終わらないうちに、唯先輩は店員さんから自分のギターをひったくって、しっかりと自分の胸に抱きしめた。

……っか、名前付けてたんですね……。

ギー太に頬擦りをしている唯先輩を横目で見つつ、俺も自分のギターを店員さんから受け取る。

おかえんなさい。綺麗になったな。これからはちゃんと手入れするから、許してね。

「ありがとうございましたあ!」

目に涙を浮かべながら、唯先輩は店員さんにお礼を言う。

「い、いえ。では、お代のほう、お二人合わせて一万円になります」

うーむ。一人頭五千円か。ちょっと厳しいけど、こればっかしは文句は言わん。

俺は鞆から財布を取り出して、確かその中に入っていた樋口一葉さんを探す。

そんな時、唯先輩の口から驚きの言葉が!

「え?……お金取るの……?」

唯先輩はポツツリと言った。
戸惑う店員さん。
梓は言う。

「いや、当たり前ですよ」

あれ？つかしいなあ。なんか段々唯先輩の顔色が悪く……まさか。
ぼそりと唯先輩は言う。

「お金無い」

「……ええつつ!!?」「……」

驚く俺等四人。

……そのまさかだったあ!!
律先輩は焦って俺に聞いてきた。

「仁！今いくら持つてる？」

俺は財布の中を確認。

……うーん、駄目だ。

「六千円とちょっとしか持ってないです」

「どっしよ……」

唯先輩が呟いたその時。

「どっししたの？」

紬先輩登場。
梓は言った。

「唯先輩、メンテナンスにお金かかるって知らなかったみたいで……」

「え？そうなの！？どうしよう……手持ちあつたかしら……」

鞆の中をまさぐり始める紬先輩。
すると、後ろに居た店員さんが焦って飛んできた。

「お、お嬢様！……ここは、サービスと言う事で……」

えっ？うそっ、いいの？

「えっ、でも、悪いわ……」

紬先輩はそういつて鞆の中を再び探し始めるが、店員さんはそれを言葉で止める。

ちよっ。どれだけ紬先輩んちって凄いなだよ！？ものすごい店員さん必死だぞ！？

このままだと、ホントに俺達のギターメンテナンスは無料サービスとなっちまいそうだ。

それは……うーん。

俺の心が少しばかり重くなる。

ええい。後々引きずるんだったら！

俺はメンテナンスをしてくれた眼鏡の店員さんを皆に見えない所まで手招きする。

「なんでしょっ?」

ちよつと躊躇。そんで、財布の中身を全部手渡した。
戸惑う店員さん。

「え? いや、でも……いいんでしょうか?」

「それはコッチのセリフですよ」

今月はまだ余裕があるから、こんぐらいの出費はなんとでもなるし
ね。

一騒動もあつたものの、そんなこんなで、この店に来た目的は果た
せたワケだ。

律先輩は言う。

「それじゃ、そろそろ帰りますか」

「「「「はーいつ」「」「」

返事をしたものの、一ツ気になることが。
俺は聞いてみる。

「湊先輩は……?」

「あゝ。呼んでくるわ」

まだあそこに居るみたいだ。

律先輩は澁先輩のもとへ歩いていく。
梓は唯先輩に言った。

「もう、唯先輩！一時はどうなる事かと思ったじゃないですか！」

「ごめんごめん。ムギちゃんも、ホントにごめんね」

「ううん。いいのよ、唯ちゃん」

「細先輩が居たから良かったものの、もし居なかったら今頃俺等店の奥ですよ？」

あははと笑う御三方。

いや、笑いごつちやないんだけども。

ひとしきり笑って、再び梓が口を開いたその時。

「うわっ！」

澁先輩の悲鳴と尻餅の音がそれを遮った。

俺達四人は、律先輩たちの方向を向く。

どうゆう状況なのかはちよつと分からんけど、どうやら律先輩が澁先輩を……引つ張ったのかな？

それで澁先輩は転んだと。

向こうで律先輩がおどけた調子で澁先輩に声をかける。

「なーにやってんだよ？澁ー」

「もういいよっ！」

それを遮って澁先輩は少し強めに声を発する。

なんだろう。いつものふざけた感じとは少し違うような……。突き放すような感じが、澁先輩の言葉の中にはあったような気がする。

その後、澁先輩は再び何かを呟いたような気がしたけど、何を言っただかは俺の耳では判別出来なかった。

でもその瞬間に、二人の間を流れる空気が微妙に変化したのを俺は感じ取った気がした。

ようやく店の外に出る。もう夕方だ。

ズラリと並ぶ様々な店が、ほのかなオレンジ色に染まる。

唯先輩は言った。

「良かったあ〜。ギー太綺麗になって！」

「名前付けてたんだな……それ」

と澁先輩。

「この後どうする？」

と紬先輩。

律先輩は答える。

「よし、お茶でも飲んでくかあ！」

「またお茶ですか……」

俺はおずおずと手を挙げる。

「あの〜……………」

「何？仁」

「お金……………無いんですけど……………」

「え？なんで？」

俺はさっきの事を説明するかしまいかで少し迷う。
すると、唯先輩が言った。

「あ！ごめん。私このあと和ちゃんと約束あるんだあ〜」

「ええ〜っ」

渋い顔をする律先輩。

こらこら。そんな顔しないの。学校で約束してたでしょうが。
その時、澪先輩が言った。

「え？和も来るの？私も行っていい？」

「えっ？」

声を漏らす律先輩。

「あ、そっかあ！澪ちゃん、和ちゃんとおんなじクラスだもんね。
いいよ〜」

「本当？」

「じゃあ、和ちゃんにも連絡するね」

「うん！ありがとー」

楽しみそうに笑う漣先輩。

それを見つめる律先輩の何とも言えない様な微妙な表情。

俺が今まで生きてきて身に着けた能力の一つに、場の空気や人の空気をなんとなく把握する力がある。

人の表情、言葉、仕草とかから、微妙な感情を読み取れるんだ。

今嫌な顔しなかったかな？とか、つまんなそうな顔してんな、話題変えよう。とか。

他人の評価とかを気にする小心者の俺ならではの力だ。

現在の律先輩の表情。先ほどの漣先輩とのやり取り。

嫌な予感が俺の頭の中に浮かぶ。

空を見上げる。

夜の空の深い紺色が、淡いオレンジ色を徐々に侵食して行くのが見えた。

第十七話 事件は小さなキツカケから。(後書き)

おお「更新遅れて申し訳ないです……」

仁「週一で更新するとか言ってたくせに」

おお「わり、塾が予想以上にハードだったから」

仁「あんまし更新しないと、皆さんに見捨てられるぞ」

おお「ああ！待って下さい百円でどうですか？」

仁「小額で釣るな！！」

おお「だってえ……最近金欠で……」

仁「やれやれ……」

おお「もうすぐ冬休みに入るから、そしたらもちっと更新速く出来る……かも」

仁「かもってなんだよ」

おお「ちょっとマジで勉強が……やばくて」

仁「適当に過ごした三年間分のツケが回ってきたんだよ」

おお「うん……言い返せないね」

おお「えっと……そんじゃ、頑張って年が明けるまでにはもう一話あげたいと思ってますので、どうかよろしくお願いします」

第十八話 たまにはちょっと怒りますよ。俺だって。

「あゝ……………」

俺はおずおずと尋ねる。

「なんだ？仁」

律先輩がヒソヒソ声で返答。

「俺達…………何やってるんですか？」

「ん？尾行」

「……………」

現在位置、なんだか小洒落た喫茶店内。
ケーキが非常においしいゆーございます。…………今そんな事はどうでも
いいっちゃどうでもいいんだけど。

楽器店を出た後、去ってゆく濤先輩と唯先輩を背中をじっと見つめて
律先輩は言った。

「尾行っけるぞ」

「…………えっ？……………」

戸惑う俺等三人をよそに、ずんずんと二人の後をついて行く律先輩。
状況がよく飲み込めないような梓と紬先輩。再び嫌な予感に苛まれ

る俺。

俺達はとりあえず律先輩の後を追った。んで、ここへと辿り着いたというワケ。

窓際のテーブルでは、俺と梓と律先輩と紬先輩がメニューで顔を隠しつつ座る。

少し離れたテーブルでは、唯先輩と澁先輩と真鍋さんが楽しげに談笑。

正確に言うと、唯先輩は黙々とケーキを貪り、残る二人が会話をし
てるみたいだ。

律先輩を見る。渋い表情をしておられる。

その視線は、言うまでも無く澁先輩達が座るテーブルへと注がれて
いた。

舌打ちをして言う律先輩。

「なんかいい雰囲気だなあの二人」

「てゆうか、なんでこんなコソコソと……」

「えへへ……なんか探偵さんみたいね」

ごもつともな発言する梓。ちよつとずれている紬先輩。
少し場の雰囲気固まった瞬間。

「よし、突撃」

突然律先輩が席を立て移動を始める。

目的地は……どーやらあのテーブルだな。

「お二人さーん、仲いいつすねー！」

律先輩はそう言うと、漣先輩にタツクルするかののような勢いで、隣に転がり込む。

驚いたような漣先輩の声が聞こえてきた。

「律！？なんでここに？」

「いや〜たまたまねえ〜」

「え？りっちゃん一人？」

「ムギ達はそっちに居るよ〜」

律先輩は言いながら俺達の方を指差す。

「あ！ホントだあー！」

見つかっちゃった。

律先輩は、固まった状態の真鍋さんに話しかける。

「いやあ〜ウチの漣が、いつもお世話になってますう」

「ちよっ、律………」

「何？何かヤなの？」

「いや、そっじゃ無いけど………」

「だったらいいじゃん！」

その後もガンガン話す律先輩。

会話だけ聞いてりゃ、仲良し四人組に聞こえなくも無い。

でも、漂う雰囲気は固い。めっちゃ固い。居心地が悪そうだ、とつても。

一人先ほどと全く変わらぬ表情でケーキを堪能する唯先輩が、酷く浮いて見える。

俺の隣では、梓と紬先輩もなんだか不安そうな表情。

なんとなく……だろうけど、二人もこの異変に気付いたのかもしれない。

律先輩が今抱える感情。それは十中八九嫉妬だと思う。

幼馴染であり、親友の漣先輩が、自分じゃない別の人と仲良さそうにしている。

それを見て心に浮かぶのは、真鍋さんへの嫉妬、妬みそして、不安。もしかして、自分から離れていってしまうんじゃないか。『親友』

から『友人』となってしまうんじゃないだろうか。

そんな感じの事を思っているに違いないハズ。漣先輩が律先輩から離れるわけ無いなんて事、この場の誰もが承知の事実。

でも、そう簡単に気持ちを割り切れないのが人間なわけで。

ごめんなさい。偉そうに語っちゃってたけど、用は二人は喧嘩予備軍なワケだ。

早いトコ何とかしないと……あの二人だけじゃなくて、軽音部の為にも。

でも……俺には……どうしようも無い。

「りっちゃん……アイス溶けちゃうのに……」

紬先輩が、寂しげにポツリと呟いた。

翌日。

四時間目のチャイムを聞いて、大は思いっきり体を伸ばすと、振り返って俺に言った。

「四時間目終了ーっ！仁ー。メシ買いに行こーぜ」

「ん？ああ、おっけ」

椅子から腰を浮かせた瞬間、鞆の中でバイブ音が響いた。

鞆内から携帯を取り出す。律先輩からのメールだ。

『学園祭に向けて、これからは昼休みも練習するぞ！部室に集合！』

ちよっ、急すぎっ。

大が俺に聞いてきた。

「どうした？仁」

「ワリ、大」

俺はそう言いながら、大に携帯の画面を見せる。大がなるほどと頷いていると、梓がやってきた。

「仁君、メール来た？」

「おう」

「……どういう事だろう」

「学祭に向けて、気合入れてくぞってコトじゃない？」

「うん……」

梓は何だか納得のいかない表情。

ま、そりゃそーだろうよ。昨日の一件を目の当たりにしてれば。

購買でパンを買いつつ、俺は急ぎ足で梓と共に音楽室へと向かう。扉を開けると、中に居たのは紬先輩と絶賛お食事中の唯先輩。梓が言う。

「あれ？律先輩と澁先輩は？」

「今りっちゃんが澁ちゃんを呼びに言ってる所だよ」

唯先輩が弁当箱から顔を上げて、梓の質問に答えてくれる。

梓はなるほどと納得していたが俺はある疑問に苛まれる。

何故澁先輩だけ、メールでの連絡でなく、律先輩自身が昼練の事を伝えに行ったのか。

なんとなく答えの予測はつくけど……ね。

直に律先輩が澁先輩を連れてやってきた。

先にやってきた律先輩は満面の笑顔。対して澁先輩はやや渋い顔。

とりあえず、皆楽器の準備をして、練習に備える。

俺もギターをアンプに繋ぐ。

後ろでは、しかめっ面でベースを肩にかける漣先輩。その周りを歩
きながら、一人明るく喋る律先輩。

「いや〜今年の学園祭は、漣、どんな風に盛り上げてくれんのかな
〜っ」

「去年はパンチラだったし〜。今年はへソ出しとかかな〜？」

「あ、それとも〜」

「練習するんだろっ！！」

律先輩の言葉は、漣先輩の怒鳴り声によって遮られる。
とても強めの口調だった。皆二人の方を振り返る。

律先輩はいったん固まった後、またヘラツと笑って言う。

「するよ〜」

「だったら……」

「ていつ！」

突然漣先輩の顔に手をやる律先輩。

漣先輩は軽く声を上げる。

「タツコ焼き〜」

「はあ？」

律先輩は笑顔を崩さず、澁先輩の後ろへ回り込む。そして澁先輩の艶やかな後ろ髪を持ち上げて言った。

「ポニテーっ！」

その後も澁先輩で様々な髪型を作って遊ぶ律先輩。ただ何もせず、二人を見つめる俺たち四人。

「もうっ！なんなんだよ！」

澁先輩は律先輩を振りほどいて、再び強い口調で言う。尚もその貼り付けた様な笑顔を崩さずに言う律先輩。

「あっ！そうそう！オススメの、すっごく怖いホラー映画持ってきたんだけど〜」

「「っ」」

思わずたじろぐ澁先輩と俺。

「も、もう教室戻るぞ！」

「ふーん。戻れば？」

律先輩は澁先輩の方を見もせず、背中を向けたまま言う。明らかに今までとはトーンの違う声。

律先輩は澁先輩の方を向く。その顔には、先ほどの取ってつけたような笑みさえも無い。

「悪かったよ。折角の和との楽しいランチタイムを邪魔してさ」
邪魔という単語に妙にイントネーションを置いて言い放つ律先輩。
その言い方だと、言葉の意味とは全く逆の意味になっちゃうよ。
漣先輩は一度ギリツと歯を食いしばってから怒鳴る。

「そんなコト言っていないだろ!!」

先ほどよりも更に強い口調。

その剣幕に、思わず怯む俺たち四人。

……このままじゃマズイ。何か言おうか?でも何を言う?

俺はさんざん迷った末に紬先輩に向かって言う。

話を振ってスイマセン紬先輩。でもこれしか思いつかなかったんです。

「あの、お茶にしません?なんだか急にそーゆー気分になっちゃったというか……」

「そ、そうね!お茶にしよう?ね?」

紬先輩には俺からの突然のフリにも怯む事無く言ってくれた。
ありがとう紬先輩。でも、二人は未だにらみ合ったまんまだ。
駄目だ!もっと場の雰囲気を変えるような……和ませるような……。
その時、俺の背後からちよつと弱弱しめな声が聞こえてきた。

「み、皆さん!」

背後を振り返ると、そこには……。

「な、仲良く練習しましょううう……」

何故か猫耳を装着した梓が。

こんな時であれなんだけども……。

めっちゃ可愛いと思います。似合ってると思います。そっちの世界に行っちゃいそうになります。

なるほどコレが「あずにゃん」と呼ばれる所以なワケですね。

五つの視線の集中砲火を浴びたあずにゃ……梓。

恥ずかしさを堪えての事だったみたい。お顔が真っ赤。語尾は消え入るようだったし。

固まった場の雰囲気を感じてか、涙目になる梓だけど、その効果は絶大だったよ。

律先輩は呟いた。

「うん。まあ……練習しよっか……」

「うん……やろっか？」

透先輩は、俺たちに向けて軽めに笑みを浮かべながら言った。

グッジョブ、梓。

唯先輩が梓の頭を撫でた。

梓の捨て身の行動でなんとか調和は持ち直したものの、一度崩れた

それは後にも若干の後遺症を残していた。
少し固めの雰囲気の中、練習がスタート。
いつもの曲、ふわふわ時間の前奏が始まったんだけど……。

その場の誰もが普段との違いに気付く。

何か足りない。大きな何か。自分達を支えてくれる何か。

漣先輩が演奏をストップさせ、後ろを振り返っていった。

「律……？あのさ、ドラム走らないのはいいけど、パワー足りなくないか……？」

律先輩は答えない。椅子に座って俯いたままだ。どうしたんだろう。物言わぬ律先輩を見て、漣先輩は少し強めに再び名を呼ぶ。

「おい、律！」

「あゝゴメン」

律先輩は立ち上がりながら言う。

その気だるそうな行動が、俺を少しだけ刺激する。

……少し態度悪いですよ、律先輩。

「なんか調子でないやー。また放課後ねーっ」

……は？なんだそれ。

ちよっと自分勝手過ぎやしないか？オイ。

ダラダラとその場を立ち去ろうとする律先輩。

「あの、律先輩」

俺は少しいつもより言葉に力を込めて言う。
無意識に眉間にも力が入っているのが分かった。落ち着け、俺。も
っとラクに。

立ち止まって振り返る律先輩。

俺は口を開いた瞬間、律先輩と目が合った。

言葉に詰まる。顔に入っていた力がフツと抜けた。

……律先輩……？

あの、と再度言おうとしたが、その後何を言おうかが思いつかない。
俺は黙りこくってしまった。

何も言わない俺を見て再び律先輩はフラフラと歩き出し、音楽室を
出て行く。

そして律先輩は、結局その日の放課後練習にも姿を見せなかった。

第十八話 たまにはちょっと怒りますよ。俺だって。(後書き)

おお「……………(土下座)」

仁「オイ」

おお「何?(土下座)」

仁「色々聞きたい事はあるが、まず何故こんなに更新が遅れたかについて説明しろ」

おお「(顔を上げる)だって、だって!ネタがおm「誰が顔を挙げて良いと言った!」(再び土下座)」

おお「この話でのお前の立場をどうしようか……………さんざん考えてたんです」

仁「その結果がコレ!?ほぼアニメの話通りなんだけども!」

おお「俺だってホントはもっとお前に活躍してもらおうと思っ
たさ!でも……………」

仁「でも?」

おお「……………なんか腹立つし」

仁「表出るやあぁ!」

本当に申し訳ありませんでした。

第十九話 喧嘩するほどなんとやら。(前書き)

約二ヶ月ぶりとなりました。

卒業式も終え、受験も終え、ようやく再開することができます。

日本は今大変な状況ですが、情けない事に僕には何もする事は出来ません。

それならばと、不謹慎かもしれませんが、なるべく普段通りにやっていこうと思います。

自分の小説で、ちょっとでも気持ちを落ち着かせることが出来れば嬉しいです。

第十九話 喧嘩するほどなんとやら。

翌日。

音楽室には、何やら重苦しい雰囲気か漂っていた。

梓が重い口を開く。

「律先輩……来ませんね」

梓の言う通り。

昨日に引き続き、今日も律先輩の姿は見えない。

部室では山中先生も含め、律先輩を除く六名が机に座っている。皆少し俯いてる。そう言う俺も、視線は少し下の方に。

「どうしたんだろう……」

唯先輩が言う。

唯先輩は澗先輩に対して何か言いたげな視線を向けたが、澗先輩はその視線に気付いてはいない。

山中先生が言う。

「そりゃあやつぱり、澗ちゃんが冷たいからじゃない？」

「えっ？」

ここで山中先生はいきなり澗先輩を指差して言った。

「軽音部の為に、一日りっちゃんのオモチャになってきなさいっ！」

……先生。無茶苦茶です。

「でないと……りっちゃんは……」

先生は自身の世界へと旅立っていったので、俺はその妄想をシャットアウト。

律先輩が姿を見せないのは、やっぱり漣先輩との事があるからか。でも、この大事な時期。律先輩はそういう大切な時にはきっちり締め人だと思っただよな。

昨日の律先輩の様子を見るに……律先輩は多分……。

「でも……もしこのまま戻ってこなかったら……学園祭のライブ、どうなるんでしょう?」

隣で梓が呟くようにして、周りに問い掛ける。

その言葉で、俺の意識はカムバック。どうやら山中先生の妄想話は終わったようだな。

漣先輩は一度考えるような素振りを見せると、立上がって言った。

「練習しよう」

「律先輩の事、いいんですか!？」

俺は溜まらず言っちまった。

しかも、若干荒めの言い方になっちゃってるし。

漣先輩は俺を見て何かをグッと堪えるような表情を作る。目線が一瞬だけ外れ、そして再びかち合う。

「仕方ない……だろ」

少し弱めの口調で澁先輩は言った。
俺は次に言う言葉が見つからない。
梓が言った。

「呼びに行かなくても……いいんですか……？」

梓の問いに対し、澁先輩は一度口を開いたが言葉は発さず、黙りこくった。

山中先生は言った。

「もしくは代わりを探すとかね」

「えっ？」

「まあ、万一の事を考えてだけど」

流石に澁先輩は、少し戸惑ったような表情を見せる。
その時、紺先輩が叫んだ。

「りっちゃんの代わりはいません!!!」

驚いたね。紺先輩がこんなおっきな声を出すなんて。
でもまあ……その通りだよな。うん。

「ムギちゃん……」

「待ってよう。りっちゃん来るの、待っていようよ。りっちゃん……きつと来るから……」

それきり、誰も何も言わなかった。

俺は自分の部屋の扉を開けると、ギターケースを置き、鞆を放り捨ててベッドに倒れこむ。

ふーっ、と一息。目を閉じる。でも寝はしない。ちよっと考え事が見たいんだよ。

帰り道。唯一会話といえんのはそれぞれの別れ際に交わした「また明日」のみだった。

このままじゃマズイ……なんとかしないと……でも、どうやって？俺は何をすればいいんだろう？

つか、俺に何か出来る事はあるのだろうか？

そもそも俺等が何をした所で、そもそもこの問題の本質は律先輩と漣先輩。二人のすれ違い。

二人の問題なんだから、二人でなんとか仲直りしないとなんにもならないよな。

うーん……。

俺は考える。もっと考える。ものっそい考える。

はたして今まで十五年間生きてきて、これほど深く物事を考えたことがあっただろうか。

しかし、俺の必死の努力も空しく。頭には何一つのアイディアも浮かんでこなかった。

あゝ。もうヤダ。

「ちつくしよお！」

俺は一人で叫ぶと、ベッドから跳ね起きた。

は「あ、と深めの溜息一つ。

空腹感を感じてきた為、ひとまず俺はベッドから降りて部屋の出口へと向かう。

……途中。

「痛てっ！」

ドンという鈍い音が鳴ったかと思えば、腰に猛烈な刺激が走る。どうやら机の角に腰骨をしこたまぶつけたみたいだわ。めっちゃ痛い。

呻いてしゃがみ込んだ瞬間。俺の頭の中を稲妻が駆け抜けた。

……あつ。閃いた。

なんだ、簡単じゃん。なんで気がつかなかったんだらう。

俺の馬鹿。返せ。俺の三十分。こんちくしょう。

猛烈な痛みで俺の脳細胞が活性化されたのか、振って沸いたかのようアイディアが浮かんできた。

今思えば、ホントに簡単な事なだけだね。

俺は腰をさすりながら、再びベッドへと舞い戻る。

そして、先ほど放り出した鞆から携帯を取り出した。

この計画の為には、まずある事の確認から入らねばな。

俺の予想はきつと当たってるハズ。根拠はないけど、なんか自信はある。

ま、もしそれが外れてたら、また一から計画を練り直すさ。

ふうっ、と深呼吸して、頭の中でこれからの会話をシュミレーション。

そして、俺は通話ボタンを押した。呼び出し先は……。

『律先輩』

次の日。

ダラダラと授業を終え、俺は急ぎ足で部室へと向かう。

梓が後ろで「仁君……なんでそんなに急いでるの？」というのが聞こえたが、俺は歩く速度を緩めない。

振り返って答える。

「ちょっと用があるから」

梓は小走りで俺についてきていた。

ギターを背負いながら走るのには、小柄な梓にはさぞキツイことだろう。

心の中で同情しつつ、俺は足を早めた。

音楽室の扉を開けると、幸いなことにまだ誰も来ていなかった。…

…よし。

梓は少し送れて到着すると、早速俺に聞いてきた。

「で？用って何なの？」

「ん？ああ。今はまだ」

梓は頭上にハテナを浮かべたような表情をしたが、これ以上は聞いてこなかった。

それから二分もしない内に、唯先輩、紬先輩、澁先輩が到着。

梓は言った。

「あの……律先輩は……？」

「今日も学校来てないんだ……」

「そうなんですか……」

唯先輩の答えに、ガツクリと肩を落とす梓。俯く澁先輩。暗くなった雰囲気を払拭するかの用に、紬先輩は笑顔で言った。

「じゃ、じゃあまずお茶にしましょ？待ってて、今準備するから」

「あ、今日はいいですよ」

俺はお茶の準備を始めようとした紬先輩を引き止める。

え……、とこちらを振り向く紬先輩。

すみません、紬先輩。昨日の内に話しておけば良かったですね。俺が心の中で詫びを入れた瞬間、ガツと袖をの方に何やら重みがかかる。

あまりに突然だったんでビックリして力の方向を見ると、唯先輩が俺の袖を掴みつつ、涙目でこちらを見ていた。

唯先輩は言った。

「ひどいよっ、仁君！なんでそんなコト言っのさっ！」

唯先輩からお菓子を取り上げることがどれほど残酷な事か、俺はもうよく理解しています。

だけど、今日はちょっと我慢して下さいね。すいません。

俺は優しく唯先輩の手を解くと、澪先輩の方を向き直って言った。

「あの、澪先輩……」

「なんだ？仁」

すっつ、と一回深く深呼吸をしてから、俺は言った。

「律先輩、風邪ひいてるみたいですよ」

「えっ？」

「一昨日から。結構重いらしくて、熱も下がらないんだそうです」

澪先輩は表情を動かさぬまま、俺の言葉を聞いていた。

やがて、俺から視線を逸らし、下を向いてしまった。

澪先輩は今とても苦しんでいる。

律先輩の見舞いに行きたいという思いと、喧嘩中であるという現実。この二つの板挟みに遭い、澪先輩は動く事ができないんだ。

せめて……せめて、あと少しでもその縛りを砕いてあげられれば！

「律先輩、なんだか悲しんでましたよ」

「えっ？」

澪先輩は顔をあげて俺を見た。

「澪にも、皆にも酷い事しちゃったなあ……って」

「そんな……律は別に……」

「これからどうしよう。皆に謝らないと。澪にも……」

俺は再び一呼吸置く。

深く息を吸う。

「澪にも、謝らないといけないなあ……って」

澪先輩は再び下を向く。

その体は小刻みに震えていた。

「ち……がう……」

バツと顔をあげて、澪先輩は叫んだ。

「違う！謝るのは律じゃない！悪いのは私なんだ！！私が……私が
悪いんだ……だから……だから……」

ここで澪先輩はハツと目を見開いた。

次に発した言葉は、自らに言い聞かせるように。

「私が、律に謝るんだよ！！！！」

そう言うと澪先輩はくるつとUターンをして、音楽室から駆け出して行った。

外から聞こえてくる足音は、澪先輩が相当な勢いで階段を駆け下りているという事を俺に教えてくれた。

紬先輩は言う。

「澪ちゃんもりっちゃんも……もう大丈夫ね」

うん。もう心配ないだろう。あとは二人に任せておけば。
俺が満足感に浸っていると、梓に声をかけられた。

「あの……仁君？」

「何？」

「どうして律先輩が風邪ひいてるって知ってたの？」

「ああ。昨日電話して聞いたんだよ。一昨日律先輩の顔見た時、なんだか体調悪そうだったから」

紬先輩が聞いてきた。

「よく見てるのね仁君。私、全然気付かなかった」

「俺はグサイ人間ですから。いつつも人の顔色ばっかし見てんです
よ」

ここで場の雰囲気が緩んだ。久々の感覚。
唯先輩は言った。

「よしっ！私達もりっちゃんのお見舞いに行こうっ！」

えっ！？それは俺の計画には組み込まれていなかったんですけども！

二人に全部任せようと思っただけから。

俺が面喰らっている間にも、唯先輩は出かける準備を済ませ、入り口で俺達に早くしろと催促を。

やれやれ……。仕方ないか。

その奔放さに若干呆れながらも、俺は笑顔で言った。

「じゃあ、行きましようか！」

「うんっ！」

「はいっ！」

唯先輩と梓も返事をした。

唯先輩の案内で俺たちは田井中家に到着。

とりあえずチャイムを鳴らそうとしたんだけど……。

「あ。ドア、開いてますね」

梓の言ったとおり、田井中家の玄関ドアは少しだけ開いていた。

ちよつとあけて玄関を拝見させていただくと、そこには脱ぎさらされた見覚えのある靴が。

唯先輩の靴だ。

あの唯先輩が、人んちの玄関開けっ放しにして、オマケに靴まで揃えないなんてな。

相当急いでいたとみえる。

周りの様子を伺うと、一階に人の気配は感じられなかった。どうやらこの家には今二人しかいないみたいだな。俺の後ろ、玄関の入り口で、唯先輩は言った。

「えーと、とりあえず……」

おっと、そうだった。

「お邪魔しまーす」

声が四つ重なった。

「りっちゃんの部屋は二階だよっ！」

と、唯先輩の案内で俺達は律先輩の部屋へと向かう。

唯先輩は、ノックしてから部屋の扉を開けた。

「お邪魔しまーす。りっちゃん、大丈夫……」

唯先輩が言い終わる前に、澁先輩は人差し指を立てて口にあてる。

「今寝かしつけてるところなんだよ」

寝込む律先輩のベッドに座って、澁先輩は言った。表情は穏やかな笑顔。

その様子を見るに……うん。良かった良かった。

「ぜんかぁーっい!!」

律先輩が高らかに叫んだ。

風邪も収まり、律先輩が学校に復帰。

山中先生も含め、これでようやく七人揃った。

律先輩はそのテンションのまま言う。

「学園祭に向けてえ……頑張るぞぉーっ!!」

律先輩の音頭で、俺たちも「オーツ!!」と拳を宙に振り上げながら叫んだ。

……瞬間。

ガチャツという音と共に、真鍋さんが慌しく部室内に駆け込んで来た。

……どうしたんだろう? なんだかただ事ではなさそうだけれども……。

「ん?」

振り返って律先輩が聞いた。

「学祭の講堂使用届け、出さなかったの!？」

「えっ?」

「……どーしよーとどけ……?」

……あっ……。

「あああつつ！！！！」

色々あつて忘れてたああつ！！

この瞬間、顧問含む軽音部総勢七名の顔が空のように鮮やかな青に変化した。

「すみませんっ！すみませんっ！」

生徒会室。

律先輩は生徒会長に向かって何度も頭を下げる。

「締め切りは締め切りだから……」

申し訳無さそうに言う生徒会長。

どうしよう。確かに悪いのは全面的にコッチだ。

え？学祭ライブ出来ないの！？

俺が絶望感に打ちひしがれていたその時。

「私からもお願いします」

真鍋さんが前に出た。

「届けが遅れたのは、部長が風邪で欠席していたからです……。
お願いします」

「お願いしますー！」

真鍋さんが頭を下げると、律先輩も再度頭を下げた。
会長は少し悩んで言った。

「まあ……真鍋さんがそこまで言うなら……今日一杯待ちましょう」

はあああ……。

よ……よかったあああ……！！

緊張の糸が切れ、ほっと安堵感に包まれる俺達。

……あれ？律先輩はまだ頭を下げたまんまだ。

どうしたんだろ？

「あ……あなた……」

ん？

「エエ人やああっ！！」

律先輩はそう言うのとガバツと顔をあげて真鍋さんの手を握った。
涙を流しながら、律先輩は言う。

「涙をよろしくっ！そして、これからはアタシの面倒も見てくたせ
ええ……！！」

オイ。

何はともあれ、学祭ライブ中止の危機は免れることができ、俺達は

……。

「ねえ。やっぱびゅあびゅあよくない？」

「却下」

梓を書記長に据え、再びバンド名決めを行っていた。

俺の斜め向かいで、自分の案を即座に却下されて肩を落とす遷先輩。

「握り拳は？」

「演歌っぽい……」

「靴の裏のガム！」

「今日、踏んだんだな……」

「え？なんで分かるの？」

ここまで唯先輩と律先輩の掛け合いです。

うん、漫才のようである。

……ん？おおっ！イイのが思いついた！これはヤバイぞ、マジヤバイ、今世紀最大のヤバさだ。

俺は右手を上げて皆の話し合いを一時停止させる。

「歌で世界を笑顔にしまSHOW……なんてどうですか？」

おおおおおおお！……！

声に出して言うともた……くうっ！

あまりのクオリティに自分で言ってる痺れるっ！サイコーだぜっ！

俺っ!!!

「ムギ」。なんかいいのない？」

「え!?!またスルーですか律先輩!?!いいでしょ?ホントはいいと思ってるんでしょ?」

「うーん……充電期間とかどお?」

「ちよつ、細先輩までスルーしないで下さいます!?!凹むなんてもんじゃないですよ!」

「うっ、縁起悪ッ……」

「何故だ……なぜ皆分かってくれないんだ……いつもいつも皆もつとセンスを磨かないと駄目だぞ。スタイリッシュに生きていこうよ。」

世間のありかたを思う俺をよそに、話し合いは進む。

「じゃあ、ポップコーンハネムーンとかは?」

「だから、なんでそんな甘々のばかりなんだよ!」

「ロケット鉛筆ってよくない?」

「お前は黙つとけっ!」

……あれ?おかしいな。

優しく笑顔でこの討論を見守っていた山中先生。
その顔がなんだか引き攣ってきたように見える。

「一寸先は闇っ！」

「さつきからムギ暗いぞっ!？」

「ちょっとダークな感じもいいと思って〜」

「チョコレートメロディとかは？」

「聞いているだけでなんか歯が痛くなってきた……」

「お風呂四十五度とかは？」

「爺さんかお前はっ!?!」

「熱いロツクな感じで行こうと思ったんだけど」

「だったらもつと温度を上げるよ!」

「え?でもこれ以上熱くすると肩まで浸かれなくなる……」

唯先輩がずれた返答をし終わる直前。

「まどろっこしやああああ!?!?!?!」

との叫び声。

見るとテーブルに足を乗っけて立ち上がっている山中先生。まあ、
お行儀悪い。

どうやら声の主は先生のようです。

山中先生は記入用紙を梓からひったくる。

「ゆっくりお茶もできやしない！こんなの適当に決めればいいのかよ
！！」

山中先生はブツブツ文句を垂れながら、ガリガリと記入していく。

「よしっ！」

「勝手に決められた……」

俺達六人の言葉がシンクロした。

で？結局どんなのになったワケ？バンド名。
用紙を六人で覗き見る。

うーん……これは……。

どうなんだろう……？

漣先輩が言う。

「まあ、私達らしいっていえば、私達らしいよな」

紬先輩が言う。

「なんだか、あつたかそうな名前ね！」

唯先輩が言う。

「なんか可愛い気がするね」

梓が言う。

「ピッタリだと思いますよ。……認めたら負けな気がしますけど」

俺は言う。

「バンドの要素ゼロですけどね」

苦笑いの五人。

律先輩は、皆を見渡してから言う。

「ま、いつか!!」

その後、俺達は写真を撮った。

バックには、『放課後ティータイム』書かれたホワイトボード。

そうコレが俺達桜高軽音部の名称ですっ！

なんだかんだあったけど、後は学園祭に向けて全力で練習するだけだな！

唯先輩がしきりにくしゃみをして鼻水を垂らしていたのが少し気になるけど……。

ま、大丈夫だよな!!

……大丈夫だよな？

第十九話 喧嘩するほどなんとやら。(後書き)

おお「つーワケで、前書きでも触れたとおり、いつも通りに行きまーす」

仁「少しでも楽しんでもらえれば嬉しいな」

おお「つか、投稿して分かったけど、随分中途半端なトコで終わってたんだな……」

仁「この話だけでも書いて投稿すりゃ良かったのに」

おお「おベンキョしてたんですっ!」

仁「ゴメン。信用ならん」

おお「しどいつ!ちゃんとやってたよ!……ゲームの息抜きに」

仁「息抜きが逆うう!」

第二十話 謝罪は全身全霊で。(前書き)

ってなワケで、ついに！ついに学園祭に突入しましたっ！

実質最終話ということもあり、アニメの感じでは割とマジメな感じの話ですよね。

なので、随所に明るめの会話を盛り込んで行きたいと思っています！

……シリアスな話って、書くの苦手なんですよね……。。

俺、ダラけた人間だから、ダラけた話しか書けないんです！

……頑張らないとなあ。

第二十話 謝罪は全身全霊で。

こんにちは。三浦仁です。

今回はまず今まで俺が生きてきた中で感じた事の中の一つを皆さんに紹介します。それは……。

チラツとでも嫌な予感がしたら、案外その予感は的中する。

何？その程度？なんて目で僕を見ないで下さいよ。僕の考案ですよ？たいしたもんな訳無いじゃないですか。

ま、それは置いといて、この直感的に感じる予感。

「あー俺マジヤバイわー」みたいな口先だけの予感でなく、体全体で感じたらもうアウトなんだ。

第六感って奴も、あながち適当ではないのかもしれないね。なんて、冒頭から語っちゃってみたいり。

学祭がいよいよ本格的に近づいてきたある日。

一年二組の教室で、俺達五人は一つの机を囲むようにして座っていた。

梓は言う。

「まだ熱下がらないんだ……」

「うん……あの調子だと、明日も多分……」

憂が頭を垂らして悲しそうに言う。

俺はうなだれる。

そうか、まだ治らないのか……。

話題の主は唯先輩。

三日ほど前から熱を発祥し、学校を休んでる。

そう、数日前に感じた俺の予感、残念ながら見事に的中しちゃったわけよ。

これであの冒頭の語りにも意味が生まれた訳だね。良かった良かった。

……いや、全然良くないがな。

俺が自分で自分につっこみを入れてみると、純が言った。

「結構重症みたいだね……」

うん、と頷く憂。

梓が俯いた時、俺の隣で座っていた大は妙に明るい笑顔を作った。

「大丈夫！なんとかなるって！」

「またお前は楽観的な……」

俺の言葉を聞くと、大はガタリと椅子から立ち上がった。

ちなみに、運動会であれほど俺を悩ませた大の骨折は既にほぼ完治してみたんだ。

思いつきし走ったりするのはまだNGだけど、日常生活にはなんら支障はないんだって。

くそつ。ホントに都合よく骨を折りやがって……。

……まあいいや。それで、立ち上がった大は役者っぽい口調で大げさに言ったんだ。

「神様だつて、嘆いてる人よりも笑ってる人の方に味方するってもんだろ？」

純は驚いたように一言。

「おおつ。中々の名言じゃない？」

「やっぱり？俺も思った」

梓は苦笑いを浮かべながらも大につっこむ。

「そこ自分で言う……？」

「感動がどっかに行っちまうよな」

俺たちは少し笑顔になるが、憂は悲しそうな表情のまま、申し訳無さそうに言う。

「私が代わってあげられればいいのになあ……。風邪うつしてもらって」

「うつすって、どうやって？」

梓が聞いた。

憂は梓の方を向いて、決然と言い放つ。

「口移しとかで！」

なんて大胆な……。

いやしかしそんな場面も見てみたいような気がするようないよ

うな……。
決してそういう趣味がある訳ではないんだよ？でも、その画面の前の君達だっけ見たい気持ちはあるだろう？
なあに、恥ずかしがらなくともよい。僕は分かっているよ。僕達は同士だ。

危険な思考にふける俺の眼前に、突如梓の顔が出現。

「仁君？どうしたの？」

「え！？いやいやそんなこと滅相も無い！俺がんな事想像する訳……はっ！……！」

焦って口を滑らしちゃった。やつべ、俺すっげ間抜けじゃん。
いやでも肝心な事は何一つ述べていないから、梓には俺が何を言っただかサツパリ……。

「仁君……？今さっき何を考えていたか、そこに正座して説明して」というのは甘い考えでした。すみません。
顔が怖いですよ梓さん。ホラ！もっとスマイルスマイル！
純も言った。

「大君もそこに正座しなさい」

大は何も言わずに命令に従い、床に正座した。
さてはコイツも……なるほどなるほど。
どうやらコイツは口ではなく、表情に出るタイプの人間らしいな。
俺も大に習って、床に正座する。

「皆どうしたの？」

一人キョトンとした顔の憂。その純粹さが眩しいです。キミはいつになってもそのまま変わらさず真っ白なままでいて下さい。

「さあて……。尋問の開始だね」

コチラを見ながらニヤリと笑って言う純。

その表情の裏には、「なんか面白そう」という感情が見え隠れしている。

そんな純に対し。

「先ほど想像していた事について句読点含む三十文字以内で簡潔に述べなさい」

まるで国語の問題のように淡々とした口調で言う梓。

その表情は石のように無表情。

ヤベエ。こっちは本気だ。本気と書いてマジと読む方のヤツだ。

俺と大は目を見合わせる。

あつらう。大君冷や汗ダラッダラ。

なんて言ってる俺も、背中にじつとりと嫌な湿り気が……。

（だ、大！どうする？なんだかめっちゃヤバイ状況なんですけども！！！！）

（言われんでも分かっとなるわそんな事！大体お前が口を滑らせなきや……！！）

（んだと！お前だつてなにやら怪しい笑みを浮かべてたクセに！）

（お前俺の顔見てなかっただろ！だったらんな事分かんねえじゃんか！）

（純にフツーにばれてたじゃねえか！気付け！！）

「被告人は無駄口を叩かない！！」

「「申し訳ありませんでした」」

梓に厳しい口調で言われ、俺と大は二人揃って土下座。

フーか、最早俺達罪人扱い！？妄想をする事も許されないのかこの国は！！

俺が絶望にくれていた時。

バーンと中々うるさい音が教室内に響き渡った。
何事かと顔をあげると、そこには……。

「たのもおーっ！！！！」

と叫ぶ律先輩と。

「下級生をビビらせるな！！」

と律先輩の頭に鉄拳を落とす遷先輩が。

律先輩は床に這い蹲る俺たちに目を向けて言った。

「何してんの？二人とも」

大は言う。

「いえいえ、お気になさらずに」

漣先輩は言う。

「いや、気にするなと言われてもだな……」

俺は言う。

「いえいえ、そんな。私達、こうしているのが好きです」

律先輩は言う。

「いや、無理があると思うぞ。その謎設定」

いや、この件に関しては、あまりつつこんでもらいたくないのですよ。

先輩達が尋ねてきたんだからと、俺と大は主に梓に対し、必死の自己弁護を決行した。

妙なトコロで鋭い律先輩に気取られないように慎重に言葉を選びながら。

憂と漣先輩に、なんでもありませんよと言う気持ちを込めて爽やかスマイル冷や汗付きを送りながら。

純が口を滑らせぬよう、随所で鋭めの視線を向けながら。

ま、そんなこんなで俺達は問題をうやむやにする事に成功しまして、ミッションコンプリートの喜びを大と男同士の熱い抱擁で分かち合っていた訳なんですよ。

と言う訳で、あまり人に触れられたくない騒動も一段落。
漣先輩は言った。

「まだ唯の熱は下がらないんだな……」

憂は頷く。

律先輩は腕を組みながら言った。

「まったく、こんな時に風邪ひくなんて。たるんでる証拠だっ」

なんて偉そうな。……つか……。

「お前が伝染したんだろ」

うん。漣先輩が代弁して下さいました。

どー考えてもそうだよな。少なくとも、原因の一つである事は間違いないよ。うん。揺るぎない。

律先輩は「え？アタシ？」などと純真無垢な顔を作ってふざけた事をぬかしていらっしやりやがる。やれやれ。

梓は言う。

「時期的に考えて、それ以外考えられないじゃないですか」

だってよー、と口を尖らせる律先輩。

そこへ、憂が助け舟を出航させる。

「あつ。でも多分……違うと思いますけど」

「ん？他になにか原因っぽいのがあんの？」

純が聞く。憂はうん、と頷くと、俺達に解説を始めてくれた。

「確か何日か前の事なんだけど……」

憂の言葉を頼りにして、俺は記憶の海へと飛び込んで行く。

事は憂の言った通り、数日前に遡る。

その日の山中先生は、不自然に機嫌が良かった。まあ、その理由はすぐに分かったんだけど……。

「この中からステージ衣装を選んでっ！」

きよっ、強制かよ……。

どこからか知らんけど、山中先生は店で売り物の服を引っ掛けておくアレを持ち出していた。

そしてそこには色とりどりの衣装がっ……！

つか、衣装ってよりは……コスプレ衣装？かなあ？

メイド服にナース服、更にはシヨボ目のRPGで主人公が着ているようなゴツゴツした鎧まで……。

とにかく、よりどりみどりだったのですよ。

澪先輩は半ば呆れ顔で言った。

「いつの間にかこんな……」

「どれでもいいわよ」

そう言っつて山中先生はお手製の衣装を物色していく。

「例えばこの……ウエイトレスっ！」

そう言っつて先生が取り出したのは、赤と白を貴重とした、まー可愛らしいウエイトレスコスチューム。

そのまま山中先生は何故かそれを持つ手を俺の方向に向けて焦点を合わせるように……っつて。

「何ロツクオンしてんですかっ！」

「仁君、着てみない？」

「絶対にイヤだ！！つか、んな恐ろしいもん皆さんに見せられる訳ないでしょっ！」

他小説主人公の皆のようにイケてるメンズな男子ならばいざ知らず、私三浦仁は筋金入りのフツメンですよ？健康爽やか系男子なんかじゃないんですよ？ただのむさ苦しい男子高校生ですよ？日に日にオッサンに近づいてるんですよ？

ただでさえ最近ヒゲが濃くなっつてきて悩んでるといのに……っつてこれは今関係なかった。

とにかく！俺はもう毛も生え揃った立派な男なワケです。んなもん着ちまっつたら……。

「うっつ、自分で想像して気持ち悪くなっつてきた……」

「そんなに自分を卑下する事も無いと思うけどな……」

ああ……律先輩のフォローが心に染みる。

「冗談冗談！ちゃんと仁君用の衣装も用意してあるけど……」

「いや、いいです」

再び衣装を取り出しに行こうとする山中先生を、俺はキツパリとした口調で制する。

この人の事だ。いくら男もんの衣装つつたつて、どんなもんか……。
ぶるるっ。想像するだけでもオソロシイ。

俺が恐怖に打ち震えていると、楽しそうな唯先輩の声が聞こえてきた。

「ねえ、見て見て！」

声の方向を振り向くと、可愛いミニスカ浴衣に着替えた唯先輩と梓の姿が。

ちなみに唯先輩はピンク色。梓は紺色のを着ています。
楽しげに言う梓と唯先輩。

「これ、どうですか？」

「これ可愛いよっ！」

「本当ね！動きやすそうだし……」

「まあ、これなら……」

上から紬先輩と澁先輩の感想。

ま、確かにアレならさっきのメイド服やらナース服やらよりは常識的な衣装だよな。

律先輩は言う。

「でも改造してあるとはいえ、浴衣だろ？二人ともよくそんなキツチリと着られたな」

「いえ、見た目は浴衣っぽいですけど、帯とかが全部くっ付いてたので普通に上から着るだけでオツケーでした」

「ふうん、さわちゃんにしては考えてあんだな」

「りっちゃん、それどういう意味!？」

「あゝ、あはは……深く考えない方がいいぞ……」

ふうん、そんな作りになってたんだな。

それなら、着替えには時間がかからなさそうだ。

……ん？着替え？

俺は心に浮かんだ疑問を梓にそのままぶつける。

「あの、そういうええいつ着替えてたの？」

「ん？ああ、さっきそこで。唯先輩がコレ見つけてきて、私もいいなって思ったから……」

「ハア!?!さっき?そこで?この場で着替えたの!?!」

「うん、そうだけど？」

アレ？俺って、男だよな？俺、ずっとこの場にいたよな？

つまり、俺がこっちでギャーギャー騒いでる間に、梓と唯先輩は……。

クッソ！！なんで気がつかなかったんだ俺！！ちよつとしたトラブルを装ってチラッと見るくらい簡単だったろうにっ！！

ま、それはそうとして、皆俺が健全な男子高校生だって事忘れてないかな？

つか、みんな俺の事を男として見てないのかな、ははは。凹むわ。

俺は一人で悩んだり悔しがったり凹んだりとせわしなく感情を動かしていた。

そんな時、めっちゃ明るい声で唯先輩は言ってたっけ。

笑顔でコッチを見て、両手をブンブン振りながら。

「ねえねえ、これにしようよ！」

あゝ、思い出した思い出した。

確かにそんな事があつたっけ。

俺はちょうど今思考の海から舞い戻ってきたトコロ。

あの日の出来事全てが、俺の脳内で明確にフラッシュバック。ついでに唯先輩の言葉にエコーをかける演出もオマケで追加しておいたぜ。

なんて、自分の映像編集能力っぷりに軽い自己満足に浸る俺。

その後も憂は続ける。

「お姉ちゃん、すっごくい気に入ってて、その後一日中浴衣で過ごしてたから、冷えちゃったのかも」

「小学生か……」

「唯先輩らしいですね」

と、律先輩と梓の感想。

律先輩は言う。

「つーかさー、あの時の衣装もさあ……イケてるような気がしたけど……」

「冷静に考えると、恥ずかしいですよ……」

それが男のいる部屋で平気で着替えた女の言うセリフですか？梓さん。

つか、あの衣装って、駄目だったんだ……俺は別にイイと思っただけ……？

「どんな衣装だったんだ？」

「あ、それ私も気になる」

大と純が聞いてくる。

梓は少し面食らったような顔を見ると、ほんのり頬を染めて言った。

「えーと……全体的には浴衣っぽくて、半袖ミニスカちよびっとフ

リル付き……」

「うー、微妙にイメージは浮かんでくるのだが……」

「やっぱり実物を見ないと難しいね……」

大と憂は少し悲しそうに言う。

……実物……？

俺は心に何か引つかかるのを感じて、記憶の糸をたどっていく。思い出せ……確かあの後こっそり……あつ。

「うがーっ！！参考資料は無いのかぁーっ！！」

純が頭を掻きむしりながら吼えた。

梓はニヤツと笑いながら言う。

「残念でした。何にも残って無いよ」

「うう〜っ。……梓お願い！もっかいソレ着て見して！」

「ヤダよ……」

「私に見せるだけでいいから！ちよ〜っとだけ！」

「あ！ズルい純ちゃんだけ！私にも……」

「あ、俺も見たいー」

「何回言っても駄目だよ。だって……」

「写真でいいならあるぞー」

俺は梓の言葉を遮って言った。
右手で携帯電話を掲げながら。

その通り。実はあの後、梓の写真を撮っておいたのだあつ！
だってさ、梓はああ言うけどさ、結構似合ってたと思うもん。正直
可愛いと思っただし。
ま、気がついたら手が勝手に……ってカンジでさ。

俺の言葉で、三人のボルテージは一気に最高潮。

「仁良くやったあ！」

「流石仁君！」

「それでこそ仁君だっ！」

反比例するかのように青白い顔に変わった梓は焦った口調で言う。

「駄目仁君！絶対に駄目っ！」

「まあまあ、そう言うなって梓ー」

「律先輩までですか！」

「さあ仁君。早くその携帯を私に……」

「純っ！ー！」

梓が顔を真っ赤にして奮闘しているのを眺めていたら、ついに梓の標的が俺の方に移ってきた。携帯に手を伸ばす梓。反射的に上に上げる俺。

「あっ！」

と一声。

梓はその場でピョンっとジャンプ。伸ばした両手は空を切る。ぐぬぬと悔しい顔を作る梓。視線は俺の掲げている携帯に注がれている。

俺はその手をちよっと下げてみる。すかさず飛びつく梓。俺は再び手を振り上げる。

……なんか……オモロイ。

俺梓の必死の行動を見て思わず頬を緩めてしまう。

そんな俺の隙を梓は見のがさず、今度は携帯では無く、俺自身に飛びついてきた。

不意を突かれ、梓もろとも背中から倒れる俺。……い、痛い。

俺は腰と背中への衝撃に思わず目をギュッと閉じる。目を開けると、すぐそこには梓の顔が。

腹の上に掛かる重量感から、梓は俺の体の上にキレーに乗っかってる状況だと推測。

ち、近いよ梓さん。顔が怖いよ梓さん。でもどこもなく可愛いです梓さん。

「消しなさい」

「えっ、いやー、あー、そのー……」

どもる俺。

梓は更にズイッと顔を近づけてくる。
鼻の天辺がくっ付きそうなほど。

「消して」

「はい……申し訳ございませんでした……」

ゴメン。もう色々限界。

聞こえてくる溜息と苦笑いの声を聞いて、俺は心の中でそっと呟いた。

その後の俺は必死に梓の機嫌のリカバリーを試みている。頑張ったんだよ、俺。

謝っている間はずっとそっぽを向いていた梓。

俺はちよつとマズイかなって思って、更なる交渉に出る。

「駅前の喫茶店のパフェ奢りますっ！」

「……………」

口は固く結ばれたままだったけど……。

見た。今一瞬だけ、目だけコツチを見た。俺は見逃さなかったよ。

「女の子の気持ちを食べ物で釣ろうとするなんて……………」

「サイテーだな」

純っ！大っ！うるさいっ！！

つか、テメーらだけ責任逃れしやがって！本来なら一緒に謝る立場ですよっ！？

俺は心の中で悪態をつきながら、とどめの言葉を梓に言い放つ。

「バナナタルトも奢りますっ！」

バツとコツチを向いた梓。表情は笑顔。そういえば、梓はバナナ好きだもんね。

梓は一瞬だけ向けた笑顔をすぐに揉み消し、下を向いた。

「……………」

しばし沈黙。

すると、梓は顔はそのまま、視線だけを俺の方に向けて言った。

「……………学園祭が終わったら……………絶対だからね」

はいっ！喜んでっ！！

第二十話 謝罪は全身全霊で。(後書き)

おお「オマエに言う事はただ一つ！」

仁「何？」

おお「チョーシに乗ってんじゃねええ!!！」

仁「ゴメン！マジゴメンって!!！」

おお「しかしこの話の進まなさといったら……」

仁「冒頭の会話シーンだけで一話終わっちゃまってるからな。無駄な会話を入れすぎなんだよ」

おお「だって、そーしないと全部が全部暗くなっちゃうし。前までの話と続けて、コレで何話連続？ってカンジじゃない」

仁「またオマエは自分勝手な……」

第二十一話 いくら上手く変装しても、オーラは誤魔化せないぜ。(前書き)

学園祭その2ですー。

第二十一話 いくら上手く変装しても、オーラは誤魔化せないぜ。

ようやく俺が梓の許しを得て数秒後。

今まで何かを考えるように沈黙を守り続けてきた漣先輩が、ようやく口を開いた。

そしてその提案は、ちょっと衝撃的な物だったりもして。

「梓、仁」

俺と梓は顔を見合わせてから返事をする。

「なんですか？」

「今日からどつちか、リードの練習もしておいてくれないか？」

「えっ？」

思わず声を漏らす梓。

俺も気持ちちはちょっとグラついた気分。

「唯が間に合わないかもしれないって事か？」

律先輩が聞いた。

漣先輩は答える。

「あくまで万が一に備えてだから……」

俺と梓は再び顔を見合わせる。

えっと……まあココはとりあえず……。

「梓、頼める？」

俺は梓に言った。

まあ、正直これは当然だと言わせていただけです。

俺なんかより梓の方がずっとギタースキルも高いし。

それに情けない事を言わせて貰うと、俺は自分のパートだけで精一杯なんだよ……。

これ以上の負担は、ちょっとキツイ……かな。

「うん……それはいいんだけど……」

梓は少し悲しそうな表情を見せる。

そんな梓を見て、俺は励ましの言葉をかけてみる。

「澁先輩も言ってる？あくまで万が一って。シケた面してんなよ？」

「うん、そう……だね。うん！分かった！」

梓は笑顔で言ってくれた。

それを見て澁先輩と律先輩は帰り支度を始める。

「それじゃ、また放課後」

「またなー」

「はいっ」

「さよーならー」

二人はそう言って教室を後にする。
憂はまた悲しそうな顔を作って言った。

「二人とも……ゴメンね」

「ううん！」

「憂が謝るこつちやないだろ？」

「そそ！さあ笑顔笑顔っ！」

「笑う門には福来るってもんだ！」

皆の励ましを受けて、憂は言った。

「うん……そうだよね！」

その顔は穏やかな笑顔だったが、どこか無理してるみたいだった。
唯先輩の風邪の事で責任を感じてるのはよく分かるけど、そんなに
気にしなくてもいいんじゃないかな？

……ま、本人でもない俺がとやかく言うのはよしとくけど。
でも、憂はちよつと責任感が強すぎる所があるよな。
気にしすぎは精神的に良くないし。今度からは俺たちがもっと助け
てやらないとなあ。

その日から、早速梓はリードギターの練習を始めた。
梓には負担をかけちまって、ホントに申し訳ない。

慣れ親しんだ曲とはいえ、他パートを覚えるのには少々時間が掛かるだろうと思ってたんだけど……。

やっぱり梓は流石だった。唯先輩の演奏を聴いて覚えていたみたいで、楽譜を殆ど見ずにギターを鳴らしていく。

時折確認の為に視線を楽譜に落とし、そしてまた同じ小節を弾き直す。その表情は真剣そのものだ。

気付かぬ内に、俺はせわしなく、けれども余裕を持って弦の上を走り回る梓の手を見つめていた。

いやはや全く。上手いなあ……梓は。

と、俺が梓の演奏に見惚れていると……。

「何？仁君？」

「えっ？あつ、えーっと……。何でも無い」

急に目が合ったので焦った。しどろもどろになっちゃった。

梓はそう？と俺に聞くと、ギターを肩から下ろしてふーっと一息ついた。

どうやら一通り終わったみたいだな。

見渡すと、各々一通り個人練習を終えたみたいで、リラックスしている状態だった。

……やべ、俺今なんもしとらんかった。……いやいや！上手い演奏を見るのもまた練習だ。うん。

己の罪を誤魔化しつつ、俺は梓に聞いてみる事にした。

「梓ってさ、ホントギター上手いよな。いつからやってるの？」

「え？ああ、言ってなかったけ。小四の時からだよ」

「へえーっ。やっぱり長いんだなーっ」

「うん。ウチ、親がジャズバンドやってたから、その影響でさ」

「マジ!? 音楽一家じゃん!」

「やっぱり、音楽の才能を受け継いでるのかもな。梓は」

律先輩も会話に参入してくる。

うん、全くその通りだと、俺は律先輩に賛同する。

「そんな大それたものじゃないよ」

梓はあははと笑う。

俺は少し目を閉じる。

「どしたの? 仁君」

ん? 少し決意を固めているのだ。

……よし。

「決めたっ!」

「何を?」

梓は首を傾げて聞いてくる。

俺はそんな梓に向かって人差し指を突きつけ、宣言する。

「卒業するまでに、梓よりもギター上手になってやるっ!」

律先輩は言った。

「おっ。戦線布告かぁーっ？」

梓は一瞬驚いたような表情を作ったが、すぐにふふんと笑った。それで、笑顔の種類をニツと笑う形に変えて言った。

「かかってきなさいっ！」

「上等だぜっ！」

「おお……燃えてるな、仁」

「青春マンガって感じね〜」

「今日から梓と仁はライバルでもあるワケか！」

上から湊先輩、紬先輩、律先輩の言葉。

その通り。梓こそまさに、最高の仲間ライバルだろう。

そう。仲間と書いて、ルビはライバルだ。なんかカッコよくない？
……さあ、まずは早速……。

「この部分上手く弾けないんだけど、どうしたらいい？」

「早速敵に助けを求めた！！」

いいんですよ律先輩。梓はライバルであり、仲間なんですから！

梓は苦笑いしながらも、懇切丁寧に俺にその部分の弾き方のコツを教えてくれた。

優しすぎるぜ梓さん！

梓は持ち前のギターテクで、早くもリードのパートを弾きこなせるようになった。

それならばと、早速次の日にリード・梓の形で一回合わせてみることに。

とりあえず一度演奏した後、澁先輩は梓に聞いた。

「梓、いけそう？」

「はい、なんとか」

うん。梓の演奏は問題なさそうだ。とても一日の成果とは思えないね。

後は学祭でも梓がリードをする羽目にならんよう、祈るだけかな。

「じゃあ、もう一回最初から通してみよっか」

澁先輩の言葉で、俺たちは再び演奏の構えを取り、律先輩の合図を待つ。

しかし、次に俺の耳に飛び込んできたのはスティックの音ではなく……。

「やっほー」

と、登場した唯先輩が音楽室の扉を開ける音だった。

「あ、来た！」

「先輩っ！」

と、驚きの声を漏らす梓と澪先輩。

だけど、その言葉の中には喜びの感情も含まれていて。

そりゃそーだ。俺だって嬉しいよ！これで学園祭も大丈夫……かな？

……あれ？大丈夫だよなあ？唯先輩はもう元気になってる。もう一人も欠けちゃいない。曲の出来も上々だ。

何だ？何かが引つかかっている。……唯先輩……か？

一人思考にふける俺をよそに、皆はその唯先輩に駆け寄った。唯先輩は聞いた。

「風邪、大丈夫なの？」

「え？あつ……風邪か……」

と、唯先輩は一人咳くと、ゲホゲホと数回咳をする。

「わざとらしい……」

「まあ、それなら大丈夫ってことか」

と、梓と澪先輩。

「治ったんなら、朝からちゃんと来いよーっ。皆心配したんだぞーっ」

律先輩の言葉に、紬先輩はうんうんと首を縦に振って賛同する。唯先輩は少し戸惑ってから、たどたどしく言い訳を始める。

「授業が終わるころに、急によく言ったの！」

「サボリたかつただけだろ」

律先輩は唯先輩の言い訳を華麗に一刀両断。梓は一步前に出ると、皆の顔を見渡しながら言った。

「それより、早く練習しましょうっ！」

じゃーやるかーっ！と気合を入れる律先輩と紬先輩。そして、それを穏やかな笑顔で見守る唯先輩。

……なんつか……ヘンだ。おかしい。なにか違う。

いつもの唯先輩なら、一緒になって気合を入れるところだと思うんだけど……。

つか、なんか今日の唯先輩の笑顔は……こう、いつもみたいなふわふわした感じじゃ無くて……。

うーん。これは病み上がりだからという事だろうか……。

「おーい、仁！始めるぞっ！」

「え？あつ、すみません……」

急に律先輩に名前を呼ばれ、俺は戸惑う。

俺が考えてる間に皆はもう準備万端なワケか。ゴメンゴメン。

俺は急いでギターを肩にぶら下げ、演奏用意。

「じゃあ、いくぞ?」

律先輩はそう言うと、口でカウントを取りながらスティックを叩く。ふわふわ時間の前奏が始まる。

……おかしい。絶対おかしい。何かヘンだ。

俺の疑惑の的はもちろん唯先輩。

今日の先輩は、リズムが正確で、非常に安定した演奏を見せている。言っちゃ悪いが、唯先輩らしくない。いつもはもちっとブレるのに。けど、今日の先輩はどことなく慎重な感じで、丁寧に弾いている。これまた唯先輩らしくない。いつもはもっと楽しく、それでもって大きく弾いているのに。

それでもって、今日の唯先輩の仕草全てが……なんつか、らしくない。アレじゃ唯先輩っていうより……あつ。まさか……。

俺は、なんとなく疑問の答えが見えた気がした。

疑問は恐らく解決したものの、色々考え事してる状態で、素人上がりのギターリストである俺が良い演奏が出来るワケでもなく。

数箇所でちよいちよいつとミスをし、リズムも一部走ったり遅れたり。

とにかく、酷い演奏をしちまったワケなんですよ。

演奏が終わってから、当然の如く質問される俺。

「仁、どうした? なんだか不安定だったけど」

「仁君、ちゃんと集中できてる?」

と、漣先輩と紬先輩。

「すみません……」

とりあえず謝罪を。

それから、俺はめっちゃ間抜けな質問を投げかけちゃってみることにする。

「あの〜……」

「何？」

唯先輩に。

俺は質問の続きを言う。

「唯先輩……です……よね？」

「えっ!？」

と驚く唯先輩。

でもなんだろう、どことなく焦ったような……効果音を付けるとしたら「ギクツ」かな。

……脈あり。やはり……か。

「何言ってるんだよ仁!熱でもあんのか?」

「今度は仁君が寝込んでるじゃうの?」

律先輩と梓に合わせるようにして、唯先輩は言う。

「そつだよ仁君。何言ってるの？」

うん。若干声が震えてる。

俺は相手の動揺に乗じて、攻め込む事にした。

「もう一回よく思い出してください皆さん。今日の唯先輩の演奏を……」

皆は互いに顔を見合わせる。「何言ってるのコイツ？」みたいに。けれども、俺は動じない。だって、きっと俺の推理は当たってるから。

「俺のミスばかり気になってたとは思いますが、……どうですか？唯先輩のミスが無かったと思いませんか？……いや、完璧だったと言っている。何か引つかかる所はありませんか？」

俺の言葉で、皆は各々先ほどの演奏を頭に蘇らせる。

「言われてみれば……」

「確かに……」

「いつもよりも……」

「安定してましたね」

上から律先輩、紬先輩、澁先輩、梓。

えっ？と動揺がついに顔に出始める唯先輩っぽい人。

「確かに、今日はなんかドラム叩きやすいな〜っ。って思ってたんだよな。……仁のミスは抜きにして」

「うっ」

そこは触れないで……。

「私も。今日は唯先輩と噛み合うなあって思ってた」

疑惑の主は取り繕った笑顔で言う。

「そ、そんな事無いよお〜っ。お姉ちゃんはいつもこんな感じ……っ！」

自分の重大なミスに気づいてあわてて口を押さえるけど、もう遅いよ。

皆聞いちゃったもん。

「お姉ちゃん？」

律先輩がもう一度、証拠となるワードを反芻する。

その時、部室内に真実を解き明かす言葉が響いたっ！

「いいかげんいいんじゃない……？ 憂ちゃん」

「さわちゃん居たのかよっ！」

ティーカップ片手に突如出現した山中先生に、律先輩が突っ込みを入れる。

つか、山中先生、いつのまに……一人でお茶までいれて……。

……っつて、一番おいしい所を山中先生に持ってかれちゃったんです
けどっ！！

「「憂ちゃんっ！？」」

と、俺と先生以外の全員の声が重なる。

その通り！今ここにいる唯先輩＝憂。これは間違いない！！

「どんなに完璧に変装しても、私の目は誤魔化せないわよ」

先生。流石生徒の事をよく見てるだけあるなあ。そっくり兄弟の違
いをきつちり見抜いてる。

そっくだよね。唯先輩よりも憂の方が、どこと無くしっかりした雰囲気……。

「唯ちゃんよりおっぱい大きいじゃない！！」

着眼点、そこかぁーっ！！！！

ただのエロオヤジの視点じゃねーか！先生何歳い！？

「な、なんの事やら、さっぱりわ、分かりませんんっ！」

ついに化けの皮がはがれた唯先輩……もとい憂。

山中先生の言葉に胸を押さえながらも、必死にリカバリーを試みる。
けれども、しどろもどろだよ。

梓がとどめの一言を放つ。

「じゃあ、私のあだ名言ってみて！」

「あ、あずさ2号っ!！」

「ニセモノだ……」

正解は、「あずにゃん」でした。

「ごめんなさい……」

髪型をいつものポニーテールに戻し、憂は謝る。
澪先輩は言った。

「それにしても似てたなあ……全く気づかなかった」

「仁君は、気づいてたみたいね」

「え?あ、はい」

紬先輩に言われ、俺は肯定をする。
律先輩も聞いてくる。

「どこで気づいたんだ?」

「まさか、先生と同じで、胸の大きさ……?」

「違う!断じて違うから梓!ああ、皆さんもそんな目で見ないで下さいっ!」

俺は変体の称号から逃れるため、種明かしをする。

「オーラですよ」

「オーラ？」

律先輩の言葉に、俺は頷く。

「はい。人の周りを渦巻くオーラです。なんか、いつもと雰囲気
が違うな〜ってずっと思ってたんですよ。喋ってるのとか見ると」

「具体的には、どんな感じで違ったの？」

紬先輩の問いに、俺はちよつと考える。

「そーだな……オノマトペで表すとすれば、唯先輩が”ふわふわ”
で、憂が”はきはき”と”ふわふわ”のサラブレッドって感じ」

「なるほど、さっぱり分かん」

「汲み取って下さいよ律先輩」

「仁君は感受性が豊かなのね〜」

「どうもです紬先輩」

ここで、梓は憂に聞いた。

「そつえば、憂ってギター出来たんだね」

「ううん。お姉ちゃんに何回か触らせてもらって……」

憂の話を聞くとところによると……。
唯先輩、家じゃ分からない所全部憂に聞いてたんだ。
そしてそれを教えられる憂……。つか、たった数回であそこまで弾きこなせる憂……。恐ろしい子！

「このまま唯には休んでもらった方がいいのかも……」

と、腹黒い思考を巡らせる律先輩。まったく。

「皆さん、本当にごめんなさい……。なんか、ベッドで寝てるお姉ちゃん見てたら、いてもたってもいられなくなっちゃって……」

憂の言葉に、俺が何か言おうと口を開いたその時……。

ガチャリと扉の開く音がして、そちらを向くと……。

「やつほー」

そこには唯先輩が居た。

おおっ。こっちはホンモノだ。

「激しくデジャヴー！」

律先輩の言うとおり。先ほどの憂が変装してた唯先輩が登場した構図とよく似ている。

違うトコがあるとなれば、両手に抱えたティッシュボックスと、ちよっと熱っぽく赤い顔かな。

先程と同じように、俺たちは唯先輩に駆け寄った。

「ごめんねー。心配かけて」

「大丈夫なの？」

紬先輩の問いに、笑顔で答える唯先輩。

「うん！さっき起きたらね、なんか元気になっててね。少しは練習し……」

……あ。マズい。

俺は野生の直感で、反射的に今まで居た唯先輩の真ん前から体を移動させる。

「へえつくしっ！！」

「あっ！つぶねええええ……」

予想通り。唯先輩のくしゃみが爆発し、今まで俺が立っていた所に唾と鼻水が撒き散らされた。

まさに間一髪！

俺は皆からの拍手を浴びる。ありがとう。なんかありがとう。

さて、その唾&鼻水爆弾の発射元である唯先輩は、憂に鼻をかんでもらうと、先程の続きを元気良く言った。

「だから、もう大丈夫！」

「嘘つけ」

唯先輩は律先輩のツッコミの言葉をスルーし、後ろの長椅子を見て

いる。ホントにマイペースだよ。
そこには、さつき憂が丁寧に置いておいた唯先輩の相棒、ギターがあっただよな。

「ギター太っ！こんなところに居たのかあ〜っ！」

名前を呼びながら、笑顔でフラフラとギター太へと歩み寄る唯先輩。そして、よっこいしょとギター太を持ち上げ抱きかかえ……。

「って重っ!？」

ることが出来ずに、唯先輩はギター太とともに床に崩れ落ちた。

結論から言わせてもらおうと、唯先輩の風邪は全く治っていなかった。倒れた唯先輩を俺達は必死に抱え起こして、今は長椅子の上で寝てもらってる。

音楽室に登場した時よか顔は真っ赤に火照っていて、一目で熱があると分かるくらい。

無理するからそういう事になっちまうんですよ……。

今は絀先輩が、赤い唯先輩のおでこの上に濡れたタオルを乗っけようとしてるトコ。

唯先輩は突然絀先輩の顔に手を伸ばすと、弱弱しい声で言った。

「今度……お茶漬けにさせてね……」

「えっ?」

唯先輩……ついに幻覚症状まで……これはかなりヤバイな……。
澁先輩は言う。

「熱全然下がってないじゃないか！」

「ごめんね……。やっぱり駄目だね……。私抜きで本番の方が良いかも……」

「そんな……」

紬先輩が言う。

唯先輩は寝たまま顔を梓の方に向けて言った。

「あずにゃん……学園祭……私の代わりは任せたよ……」

なんだかもう諦めた様な唯先輩のセリフ。

そんな事……言わないで下さいよ……。まだ分かんないじゃないですか……。

部室内に悲しく、重苦しい雰囲気流れる。俺の心も同じように深く沈んでしまった。

そんな俺たちの心に、そんな雰囲気払拭するかの如く言い放った梓の言葉が入り込む。

「嫌です」

梓はきつぱりと拒否した。

「……梓ちゃん……」

憂が呟いた。

「駄目ですっ！皆で出来ないなら、辞退した方がマシですっ！！」
梓は一気に言い切る。

その強い口調と言葉に、一度沈んだ俺の心が再び浮上してきた。
梓に負けじと、俺も唯先輩に向かって言い放つ。

「そうですよっ！まだ学園祭まで日はあるんですから！んな事言っ
てたら、治るもんも治らないですよ！！」

唯先輩と視線が合う。俺は目を逸らさない。

ガン飛ばすくらいの強さで、これでもかと唯先輩を睨みつけてやっ
た。

涸先輩が、何か考え事をするように組んでいた両腕を解くと、唯先
輩に宣告する。

「唯、本番まで軽音部に来るな」

「っ、ついに出禁！？」

唯先輩は焦った口調で言いながら、ヨロヨロと体を起こして聞いた。
涸先輩は違う、とそれをきっぱりと否定する。

「本番までゆっくり休んで、風邪を完璧に治す事。そして、皆で本
番を迎える事。それまで絶対諦めるな」

諭すように、涸先輩は優しくも力強い口調で、唯先輩に告げていく。

「いいな」

唯先輩は口元まで流れ出てきていた鼻水を一気にすすると、呟いた。

「漣ちゃん……」

漣先輩は唯先輩に微笑みかけると、視線を梓の方に向けて言った。

「梓もちゃんと練習はしておくように。唯が居なかった時の為じゃなく、今後の為に」

「先輩……」

漣先輩は、視線を俺たち全員に向けると、笑顔で言った。

「今私達に出来る精一杯の事をやろう！」

「うんっ！」

「はいっ！」

全員が、漣先輩の呼びかけにしっかりと答えた。

第二十一話 いくら上手く変装しても、オーラは誤魔化せないぜ。(後書き)

おお「ってなワケで、二十一話でしたー」

仁「ほぼ原作通りでしたね」

おお「嫌味な事言っなって」

仁「で？次は学祭当日？」

おお「いや、学祭までの残りの日々を書くー」

仁「また余計な話を……」

おお「このまま学祭いったら、真面目系二連続じゃない。そんなの俺嫌だよ」

仁「ハッキリ言っなー」

おお「シリアス物書くのは苦手なんですー」

仁「たまには俺も真面目にやりたい！」

おお「ってなワケで、次回はオリジナル話ですー」

仁「えっ？無視？」

おお「息抜き、著休め的な感じで、いつも以上にグダグダな明るめの話になると思いますので、どうぞよろしくー」

仁「む。宣伝」苦勞」

第二十二話 信じてるからこそ、ふざけられるワケで。(前書き)

今回は学祭本番までの日々を書いてみましたー。

色々ふざけすぎた感もありますけども、やっぱりしこいついっ話の方が書くのラクです。

第二十二話 信じてるからこそ、ふざけられるワケで。

約束通り、唯先輩はそれから部室には姿を現さなかった。俺達は唯先輩が来ると信じて。いや、来るに決まってる。

「絶対だ！なあ仁！」

「はい！唯先輩は120%来る！」

「……いや、120%は言い過ぎたかな？」

「仁……いいじゃないか……」

「そ、そうですねっ！あははははスイマセン濔先輩。なんか俺、根がネガティブで……」

「”ネガティブ”……シャレか？仁」

「妙なトコ突っ込まないで下さい律先輩っ！」

「すごいわ〜仁君！コメントの中にもささやかなお茶目心を覗かせるそのセンス……」

「やめてえ！変に過大評価しないでっ！全然そういうんじゃないからっ！」

「またまたあ〜謙遜しちゃって〜」

「もっ……許して下さい……」

「あの……練習しませんか？」

「え？」

「え？って律先輩。学祭も近いのに……」

「冗談だって怒るなよ梓。いくらアタシだって、やる時にはやるんだぞー」

「ええ。どうだか……」

「むっ。聞き捨てならないな……ようし見てろっ！今日のアタシはいつもと一味違うぞっ！」

「やれやれ……。じゃあ、そろそろ練習するか！」

「はいっ！」

「は、あっ！ちょっと待って下さむぶっ！……」

「……仁君？どうしたの？」

「……急いで……飲み込んで……だら……マドレー……又が……喉に詰まっ……た」

「大変仁君！えっと……何か……何か……」

「紅茶で流し込むんだ仁！ムギっ！」

「はい仁君っ！」

「すみませ……紬先輩……っで熱っっ!!！」

「淹れたてホヤホヤだからな」

「お前ら……」

「やれやれですね……」

っでな感じで、通常運転で軽音部は進行中です。

いやいや、そんな何も考えてないわけじゃないさ！誰もが心の中では少なからずの不安を抱えてはいるよ？

でも、んなこと今言っただって何にもならないし。俺たちじゃどーしようも無いし。

漣先輩じゃないけど、俺達は今俺たちが出来る事をやるだけだ。

だから、俺達はなるべくいつも通りにお茶飲んで……練習してっというワケ。

もちろん、普段よりかは練習に割く時間は圧倒的に多いんだからね？六割り増しっでトコかな。

けど、だんだんと時間にも余裕が無くなってきた。

軽音部のライブの事はっかし考えてたけど、クラスでの出し物もあるもんね。

俺と梓はもちろんの事、先輩達も自分のクラスの出し物で忙しそうだ。

ちなみにウチのクラスは無難に喫茶店をやるみたい。……俺全然知らなかったけども。

教室をオシャレなお店に変えるべく、放課後も俺達はちゃきちゃきと作業を進めていく……。

「……………これを俺に着ると!?!」

「そ。カワイイでしょ」

島田さんは俺の前でケロリと答える。

三浦仁、現在絶賛絶句中。

現在俺が手にしているのは、ピンクのウサギのきぐるみ。

島田さんは、このキャワイらしい代物を俺に着るとおっしゃる。

ははは……………ジヨードンだろ……………。

ウチのクラスの喫茶店はどーやらアニマル喫茶店っつー変り種らしい。

喫茶店をやるう!

でも普通の喫茶店じゃつまらないよね。

動物をモチーフにしたらどう?

それいいね!

でも、学校に動物を連れ込むわけにはいかないよ……………。

なら、自分達が動物になればいいんじゃない?

天才現るっ!

……………という、安易な発想から生まれたんだとか。

俺は島田さんの天辺で結んだ薄茶色の髪の毛を恨みがましく見る。くそつ。楽しそうに左右にピヨピヨ揺れやがって。ちなみに顔を見ないのはまだそれはド恥ずかしいから。さすがにこの三浦仁。女の園に放り込まれて早半年。女性に対する免疫だつて、ちょこつとついてきたのよ？

「ただど……それはまだハイレベルってもんだ。」

「……どした？」

「いや……なんでもないです……」

島田さんの気の強そうな目で睨まれ、俺は思わず萎縮。……情けない。

「ユリー。三浦が着たくないってゴネてるよーっ」

「これ見てゴネない方がおかしいと思うんだけど……」

島田さんに呼ばれ、長めの黒いポニーテールを揺らしながら野村さんがコチラにやってきた。

野村由梨さん。このアニマル喫茶の発案者。かなりの動物好き。企画の発案者という事で、学級委員長と共にクラスの作業を取り仕切ってる。

「えーっ。三浦君コレNG？」

「YES。……つか、俺厨房の方に回してくんね？そっち方面なら一応人並みには出来るから」

「うん……でも厨房の方はもう人手が足りてるんだよなあ……」

「あれ？前は人手が足りてないって言ってなかったっけ？」

「うん。でも、憂に厨房係を全部任せてみたら、なんか全部綺麗にまとまっていたの」

「おお……流石憂だね……。……って、アンタなんか所々アウトじゃない？」

「え？そう？」

「うん。そう」

「えー……」

……なんでだろう。さっきまでは俺が当事者だったのに。今じゃ綺麗に蚊帳の外だ。

このままじゃ事態は進展しなさそなので、俺は思い切って言うってみる事に。

「あゝ……結局俺はコレを……」

「着て接客してね」

「マジすか……」

ひどいよ野村さん……。

島田さんは言っ。

「少ない男子を裏方にまわすワケにはいかないでしょ？もつと前に出てくれなきゃ」

「縁の下の力持ちになりなさいって、おじいちゃんが言ってたんだけど……」

「つまらない言い訳しなくていいから。さっさと着てみてよ」

「えっ？今着るの？その必要は無いんじゃない？」

「見てみたいからっ！」

「ちよっ、テキトーすぎないっ？」

「あ、でもホラ、瀬川君はもう着てるよ？」

野村さんが指差す先には、鮮やかな黄色のキツネの着ぐるみを着た大が立っていた。

さすがに大もちよっ不機嫌そうな顔だ。だけど、中々似合ってるから不思議。

そして周りで女子が「キャワイイッ」とか言ってるのも不思議。……クソッ。

「さあ、三浦も早く！」

「アレ見ると余計に着れないんだけど。ハードル高いよ……」

「つべこべ言わずにさっさと着る。男でしょーが！」

島田さんに頭からウサギの着ぐるみをかけられ、俺はこれ以上の抵

抗を諦める。

あゝあ、なんてこった。こんなカツコで人前に入るだなんて……。

俺は制服の上からそれを着てみる。割とあったかい。へえ。

最後にウサギ特有の長い耳付きフードを被って完成。顔以外全てがカワイイウサギに大変身だ。

島田さんは俺の全身を眺めてから言う。

「なんだ、意外と似合ってるじゃん」

「そりゃどーも……」

「おやおやウサギさん。そんなトコロで何してんの？」

俺が島田さんに無表情でお礼を言うと、後ろからキツネがやってきて、ウサギ耳を引っ張りながら言ってきた。

「あらキツネさん。随分とご機嫌が宜しくなった様で」

「ん〜。なんか慣れた」

「順応早っ!」

「だってさ、なんかコレあったかくね？」

「あ、それはなんとなく分かるかも」

「しっかし……妙な光景だなオイ」

大の言う通り、教室には俺達と同じような着ぐるみを着た接客係の生徒達がたくさん。

まあ。なんてファンシーな。

「おっ。二人ともく中々似合ってるじゃん」

後ろから声をかけられたので振り向くと、焦げ茶の犬の着ぐるみに身を包んだ純と、グレーの猫の着ぐるみの梓が。

純は楽しそうな笑顔を浮かべているが、梓は顔を赤くして若干俯いてる。

分かるぜ、その気持ち。けどかなりの似合い度だぜ。ベストオブアニマルだ。

俺は心の中で梓にワケの分からない賞を授与する。

「やっぱし梓は……猫なんだな」

隣で大が俺の言葉に賛同するようにうんうんと首を縦に振る。

「もーっ！からかわないでっ！」

俺は梓の怒りを静めるように言う。

「別にからかつてるつもりは無いんだけどな」

「うんうん。似合ってるし」

「え？そう……かな？」

「ねえねえ、アタシは？」

「え？純も似合ってると思うよっ」

「なんか投げやりな感じじゃない？」

大と純が戯れているのを眺めていると、梓が俺に言ってきた。

「でも、意外と仁君ウサギが似合ってるね」

「どうもって言いたいところだけど、意外が付いてるからなあ……。まあ、分かっちゃいたけどさ」

「そう言わないでって」

「しかし、こんな姿で人前に入るなんて……。大丈夫かな俺。梓は？平気なの？」

「私は……」

「そこは文化祭のノリってヤツで誤魔化すのだっ！」

「おおっ！？純！びっくりさせんなよ！」

「あはは〜ゴメンゴメン」

純はヒラヒラと手を振ってあやまる。

大は言った。

「ま、慣れれば楽しいんじゃないの？……慣れれば……な」

「慣れるかな……」

梓の言葉に、俺と大はそろってため息をついた。

俺は言う。

「つか、こんな格好、知ってる人にはなるべく見られたくないよな
」

「梓！。仁！。居るかーっ？」

「っ!?!？」

突然教室内に律先輩の声が響いたので、俺と梓は身を強張らせて、サツと机の影に転がり込む。

しまった！変なフラグを自ら立ててしまった！今はとりあえず、隠れてやり過ごそう……。

なにやってんだ？と、大が覗き込むのを、俺はシツシツと手を払って追い返す。

つか、狭いっ!?!

（梓！押すなって！）

（押してないよっ!?!ここが狭いだけっ!）

（つか、何で同じトコに逃げ込んでるんですか!?!アッチの方に隠れてちょうだいよ!）

（とっさの事で、そこまで考えられなかったの!?!あっ……先輩達が入ってきた……）

梓の言葉通り、律先輩の後ろから澁先輩と紬先輩が教室に入ってくるのが確認できた。

純と大は挨拶をする。

「こんにちは」

「ああ、こんにちは」

「しっかし、すっごいなあ……遷が喜びそうな所だ」

「アニマル喫茶です。是非いらして下さいねっ」

ちやつかりと宣伝をする純。グッジョブと純に贅辞を送る島田さんの姿も確認できた。

「夢の国みたいね」

「まさしくそうだ……！絶対ここ回るっっ！」

「い鼻屑にどうもっっ」

なんて会話を交わす先輩達とアイツ等。ここで、ついに律先輩は言う。

「ところで、仁と梓は？」

「あれ？さっきまでそこにいたんだけど……？」

純はそう言いながら、額に手をかざして教室内をキョロキョロと捜索し始める。

大はチラチラとこっちの方に視線をやってくる。俺と梓は必死のパントタイムで、黙っている。という思いを伝える。

けど、中々伝わらない！くそっ！なんて感受性の鈍い奴っ！

事もあるうちに、だんだん大は腰を曲げ、顔を下げ、コチラの方を凝視し始めてきた。

バツカ！オマエ、んな事してたらすぐバレるに決まってるだろうがっ！

案の上、紬先輩が大のマヌケな行動にすぐ気づいてしまう。

「大君、何見てるの？」

「えっ？あーいやその……」

なんて、大は慌てて取り繕ったけど、もう遅いんだよお！

紬先輩、ばっちしコッチの方覗き込んでるしっ！ああ、律先輩と漣先輩までっ！

これはマズいと、俺と梓は僅かに存在する完全死角となるスペースへ二人して体を押し込む！

……なんて芸当が出来るワケもなく。

ガンっと、鈍い音が一つ。

「あ痛っ！」

頭に走る衝撃。

俺はうつかり声を上げる。その時に頭を抑えたせいで、俺は肘で梓を押ししてしまう。

「えっ？ちよっ、危なっ……」

梓は俺に警告をするが、もうそんなの遅い。

俺達は机の影から二人そろって……。

「え？何？」

「だから、危ないって！」

「ちよっ！袖を掴まないでええ！ああああああ………」

雪崩込むようにはみ出してしまった。

……あーあっ……。

俺と梓は周りの視線を完全無視して立ち上がると、着ぐるみに付いたホコリを払う。

で、先輩達を見て言った。

「……なんですか？」

顔は真っ赤だったけれども。

「ぶっ！に……似合ってるぞ。梓〜仁〜」

「その反応が嫌だったから隠れていたのにつ！」

「二人ともホントに似合ってるわよ〜」

「ムギ先輩もやめて下さいっ！」

梓も顔を真っ赤にして言った。

律先輩は頭の上で腕を組んで言う。

「いや〜。部室行くついでに、ちよっとなんて覗いてこっかな〜なんて思

ってたら……。いや〜いいもんが見れた!」

「仁! 梓! 写真撮らせてくれ!」

「それだけはカンベンして下さい澁先輩っ!」

「別にいいんじゃないの?」

「大君は黙っててっ!」

くっそ、大め……。余裕ぶっこきやがって……。誰か! 誰かヤツに天罰をっ!!!

……。な〜んて思ってたら、ホントに大に天罰が下る。……。澁先輩の手によって。

澁先輩はキラキラした顔で、大の腕をガツと掴むと、物凄い勢いで言った。

「折角だから……。瀬川君と鈴木さんも……。一緒にっ!!!」

「えっ、え〜っ……。! その展開は予想していなかった!!! 是非ご勘弁願いたいのですけれども!!!」

「アタシはいつこうに構わないけど……」

「純……。私は時折純の事が羨ましくなるよ……」

「え? どして?」

純先輩と律先輩は言う。

「いいじゃない！皆で撮れば！」

「そつだぞ〜。」赤信号 皆で渡れば 怖くない” って言うじゃないか！」

「妙な格言持ち出さないで下さいよ！」

俺達は必死の抵抗を試みる。

すると、ついにクラスメイト達までもが俺達の人間としての尊厳を売りに出しやがった。

「ほら！梓も、瀬川君も三浦君も、往生際悪いよ〜っ！」

「先輩の言う事は聞くもんだよ！」

「いいじゃん！写真の一枚くらい！」

お、お前らああ……信じていたのに……。

俺の隣で、大は悟ったような表情を言う。

「仕方が無い……か」

「大い！？負けるんじゃないやねえまだ希望はあるっ！」

「いや……ここまできたら……腹括ろっぜ……」

大い！いい！！チクシヨおなんてカツコイイんだオマエはよお！！
オマエがモテるのもなんとなく分かった気がするぜっ！！

さあ、そーと決まったら、心が変わらない内に……。

Vサインよしっ！笑顔よしっ！さあこいっ！！

「はい、チーズっ！」

「あああああ！待ってやっぱり恥ずかしい！」

「あ！コラ逃げんな仁！」

「っ！？その手を離してくれ梓っ！」

「自分だけ逃げるなんて……そんなの許さないよっ……！」

「笑顔がっ！笑顔が怖いよ梓っ！」

「そんな恥ずかしがることないんじゃない？」

「純……人の価値観ってもんは、それぞれで異なるもんだぜ……」

「って逃がすかつ！」

「くそっ！俺の”なんか名言っぽい事言っつてエスケープしちゃえ大作戦”を阻止するとは……やるな！大！」

「いいかげん腹決めなって！男だろっ？」

「男だからこそ……だよ」

「あっ、また逃げるかつ！」

「梓ナイスっ！」

「まかせてよ純っ！」

「なんて防御力だ……尊敬に値するぜ梓さん！」

「何を言ってるんだか……」

「梓っ！気を緩めちゃ駄目っ！」

「はっ！しまった！」

「はっはー！チヨロイぜお嬢さんっ！って何だ!？」

「考えが甘かったな。仁」

「くそう！今度はオマエが大っ！」

なんて騒いでるうちに、澁先輩はかなりの枚数の写真を撮ってたみたい。

で、しかもクラスの皆もいつの間にか携帯で写真を撮ってたみたい。この後しばらくの間、俺達のファンシー 動物着ぐるみスタイルの画像を待ち受けにするのがブームとなり、俺達は辛い日々を過ごす羽目となる。

こんな事やってますけれども……学園祭まであと僅か!!

全員でライブするって、唯先輩は約束した。

絶対にそれは守って貰わなくっちゃな!

第二十二話 信じてるからこそ、ふざけられるワケで。(後書き)

おお「ってなワケで、二十二話でしたー」

仁「シリアスの欠片もねえな」

おお「いいじゃない。楽しければそれで」

次回でついに学祭本番に入りますー。
なるべく早く書ければいいけど……。

第二十三話 実力はやっぱり評価されんのだ。(前書き)

学園祭その4ですー。

ちなみにこの話に登場する男子、最喜さんと明くんの名前の読みはそれぞれ、

”さいき”と”あかる”です。

モブキャラのクセに読みづらい名前つけてすみません……。

第二十三話 実力はやっぱり評価されんのさ。

慣れ親しんだ教室。

若干薄汚れてしまった壁は、ピンクや黄色等の明るい色で装飾されている。

机は四つずつ合わせられて、上に可愛らしいテーブルクロスがかけられていて、あの剥き出しの木の質感を隠している。

普段のシンプルな学び舎のイメージは一層され、全体的にポップなイメージへと変貌を遂げた。

今日は学園祭当日。俺達の……放課後ティータイムのライブ本番。そして、唯先輩は……。

「きつと……来る」

「……うん」

まだ……姿を見せない。

開店前の教室。

俺達一年二組の生徒全員は、教室の真ん中で円陣を組んでいた。

第一シフトの人達は、それぞれの衣装に身を包んでいる。

ちなみに、俺は第一シフトなので、例のキュートなウサギスタイルとなっています。

改めて言うけど、恥ずかしいな……。

隣には大と梓。二人とも同じ様に既に動物へと変身済みだ。

「いよいよ学祭本番です！皆が今まで頑張ってきたおかげで、今日

を迎える事が出来ましたっ！」

イエーイと湧き上がる拍手と歓声。
場の雰囲気盛り上がる。

「今日は一日、楽しんで頑張りましょうっ!!」

皆がオーツと叫ぶとともに、輪の中心に向かって一歩踏み出す。
ビリビリと教室が揺れ、それが開幕の合図となる。

「千尋ちゃん！そっちお願い！」

「まっかせてっ！」

「あれ？看板どこだっけ？」

「そっちにしまっただけあるよーっ」

「皆頑張っってっ！」

「交代時間は厳守で頼むよー」

よし、と雑念を振り払って、接客マニュアルでもおさらいするかと
周りを眺める。

俺のちょうど真後ろ。教室の隅で梓が一人立ち尽くしていた。
ちよっと心配になったので、声をかけてみる事にする。

「何ボーツとしてんだよ？もう開店しちまっぞ」

梓は俺の方を見て言う。

「うん、ゴメン。でもやっぱり唯先輩の事が心配で……」

「もう開店しちまうぞ？そろそろ切り替えないと」

「うん……分かってるんだけど……」

「……学園祭をやってるのは俺達だけじゃない。他の皆も、何日も前からずっと準備してきたんだ。それを、俺達の感情一つでぶち壊しには出来ないだろう？だから、雑念は捨てる。今に集中するんだ」

「……………うん……………」

「以上、前にどこかの本屋で立ち読みした本からの引用でしたっ！」

「えっ！？私今凄い感動してたのに！ショック！」

ちなみにその本の名前は、『コレでアナタも頼れる男！女性を勇気付ける100の言葉』ですっ！

流石に本のタイトルは梓には教えないでおこう。俺は言う。

「たとえいかなる方法だろうと、他人に感動を届けられる人。そういう人に、私はなりたい」

「ひょっとしてそれも……」

「立ち読み本からの引用ですっ！」

「なんでそこでドヤ顔？てゆーか、立ち読みとかお店に凄い迷惑！」

「あの時の店員さんは手強かった……。やたらと俺の周りを清掃してくるんだもんな。四時間半も」

「買いなさいその本！」

「諦めたらそこで終わりだぜ。本の世界に集中すれば、店員さんの舌打ちも全く耳に入ってこないのさ」

「聞いているじゃん。認識してるじゃん舌打ちの音」

「……………」

そこに気付くとは……。流石だ。梓。

あの時は辛かったな。自分の行動が原因とはいえ。涙目になっちゃったな。

ちなみに、ホントにそこから離れなかった理由は、その涙目のせいだったりもするんだよね。

「でも、まあ……………」

梓は俺に顔を向けて言う。

その表情は、明るい笑顔。

「なんか元気出た。ありがとう」

「いえいえ、お安い御用です」

おお、凄い効果だぜあの『コレでアナタも頼れ（以下略）』！！
やっぱし買っとけばよかったかなあ。

今更ながら、ちょっとばかり後悔。

「ネズミさんコツチ来て〜」

「はいはいただいまっ!」

「イヌさ〜ん、注文いいつすか?」

「コーヒーまだー?」

「すいませーん、水おかわり頂けますー?」

「ちょ、ちょっと待って下さい順番に……」

やばい、忙しい。中々忙しいぞ。

教室内は多数のお客さんでいっぱい。外には既に順番待ちの列までできてる。

開店直後はそんなに客はいなかったのに……なんか段々増えてきて増えてきて……。

ま、原因は分かりきっているんだけども。

憂の厳しう的確な指導により、ウチの店の料理はそこらのクラスよか三段階はグレードが高い。

今年度桜高学園祭内においてトップの水準を誇るとも思われる。いや、実際トップだと胸を張って言えるな。

つか、学祭で出すメシじゃないよこんなの。全く、憂は万能だぜ。

そのことが、どうやら瞬く間に来場者達の中で口コミで広がっていったらしく、現在の盛況っぷりになっているらしい。

もちろん、店全体のポップな雰囲気小さい子供のハートをガツチリ射止めたつてのもあるけどね。

そんなこんなで、店内はお客さんとスタッフの声で埋め尽くされる……。

「キツネさん、写真とつてもいいですか？」

「えっ？て、店内での写真撮影等は禁止となっております……」

「あれ、そんなルールあつたけ？キツネさん」

「イヌう！余計なことをお！」

なんつーなんとなく腹の立つやり取りを聞きながら、俺は……俺は……。

「おおっ、意外と似合ってるじゃブツ！！……ねえか仁」

「ああ、正直驚いたぜ。お前がこんなブホッ！！……やべえ……耳が……！耳がかたつぽ曲がってる……！」

「バツカ、オマエ余計なこと言ブフウツ！」

「やめろよオマエら！仁だつて必死に頑張ってるじゃ……やべえ、尻尾フワッフワじゃん……くく……」

「どうせ笑うんだつたら堂々と笑え！俺を指差せ！腹抱えろ！床を転げまわつて笑つてみせろよよおおお！！」

むさ苦しい男共相手に爽やかに接客をしている訳であります。

四人がけのテーブルに腰掛けるは俺の右前から順に最喜、明、雄平、智治。五組と三組のメンバーだ。

一足早く笑いの発作から立ち直った最喜が涙目で俺に聞いてくる。

「はー、いやー。笑ったわー。……で？メニューは？」

親切に対応する俺。

「水一杯三万八千円になります」

「高っ！！キャバクラ？ここキャバクラだっけ？」

「先程そちらのお客様が私めの尾を”おさわり”したため、三万円の追加料金を頂く計算となっております」

「智治う！オマエだよな触ってたの！オマエが払えよ三万円！！」

「またまた〜。お優しい雄平さんはそんなこと俺にさせる気なんか無いクセに〜」

「つか、それでも水一杯八千円の計算になるんですけど……」

明の問いに、俺は尚も懇切丁寧に答える。

「うちのシェフが厳選した”桜高印の水道水”ほのかな消毒液の香り〜”となっておりますので〜」

「そこまで豪華絢爛な修飾が付いた水道水は初めて聞いたなボク！！」

最喜が目を丸くして驚く。

……ふう、やれやれ、そろそろカンベンしてやるか。
俺は懐からメニユー表を取り出す。

「ホラ、こん中から選べ」

「流石仁さん！やる時にはやる男だぜ！」

「いったん突き放してからのその優しさ……まさかツンデレキャラを
目指しているな仁さん！」

「旨そうな料理名だなあ」

「料理名を見て涎を垂らせるオマエの感受性に俺は今感心している
よ」

上から順に最喜、智治、明、雄平の感想。まさに四者四様。って、
こんな言葉はないのかな？

俺はひとまずそこを後にしようと思いついて背を向けるが、ふと何かを思い出
して再び四人の方を向き直る。

「言い忘れてた。一人頭五千円は吐き出すまで帰さないからそのつ
もりで」

「この一ヶ月俺に水と塩で過ごせと言っのか！？」

と明。

「貴様俺達を破産させる気だな！？」

と智治。

「汚い！見た目はこんなにメルヘンなのに、やり方が汚い！」

と雄平。

「腹黒っ！ピンクウサギ腹黒っ！！」

と最喜。

ここでどこからか俺を呼ぶ声が。

「ウサギさーん！お客さん席に案内してあげてーっ！」

「はいはいりょーかいしましたー」

「「見事にスルーされた！」」

という四人の悲痛な叫び声を俺は無視。いやだってさ、ホラ。……
呼ばれたし。

心の中で誤魔化しつつ、羊さんに呼ばれたので、入り口の方へ向かうと……。

「先輩達！」

「よっ、中々盛況じゃん」

「皆頑張ってるわねー」

「はああああ……なんて素敵なたこなんだ……」

俺は先輩達を迎え入れ、席へのご案内。

「え〜と、じゃ、ご注文は？ウチの料理は旨いですよ。監修・平沢憂ですから！」

「そうそう、結構評判になってるんだよね〜ここ」

「憂ちゃんの料理なら間違い無しね〜」

そんな会話を交わしつつ、俺は先輩達から注文を取っていく。紅茶三つにシヨコラケーキにメープルホットケーキにミニチョコパフェか……。

あ、念を押しとくけど、全部手作りだかね？信じられないだろうけど。

しかもお値段は非常に財布に優しく設定されているし。全く。憂は流石だぜ。

目が回るほど忙しかったけど、俺達はなんとか自分のシフトを終え、次のメンバーとバトンタッチ。

ようやくこの着ぐるみともお別れってワケだ。あれ？名残惜しい気がするぞ？何でだ？

……まあいいや。とりあえず、一息つこう……。で、次だ。

「二人とも、頑張つて！絶対に見に行くから」

「心配はいらないさ、なんとかなる。神様って奴は、そんなに残酷じゃないぜ」

「お姉ちゃんは絶対に大丈夫。安心して！」

純と大と憂に送られ、手を振ってそれに答えながら俺は梓とともに部室へと向かう。

ここまでくると、流石に不安が大きくなってきた。けど……。けど、絶対に大丈夫だ。……大丈夫……。だよ。

俺達は部室に戻って先輩達と再び合流。

一度演奏の流れをおさらいし、そろそろ講堂の方に事前に持っていく機材等に移すことに。

こういう力仕事は男である俺の腕の見せ所かなと意気込んでいたら……。

「……細先輩、重くないんですか？」

「ええ、全然平気よ〜」

笑顔で俺の問いに答える細先輩。なんて涼しい顔なんだ。やばい、負けたわ完全に。

俺達が今運んでいるのはアンプ。男の俺でも結構重い。講堂まで持つてくのは中々キツイ。……のに。

細先輩は汗一つかかずに鼻歌交じりでそれを運んでいる。しかもコレが部室と講堂三往復目。

俺は既に両腕上腕二等筋が限界突破しているつてのに。やっべ、絶対明日筋肉痛。

近頃のお嬢様ってのは力がお強いんでしょうか。それとも俺が貧弱なだけ……？

どしよ、筋トレしようかなあ……。それともジムに通おうか……。

つとまあ、そんなカンジで心に若干のダメージを負いつつも、無事

に運ぶべきものを全て運び終える。
後は部室で待機。唯先輩を待つだけ……か。

俺と紬先輩は部室へと戻る。

道中、俺は紬先輩に聞いてみることにする。

「紬先輩、力持ちなんですね」

「うん。普段からいざという時の為にとって、力を蓄えてるの！」

両拳を握って頑張りますポーズをとる紬先輩。

いざって時って……いつよ？今？今かな？

俺は苦笑いをしつつ、携帯で現在時刻を確認。……十二時半ちよつと前か……。

思わず弱気な発言をしてしまう俺。

「唯先輩、間に合うでしょうか……」

「携帯には、絶対に間に合わせるってメールは来てたけど……」

うーんと唸りながら、俺は頭をガシガシと掻いた。

「初ライブが一人欠けてるってのも……後味悪いなあ。なんとかして
も間に合わせてもらわないと」

「唯ちゃんは大丈夫よ」

柔らかな笑顔で、でもきつぱりと俺に言い放つ紬先輩。
……だよな。散々梓に説教しといて。俺……情けねー。

「うん、そうですねー！」

「そつよ〜!」

その後も適当な日常会話をしつつ、俺達は部室前に到着。扉を開いて中に入る。「お疲れー」と、出迎えの音がする。

後は……ひたすら……待つだけだ。

第二十三話 実力はやっぱり評価されんのさ。(後書き)

おお「いよいよ次で学園祭も終わりかな」

仁「次話の目処は立ったのか？」

おお「なんとなく。だけど、やっぱり字数が足りなくなるかも……」

仁「この話と繋げりゃ良かったのに」

おお「それだとちょっと長くなっちゃうでしょーが。個人的に一話につき、最低四千文字はノルマだから、そこに届けばおっけーなわけ」

仁「そーなんだー」

第二十四話 有言実行ってかっこいいと思うなあ。(前書き)

ってなワケで、テストも無事終了ー！

……いや、無事……か？

第二十四話 有言実行ってかっこいいと思うなあ。

俺たちは待つ。

ただひたすら唯先輩を待つ。

しかし、未だその姿は見えない。

……まったく、どこまでもつたいぶれば気がすむんだか。

暫しの沈黙を破ったのは律先輩。

「一回おさらいしとくか？唯抜き演奏も」

先輩はスクールバックをドラムスティックで軽快に叩きながら言った。

透先輩は少し考えてから、ため息を一ついれて言う。

「仕方ないな」

「嫌です」

透先輩の言葉に被せるようにして言うのは梓。

「やっぱり嫌です！このまま唯先輩抜きで演奏しても意味ないです！」

梓の言葉に、俺たちは皆うつむく。

そうして、再びの沈黙が訪れる。

次にこの沈黙を破ったのは、音楽室の扉が開く音。

俺たちは一斉に扉の方向を振り向いた。

唯先輩の登場を期待していた俺達の気持ちは再び下がる。

……なんて言い方すると、たった今現れた真鍋先輩に申し訳ないんだけどね。

五人の視線の集中砲火を浴び、真鍋先輩はキョトンとした様子で言う。

「どうしたの？」

なんでもないと俺たちが伝えると、真鍋先輩は報告を始める。

「ステージは十分おしだけど、予定通り、十三時には講堂に入っ

「……分かった」

澁先輩の言葉を聞くと、真鍋先輩は持っていたクリップボード上の用紙にサラッと何かを書く。

そして、温かみのある笑顔で俺たち五人の顔を見渡して言う。

「全員、揃っているわよね」

真鍋先輩の言葉に、俺たちは微妙な表情を浮かべる。

……全員……揃ってないんだよね。

しかし、次に真鍋先輩が言う言葉は、事実と相反するものだった。

「軽音部、出演者全員準備完了……と」

「和……」

湊先輩がつぶやく。

ここで真鍋先輩は再び俺らを見渡すと、ある話を始める。

「昔ね……」

それは、唯先輩と真鍋先輩の子供の頃の話。

小さい頃、真鍋先輩が花摘みをしている数メートル後ろの方で、唯先輩は一人黙々とザリガニ釣りをしていたらしい。

しかも、ちゃんと糸とエサを使ってとってたんだとか。

幼稚園児のくせに、そこそこはなんかしつかりしてんなあ。

暫くそうしていると、後ろの方から唯先輩の声が聞こえたんだって。

「もういっぱいだあ！」

そう言つて唯先輩は、ザリガニで一杯のバケツを持って、フラフラと真鍋先輩の横を抜け、どこかへ行つては殻になったバケツを持って、またザリガニ釣りに興じてたんだと。

……つかー。幼稚園児の女子がザリガニ釣りつて……。ズレてんなあー唯先輩。そんな時から。

で、日も暮れて真鍋先輩は自宅に帰ろうとする時も、唯先輩はまだ黙々とザリガニをとっていたんだとか。

「ゆいちゃん！」

幼き頃の真鍋先輩がいくら呼んでも、全くそこを離れなかったらしい。

まるで、真鍋先輩の声が聞こえてすらいなかったかのように。

そこであきらめて真鍋先輩は一人で家に帰ったんだって。

暫く自宅の今でテレビを見てたら、お母さんの声が聞こえてきたんだそう。

「あら唯ちゃん、またまたいらっしやい」

「うんっ！」

そんな声と共に、唯先輩は真鍋先輩がテレビを見ている居間の横を生き生きと走り抜けていき、そして直ぐに外へ出て行ったらしい。

気になった真鍋先輩は、唯先輩が行った所に行ってみる事にしたんだってさ。

そこはお風呂場です。湯船の中を除くとそこには……。

「湯船一杯に詰め込まれたザリガニの山。思わず身震いしちゃったわ」

「ひいっ！！！」

「……なんだそれ」

と、話を終える真鍋先輩と光景を思い浮かべ、悲鳴を上げる澁先輩。

そして素直な感想をもらす律先輩。
俺もその光景を頭に浮かべて思わず身震い。
……最早ホラー映像だぜ……。

「昔からヘンな人だったんですねえ……」

コラ梓。

それ、唯先輩に中々失礼よ。

心の中で梓を注意しつつ、実は俺も梓と全く同じ事を考えていたのはここだけの秘密。

紬先輩は聞く。

「でも、なんでそんな話を？」

「夢中なことがあると、唯はそれだけしか見えなくなるってこと」

真鍋先輩は答える。

「きつと、風邪の事なんか忘れちゃうわ。だから……」

金メダル級になったであろう真鍋先輩の名言を遮るは扉の音。

そして、そこから出てきたのは……。

「チヨリーツ」

山中先生だった……。

その後、律先輩から先生に「空気読め！」とお叱りの言葉が飛ぶが、まあ……当然だろ。

「てゆうか今まで何やってたんだよー。皆大変だったのに」

「あら、もちろんブーツと過ごしていたワケじゃないのよ」

律先輩の問いに、山中先生は答える。

「寒さの事を考えて、あの浴衣の防寒バージョンを作っていたのですっ!」

と、キメ顔キメポーズで言う山中先生。

……そのやる気を他にまわしてほしい……。

「そして、これがその衣装ですっ!」

と、先生は音楽室の入り口の方へと手をやる。

皆の視線を受け、扉の影からこっそりと登場したのは……。

「失礼しまあーす……」

あのピンク色のミニスカ浴衣に身を包んだ、唯先輩だった。

「唯っ!」

「唯先輩っ!」

律先輩と俺の声に続いて……。

「来てたんなら真っ先にココに来い!」

という澪先輩の声。

まったくだ。どれだけ心配したと思ってるんすか。

「ごめんなさい……」

唯先輩は苦笑いで誤る。

すると、唯先輩は後ろの梓を見て言う。

「あずにゃん？」

皆が振り返ると、梓は涙を堪えて顔を真っ赤にしていた。

梓は言う。

「最低です……。こんなに皆心配してたのに……。最低ですっ!!」

そう言って梓はくるっとこちらに背中を向けてしまった。

澪先輩は唯先輩に言う。

「ちゃんと埋め合わせしろよ。梓が一番心配してたんだから」

「えっ!?!? そうなの?」

唯先輩はあたふたしつつも、梓の名前を呼びながらその本人のもとへと寄っていく。

「まったく駄目過ぎです。大体風邪を引いた時に……」

梓の言葉を遮るように、唯先輩は梓を背後から優しく抱きしめる。

おお……。なんと感動的な……!!

その状態で、唯先輩は梓に言う。

「あずにゃん、ごめんね。心配かけて……」
言葉を続ける唯先輩。

「私、精一杯やるよ。皆と一緒に。ね？」

再び顔を背ける梓に、唯先輩は言った。

「最高のライブにするから」

梓は暫く黙ってから言った。

「もっ……」

「特別ですよ……？」

梓のその言葉を聞いた唯先輩は、お顔をパアツと緩ませると、「仲直りーっ！」の声と共に、梓に対して熱い接吻を交わそうとする……！

思わず叫ぶ俺……！

「ひゅーひゅーっ……」

……あ、唯先輩ビンタ食らった。
やっべ、梓めっちゃこっち睨んでる。
あ、梓さん……？めっちゃ怖いんですけども。

「本当に、私の事、心配してたの……かな……？」

左の頬に真つ赤なもみじマークをつけた唯先輩が澗先輩に聞く。

「多分……」

澗先輩が答えたすぐ後。

梓が少し微笑んだのを俺は見たような気がした。

「さ、もう時間よ。移動して」

真鍋先輩の声と共に、高らかに「おーっ！」と叫ぶ俺ら六人。気合十分！さあ、ライブだあっ！

……しかし、物事はそうそう上手くは進まない。唯先輩は当たりを見渡してから言った。

「ってあれ？ギータは？」

「えっ？」

律先輩と俺の声がハモる。

「ここに置いてったよね？」

え？それなら……。

俺は梓に確認をとりつつ、唯先輩に事を伝える。

「憂が持って帰った……。よな？」

うん、と首を縦に振る梓。

唯先輩は、何かを思い出すように上を向く。

まあ、結果は唯先輩の表情が段々青くくなってきた事を見れば一目瞭然だ。

「そうだったあーっ!!」

やっちゃったよこの人おおおお!!!

「どーしょあー……」

そんな唯先輩に、救いの手が……。

「仕方ないわね……」

山中先生だ。

「コレ……使いなさい」

柔らかな笑顔で、山中先生は自らのギターを唯先輩に手渡す。

それは白く、簡単に言つと逆V字型をした特徴的なギター！

唯先輩は聞く。

「ギー太じゃなくていいのか？」

「うん……。てゆーか……」

唯先輩は一度唸ってから、言葉を続ける。

「ギー太以外の楽器弾けない……」

涙目で宣言する唯先輩。

でしようねー。唯先輩確か軽音部入る前まで音楽経験0ですもんね。種類の違うギターなんて、最早別の楽器ですよねー。

……ふう。仕方が無いな。

俺は親指で自分の胸を指差して言う。

「俺が唯先輩んちまで走ってとってきますっ！」

律先輩は言う。

「え？大丈夫か？」

「ノープロブレムっ！」

紬先輩は言う。

「ライブには間に合うの？」

「それはちょっと自身無いですけど、唯先輩が行くよりも数倍は早く戻ってこれると思います」

「あれ？でも仁君……」

「なんだい梓ー？」

困惑顔で聞いてきた梓に俺は爽やかスマイルで応答する。

「仁君って、唯先輩の家行った事あったっけ……？」

……………あ。

分かる。分かるよ。

今俺の顔面色は真っ青を通り越して真っ白になってるハズ。

しかも。額には大粒の汗が……。あれ、おかしいなあ。もうそんなに暑くはないのになあ。

「知らないんだな……唯の家」

遷先輩の言葉に、俺は満面の笑みでコクコクを頷いた。

そーいや、憂がウチに来た事はあっても、俺が憂んち、つまり平沢家に参上した事はまだなかったわ。

やべっ、俺のうっかりさん。てへっ！

……………はあ……………作戦失敗だ……………。

哀れに思ったか、唯先輩が俺に言う。

「仁君。ありがとう。でも、大丈夫。私、自分で取りに行くよ」

「それじゃあ間に合わないんじゃないか？」

「下手すれば、ライブの時間が終わっちゃうかも……………」

遷先輩と梓の不安意見をものともせず、唯先輩は真っ直ぐ俺たちを見つめて言った。

「それでも私。自分で行きたいんだ。私の足で、走ってギター太を迎えに行きたいんだ。ライブにはちょっと遅れちゃうと思うけど。でも、私……………絶対に皆と演奏するから。絶対に間に合わせるから」

「唯……」

「先輩……」

「もう散々皆に迷惑かけちゃったけど、もう一つだけ私のワガママを聞いてくださいっ！」

そうやって唯先輩は俺たちに頭を下げる。

そうか。

もう唯先輩の中では、覚悟が決まってるんだ。憂も言ってたっけ。

『お姉ちゃんはやる時にはやる人なんだよっ』

うん。俺もそう思うよ。

それと、さっきの和先輩の話。

『夢中なことがあると、唯はそれだけしか見えなくなるってこと』

唯先輩の瞳は全てを物語っている。強い、強い決意と希望の光が燃えている。

本人が間に合わせると言ってるんだ。絶対に間に合うに決まってる。思えば、風邪を引いてからの唯先輩だってそうじゃん。

どんなに遅れようが、どんなにギリギリだろうが、それでも絶対に唯先輩は間に合わせたじゃん。

俺は静かに口を開いた。

「まー、いいんじゃないですか？ここは唯先輩に任せてみましょう」
皆は何かを考え込んだ様子で、何も言わない。
俺は続ける。

「自分のミスは、自分でなんとかしなきゃ。それに……」

「それに、絶対に大丈夫だと俺は思います。唯先輩は、やる時にはやる人ですから」

一度息継ぎして、一気に言い切った。
そう、絶対に大丈夫だ。

「そう……だな」

澪先輩がポツリと言った。
唯先輩は唯先輩の肩を叩く。

「うう……！唯い！絶対に、絶対に間に合わせるんだぞっ！」

「安心してりっちゃん！私、全力で走るよ！」

「もし間に合わなかったら、明日からはおやつ抜きになっちゃんか
もっ」

「ひえっ！？ムギちゃんヒドいよっ」

「急ぐのはもちろんだけど、転んで怪我なんかするんじゃないぞ」

「大丈夫だよ澪ちゃん！私を信じてっ！」

「先輩……」

「何？あずにゃん」

「もし間に合わなかったら、私、唯先輩を許しませんっ!!」

「とほほ。あずにゃんは手厳しいねえ」

あははと笑う唯先輩。

直ぐに表情を変え、キリツとした顔つきに戻る。

鼻からフンスと息を噴出して気合を入れた唯先輩。

「よし、それでは……。行ってきまあす!!」

そう宣言して唯先輩は駆け出していく。

その後姿を見守る俺たち。

ピンクの衣装が扉の向こうに消える……。つて。

俺はある事にハッと気がつく。

すぐに唯先輩の通ったところを走り、扉を開けて叫んだ。

「唯先輩!! その格好で行く気ですか!? 走りづらいでしょおお!

」

「はっ! そうだった!!」

一つ下の階段から、唯先輩の焦った声が聞こえた。

……だ、大丈夫……だよな?

第二十四話 有言実行ってかっこいいと思うなあ。(後書き)

仁「一ヶ月間が空きましたねー」

おお「まったく困ったもんですねー」

仁「何故人事口調う!?!」

おお「すまんすまん。ちょっとあまりにも数学がわからなくてねえ」

仁「もつとちゃんと勉強しとけば良かったんに」

おお「人には……頑張ったって出来ないことがあるのさ……!」

仁「爽やかに閉めるな!」

第二十五話 緊張してる時の心臓は凄い。ちょっと休め。(前書き)

学祭ラスト一歩前ー！

第二十五話 緊張してる時の心臓は凄い。ちょっと休め。

唯先輩のちよっぴし不安な出発を見守った俺達。

その後、急ピッチでライブ準備を行う。

残った荷物を講堂まで運び終え、俺達が次に行くのは……。

「んじゃあ、私達は更衣室で着替えてくるから」

「あーい」

衣装にお着替え。

俺は律先輩の言葉に返答しつつ、いったんは去ってゆく皆を見送る。

そう、山中先生が防寒対策を施してくれたあのミニスル浴衣にチェンジすることになったのよね。

俺？いやいや、俺はミニスルじゃないからね？ちよっと考えりゃわかるでしょっ！

山中先生が作ってくれた俺専用の浴衣衣装があるわけですよ。

僕はそれを着まゝす。

男子専用の更衣室に向かい、その衣装を広げて見る。

赤色に近いオレンジ色の浴衣。所々に薄黄色の水玉が。

皆のとは違ってフリフリとかが付いていないので、普通の浴衣に近い。

ただ、以上に胸元が開いてると、袖が短いのが特徴的かな。

あ、下は裾の広いズボン系になってんのな。これならまだ動きやすいぜ。

さっさと着替えて皆との待ち合わせ場所に戻る。

一分もしないうちに皆はやってきた。

梓は言う。

「お待たせ仁君」

「いや、全然待ってないよ」

「わゝ、仁君似合うわゝ」

「どうもです紬先輩。皆さんも似合ってますよ」

「とーぜんだ！アタシが着てるんだからな！」

「その自信はどこから来るんだっ！」

皆色違いで同じデザインの浴衣だ。

梓が紺色、澁先輩が薄紫、律先輩が黄色、紬先輩がミント色。

皆さん本当にお似合いで。素晴らしくお似合いで。

澁先輩は言う。

「じゃあ……そろそろ行くかつ」

「はいっ」

俺達は講堂内へと足を踏み入れる。

とりあえずステージ横のスペースで待機。

現在ステージでは演劇部の演劇が行われている。

あー。いよいよかあ……やっべ、緊張してきた。

足ガクガクしてきた……唇カッサカサだあ……まっずいなあ……。

梓は聞いてくる。

「大丈夫？仁君」

「のーぷろぶれむっ！」

「説得力ゼロだよ。その表情じゃ……」

俺は梓に聞いてみる事にする。

「梓は？緊張しないん？」

「んー。うん。緊張は無いかな。むしろ、少しワクワクしてるかも」

「え？どして？」

「今は唯先輩がいないけど、私達……放課後ティータイムとして人前で演奏するのは初めてでしょ。それに……」

「それに？」

「私、皆と一緒になら、どこでだって楽しくなれる気がするんだ」

「そーか……。梓は強いなあ。俺はやっぱし緊張で手震えが止まないよ」

「なんだー仁！緊張してるのかー？」

「うえっ！？律先輩！おどかさないで下さいよっ！」

「懐かしいわー。私も去年の学園祭はすっごく緊張してたなあ」

「溲なんかガチガチだったよな。ほとんど泣いてたよなあ」

「なっ、泣いてなんかないぞっ!」

「それで演奏の後にパンt……」

「ああっ!それは言っちゃ駄目!」

「ああ、アレですか……」

「パン……?なんですか?」

「なんでもないぞー。気にするなー仁」

「梓は知ってるの?」

「え?ああ……うん……一応」

「えっ!?!なんか俺だけ知らないって悲しい!教えて梓っ!」

「仁……?」

「うへっ!肩を握らないで下さい溲先輩っ!てかいつてええ!握力何キ口あるんですか!?!」

「……………」

「あっ、もげるっ……………!?!?!?!?!すみませんっしたああー!?!」

ここで俺は秘儀、ジャンピング土下座を発動させる。

それはそれは美しいフォーム。世界土下座選手権がもしあったなら、表彰台間違いないしっ！

……つかー、マジいつてえ。肩の骨が砕けたよ澁先輩……。

俺は大爆笑している隣の三人を睨んで言う。

「なんですかー。笑わないで下さいよっ！マジで痛かったんですからっ！」

「いやだつてさ……仁、弱っ！」

「仁君は将来尻に敷かれそうなタイプだね」

「えっ？座布団にされちゃうの？」

「えっ？」

「えっ？えっ？私何かへんな事言ったかしら？」

あれ、紬先輩……？それは本来唯先輩のポジションのはずなんだけどな……。

なるほど、紬先輩も中々の天然さんなワケなんかな。

「ムギ先輩。言葉のまま意味を取らないで下さい……」

「尻に敷かれるっていうのは、例えば、家庭内で奥さんよりも立場が凄く低いダンナさんのこととかをいうんだよ」

澁先輩が紬先輩に丁寧に説明する。

「あら、そうだったの？ごめんなさい！私、よく知らなくて……」

「あはは……。まあ、そういう事もありますよ」

梓が言った後、律先輩が俺の顔を覗き込んできた。

うおっ、なんですか恥ずかしい距離が近い！

「な、なんですかっ？」

「仁……。緊張なくなったんじゃないか？」

「え？」

あ、ホントだ。心臓もゆっくりだし、手足の震えもとまってるし、唇も潤ってる。

皆と騒いでたから……。か？

……。そうだよな。

俺達には……。放課後ティータイムには、緊張の文字なんか存在しないんだよな。

いつだって、どこでだって、今みたいにだらだら楽しくやれるハズだ。

「梓」

俺は梓にだけこっそりと言っ。

「何？」

「俺も……皆と一緒になら、どこだって楽しくやれる気がするよ」
梓は一瞬真顔になってから、ニコツと可愛い笑顔を見せて言った。

「でしょっ?」

その時は来た。
いよいよ俺達の出番だ。

ステージ上に俺達は既に立っていた。
幕がかかっているため、観客の姿はまだ見えず、向こうからも俺達の姿はまだ見えていない。
機材はセッティング完了。チューニングは完璧。……いける。

隣では山中先生がチューニング中。
やっぱり今までの六人体制の方がなんとなくやりやすいつつー事で、急遽さつき依頼したんだけど……。
大丈夫かな?でも山中先生つてめちゃうくちゃギター上手いし、本人も余裕そうだし……。
まあ、心配はいらなのかな。今は自分の心配をすべき気がする。
あー、やっぱりシドキドキする。
でも、さつきみたくガチガチの緊張じゃあない。
程よい緊張。体中に染み渡る高揚感。最高のコンディションだぜっ。

俺は後ろを振り返る。
皆も俺と同じ方向を見ていた。

「えっ？アタシっ？」

我らが軽音部部长、田井中律先輩だ。

俺のとなりで、梓が苦笑を浮かべながら言う。

「当たり前じゃないですか。一応部長なんですから」

「一応をつけるなっ！」

「たまにはビシッと決めてくれよ」

「たまにはって……遷まで……。アタシはいつもバリバリちゃんとしてるんだぞー」

「りっちゃん！期待してるわ！」

「あっ、でも下手に期待されると緊張するなあ……」

「私が代わってあげてもいいのよ」

「さわちゃんには任せられない！」

なんでよ！と叫ぶ山中先生。

俺は律先輩をジーツと見つめる。

「……なんだよ、仁」

俺はニコツとスマイル。

「き、た、い、してますよ？」

「じーんーっ!!」

「あー！危ない！危ないから律先輩！アンプがそこにあるからっ！」

「ギターが壊れちゃいますよっ！」

「梓、俺の心配はあ!?!」

「ちえっ、なら仕方ない……」

律先輩は俺の首から手を離すと、オホンと咳払いを一つして言う。

「それじゃ……」

「待って律」

漣先輩が律先輩の言葉を制した。

「話を頭から叩き潰すなよ漣」

「どうせなら皆で円陣組もう。その方が……なんとというか……霧困
気出るし」

梓が言う。

「ああー、いいかもですね！」

「漣はミヨーなどところで体育会系だからなー」

あれ？ 紬先輩が妙に顔をほころばせて目をキラキラさせていらっしやる。

……まさか？

「紬先輩」

「何？ 仁君」

「もしかして、今まで円陣組んだこと無い……とか？」

「うん！ だから、こつこつ部活とかでやる円陣。私憧れてたの！」

あー。確かに高校スポーツとかで見る円陣って、なんかこつこつ……感じるものがあるよね。

爽やかっつーか、でも燃えてるっつーか……。

まあ、簡単に言やあ、”青春”ってヤツですな。

つまり、これから俺達もその青春の代名詞を行うわけか。おおっ、なんかワクワクしてきたぞ！

「それじゃー、組むぞー」

律先輩の合図で、俺達は肩を組む。

俺の右には梓、左には山中先生。

律先輩は俺をジーンと見て言う。

「思えば仁も成長したなあ……」

「何がですか？」

「だってさ、ホラ……」

律先輩の言葉を紬先輩が引き取った。

「仁君てば、最初の頃は私達と目も合わせられなかったでしょ。それが……」

「名前で呼ぶようになり……」

続いて澪先輩。ラストにぐるっと回って再び律先輩が言う。

「そして今。私達”女の子”と肩を組んでいると」

え？あ……。

ああああああ……。

「すいませーっん……」

俺はそう叫んで円陣からの離脱を図るが……。

「今更何言ってるの」

「逃がさないわよ」

俺の両隣、梓と山中先生にガッチリとホールドされ、全く動けない。たまらず喚く俺。

「いやいやいやいや！コレはまずいって！体密着してるし！顔近いし……」

「あら嬉しいわ。高校一年生に意識されるなんて。私もまだまだ

イケるかしら？」

「あれ？なんか急に普通になってきたーあああああー！」

突然頭部に締め付けるような鈍痛が！

原因は……。

「痛い痛い先生すいませんでしたボクが悪かったんです！！」

山中先生によるガツチリヘッドロックのせい。

まったく、失礼しちゃうわと俺の頭を解放する先生。

ちよつとした孫悟空気分を味わった俺は、フラフラと輪の中に再び舞い戻る。

律先輩が聞いてくる。

「あれ？もういいのか？」

「いや……だって……。女性って、怖いなって思いましたから……。もういいんです逆らいません」

「先生〓女子全員とは考えないで仁君！全然違うからっ！」

となりで梓が焦って言う。

「ちよつとー。まるで私が常識外れの変人みたいな言い方しないでよー」

「……いや、実際そうだから」

「あんん！！？」

「じめんなさいさわちゃん」

「……早くしろ」

「時間が無くなっちゃっわ」

湊先輩と紬先輩の言葉で、俺達はおおそうだったと再びガツチリと円を組む。

恥ずかしいなんて言ってる時間は無かったな。ごめんなさい。

「えーと、それでは仕切りなおしで……。私達は二回目の。仁と梓は初めての学祭ライブだ」

律先輩は一呼吸おいて続ける。

「唯は絶対に来る。だから、私達は気にせずライブを楽しむ。それで、唯が来たら、六人でもっと楽しむ。だから……」

「……………あれ？」

律先輩が詰まった。下向いてる。なんか顔がめちゃくちや真剣。考えてる？律先輩今考えてる？

律先輩は、半ばヤケクソなカンジで右足を円の真ん中に踏み出しながら言った。

「だから……その……が、頑張るぞっ！」

「おおーっ！！」

続けて足を出して叫ぶ俺達。

よし！よく頑張った律先輩！そこでよく言葉を捻り出したっ！

ステージよこから真鍋先輩の音がする。

「皆！そろそろ幕上がるから準備してっ」

「分かった！」

湊先輩が返答。

それを合図に、俺達はそれぞれの持ち場につく。

同時に、講堂内にスピーカーを通した声が響いた。

『これより、軽音楽部、放課後ティータイムによる、ライブを開始します』

歓声が俺の耳に届く。

心臓が高鳴る。顔が火照る。指先が一度震えて、止まる。

俺は顔を上げる。段々と上に上がっていく幕を見つめる。それにつれ、大きくなる歓声を感じる。

幕が、上がる。

第二十五話 緊張してる時の心臓は凄い。ちょっと休め。(後書き)

仁「また偉い引き伸ばしで」

おお「言っな。……言っな」

第二十六話 努力は報われる。必ず。(前書き)

学園祭編終了ですっ！

第二十六話 努力は報われる。必ず。

俺達を隠していた幕が全て上がりきり、俺達五人は大歓声で迎えられる。

オーソドックスな「キヤーっ！」という歓声の中に、「溲せんぱーい！」と名前を呼ぶ声も。

そんな女子特有の黄色い声援を押しつけるのは……。

「じいじいじいーんんんーっ！……！」

俺を除く一年男子十人の野太い声。いや、最早怒声？それにしてもまあ、よく通る声だこと。

講堂の一番後ろにゾロつと並んでるアイツら。うん、よく見える。

俺はアイツらに向かって返答の代わりに右手で応ずる。
すると……。

「キヤーッ！」

やめるおお！オマエらが「キヤーッ」って言つな気持ち悪い！
うえっ、背筋がぞわつと……。

「三浦君かつこいいーっ！」

「こっち向いてーっ！」

「投げキッスしてーっ！」

ああ……。俺は幸せ者だ……。

上三つを女の子が言ってくれたのならば。

「漣は？」

「大丈夫だ。いつでもいいぞ」

「よーし……。それじゃあ」

俺は前を向いてギターを構える。

周りで皆もそれぞれの楽器を構える。

雰囲気を感じて、観客は一気に静まる。

空気が、張り詰める。

場の空気が変わる。

律先輩の合図が来る。

「ワン、ツー、スリー」

ステイック三回。

演奏が始まる。

一曲目は、「私の恋はホッチキス」という、なんとも漣先輩らしい曲。

ややゆったりしたカンジの前奏。演奏に集中！梓のリードと合わせる。

山中先生は流石。めちゃくちや安定してんのが分かる。こりゃーやりやすい。

前奏は完璧！漣先輩が歌いだす。

観客の皆が歓声を上げた。

演奏予定の曲はこれを入れて三曲。

唯先輩には少なくとも。この曲の終わりか、次の曲の終わりくらいで顔を出してもらおう必要がある。

時間にして約十分ほど。唯先輩はもう二十分以上前にココを出發している。

唯先輩の家まで学校からどれくらいかかるのかは知らないが、それまでには間に合ってもらわんと困るってわけよ！

曲の方はサビへと入る。

観客の皆のノリも上々だ。

ここが山場！

一番のサビのラストの言葉！

澪先輩はしつかりと言い切る。

そのテンションを崩さぬまま、俺達は安定して一番二番と引き終える。

で、ついにラスト。

澪先輩が歌詞の最後の言葉を歌う。

絢先輩のキーボードが最後のメロディを奏で、ゆったりとした雰囲気、
「私の恋はホッチキス」は終了する。

ふう、と俺達は一息つく。

唯先輩はまだ来ない。

俺達の顔に、不安の色がチラつく。

次の曲がリミット。終わって三曲目が始まるまでに来なかったら…
…アウト。

だけど、気分を下げるわけにはいかない。

俺達は今、お客さんの前に立っているんだから。

唯先輩がこの場にいないっつーのは、まあ、ハッキリ言えばコツチの都合。

俺達の都合だけで、この場の雰囲気盛り下げるワケにはいかない。チラつと梓が俺を見る。

俺は頷く。目線で伝える。「まー、大丈夫だろ」と。

まあ、カッコイイようにも見えるけど、俺にはテレパシーなんてものは使えないわけで。

つまり、梓に俺の気持ち伝わると考えるのはちよつとアレだよな。けど、梓は俺を見て頷き、再びしつかりと前を見据えた。

言葉が無くても大丈夫なんだよなあ。こういう、皆が完全に一つになつてる時には。

ド偉い過去の日本人は、こういう時にピツタシな言葉を後世に残して下さっている。

そう、まさに”以心伝心”ってヤツだ！

漣先輩は、マイクと通して会場に言う。

「それじゃあ……次の曲いきます！聞いて下さい！」ふでペンくポールペンく”」

言うと同時に、律先輩がドラムを打ち鳴らしす。

前奏。梓のリードが目立つ。

おお、流石梓、完璧だぜつ。そこ難しいのに。俺が一回挑戦したときは、グダグダになっちゃったのに。

漣先輩が歌いだす。

自分のパートを慎重に、だけど俺らしくガンガンと引きながら、俺はちよつと思ひ出す。

そーいや、この曲って唯先輩が夏合宿の夜に練習してた曲だ。

ま、実際に練習してたかどうかは俺見てないからわかんないんだけどね。

二人がちよーど床で重なってる現場に遭遇したから、つついへんな妄想をしちゃったんだっけ。

でも、梓いわく、「唯先輩もちゃんと練習してた」らしいから、きちんとやってたんだろう。

サビに入る。さっきの「私の恋はホッチキス」とは違って、ノリのいい感じの曲。

俺はちよつと体を揺らしてリズムをとって、気分良くギターを打ち鳴らしていく。

一番のサビが終わる。

間奏は前奏と同じカンジ。梓のリードの見せ所。

で、曲は二番に入る。

流石にここまで来ると、不安で不安でしょーがない。

曲終了まであと二分ちよつと。これは……！どうなんだ！？

つついチラチラと講堂の入り口の方へと視線がいつてしまう。

まだ……か？まだなのか唯先輩っ！大丈夫か？もう時間ねえぞ！？

駄目だ駄目だ！集中しねーとっ！よそ見しながらいい演奏なんてできねえぞ俺っ！

2番のサビに入る。

唯先輩も、今はどこかの道を全力で疾走してるハズ。

頼む。頼む。頼む！間に合ってくれ！間に合わせてくれ！

学園祭まで、こんなにイロイロあったんだ！でも皆で頑張ってきたんだ！

最後には完全完璧ハッピーエンドで終わったっていいだろ？つか、

それがトーゼンってもんだろ？
だから……。だから……。！！

さっさと姿を見せやがれ唯先輩iiiiiiiiっっ！！

俺が心の中で叫んだその時だった。

ガタン、と大きな音を立てて、講堂の扉が開いた。
薄暗い室内に、外の光が差し込んだ。

それは、俺達、放課後ティータイムにとっての、希望の光。
背中に溢れんばかりの光を受けとめ、俺達が待ちに待った人が、そこにはいた。

平沢唯先輩が、そこにはいた。

曲はラスサビ終了ちょうどだった。もう正直駄目かと思った。ただ
ど……。

やっぱり、唯先輩だなあ。どんなに遅れたって、最後にはきちんと
間に合わせる。

唯先輩は直も走ってステージまでやってくる。

最後、キーボードの音で、「ふでペン（ボールペン）」は終わった。
俺達は、息を切らしてステージ下から俺達を見上げる唯先輩を見つ
める。

めちゃくちゃ走ったんだらな。リボンが解けて、ブラウスの裾もベ
ロンと外に垂れてる。

やっと……。来ましたね。

俺達は唯先輩の下へ集まる。

ステージによじ登ろうとする唯先輩……っっておつと危ない。
落ちそうになった。気をつけて下さいよ。

無事壇上になると、唯先輩は俺達全員の顔をゆっくりと眺めた後、
山中先生に向かって言った。

「さわちゃん先生。ありがとう」

山中先生はその姿を見て、一度柔らかく微笑む。
そして、コチラに視線を残したまま、背中をコチラに向ける。

「じゃ、後頑張りなさい！」

会場の拍手と「山中先生かっこいい〜！」との声援に送られ、山中
さわ子先生はステージから退場していく。

……どうもありがとうございました先生。ホントに助かった。
アンタもやる時にはやる人だよっ！

先生を見送ると、唯先輩は再び俺達に向き直って言う。

「皆、本当にごめんなさい。よく考えたら……」

唯先輩の言葉がこもっていく。

見る見る内に唯先輩の瞳に溢れる大粒の涙。そして溢れる鼻水。

「いつもいつも、ご迷惑を……」

唯先輩は必死に涙をかみ殺すが、溢れ出す感情は抑える事が出来な
い。

「こんな……大事な時に……」

「……タイくらい、ちゃんと結べ」

澁先輩は、そんな唯先輩に優しく声をかけ、青いリボンを結んであげる。

俺達五人は、唯先輩をじっと見つめる。

律先輩が、言った。

「皆唯が好きだよ」

講堂内は静まりかえっていた。

だから、律先輩のその言葉は、唯先輩や、俺達は勿論の事……。

「頑張れー！」

「唯ーっ！」

「頑張つてーっ！！」

観客の皆さんの耳にも、しっかりと届いていた。ついに声を上げて泣く唯先輩。

顔中涙と鼻水でグシャグシャだなあ。

俺はポケットからティッシュを取り出すと、唯先輩に差し出して言う。

「顔を拭いて下さい。可愛いお顔が台無しですよ？」

「うえっ、今のセリフ仁君……」

「キツザだなあ〜」

「えっ？」

突然梓と律先輩にジトつとした目で見られた。
何故？俺なんも悪い事してないんに。

「ありがとう、仁君」

唯先輩はグシャグシャの笑顔で、俺からティッシュを受け取った。
そして、大音量で鼻をかむ。

「ゆ、唯ー。女の子なんだから、もう少しおしとやかに……」

湊先輩の言葉は、次なる唯先輩の鼻鳴りによってかき消される。

「唯ちゃん、凄いわね〜」

「む、ムギ先輩？挑戦しないで下さいよ？」

キラキラと目を光らせる紬先輩に、梓が釘を刺した。
律先輩は唯先輩に聞く。

「収まったか？唯」

「うん！もう大丈夫だよ！」

満面の笑顔で唯先輩は答える。
律先輩は皆に言う。

「よし！じゃあ、残りの時間も全力で行くぜえっ！！」

「オオーツツ！！！！」

俺達五人は拳を中に突き出しながら叫ぶ！

その姿に、観客から再び歓声が聞こえてくる。

よし、今からが本当に本当の放課後ティータイムのライブスタートだぜっ！！

「えっと……。改めまして、放課後ティータイムです」

家から連れて来た唯先輩の相棒、ギー太を抱えて、センターポジションに立った唯先輩は、遅くなった自己紹介を始める。

「今日は、私がギターを忘れたせいで、こんなに遅れてしまいました」

その後、唯先輩は、「ギー太も忘れてゴメン」と、腕の中の彼に向かって誤る。

MCを続ける唯先輩。

「目標は武道館！とか言っつて、私達の軽音部は始まりました」

一切の緊張を感じない。普段通りの唯先輩だ。

この精神力といつかなんとゆーか……。

まあ、とにかく見習いたいものがあるなあ。

「ギターを買うために皆でバイトしたり、毎日部室でお茶を飲んで、たくさん喋ったり……」

唯先輩が語るは、俺達放課後ティータイムのちょっとした歴史。

「ムギちゃんちの別荘で合宿したり、入部してくれる一年生を探したり……」

ここで俺と梓は目を合わせる。
それで、二人してニツと笑った。

「脇目も振らずに練習に打ち込んできたー、なんでとても言えないけど、でもここが！」

唯先輩はここで息をすうつと吸い込んで、力強く言った。

「今いるこの講堂が！私達の武道館ですっ！！」

この言葉で、場内は一気に盛り上がる！
今日一番の盛り上がりだあ！

「最後まで思いつきり歌います！」

唯先輩は振り返って、律先輩とアイコンタクトを取る。
よし、いよいよラス曲。全力で行くぜっ！

「ふわふわ時間っ！！！！」

唯先輩が曲名を宣言すると同時。

律先輩のスティックの音に合わせて、唯先輩がギター太を打ち鳴らし

ていく。

その姿は……それはそれは……。

楽しそうだった。

観客の皆の手拍子が気持ち良い。

サイコーの気分！ライブって、こんなにイイもんだったんだなあ！

その勢いのまま、唯先輩はマイクに口を近づけ、歌いだす。

唯先輩の柔らかな歌声が、会場内に響き渡る。

ボーカルが楽しそうに歌えば、俺達演奏者だって楽しくなってくる。
最っ高の状態だ！

そういえば……。

俺が軽音部にやってきて初めて聞いた曲もこの曲だったなあ。

あの時はまだ見学っていう名目だったっけ。

そう、この曲を聴いて、俺は軽音部に入ろうって思ったんだ。

この人達と一緒に演奏してみたいって思ったんだ。

そして今、その願望が叶ったっつーワケかあ。

なんか……感動だなあっ！

今、ステージの下。

つまり、俺達の間近には、たくさんのお客が押しかけてる。

なんか、ホントに有名人のライブみたいな盛り上がりだなあ。

おっ、あそこには憂と純！おっ、大達っ！近い！近いよオマエら！
でもありがとよっつー！！

唯先輩が歌いきった。律先輩のドラムの音が響き、ギター音が残って、「ふわふわ時間」の演奏は終わった。

終わったー！……終わっちゃったか……。ちよっぴし寂しいかも。やっぱしすつごく楽しかったし！

そんな俺の寂しい気持ちを打ち払ってくれたのは、後ろから聞こえてきた絅先輩のキーボードの音色。

そのメロディーは……ふわふわ時間？

絅先輩の表情を見て、律先輩は楽しげに笑うと、彼女もまたドラムを再び打ち鳴らし始める。

続いて湊先輩が、梓が、それぞれのメロディーを再び奏で始める。

再び盛り上がってくる。俺達。会場内もまた燃え上がる。

なるほど……。俺達の演奏は……。

まだ続くってワケかっ！！

俺もまた皆に習って、俺のパートを打ち鳴らす。

今までで一番大きく、力強く。そんでもって、楽しく。

唯先輩は、俺達を見つめて満面の笑みを浮かべると、ギターを弾き始めた。

円になって演奏する俺達。これで完全にふわふわ時間の再来。観客の皆の手拍子が気持ち良い！！

演奏しながら、俺達は皆と目を合わせて、皆で一斉にニコッと笑った。

それを合図に、唯先輩は観客の方へと振り返る。

大きな声で会場に宣言しながら。

「もう一回っ！！」

再び歌いだす唯先輩。

会場の熱気は最高潮だ。

観客の皆の手拍子に合わせて体を揺らしながら、気持ちよく演奏する。

もう俺の下のアイツらのガナリ声ですら心地良い。良い味出してるよっ！オマエらっ！

汗が頬を滴って、床に雫を作った。

もう汗だくだ。だくだく。頭もびっしょり。でも、嫌な汗じゃないな。

もう何がなんだか分からん。どうやって演奏してんのかも分からん。つかー、俺ミスってないよな？特に皆反応ないからオツケーだよな？心も体も高揚して、熱くくなって、全然分かんないんだ。ただ……ただ……。

笑顔が溢れて、溢れて。止まらねえっ！！

「ふわふわタイムっ！」

ラスト、ふわふわタイムを三回連呼してこの曲は本当に終わった。すっげー良かった！本当にありがとう！！

笑顔と大歓声の中、唯先輩は両腕を一杯に広げて叫ぶ。

「けいおん、大好きーっっ！！！！」

唯先輩はすぐに振り返って言う。

「りっちゃん！もう一曲っ！」

「おっしやあ!!」

え?マジ?まさかまだまだ続く系な?

おーし、俺はまだまだイケるぜっ!

しかし、そんな二人のやり取りを見てか、舞台袖から和先輩が慌てて飛び出してきた。

「唯!!」

「あ、和ちゃん!」

「もう時間切れよ!!」

高校一年生の秋。

俺にとって初めてのライブは、たくさんの笑顔と、感動と、そして最高の思い出を俺に与えてくれ……。

「え、えええええええええ〜!」

唯先輩の気の抜けた叫び声で幕を閉じた。

第二十六話 努力は報われる。必ず。(後書き)

おお「ってなワケで、学祭おっっ」

仁「あっ、どーもどーも」

おお「いや、書き上げた自分への労いのつもりだったんけど……」

仁「えっ、そーだったん!?!」

おお「うわぁーっ!自意識過JOY!!!」

仁「うぜえええ!!!」

おお「次回からはまたいつものゆるゆるグダグダで行きます」

第二十七話 約束をちゃんと守るのが漢ってもんだ。(前書き)

ちょっとリアルが忙しゅうて、遅くなっちゃった！

第二十七話 約束をちゃんと守るのが漢ってもんだ。

「はあああああ〜……………」

「冒頭から思いっきりダラけんな主人公」

大につつこみを受け、俺はたった今机にくっつけた体を引き剥がす。

「いやさ。なんか学祭終わったら、気が抜けちゃって……………」

「うん。ちょっと今は何も手につかないかも」

隣で梓もややダルツとした雰囲気を出しながら言う。

おおっ。賛同が一票。

感動の学園祭があったのはつい三日前。

もう色んな事があの一日に盛り込まれすぎてて、俺の脳みその要領を軽くオーバーしちゃったんだよ。

で、三日たった今でもまだな〜んか脱力感ってやつが拭えないんだよな〜。

「まあ、あのライブは凄かったからねえ」

「感動だったよね〜」

純と憂が言う。

俺達のライブは、とにかく学校内での評判が良かった。

俺を含む軽音部の六人は、廊下を歩けば「あ！あのライブの！」と指をさされる、ちょっとした有名人となっていた。

勿論、俺と梓と漣先輩は若干困っているんだけどね。

あと、律先輩も恥ずかしそうにしてたなあ。意外な一面発見。でもま、それだけのモンだったって、ポジティブに考えてもいいんだよな。

なんだかんたあったけど、アレは大成功だろっ。

ホラ……クラスの皆の、俺に対する態度がちょっと変わってるよ…

…？

「すごい良かったよ梓ちゃん！」

「梓ちゃんギター上手いね〜」

「私すごい感動しちゃった！もう梓ちゃん達のファンになっちゃったかも〜！」

あれっ？あれれっ？

俺はああああ！？

……とゆーのはほんの冗談。

今の俺は心に余裕があるからね。冗談の一つも言いたくなるさ。では、俺に寄せられた賛辞の言葉を一部抜粋！！

「三浦君、すごいかったこよかった！」 裏声博也

「ギターを弾く三浦君とのギャップにやられちゃった！」 裏声最喜

「もう三浦君しか愛せない！」 裏声涼

「三浦君マジラブリー！」 裏声雄平

「LOVE LOVE! みうLOVE!! LOVE LOVE! みうLOVE!!」 裏声陽介

うっ……。思い出しただけでも吐き気が……。！
俺と画面の前の皆の心と体のためにも、この辺で紹介は打ち切らせて貰おう。

まあ、クラスの人たちからは結構褒められたんだぜ！
やっべ、ちよっとニヤニヤ笑いが……。

まあ、そんなこんなで、俺達は今何かを達成したんだという満足感と幸福感に体を預けているワケなんですよ。

「でも、いいかげんにシヤキつとしろよ」

大が俺に言うてくる。

そーだなー。大の言うとおり、こーのダラけた感覚も早くなんとかしないとな。

俺はん〜と伸びをしながら言う。

「そーだなー。明日は部活も休みだし、のんびり家で休んで、リフレッシュでもするよ」

しかし、俺のこの至福のダラけ感、純の一言によって脆くも崩れ去る事となる。

えっ、と声を漏らしてから言う純。

「あれ？学園祭終わったら、仁君、梓にケーキとかパフェとか奢る〜。とかなんとか言っただけ」

あ。

……汗が一滴。俺の頬を流れる。

あれ？なんだか急にさむく……。いよいよ秋も終わって冬に変わって行くのかな？

大と憂は言う。

「そういえばそんな事も言ってたっけな」

「うん。確か、学園祭の数日前に……」

「そうだったね！それじゃあ早速明日行こ？空いてるよね？」

顔をパアアツと輝かせて俺に言う梓。

どうやら梓さんもすっかり元気になりましたようで良かったですハイ。

「え？ああ。ちょっと用事があつたよーな」

言葉を濁す俺。

こ、今月は……。かなりピンチなんだよ……！

しかし、俺の思いを大は無常にも砕く。

「おい、さっきは”明日は一日家でゆっくり”……なんて言うてただろ？」

こんのヤロウ！無駄に頭を働かせやがって！

……でもー、数分前の事だもん。覚えてないほうがおかしいか。ハハハ。

「仁君？」

「仁君！」

「仁」

上から憂、純、大。皆そろって俺を見るんだ。
やめて！俺を見ないで！

……そして極めつけは……。

「仁君！楽しみにしてるね！」

それはそれはもう。キラツキラに輝く梓の笑顔だった。

負けた……。女の笑顔って奴は最早魔法だね。

そんなワケで土曜日の午前10時。

約束してた梓との待ち合わせ場所に俺は立っていた。

梓からは「ちゃんとした格好してきてね」とのリクエストを受けたので、いつだったかまた皆に選んでもらった服に身を包んでいる。

Tシャツの上にフード付きでチエック柄の服を羽織って。

下は余裕のあるジーンズ。靴はオーソドックスなスニーカー。

皆曰く、かじゅあるふあっしょんってヤツらしい。んで、かじゅあるって何よ？

やれやれ、やっぱしジャージの方が落ち着くんだけだな。まあ、しやーないか。梓に言われちゃ仕方ない。

今日はいつぞやの俺が口走った約束を果たすための日だし、そもそもそんな事になったのは俺が梓をからかいすぎたからだし。

ま、罪滅ぼしってカンジで、誠心誠意、奢らせていただきましょうか！

だけど、それならこんな時間にせずとも良かったんじゃないかな？

間もなく向こうの方から梓が登場。

ポップな色合いの、暖かそうな服を着こんで肩には鞆を提げている。手を振りながらこっちの方に走ってやってくるそれはなんかのドラマのワンシーンみたい。

「ごめん！遅かった？」

梓の問いに、俺は首を横に振って否定してから言う。

「大丈夫。俺が早く来すぎただけだから」

「良かったー。それじゃ、行こっか」

そう言っつて梓は元気良く歩き出す。

……っつてオイオイちよっと待っつてよ。

俺は梓を呼び止める。

「例の喫茶店はそっちじゃないよ？」

「え？ああ、それは後で。まずは行きたい所があるの！」

「ひょっとして俺も行く系な……？」

「当たり前！仁君は今日一日、私に付き合ってもらっただけだから！」

「あれっ？ケーキ奢るっただけじゃなかったっけ梓さん？」

「細かいこと気にしていると仁君。女の子にモテないよー」

「オーケイ。僕はどこまででも付いて行くよ。例え世界の果てまでだって」

「……もうちょっと見栄張っても良かったんじゃない？」

「いえいえ、人間、素直が一番ですよ」

梓はあははと苦笑いをした。

梓に連れられて俺がやって来たのは、このあたり一帯では一番の大型デパート。

オシャレな洋服店とか、美味しい飯屋とか、映画館とか、ゲーセンとか、雑貨屋とか……。

まあ、とにかく「ヒマだな」って一日ブラブラするにはうってつけの場所ってワケ。

……らしいよ？皆が言うには。え？いやだって俺ここ来た事ないもん。

自動ドアをくぐって屋内に入ると、俺は梓に問いかけた。

「で、梓さん。ココでの目的は？」

「ん〜。色々と行きたい所はあるんだけど、今日一番の目的は……」

そう言っつて梓は肩の鞆をガサガサとあさると、俺に一枚のチラシを

提示してきた。

そこに書かれていた文面は……？

「本日より三階にて、楽器専門店オープン……？」

「そう！でね、でね、ここのお店、音楽方面ではかなり有名な会社がついてて、なんか凄いらしいよ！」

頬に興奮の赤を携えて、一気に言い切った梓。

俺はその勢いに、一瞬怯まされる。

「そ、そーか！良かったなー！」

「うん！」

ニコニコしながら頷く梓。

うん。こんな素晴らしい笑顔が見られるんだもん。この楽器店には感謝せねば。

目的の店はエスカレーターを上がってすぐの所にあった。

ついた瞬間、何も言わずに小走りでそこへ向かう梓。

やれやれ、梓って妙なところでちよつと子供っぽいよな。

だけどそこがまた良いところだったり。……って何言ってるんだ俺恥ずかしい。

店に入って早速しゃがみこんだ梓。

ガラス張りのケース。その中に入っている古ぼけたギター。それを梓は見ていた。

「何これ？」

俺は梓に聞いた。

「さっき言った有名会社さんがいつちばん最初に作ったギター！って、書いてあるよ」

なるほど。ガラスケースの隣には、今梓が言った通りの内容が書かれていた。

「へえ〜。ギターにしる他の物にしる、一番最初のソレって、なんか見てるところ……感じるもんがあるよな〜。こっからこーゆー風に進化していったのかあって……」

「仁君仁君！コツチ来てーっ！」

「って聞いてないしっ！」

その後も梓は驚くべき興奮のしようで、俺を翻弄。

なにやら最新モデルのギターやら、俺にはよく分からない機材やら、CDやらなんやら。

店を出る頃には、梓は超満足顔でホックホク。俺はなんだかつかれてヘットヘトだった。

楽器店に1時間半くらいもいたため、すでに時刻は正午。

腹の虫も絶好調だったので、デパート内のファストフード店で梓と昼食を取る。

もちろん、俺のオゴリではない。人生そんなに甘くはないのでございませよ。

食べ終わって、そろそろここを出るかと立ち上がり、歩き始めたその時……。

「仁君仁君！あれ見てっ！」

「ん〜？」

俺は梓が指差す方向を見る。

そこには、大勢の人が作る行列と、なにやら黒いテントのような建物。そして……。思わず目をそむける俺。俺の目に入ってきたのは……。

「恐怖の館」

と、おどろおどろしい字体で書かれた看板が。

俺の心がざわつく。しかし、それを押えつけて平静を装う。

……ふん、なんて安易なネーミングなんだ。そんなじゃ、この俺の鋼アイアン・ハートの心は揺るがないぜ。

俺はいたって冷静に梓に尋ねる。

「ウンウン、デ、アレガドウシタノ？」

いたって冷静に梓に尋ねる俺。

うん。クールだ。

「行かないっ？」

「嫌だ」

思わず即答。

いやいや〜。高校生にもなってあんな子供騙しなの〜。
いやいや？決して怖いとかじゃなくて、もう子供も卒業したワケだし、あそこに並ぶのはちょっと恥ずかしいかな〜って。いや、怖いなじゃなくてさ。

「行かないっ？」

「嫌だ」

再び同じ事をたずねてくる梓。
先程と同じやり取り。

「仁君……怖いのか？」

俺はその言葉にピクツと反応する。
なんてこというんだ。名誉毀損だぞう！

「いや？ぜぜぜ全然」

俺は余裕でサラツと言いつ切る。
梓は言った。

「分かった。私は行きたい。仁君は行きたくない。議論しても無駄。そういう時は……」

俺は梓の言いたいことが分かった。

「「ジャンケンでしょっ！……」」

梓に合わせて言い切る俺。

同時に二人の間にちる火花。後ろでは雷鳴が轟く。緊張の一瞬。汗が一滴俺の頬を滴り落ちる。周りの人の視線が気になる……。

おおっとお！雑念は捨てるんだ。今は勝負に集中！相手の手を読むんだ……！

梓の目も真剣そのものだ。瞳の奥にメラメラと燃える炎が見える。俺と梓は同時に叫んだ。

「さーいしょーはグーっ！ジャンケン……」

ポンッと俺が出した手はグー。対して梓は……。

「うう……。負けた……」

と、悔しそうに梓は自分の出したチョキを見つめる。

そう、俺の大勝利っ！

「さあ行くっかっ！」

俺は世界スマイル選手権があつたら五位くらいに入賞できるレベルのきらんきらんした微笑を携え、そこを後にしようとする。

いや別にそこにいると悲鳴が聞こえてきて怖かったってワケじゃなくって！

別に看板の字のクオリティにびびってたワケじゃなくって！

まあ、俺がジャンケンに勝利したワケだからね。勝負の世界は厳しいという事を梓に教えよう……。

自分にそう言い聞かせながらスタスタと歩く俺の耳に、梓の弦音が聞こえてきた。

「あゝあ……。行きたかつたなあ……」

チラッと後ろを確認する俺。

やばい。梓めっちゃ落ち込んでるよー……。

……………。
はあ……………。

俺は振り返って歩いてきた道を戻る。

途中で梓の腕を引つつかみながら。

「えっ？何仁君？」

「行くぞ。入りたかつたんだろ？」

「い、いいよ……。私が負けたんだし……」

そついう梓を俺は無視して、行列の最後尾に並ぶ。

パツと見た感じでは、中々店の回転はよさそうだ。これなら大体三十分ってトコかな。

梓が上目遣いで俺に聞いてくる。

「じ、仁君……？いいの？怖くないの？」

俺は梓に向き直る。

それはそれはキリつとした顔で。

ここでカツコイイ事の一つでも言えば、三浦仁の男株はつなぎのほりだったんだろうけど……。

「死ぬほど怖いに決まってるんだろ」

そう言つて俺はガタガタ震える俺の両の足を指差す。
残念ながら俺はダサイ男だった。

梓はクスッと笑つてから言つた。

「残念。途中まではすつごくかつこ良かったのに」

「言つな！怖いもんは怖い」

「ならあのまま行つても良かったのに」

「梓がすつごく悲しそうな顔してたから、ほつとけなかつたんだよ
！」

「えっ、本当………?」

「ウン」

「……なあんだ。ちよつと残念」

「本当は、周りの目が気になつたから、ここはちよつと見栄張つて
みようかなーなんて思つちやつたのが俺の運の尽きであつた……」

「なんで急に語り口調!?!」

そう言つて梓は苦笑いをする。

しかし、その後すぐにパアッと明るいニッコリ笑顔に変えて言つた。

「でも、ありがとう。仁君!」

「どづいたしまして」

俺はガタガタ震える笑顔で言った。

こゝ後悔なんてしてないもんね！！ちよゝつとしか！

第二十七話 約束をちゃんと守るのが漢ってもんだ。(後書き)

仁「前書きキモス」

おお「分かってる……。分かってるんだ……」

第二十八話 失敗は成功の母であってほしいなあ。

少し並んで待つてると、もう後五組で俺達という所になった。

俺の見立て通り、中々にここのお化け屋敷の回転は早い。

ついでに俺の体の内から心臓が肋骨をガンガン叩くペースも早い。クソ早い。

俺は必死に気持ちを落ち着かせようと頑張る！

ふん、あ、あんなオーソドックスな名前のお化け屋敷、ぜぜぜ全然怖くないももももああああ！やっぱし怖いい！看板だけでも怖いい！

なんで字が紫色お？そんなでもって、なんで溶け出してんの字！？なんで字の周りに赤い飛沫が飛び散ってんだよおお！！？

隣の梓は涼しい顔だ。

何故だ……。何故平気なんだ……。

ビビってる内に、もう俺達の順番が回ってきてしまった。

俺達はカーテンをくぐり、黒いテント内へと進入して行く……。

「雰囲気あるね〜」

梓は周りを見渡してから言う。

雰囲気？ああこの薄暗さの事？それともこの生暖かさ？青白く光るライト？

うええ……。なんか霧がかつてるう……。なんか壁に赤い飛沫が飛び散ってるう……。

あらあら、これはガイコツのインテリア？ま〜オシヤレ……。ってどんな呪いの高級住宅う！？

ははははは……やべえ帰りてえ。今すぐ入り口まで全力疾走してえ。クラウドチングスタートで。俺は梓に言う。

「これから先。どんな事があっても俺の事を離さないでね」

「それって普通私が言うセリフじゃないかな……?」

「さあ行こう梓。ぜひ俺の前を歩いて下さい」

「えっ?私が前?こういうのは普通男の人が……」

「梓」

俺は梓を真っ直ぐ見つめる。

んで、親指を突き出した拳を前に出して言う。

「男女平等!」

「これだと仁君の方が有利だよ!？」

「うっ……。大丈夫。三步下がって付いて行くから」

「全然大丈夫じゃないし。てゆうかどこの良妻?」

俺と梓の醜い議論の結果は、二人並んで歩くというごくごく平凡なものだった。

……やべえ。進みたくなえ。非常口!非常口は!?

「逃げるのはナシだよ」

「何故分かった!」

「だってなんか挙動不審だし。なんか入り口の方をチラチラ振り返ってるし」

「ちくしょう……!!」

「さあ仁君。そろそろ進もう?」

梓が俺の手を引く。

……ん?手?

いつのまにやら、俺と梓は手を繋いでいた。

梓は俺を見て言う。

「頼りにしてるから」

まっかせるー!

この男の中の男、三浦仁にドーンと任せておきなさいっ!

俺が心の中で大見得を切った瞬間!

「キヤアアアアアア!!」

「ギヤアアアアアアアアア!!?」

突然俺達の前方から女の人の悲鳴が聞こえてくる。

んで、共鳴するかのよう俺も叫びだしてしまった!!

なつんだよ前の人。そんなに叫ぶなよ。怖いじゃん！後から行く俺めっちゃ怖いじゃん！
あゝヤベ。腰抜けた。もう泣きそうだ。
俺は床にへたりこんだまま梓に言う。

「梓」

「何？」

「頼りにしてるから」

暗闇の中で梓の顔は良く見えなかったけど、多分いつもの苦笑いをしてるんだろな。

梓は言った。

「まっかせて！」

俺と梓は裏暗い内部をずんずんと進んでいく……。
二人の手は握られたまま。もう恥ずかしいとか何とか言ってるらね。生命の危機だもんね。

曲がり角に差し掛かる。

見えてきたのは日本風のお墓。

「こんなところにお墓……」

「よ、よく出来てるじゃないのお……」

つーか出てくるなら墓から出て来いよ！なんか合図しろよ！それなら準備も出来たのにいい！どんだけ期待を裏切ればいいのさ！天邪鬼さんですかああ！！？

俺と梓を驚かせるだけ驚かしといて、そのなんだか得体の知れないのは静かにフェードアウトしていく……。

「あゝ。ビツクリしたあゝ！」

「もう……お家に帰して……！」

俺は半泣きで言う。

なんだってんだまつたくもうここの従業員はお客の心理を良く知り尽くしていてホントにイイ仕事するぜチクショウツ！！

そこを突破後も、数々と襲い掛かるトラップに耐えながら俺と梓は突き進む。

何かが流れないように、涙腺に気を配りながら。膀胱に気を配りながら。

もう心も体もボロボロだ。はははは……日の光が懐かしいぜ……。

「そろそろ終わりかな……」

「えっ、マジ？早く行こう！さあ早く出よう！」

俺は元気良く歩き出す。

すると、広いスペースになにやら古ぼけた井戸のセットが。

……ははあ。なるほど。

多分近づくと中から何か……。そうだな。髪の毛の長い女の人……に扮

したスタッフさんが出てくるんだろう。
まったく。最後の最後でツメが甘いぜ！このお化け屋敷は。

「うん。ここを抜けると出口だね」

梓は井戸の向こうを指差す。

「あ、ホントだ。外の明かりが見える」

「長かったねー」

「全くだよ」

「それじゃー。最後行こ？」

「おっけー。……井戸には気をつけないな……」

俺と梓は慎重に……慎重に井戸の近くを通る。
すると……。

バツと突然井戸から白い服を着た髪の長い女の人……に扮したスタッフさんが登場。

ふふん。流石にこの三浦仁だつてよ。何が出てくるか予想できたり
やーそこまで怖がることはないのよ。

……まあ、それでもちよつと怖かったけどな。

ようし。最後の最後は乗り切った！なんかイイ気分を外に出れそう
だ！

……あれ？いつまであの人井戸にいるんだろ。もう引っ込んでもい
いんじゃない。

あれ？なんか井戸に手をかけてね？あれ？なんかずりずりと這い出

てきてね？あれ？あれええええええ！！

「井戸から出てきたああああ！！」

「仁君！早く行って！！」

「出口の方にヤツがいるんだよおお！梓、下がってくれよ！」

「無理だつて！なんか角に追い詰められてる！！」

「なんかコツチに這ってきたんだけどおおおお！！梓ああ！なんとかしてくれえ！！」

「無理だよっ！」

「近い近いよ！やばいよもう手を伸ばせば届く距離いい！」

「そんなこと言ったって……きやつ……！！」

梓が悲鳴を上げる。

その理由は突然あがった閃光。

まばゆいばかりの光は、俺達の視力をいったん奪い去る……。

……！！

……やっとなんとか見えるようになってきた……って。

「あれ？ヤツがない」

「……ホントだ」

え？つまり……って事は……俺……。

「生きてて良かったああああ……」

俺はホツとしてその場に崩れ落ちた。

恐怖から開放された俺は、懐かしい光の世界に身を任せる。

嗚呼……生きているって、こんなにも素晴らしい事だったのですね

……！

お店の看板、装飾、色取り取りの商品。そして買い物に来ているお客さん達のキラキラした笑顔。

全てがいつもより三割り増しで輝いて見えた。

なんだかいい気分になった俺は、梓と一緒にデパート内探索を心行くまで楽しむっ！

「ゲーセンより」

「あ、あれ可愛い！」

「ん？UFOキャッチャーか。どれ……」

「仁君、取ってくれるの！？UFOキャッチャー上手いんだ！」

「おう。昔からなぜかコレは得意なんだー。ちよつとまってる」

「あれ？ちよつと行き過ぎじゃない？」

「いいんだよこれで。よし、完璧っ！」

「わっ！凄い！ホントに取れたっ！」

「で、梓。一回二百円だか……」

「ありがとう仁君っ！」

「らああ……ど、どーういたしましてえっ！」

「本屋より」

「おおっ、あの人新作出してたんだあ！……でもちよっと今月ピンチだしなあ……」

「仁君って本読むの好きなの？」

「読書映画音楽ゲームにパソコン……とまあ、インドア系なのは全部好きかな」

「それじゃあ休みの日とかも家で……？」

「ゴロゴロ」

「外に出るのあんまり好きじゃないんだ？」

「うーん。まあ嫌いじゃないけど、家でのんびりする方が好きかな」

「でもデートとかの時はそんな風にもいかないんじゃない？」

「うーん。まーそーかなあ」

「ズバリ！仁君にとっての理想のデート先とはっ！」

「無難に映画館？いや、古本屋巡りも捨てがたい。そんでもって買った本を落ちついたカンジの喫茶店でコーヒー片手に二人黙って静かに読みふける……」

「とても高校生男子の発想とは思えないね……」

「人にはそれぞれの考え方ってヤツがあるのです」

「アクセサリーショップより」

「凄いね〜ここ」

「一面ネックレスとか指輪とかだらけでございますねえ」

「あっ、これ……」

「どした？梓」

「……綺麗」

「欲しいの？」

「え？いや、欲しいとかじゃなくって……ただ……」

「しょーがないな……なら……」

「え？いいよいよ仁君！本当に大丈夫だから！」

「お小遣いを頑張って溜めるしかないな梓。ファイトっ！」

「……………いや、いいんだけどね」

「服屋さんより」

「さて、そろそろ仁君も装飾品に手を出してもいい頃かな」

「装飾品…………と、言いますと？」

「ベルトとか、帽子とか」

「ベルトも帽子も正直つけるの好きじゃないんだよね」

「それじゃあ眼鏡とかは？」

「おいおい。俺の視力は両目とも一七だぜ。眼鏡なんかつける必要ねーよ」

「いや、そうじゃなくてさ…………」

「よく分からない…………」

「それじゃあマフラーとかは？これからの時期…………」

「俺寒いのが平気だからマフラーはいらないかな」

「駄目だこりゃ…………」

「食品売り場より」

「おっ、美味しそうなりんごっ」

「……………」

「おおっ！こっちはミカンがあるぞ梓っ！」

「……………」

「むっ、向こうの方からソーセージの焼ける匂いが……………！さてはバイトの人が焼いて宣伝しているな！行くぞ梓っ！」

「……………仁君」

「何？」

「まさかここでの目的って、試食品を全部回って食べつくすことだけだったり……………？」

「あたぼーよお！」

「なんでドヤ顔なのっ!？」

「いやいや。でもさ、置いてあるんだから食わないと損じゃん？なにより……………」

「なにより……………？」

「タダだしねっ！」

「やれやれ……」

デパート内を隅から隅まで歩き回って、俺たちが外に出た頃には、もう日も暮れかけていた。

うん。段々と日も短くなっくなあ。もう冬はすぐそこかな？

長〜い前フリを終えて、ようやく俺たちは本来の目的である喫茶店へと行くことにする。

遊び帰りにフラッと……。

そんなカンジでやってきたんであろう人達で、店内は賑わっていた。しかし、運良く並ばずに席へと行くことに成功っ！

俺と梓は向かい合って椅子に腰を下ろした。

「ふい〜っ。つつかれたなああ〜……」

「ホントだね〜」

俺はメニューを梓に手渡しながら言う。

「それじゃー、好きななんでも選びやがれコンチクショウッ！」

「そんな前衛的な奢り方は始めて見たよっ!？」

梓は俺にそんな事を言いながら、メニュー表を吟味。
あんまし多くはカンベンしてくんねえかなあ……。

「よしっ、決まった！」

「そいじゃー頼みますかあ」

俺はテーブルの隅に置いてあつた店員さんを呼ぶあのスイッチ……。うっん、あれってなんて言つんだろ？まあいいや。

ボタンを押す。

すぐさまウエイトレスさんが登場。

梓は注文を告げてゆく……。

「バナナタルトと、宇治抹茶パフェと……」

おい！遠慮はっ！？玄関忘れてきた？

俺の心の叫びを無視して、梓は3つ4つと注文を告げる。オーダーし終えた梓は俺に聞く。

「仁君は？」

俺？……ふっふっふ。んなもん、決まってるではないかあ！
店員さんに向かって、俺はビシッと言い放つ！

「ドリンクバーでっ！」

「は、はあ。かしこまりました」

「仁君……」

ん？なんだね梓その目は。

いや別によくね？メニュー入ってるワケだしよくね？

さーっ、元とるぞーっ！

俺は元気良く椅子から立ち上がる。

ドリンクコーナーに行き、コップを一つ、氷を四つ。
それから、飲み物の種類を確認。

ふんふん……。よし！浮かんできたよーっ！

俺は一切の迷いを見せず、コップを置いて、飲み物が出るボタンを
押した。

コップに注がれる紫色の液体。それが三分の一まで溜まるとボタン
から指を離し、今度は別のボタンを押す。

完璧だっ……！

そう、俺は今、”ドリンクバー恒例！デリシャス ドリンクブレン
ド大会！”を行っているワケだ。

参加人数は一人。表彰台確実。なんだか凄く寂しいよ。

自分のジュースブレンドの才能に若干の恐怖を覚えながら、俺は席
へと戻る。

テーブルにブレンドドリンクが入ったコップをドンツと置いた瞬間、
梓が俺に聞く。

「な……何ソレ」

「四種のフルーツ爽やかミックスジュースっ！」

俺は梓に自信満々に答える。

「俺がブレンドしたもの一覽」

・100%オレンジジュース

- ・ なつちゃん（リンゴ味）
- ・ グレープソーダ
- ・ メロンソーダ

オレンジ、リンゴ、ブドウ、メロン。

四種類のフルーツが盛り込まれた贅沢なジュース！

栄養満点ベリージュージー！

俺はフルーツミックスジュースを優雅に口に運ぶ……。

「不味っっ！！！」

「……だよね」

くっそ、配合を誤ったか！ええい、次だ！次！

俺は自らへの戒めの如く、その失敗ドリンクを一気に飲み干し、勢い良く席を立つ。

「まさか、またブレンド!?!」

そんな事を聞いてくる梓。

俺は振り返って答える。

「とっておきをおみまいしてやらあ」

「もうやめてっ！ジュースが可哀想っ！」

一度の失敗くらいで梓は何をおびえているのやら。

失敗は成功の母っ！次こそっ！

〜二回戦〜

”ベジタブルティーソーダ〜生姜の香り〜”

- ・野菜ジュース
- ・アイスティー
- ・サイダー
- ・ジンジャエール

ジンジャエールは美味しいし、ソーダも美味しい。
加えて紅茶の香りの良さと、野菜ジュースの栄養を余す所無く盛り込んだジュース。
今世紀最高ともウワサされる一品。

脳内で俺の芸術作品に立派な説明文をつけつつ、俺は小指を立てて緩やかにジュースを口に運ぶ……。

「不っ味つつっ！……！！！」

「もっやめなよ……！！！」

ち、ちくしょう。今日は調子が悪かったらしいぜ……。

俺が失敗作第二号と格闘している間に、梓の注文したケーキが届いた。

あー、ちくしょう美味しそう。

「おいしそうっ！」

「……ま、まーまーだな」

梓はフォークを手にすると、「頂きます」と食事前の挨拶を済ませ、早速バナナタルトにフォークを入れる。切り落とされるタルト。やっべ、断面図上手そーっ。梓はそれを上手に口へと運んだ。

「ん〜！美味しい〜っ！」

またえっらい幸せそうな顔して言うわ。タルトもさぞ嬉しいだろうよ。

梓は溢れる笑顔のまま、その上手そうなタルトを一口二口……。俺はそれを恨めしげに見ながら不味い失敗ジュースを一口……。うわ不味っ。

はあ、とため息をつく俺。そんな俺の目の前に……。

「はい、仁君」

「な、なんですか梓さん」

フォークに刺されたバナナタルトが差し出されていた。当然、これは梓のモノだ。

「一口あげるっ」

そ、それは素晴らしい申し出ですね！……です……が〜。

「うや、うやよ」

俺は断ることにする。

いや、正直めちゃくちゃ食べたいんだけどもね。

やっぱり自分が食べたいものって、他人にはあげたくないじゃん？

一人で食べきりたいじゃん？

それを奪うのは……やっぱりね。

「遠慮しないでよー」

「いやいや、今日は俺のオ・ゴ・リなんだから、梓は俺の目の前で
見せびらかしながら食べればいいのかよ」

「何その卑屈発言。いいからっ！今日付き合ってもらったお礼」

「お礼って、そのケーキは俺が金を払う予定の……」

「と、に、か、く！」

「あつ、そこは見ないんですか」

梓は一呼吸置いてから言う。

「今日はすっごく楽しかったから。仁君と、二人で、出かけたの初
めてだったから」

「それは光栄ですね」

俺はそう言いながら、梓のもう一つの心を見抜いていた。

「で、本心は？」

「……最近色々食べすぎちゃって……」

よくぞ言った！人間素直が一番だぞ梓！

さっきオマエがお腹に手を当ててため息をついてたのを俺は知って
いるんだよっ！

俺は笑顔で言う。

「それじゃあ、お言葉に甘えて……」

俺は結局梓のバナナタルトを分けてもらうことにする。
ん〜。やばい、これは旨いわぁ。

「うっまいなこれっ！」

「でしょーっ」

梓はにっこりと笑って言った。

そして、梓は次の宇治抹茶パフェへと手を伸ばす。
あ、でもまだ食べるんだね。やっぱり女子だなあ。

スプーンをパフェにつける直前、梓は手を止めて言った。

「あ、そうそう」

「何？」

「さっき言ったの」

「ちっきっ」

ここで梓はスプーンを一度置き、真っ直ぐ俺を、見てパアツと明るく微笑みながら俺に言ってくれた、

「さっき言った、『今日は楽しかった』っていうのは、本当にホントだからっ!」

おっ、そりゃー……。

うれしいねえ。

「どういたしまして」

一日付き合った甲斐があったってもんだ。

……と、言いつつ、俺も結構今日を楽しんだんだよね。心の中で笑いつつ、俺は梓に聞いた。

「で、やっぱりここは割り勘でー」

「仁君っ?」

「ゴメン、冗談」

……駄目か。

第二十八話 失敗は成功の母であってほしいなあ。(後書き)

おお「すみません！遅くなりましたっ！」

仁「まったくだぜっ！」

おお「これでまたストックが無くなった……」

仁「おい、まさかこれからずっと月間連載ペースか？」

おお「夏休みに入ったから、もうちょい執筆速度を上げられる予感がしない」

仁「しないんかい」

おお「だって宿題多いし……夏季補修もあるし」

仁「なんとかしろよ」

第二十九話 キミは捨て犬を見て黙ってそれをスルーできる？（前書き）

アニメ番外編、「冬の日！」の話となります。

第二十九話 キミは捨て犬を見て黙ってそれをスルーできる？

外気が肌に痛い季節になってきた。

待ち行く人も肩を強張らせて歩く。耳が痛いよね。

高校生は、屋外ではもちろんのこと、校舎の中でも首にしっかりと巻いたマフラーに顔をうずめて生活している。

……ちなみに俺は防寒具の類を一切見につけない。

前にも一回行ったと思うけど、寒さ……とゆーか、気温の変化に強いんだよね俺。

でも流石に部屋の暖房はオンにしてあるよ。

『お風呂が沸きました』

廊下の向こうの方から、風呂のお湯が溜まったという知らせが届く。俺はテレビのリモコンを持って、スイッチオフ。

画面に映っていた今ブレイク中のお笑い芸人の顔がパッと消える。

……なんだか申し訳ないことをした気分だ……。

俺は軽い自責の念にとらわれながらも、大きく伸びを一回。ソファから飛び降りて風呂に向かう。

しかし、部屋の扉を開けた瞬間。甲高いコール音が部屋に響く。

どうやら電話が来たらしいな。

俺はトタトタと小走りでキッチンの傍に置いてある電話の子機を引っつかむ。

「はい。三浦ですが」

それは……。その電話の内容は……。

「……………えっ？……………えええっ!?!」

俺にとつて、嬉しいやら悲しいやら。

とにかく、中々心の中の感情決めに困る内容だった。

翌日。

俺は日直当番の日だったため、授業終了後、学習日誌を教務室に提出してから部室に向かうことに。

もう皆集まってるだろうかと俺はやや早足で音楽室へと急ぐ。その道中。

「あっ！仁君！」

「こんにちは。唯先輩」

同じく音楽室へと向かう唯先輩と会った。

首に巻いたピンク色のマフラーにうずめた顔。鼻からはちよつと鼻水がたれてる。

鞆の類を何も持っていないっつーことは、一度部室に行ってるな。

「先輩、寒そうですね」

「だって寒いも〜ん！仁君はマフラーとかしないの？」

「ん〜。俺は特にそういうのはしなくても大丈夫かなあ」

「ええ〜。寒くないの?」

「はい。まあ、寒いつちゃ寒いけど、そんなに気にならないかなあ」

「へ〜。凄いね〜」

こんな会話をしているうち、俺たちは部室に到着。
唯先輩が扉を開ける。

「ふい〜。寒いねえ〜」

「こんにちはー」

部室にはやはり皆集まっていた。

いつものテーブルの周りに座る四人。

唯先輩はそのまま皆の元へ向かい、俺はとりあえず肩の荷物を下ろしにかかる。

ふうっ、とため息を漏らしながらギターケースと鞆の重量から俺の右肩を解放してやる。

そのままギターケースは壁に立てかけ、鞆は長椅子の上に並べる。

「おーっす、仁ー」

「こんにちは、仁君」

「こんにちはです。先輩」

俺が席に着くと、改めて先輩達から挨拶を受ける。

唯先輩は言う。

残る俺達四人は、そんな二人を静かに優しく見守っていた。

ひとしきり騒いだあと、唯先輩はギターケースから相棒のギター（名称ギー太）を取り出す。

そして長椅子に腰掛けると、ギー太を膝の上に乗せて、演奏の構えを取る。

ちなみに、マフラーはしっかりと首に巻いたままだ。

唯先輩はふうふうと息を吐いてから言う。

「寒くてギー太弾けないよお〜」

「指がかじかみますからね」

俺は言う。

うう〜んと困り顔の唯先輩だったが、次の一瞬で急にパアツと表情を明るくする。

「そつだ！手袋したまま弾いたらいいんだ！」

うう〜ん……それは……。

どうだろう？上手くないかのような気しかしな感じですけれども。

律先輩も俺と全く同じ考えのようで、ドラムのイスに腰掛けながら唯先輩に言った。

「やってみるよ……」

周囲の雰囲気をもともせず、唯先輩はいそいそと愛用の手袋を両手にはめる。

「よしっ」と一言。準備完了みたい。
再びギー太をしつかりと構え、演奏体制に入る……。

「あぁっ！」

あ、ピックが飛んだ。

「ピックが持てないっ！」

唯先輩は器用に連続でピックを掴み損ねる。

そのせいで、ピックは唯先輩の周りを跳ねるようにして宙を舞う。

「いよしっ！」

との声と共に、唯先輩は両手でピックをしかと挟み込む。

そして、慎重に右手に持ち、それを弦にあてて弾き始めるも……。

「あうーっ！弦に引っかかるっ！」

唯先輩の手袋は毛糸製のため、細かな糸が弦にかかる。

当然の如くまともには弾けないわな。

唯先輩は悲しそうに両手の手袋を外すと、綺麗に重ねて椅子の上に置いた。

そして、それを指差して一言っ！

「失望したっ！」

「そらそーだっ！」

澁先輩は微笑を浮かべつつ、唯先輩に向かって言った。
その流れで、ドラムのところにいる律先輩のもとへと歩いていく。

「なあ、律……」

ん？

澁先輩の呼びかけに返答しない。

なんだか椅子に座ってポーツとしてる。

その視線は、いったいどこに注がれてるんだろうか。

不思議に思った澁先輩が、今度は律先輩の前に回って聞く。

「律？どうかしたのか？」

「りっちゃん？」

律先輩の目の前で、唯先輩は手をヒラヒラさせながら聞いた。
それでも律先輩が気付くまでに、少々のタイムラグがあった。

「えっ」

まさにハッと気がつく律先輩。

「どっしたの？」

唯先輩の問いに、律先輩はだんだんと顔を赤らめる。
なんだろう、ちょっと恥ずかしかったのかな。

「え？ああ……な、なんでもないっ」

頬をほんのり赤く染めたまま、律先輩は誤魔化すように笑って言った。

「ほら、ヒゲっ！」

律先輩は顔の脇に垂れている髪の毛をくりんと鼻の下に持ってきて言う。

そうだな……これは、俗に言う一発ギャグというヤツですな。

唯先輩はそれを見て、表情を先程のほわんとした笑顔に戻す。

「りっちゃんずるいー！私も……ヒゲっ！」

「ちっがーうっ！全然なつてないぞおーっ！」

「こうですか先輩！」

「むにゅっ……！」

「にひひっ」

何故か二人は指を口の両端に入れてうにゅっつと口を引き伸ばしてゐる。

「……でもまあ、深く詮索するのはよしとこうか。」

「……でもまあ、深く詮索するのはよしとこうか。」

「あっ！」

唯先輩は急にハッと振り返る。

そして、先程外しておいた手袋の元へ駆け寄る。

「ぶくろーちゃん！怒ってゴメンね……」

両目から涙を流しながら、その手袋をひしとその胸に抱きしめる唯先輩。

なんつか……その……よく分かんないけど……。

平和な人だなあ。

人類皆唯先輩なら、この世から争いという言葉は消えて無くなるんだろうな。

その様子を長椅子の後ろから除いていた梓は言う。

「また名前付けてるんですか!？」

一方の唯先輩は、胸に抱く手袋はそのままに、窓の外を見つめて言った。

「皆、冬がいけないんだよ!」

「冬のせいにしないで下さい……」

俺は言う。

冬の名誉を守るために。

「冬も中々これでいいと思いますけどね。この寒さでしか味わえないような事もたくさんありますし」

俺の言葉を聞いて、唯先輩はパアツと表情を明るくする。

おおっ、えらいコロコロと表情を変えますねえ。

「そつだね！冬の日も、楽しいことたくさんあるしね！」

「ですよ。コタツに入ってミカンもいいけれど、冬に食べるアイスというのも中々いいもんですよ」

「ああ、仁君がそんなこと言うから、アイスが急に食べたくなってきたよ……」

「後は、ホラ。冬の定番。鍋っ！……とか」

「おおっ！鍋っ」

唯先輩はそこでちょっと考えると、また明るい笑顔に戻る。そして、音楽室全体を見て、皆に言う。

「そつだっ！日曜日、ウチで鍋しようよ鍋っ！」

唯先輩の提案は、それはそれはもう大変魅力的なものだったのでございますけれども。

日曜か……。今週末はちょっと……。

俺はなんともいえないような表情で、どうともいえないような声を漏らす。

驚いたことに、周りの皆も同じような状況だった。

「……………あれ？」

唯先輩は目を真ん丸くして、その微妙な表情をする皆をくるくると見渡していく。

最初に口を開いたのは紬先輩だった。

「ごめんなさい。私、用事があつて……」

両手を握つて胸に当て、肩を少し小さくする。

そして、非常に申し訳なさそうな顔で紬先輩は唯先輩に告げた。

「あー、アタシも」

律先輩の声に、唯先輩は顔を向けた。

「弟を映画に連れてつてやるつて、約束したんだよなー」

スティックでこめかみのあたりをポリポリと掻きながら律先輩は言う。

眉をやや下げ気味で、これまた申し訳なさそうな顔だ。

まあ、誘いを断るんだから、当然だよなあ。

「私もちよつと……。ウチから出られそうにないんです……」

梓は長椅子の後ろから打つ向き気味に下を見つめて答えた。

既に三人にふられた可哀想な唯先輩。

先輩は「えーっ」と非常に残念そうに言うと、残った俺と澪先輩を見つめてきた。

「澪ちゃん、と仁君はーっ?」

むうっ。非常に可哀想だ。しのびない。

……使い方は合ってるのかどうかは分からない。なんでこんな言葉使ったんだろう。

で、唯先輩の誘いだけ……。

俺はさっき言ったように、ちょっとした……いや結構な用事があった。梓と同じくこの週末は家を空けられないなあ。

洩先輩も、先程の反応からするに望み薄だけど、なんとか！フリーであつては……くれないよね。

俺の残念な予想は、不幸にもぱつちりの中する。

「私もちよつと……。新しい歌詞書きたいし……」

「そんなあ……」

くそつ、これで残るは俺一人かあつ！

唯先輩はシヨックで今度は涙目になって俯いてしまった。

しかし、俺の存在を直ぐに思い出すと、パツと顔を上げて見つめてきた。

そう、その目はうるうるで。もう捨てられた子犬のようで。

なるほどなるほど、これが捨て犬を見つけてしまった時の心境か。疑似体験。

にっしても……。

断りづらい、ひじょーに断りづらい。

でも、週末は無理なんだつ！

俺はバツと九十度直角に腰を曲げて頭を下げて言う。

「折角のお誘いなのですが申し訳ございません！私事ですみませんが、今週末はどうしても外す事が出来ない予定が入っておりますね……それで」

「おいー？どうした仁ー？そんな口調だったっけか？」

律先輩の問いかけに、俺は下げていた頭をバツと上げて答える。

「あんまりにも言い辛くって申し訳なくって、ちょっと丁寧に言うべきかなーと」

「ちょっとどころじゃ無かったぞ……」

俺が律先輩と話している内に、唯先輩は再び俯いてしまった。

「そんなぁ……。誰も来れないなんて……」

唯先輩は、澪先輩にすがりつく。

「澪ちゃん！歌詞なら私も一緒に考えてあげるから！それに……ホラ！お鍋の後って、歌詞が思いつきやすいつて言っよ？」

「どんな効能ですか……」

梓がボソツとつつこんだ。

澪先輩はどうしようかと少し悩む表情を見せたが、結局は小さく首を横に振った。

「いや、一人でじっくりやるよ」

「ええ〜。なんで？」

唯先輩の問いに、澪先輩は視線を唯先輩から逸らして言った。

「いつも唯や律が邪魔するから、中々集中できないんだよ……」

そう言うと漣先輩は自分の鞆から、歌詞ノートを取り出した。

そして、床に正座して、膝元にノートを広げて俺達に見せてくれた。

「おおっ！」

唯先輩と律先輩から歓声上がる。

気になるノートの中身とは……！

色とりどりのペンで描かれた、何やら不思議な絵たち。

不気味な顔をした人型の何かが数体。

すぐそばに「りっちゃん」との文字が描かれているそれは、どうやら平沢唯作、田井中律。らしい。

うーん。ピカソもビツクリの独特のセンスだ。こういうのが芸術と騒がれるものなのか。

ああもうよく分かんなくなってきた。

……まあ、とにかくにもこのページに描かれている謎の何か達が、ここにいる先輩二人の作品、もとい落書きだと言うことは分かったぞ。

犯人の二人は、バツが悪そうにもじもじとしていたが。

「申し訳ございませんでしたあーっ！」

唐突に土下座を繰り返しながら叫んできた。

はあ、まったく……。

第二十九話 キミは捨て犬を見て黙ってそれをスルーできる？（後書き）

おお「よしっ、なんとか完成したぞっ」

仁「どーでもいいけどさ。もう少し更新早くできないの？ホントにどーでもいいけどさ」

おお「そんな強調せんでもいいやんけ。泣いちゃうよ俺」

仁「涙の数だーけー」

おお「強くなりたいよおっ！」

仁「で、更新状況は」

おお「ボクも真面目な高校生なんでえ。結構忙しいんですよ」

仁「ほう。その真面目な学生さんの模試の結果がコレか……」

おお「やめろっ！見るなっ！」

……高校の模試って、あんなに難しいもんなんですね。

「教科二百点も配点があるのに、八十点前後とか……」。

いやいや〜。まったく恐ろしいもんですなあ。

第三十話 やっぱひとりよりみんないた方がいいに決まってる。

寒いでしょうと紬先輩が入れてくれた紅茶で、俺たちはちょっと休憩することにした。

いつもより早めに、いつものティータイムを開始する。

にしてもあったかいなあ。体の芯からほわっとあったまるよ。

俺は紅茶を飲みつつ、両手をカップにそっと当てて暖を取る。

唯先輩は言っつ。

「仕方ない。憂とギー太と三人で鍋するかあ」

ぎ、ギー太も鍋参加ですか……。

それはー……うーんどんなんだろ。

俺の隣で梓は唯先輩の言葉を聞いて、少し心配そうな顔を作ってた。

「ギター汚さないで下さいよ。この間メンテしたばかりなんだから

……」

「大丈夫だよ！ちゃんと前掛けしてあげるし」

にっこりと笑顔で言う唯先輩……なんだけどー。

そーゆー問題じゃなくね？

俺は眉をひそめながら紅茶を口に運ぶ。

梓は言っつた。

「じゃあ、いいですけど……」

い・い・ん・かい！

俺はカップを口に当てたまま勢い良く梓を見た。
他の三人の先輩も同様の行動を取る。

あ、梓！。

なんか最近ずれてきてない？ 唯先輩の影響？

唯先輩はのほほんとした顔で誰へというわけでもなく言った。

「冬はやっぱり鍋だよー」

軽音部でぞろぞろと帰宅。

空はもう紺色。すぐに真つ暗なっちゃうな。

さすがに外はちよつと寒いなあ。

俺は皆が歩くちよつと後ろを空を見ながらダラダラと歩いている。

おいそこ。カツコつけとか言うんじゃない。

たまには空でも眺めながらポーツと一人でいるのもいいもんですよ。

特に冬の空というか、外気全てはさ、なんかピツと張り詰めてるんだけど、それもまたいい感じで。

ってよく分かんないよな。

とにかく、冬の空は朝と夕がいいぜ。

視線を前に戻そう。電柱にぶつかったら恥ずかしいしね。
俺以外の皆はコート&マフラー&手袋で防寒バッチリだ。

首まですっぱり埋まってあつたかそう。

俺は…… やっぱりのコートだけで十分かな。

これ結構生地分厚くてあつたかいし。これを作った我が校ナイス。いい仕事したよホント。

列の一番前で、唯先輩が律先輩に話す。

「りっちゃん、もうすっかり冬だよね！憂に貰ったぶーくろちゃん、あつたかいんだあ〜」

手をパーにして前に出し、そのぶくろーちゃんを律先輩に見えるようにする唯先輩。

多分またあのふわふわした笑顔で言ってるんだろっな。

こっからだど、顔はちよつと見えないかな。

「まったく。良く出来た子だよなー。私もあんな妹が欲しいよー」

ですよねー。

うんうん。俺も激しく同意です律先輩。

うふふふーと笑う唯先輩。

「羨ましいぞ、このこのー」と、律先輩はそんな唯先輩の脇を突つつく。

俺は後ろからそれをボーツと眺めていたが。

「ん？」

俺は立ち止まって振り返る。

突然紬先輩が俺の横を通過して行った……というか、俺が紬先輩の

横を通つたんだな。

つまり、紬先輩が急に立ち止まったっていうのが事の真相ってわけだ。

これぞ、視覚のマジック！

紬先輩は、先頭の唯先輩、律先輩にも聞こえるよう、少し大きい声で言った。

「あの一！」

その声で、前にいた四人全員が足を止めて振り返った。
唯先輩は聞く。

「どつしたの？ムギちゃん」

「今日は、ココで」

ここで帰るって事かな。
なんか用事でもあるんだろうか。

俺の思ったことと同様の質問を、唯先輩は紬先輩に投げかけた。

「うん……ちょっと……」

紬先輩は視線をチラチラと逸らしながら、横歩きで一步二歩歩くと、「じゃあ！」という挨拶を残し、その勢いのままに横断歩道を駆けて行った。

その後姿を見つめて、唯先輩は言う。

「ムギちゃん、どうしたのかな。誰かと待ち合わせかなあ」

「もしかして、彼氏とか」

「かつ、彼彼氏!？」

「なんで仁君が動揺してるの」

「いや、ちょっとびっくりして。でもま、紬先輩ならー……」

「ムギちゃんモテそうだもんねー」

ここで俺は一つ疑問を投げかけてみる。

「そういえば、皆さんはそうゆうのあったりするんですか？ホラ、ウチの学校って男子少ないし、他の学校に!……とかは」

ここで、律先輩がビクッと少し過敏な反応をしたのがちょっと気になったかも。

……けどまあ、いいか。

寒くてブルツ!の可能性もあるしね。

梓は言う。

「そんなの聞いてどうするの?」

「いや、深い意味は無いぞ?ちょっと気になって」

唯先輩はちよっと考えながら言う。

「そついえば、考えたこと無かったかも」

「やっぱりそついうもんですか」

「澪ちゃんは？」

唯先輩が澪先輩に尋ねる。

なんとなく予想はしていたけども……まあその通りに。

澪先輩は顔を真っ赤にして、両手をぶんぶん振って言った。

「わ、私はっ、そついうのっ、全然、ないから……。考えたことも……。とゆーか、考えただけで……」

ここで澪先輩はさらに顔を赤くする。

「あー、澪ちゃん顔真っ赤ー」

唯先輩は澪先輩を見てからかうように笑う。

「さっ、寒いからなっ」

澪先輩は顔を俺達にみえないよう、ぷいっとなつぽを向いてしまった。

俺と梓と唯先輩は、その様子を見て笑った。

……ん？

律先輩も顔をそむけてる……？俺達に顔を見せないようにしてる……

……？

なんだから。

さて、と。

家の近くまで歩いてきて、俺はちょっと考える。

既に先輩達は梓とは別れ、今は一人でだらだらと歩いている。

確か今日の夕方くらいに話だったなあ。

じゃあ、もういるかもしれないな。

………もういるのかなあ。もういるのかあ。

俺はちよっぴし憂鬱な気分になって、はぁーっとため息を一つする。
口から白い煙的なアレがぶわーっと吹き出す。

昔はこれで「カイリユー！はかいこうせん！」とか言って遊んだもんだ。

我が家の前に着く。

おっ、まだ明かりはついてないな。

俺は単純だった。少しだけ気分が良くなった俺は、ちよっと歩くスピードを速めて玄関へと向かう。

カギを開けて、扉を開けて、我が家に入る。

はいはいいただきます。

と、恒例の挨拶を心の中で済ませつつ、靴を脱いで上がり、リビン
グへ。

ふうっと息をつきながら部屋の電気をともそうとスイッチを押した
………が。

あれ？つかない。なんでだろ。

まさか、電気をとめられ………？ているワケはないよな。

毎月きちんと電気代は払っておりますので。

じゃあブレーカーが落ちたとか？
でも、何もしてないのにブレーカーが落ちるなんてこと……。

ん？

ここで俺は家の中のある異変に気付く。

なんか凄い湿度が高い気がする。

リビングの中だけおかしいくらいに。梅雨レベルで高い。
それともう一つ。なんだか生臭い。なんの匂いだ？

背筋が少しだけ寒くなってきた気がする。あくまで気がする、ね。
そんなワケは無い。いやいや現実でそんな超常現象なんか起こるワケないんだ。

マンガの見すぎ、テレビの見すぎだ！

そうだ！そうだよ仁。これはたまたま！

たまたまブレーカーが落ちて、たまたま家の中が凄く湿気てて、
たまたま生臭い匂いが充満してるだけだっ！

……決してお化けなんてモノのせいではない！決して！決してだっ！

俺は腕組みをして、自分の論理的な思考にうんうんとうなづく。
その時だった。

ブオオーっと、まるで地の底から響いてくるような、野太い音が響いた。

な……なんだ。なんだっていうんだ今の音は！

いやいや、多分アレだ。汽笛だろう。たまたま家の中を機関車が汽船が走っているだけであっ！？

今度はなんだ？ゴリゴリと、何かを削るような音が聞こえた……。
いやいやいや、多分アレだ。きつとキュートな小人さんが村のオバ

バを助けるために薬でも調合してるに違いない……！
ん？なんだ、足元に……煙？

っーか、なんだか足元が白い雲のような煙に包まれてる。っーか
床の上に溜まつてる。

何故だろう凄くひんやりする。

俺の体をビリビリと寒気と悪寒とその他もろもろが駆け抜けたその
時だった。

「うわあああああつっ！！？」

何かに羽交い絞めにされたっ！？

ヤメテ！俺が悪かった！っーか俺何かしたっけ？何で俺え？

いやいやスミマセン！生意気言っつてスミマセン！ホントチョーシ乗
つてました俺っ！！

だから……だから……！！

「お助けええええええええええええ……！」

ふつと俺を掴む力が緩む。

俺はその場に崩れ落ちた。

……そして……。

「ははははっ！ビックリし過ぎだろー仁ー」

「仁君はいつまで経っても怖がりなのねっ！」

パツと部屋の明かりがついて、二名の人影が浮かび上がる。

カラカラと笑う男性と女性が、そこに立っていた。

俺は床に突っ伏したまま顔だけ向けて言う。

!？」

俺は再び二人を怒鳴りつける。
目の前の両親はたいして悪びれる様子も無く。

「まあまあ落ち着きなさい仁」

「仁君！お母さんは悲しいわ。仁君がそんな怖い言葉を使うようになってしまつて……」

「うつせえ！とにかくうつせえ！」

俺は心のままに二人に怒鳴り散らす。
するとその時、廊下の方から声が聞こえた。

「まったく……うるさいな。折角帰ってきてやったんだから少しはゆっくりさせてくれよな」

この声！？

……まさか……そんなまさか……。

俺の予想は不幸にも的中することとなる。
リビングの戸を開けて中に入ってきたのは、ちょっと日本人離れした顔立ちの少女。

そりゃそうだ。だってコイツ、ハーフだもん。

えーっとだな。ハーフってヤツは……さ。大体その……。

綺麗、だよな。

で、彼女もその例に漏れてはいないわけで。

道を歩けば大体の男が振り向くような整った顔。

顔つきはやや強気なイメージ。ちょっとツリ目。ナイス目力。

ツヤツヤの滑らかな赤毛を腰に届かないくらいまで伸ばしている。

俺の姿を確認すると、ソイツは明るい笑顔で「よっ」と片手を挙げて挨拶してきた。

「ひっさしぶりじゃん仁ー！元気してたかー？」

「あ……アイサも来てたのか……？聞いてないんだけど……」

「おじさんとおばさんには黙っててくれって言ってたからなっ」

「なんでそんな面倒な事をする？」

「サプライズッ！」

どこのマジシャンの決め台詞とポーズを丸パクリして、目の前の少女は言う。

「っかし、なんて美しい発音なこと。」

三浦アイサ。

俺のー……その……あの……。

従兄弟だよおおっ！

そもそも事の発端は親父からの国際電話だった。そう、あの時の電話だよ。

『もしもし仁ー？』

『ん？父さん？どうしたの？』

『今週の金曜日に、父さんと母さん日本に帰るから』

『…………えっ？…………えええっ！？』

…………とまあ、これだけだ。

これだけで俺の両親の久しぶりの帰省が決定したワケだ。

まあ、毎度毎度こんなカンジだったから気にしないさ。もう慣れたよボクは。

アイサが来るってのは聞いてなかったからちよっとびっくりだけだな。

いや、久しぶりに従兄弟と会うんだから、嬉しくないはずは無いんだけど…………。

「なあ仁。夜飯何？」

…………コイツはこんなだからなあ。

アイサがかなり大人びてるし、分からんかもしれないから一応言うておくよ。

俺の、方が、二つ年上だっつーのっ。

ちなみにもう一つ言うと、アイサの父親は俺の父さんのお兄さんにあたる。

そのお兄さんは建築技術者で、世界のまだまだ恵まれない国のために様々な施設を建設すべく、俺の両親と同じ様に海外にいる。

そこで結婚した子供がアイサ…………というわけではなくて。

同僚のカナダ人女性と日本で結婚して生まれたのがアイサ。

アイサが日本語ペラペラなのもそのお陰だったりする。

小学四年生まではアイサは日本にいて、それからはお母さんの自宅があるカナダで暮らしてるんだと。昔はしょっちゅう遊んだ仲だ。思えば出会った頃から俺はアイツにこき使われてた気がする。

俺はキッチンでいそいそと作業をこなしながら先程のアイサの質問に答えた。

「サバの味噌煮」

「かーっ、シツブイねえー」

アイサはソファに座りながらケラケラと笑う。なんだオイ。サバ味噌ナメてんなよお！

俺は料理の手を止めてふと考える。

大体、この場に俺以外で三人、女性が二人も居て、料理がマトモに出来るのが俺だけってどーゆーことよ。

母さんもアイサも、申し合わせたかの様に料理だけは出来ないし。

父さんに作らせたなら、何でも丼にしちゃうし。

メシの上に乗っけりゃなんでも上手くなると思ってんのかあのオッサンは。

俺はアイサと別の二人がけの大き目のソファに並んで座る両親をじつとりと覗む。

二人そろってぐっすりとお眠りになっていらっしやるよ。

……まあ、長旅だったろうしな。

ハア、とため息一つして俺は作業に戻……る？

「どうしたアイサ？」

「いや、私も何か手伝おうかと思って」

「え？オマエがつっ！？いやいやいやいいいですいいです座って出来上がるのを待つてて下さいまし」

「むっ、なんかムカつくぞその反応」

「わ、分かったから！悪かったから包丁下げろっ！」

俺が慌てて言うと、アイサはああ、と思い出したかのように手に持っていた包丁を放した。

やれやれ、危ないったらありやしないぜ。

「わ、私だって。そろそろ料理の一つくらい出来ないとかヤバイかなー。なんて思ってるワケなんだよ」

俺はちよつと面食らった。

今まで自分で料理どころか、手伝いもしてこなかったからなーコイツ。

「ほらー、手作りのお菓子作ってプレゼンター！なんつー粋な演出もやってみたいワケだよ」

へー、はー。驚いた。ちよつと驚いた。

あんましそうゆうのは興味ないだろうと思ってた。基本アイサは見た目もあって、貰うばっかだったろうからなあ。

まあ、中二にもなれば色々と思うところはあるんだろうし、もうアイサが料理を覚えてくれれば俺の負担も減るし、何よりアイサのこ

れからのためになるよな。

しゃーないっ。ここは一つ、俺が一から料理のイロハを叩き込んでやると……。

「なあっ！ワサビクッキーってどう思う？パツと見抹茶クッキーしか見えなくない？」

「オマエに料理をする資格はねえっ！！」

やっぱりそうか！やっぱりそうだろうなコイツはっ！

アイサに言い放った俺は、黙々と作業をこなしに入るんだけど、アイサがしつこく纏わりついてきたので、仕方なしにアイサにも包丁を握らせることに。

にしても危なっかしい包丁捌きだなあ……。

時折親指を切り落としそうになるのを見て、俺はヒヤツとしながらそのつど止めに入る。

正直作業が進まないったらありやしないけど……。

額に汗まで流しながら野菜と向き合うアイサの真剣な表情に、何となくだけどグツとくる物があった。

案外、マジで料理を覚えようとしてんのかもしれないなあ。

俺はサバ味噌の煮具合を確かめながら思った。

……と、まあ、我が家に家族が集うと、大体こんな感じのペースで進んでいく。

料理以外の家事は、三人とも人並みに出来るから俺の負担は増えない。どっちかつつーと減ってる。

それと、これも毎度毎度のことだけど、父さんと母さんは寝てばかりだ。

まあ、二人とも外交関係の仕事してて、世界を回ってるわけだから、疲れがくるのは当然だろうな。

なんだかんだで、俺の両親は結構凄い。ワリと位の高い仕事についてるんだよな。

ここ何年かで、その事を身にしみて思ったよ。

アイサはアイサで、いつも通りの自由奔放っぷりだ。

「オイ、ゲームの相手してくれ」

「待て、洗濯物干してからだ」

「ファミチキ買いに行こうぜっ!」

「ファミマまでこっからだと歩いて結構かかるぞ……」
「チキにしよ
うぜ」

「あれ?ドラゴンボールどこいった?」

「ん?ああ、押入れの中に本棚を作ったんだよ。今はそん中」

色々苦勞はあるけれども、俺は確かに久しぶりの家族団らんって

ヤツを満喫していたよ。
楽しいよな、家に帰ると誰かがいるってのはさ。

第三十話 やっぱひとりよりみんないた方がいいに決まってる。(後書き)

てなワケで、この話では仁の家族のことを書いていこうと思います。ちなみに、仁の従妹のアイサちゃんはもともと純粹日本人でした。なんか気分を変えてみました。

さらに、彼女は元々仁の妹でした。

うっかり最初の頃の話で、「兄弟もない」なんて書いてしまったので、立ち位置が微妙に変わりました。

もっと言うと、この両親帰省エピソードは、作中の夏に書こうと思っていました。

忘れてました。

仁「計画性ねええええ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1217o/>

けいおん！ + 俺

2011年9月6日22時15分発行